博士論文

大学生における日常生活や学業への無気力に関する心理学的研究

——過去・現在の対人関係と無気力に対する感情に着目して——

令和 5 年 3 月

中央大学大学院文学研究科心理学専攻博士後期課程

林　雅子

目次

第 1 章　問題と目的 3
　第 1 節　無気力の定義 3
　第 2 節　無気力研究の到達点・限界点と本研究の方針 4
　第 3 節　抑うつ的な無気力における過去・現在の対人関係との関連 14
　第 4 節　スチューデント・アパシー的な無気力の捉え方 24
　第 5 節　本研究における目的と検討方法 33
目的 1）過去と現在の対人関係と抑うつ的な無気力との関連 36
第 2 章　養育者と抑うつ的な無気力との関連 36
　第 1 節　過去の養育者の養育態度（調査 1） 36
　第 2 節　現在の養育者からのソーシャル・サポート（調査 1） 43
　第 3 節　本章のまとめ 50
第 3 章　友人と抑うつ的な無気力との関連 51
　第 1 節　過去の友人に対するふれ合い恐怖（調査 2） 51
　第 2 節　現在の友人からのソーシャル・サポート（調査 2） 59
　第 3 節　本章のまとめ 65
第 4 章　教師と抑うつ的な無気力との関連 66
　第 1 節　過去の教師に対する信頼感（調査 3） 66
　第 2 節　現在の教師からのソーシャル・サポート（調査 3） 73
　第 3 節　本章のまとめ 78
目的 2）大学生が捉えるスチューデント・アパシー的な無気力の検討 79
第 5 章　スチューデント・アパシー的な無気力の特徴の検討 79
　第 1 節　スチューデント・アパシー的な無気力とそれに対する感情の時間的変化（調査 4） 79
　第 2 節　本章のまとめ 88
第 6 章　スチューデント・アパシー的な無気力の様態の検討 89
　第 1 節　スチューデント・アパシー的な無気力の形成過程とその捉え方（調査 5） 89
　第 2 節　本章のまとめ 103
目的 1，2）過去と現在の対人関係と大学生の無気力，無気力に対する感情との関連 104
第 7 章　スチューデント・アパシー的な無気力に付随して起こる意欲の減退 104
　第 1 節　過去と現在の対人関係との関連（調査 6） 104
　第 2 節　コロナ禍における無気力と対人関係の変化（調査 2，3，6） 120
　第 3 節　本章のまとめ 124
第 8 章　総合考察 125

第 1 節　本研究で得られた知見 125
第 2 節　本研究の到達点 129
第 3 節　今後の課題 133
引用文献 135
謝辞 142
付録 i
付録 1 ii
付録 2 viii
付録 3 xv
付録 4 xxii
付録 5 xxix
付録 6 xxxiv

第 1 章　問題と目的

第 1 節　無気力の定義

無気力とは何か。英語で無気力に該当する apathy の語源は，古代ギリシャ語の「a-（否定）＋pathos（激しい感情）＋-ia（こと）」であり，「激しい感情がないこと」を意味する。一般的な定義としても，興味や感情の喪失を示すことが無気力であるとされている（Marin, 1991）。海外において，無気力とは何かをやろうとしないという行動的な面よりも，何物にも心を動かされないという，感情的な面を重視して捉えられていると考えられる。

一方で，日本では無気力はどのように捉えられているのか。広辞苑（第 6 版）を引くと，無気力は「気力のないこと。積極的に物事をしようとする意欲に欠けること」とされている。心理学における無気力研究でも，精神病の無気力とは異なると線引きした上で，何かに対して意欲の減退を示すことが無気力であると定義づけられている（鉄島，1993；笠井・村松・保坂・三浦，1995）。なんとなく授業をさぼる（下山，1995）など，第三者から見てもやる気のない行動をしていることが無気力として認識されている。感情面よりも，行動面をより重視した捉え方であると言える。

その中で，大学生を対象とした無気力研究では，ふたつの視点が混在したまま調査や検討が行われてきていたことが指摘されている（狩野・津川，2008）。ひとつはスチューデント・アパシーの視点，もうひとつは抑うつの視点である。前者は学生の本業である学問に対して選択的に意欲の減退を示し，精神病による無気力とは異なると定義づけられている（Walters, 1961 笠原・岡本訳 1975；鉄島，1993）。一方で後者は，日常生活全般に意欲の減退を示し，無気力化した状態と抑うつ状態を等価的に扱っているものである（下坂, 2001；狩野・津川, 2011）。日本の無気力研究における無気力概念の曖昧さ（長内，2010）が指摘される中，このふたつの視点の無気力が区別されないまま研究が続けられると，　さらなる混乱を招かねない。それぞれの無気力に適した予防策や支援を講じることも難しくなるであろう。

したがって，本研究では，日本の大学生の無気力にはスチューデント・アパシー的な無気力と抑うつ的な無気力のふたつの視点があるとした上で，それぞれがどのような特徴を持っているのか検討していく。それにより，大学生の無気力の実態を明らかにしていく。

第 2 節　無気力研究の到達点・限界点と本研究の方針

海外との比較の必要性

第 1 節で述べたように，海外と日本では無気力の捉え方が異なっている。これは，無気力が日本で独自に研究が発展し進められている（山形・繁桝，2003）ものだからだと考えられる。日本において，無気力の研究は大学生を中心に行われてきた。国立大学を対象とした実態調査では，休学・退学理由で最も多いものが勉学意欲の減退・喪失といった「消極的理由」であることが報告されている（内田，2009）。当初は，海外における男子大学生が学業にのみ意欲の減退を示す報告（Walters，1961 笠原・岡本訳 1975）を当てはめ，無気力を男子大学生中心に起こる病理的なものとして捉えていた。しかし，一般学生のアパシー化（土川，1985）が示唆されたことで，大学生なら誰にでも起こり得る状態として認識が改められた。男子学生だけでなく，女子学生も同じように無気力になったり（本間・松田，2012），学業に限らず日常生活の様々な場面で意欲の減退を示したりすることが明らかにされている（下坂，2001）。無気力の定義や対象に広がりが出ていると言える。

だが，日本の大学生は特殊な状況に置かれており，無気力も大学生を取り巻く日本の文化や社会に深いかかわりを持つものとして研究が進められている（下山，1995；山形・繁桝，2003）。そのため海外の無気力研究との比較は少なく，大学生の無気力研究に限れば，李（2000）が日韓の無気力傾向と親の養育態度との関連を比較検討したのみである。研究に広がりが出た一方，その視野は限定的であろう。

そこで，以下では，Walters（1961 笠原・岡本訳 1975）の報告を出発点に，海外と日本における 1960 年代から現在に至るまでの無気力研究の流れを整理し，違いを比較する。それにより，日本の無気力研究における無気力の定義の変遷を明確にするとともに，第 1 節で示した無気力のふたつの視点の混在がなぜ起こったのか，明らかにしていく。

海外における無気力研究

ハーバード大学保健センターの精神科医であった Walters（1961 笠原・岡本訳 1975）は，一過的な状態とは異なる，慢性的な無気力状態を示す大学生がいることを，精神医学的診療の事例から取り上げている。こうした大学生の無気力はスチューデント・アパシー（student apathy：以下，図表中では S・A と表記）と名付けられ，その特徴として，1）男子に起こること，2）下級生であること，3）勉学に対する意欲がなく，大学生活の継続が脅かされる段階になってようやく周りに気づかされるといったことが挙げられている（Walters，1961 笠原・岡本訳 1975）。日本の大学生の無気力に関する概念を明確化する際にも，スチューデント・アパシーの概念が翻訳され，適用された（笠原，1977）。そのため，大学生の無気力に対する出発点は，米国と日本で共通している。無気力に対する認識も，男子大学生特有の，学業にのみ選択的に意欲が減退するものとして統一されている。

しかし，米国では，Walters（1961 笠原・岡本訳 1975）以降，スチューデント・アパシーに関する研究の展開はされていない。当時の米国は，ベトナム戦争に対する大規模な反戦運

動，公民権運動や女性解放運動といった様々な機会の平等を求める運動が活発に行われていた。それに影響を受け青年の間には対抗文化が広がり，大学生の無気力もそうした政治運動の文脈で扱われるようになった（Altbach，1979）。Walters のスチューデント・アパシーが意味する無気力とは異なる。米国社会の大学生には，スチューデント・アパシーは注目を引くほどの広がりを見せなかったのではないかと推測されている（下山，1996）。

次に, 海外において無気力に関する研究として注目を集めたのが, Seligman & Maier（1967）の学習性無力感（Learned Helplessness：以下，LH）である。これはイヌを対象に無気力になるメカニズムを明らかにしたものである。実験において，イヌを回避群，ヨークト群，統制群にわけた。まず，回避群には統制可能な電気ショックを，ヨークト群には統制不可能な電気ショックを与えた。統制群には電気ショックは与えられなかった。次にシャトルボックスにイヌを入れて，電気ショックの回避反応を観察した。その結果，回避群と統制群は回避反応をすぐに学習したが，ヨークト群は 2 群に比べて有意に学習に失敗した。LH とは，ヨークト群のように，自分の行動が結果に結びつかない非随伴性の経験を繰り返すことで，その後の自分の行動で結果を変えられる場面でも，最初から行動せずに諦めてしまうというものである（波多野・稲垣，1981）。Seligman & Maier（1967）はイヌを対象としていたが，その後類似した実験が行われ, 人間にも同じ現象が起きることが示されている（Hiroto, 1974）。その後人間が LH に陥るメカニズムの再現性を高めるために，LH 理論にさらに原因帰属理論を取り入れた改訂 LH 理論が登場した（Abramson, Seligman & Teasdale，1978）。Abramson, et al.（1978）は原因帰属の次元として内的（Internal）—外的（External），安定的（Stable）—不安定的（Unstable），全般的（Global）—特殊的（Specific）の 3 つを仮定し，その中でも，内的（自分のせい），安定的（いつでも），全般的（どんな場面でも）に帰属すると最も無気力が生起しやすくなると主張した。非随伴性の経験をした際に，必ず LH になるというわけではなく，原因と結果の帰属の仕方に影響されるという考え方である。

以下，Figure 1-1 に無気力の程度の重さと，誰にでも見られるものかどうかで，LH 理論における無気力とスチューデント・アパシーにおける無気力を分類した。改訂 LH 理論はその後, 絶望感型うつの構成要素として取り上げられている（Abramson, Metalsky & Alloy, 1989）。ネガティブなライフイベントに直面した際に，ネガティブな結果と無力感を予期することで抑うつになるという考え方であり，動機づけの低下や，悲嘆の感情が現れるといった症状が見られることが示されている（Abramson, et al，1989）。つまり，LH 理論における無気力は，うつ病における症状のひとつであり，該当患者にだけ見られる特徴である。それに対して，スチューデント・アパシーは，選択的な意欲減退であり，うつ病と類似した症状を見せることもあるが，感情の希薄化など，スチューデント・アパシーの主要な特徴をうつ病という言葉で表すのは適切ではないとしている（Walters，1961 笠原・岡本訳 1975）。父親との確執がある男子大学生にのみ起こるという限定的な要素を持つものの，LH 理論に比べれば，より程度の軽い無気力であると考えられる。したがって，LH 理論における無気力と，スチューデント・アパシーにおける無気力は異なるものであるということがわかる。

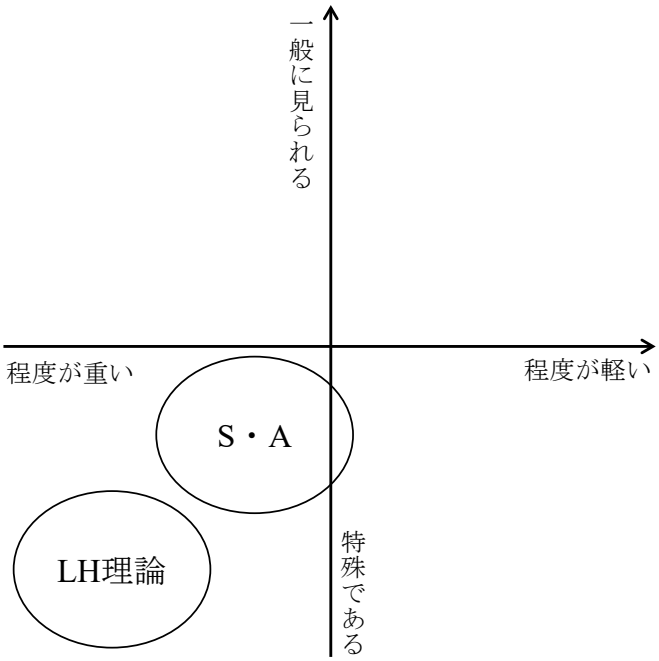


Figure 1-1．1960～80年代における海外の無気力の捉え方

その後，無気力は興味や感情の喪失を示すものであり，神経症によっても引き起こされ，症状としては精神的苦痛や知的障害，意識レベルの障害によらない一時的な動機づけの低下が見られると定義づけられた（Marin，1991）。個人の精神疾患が無気力につながること，その症状が動機づけの低下という点で，LH 理論における無気力と同じ捉え方をしていることが言える。同著者を含む無気力に関連する最新の文献では，アルツハイマーや統合失調症，前頭側頭欠損患者の症状として無気力を捉えており（Clarke, Ko, Kuhl, Reekum, Salvador, & Marin，2011），2010 年以降の他の文献でも，無気力は「神経障害及び精神障害にしばしば見られる自律的な目標立てや動機づけられた行動の減少を示す」（Kos, et al., 2017）ものとして定義づけられている。

スチューデント・アパシーについては，同じ用語を使用していても，Walters の概念とは異なる内容である。教育方略の改善を論じるためのものや（Dable, et al，2012），政治に対する無関心さを指すもの（Fox，2004）として用いられている。Walters 自身も著者の検索した限りではスチューデント・アパシーの再論はしておらず，1961 年に定義づけられたスチューデント・アパシーはその後海外では展開されていない。1990 年代以降論じられる無気力研究は，LH 理論に続くものであると言えよう。

Figure 1-2 に，現在の海外研究における無気力の捉え方を示した。スチューデント・アパシーが展開しなかったことで，海外における無気力とは，男子大学生だけに起こる限定的なものとしては捉えられなくなった。その一方で，うつ病や神経症といった精神疾患，パーキンソン病やアルツハイマー，前頭側頭欠損患者といった高次脳機能障害のような特定の疾病の患者に現れる程度の重い症状として無気力が扱われるようになっている（Clarke, et al,

2011；Kos, et al., 2017)。海外研究の認識として，無気力は治療すべきものであり，マイナスなイメージを持たれているということが考えられる。

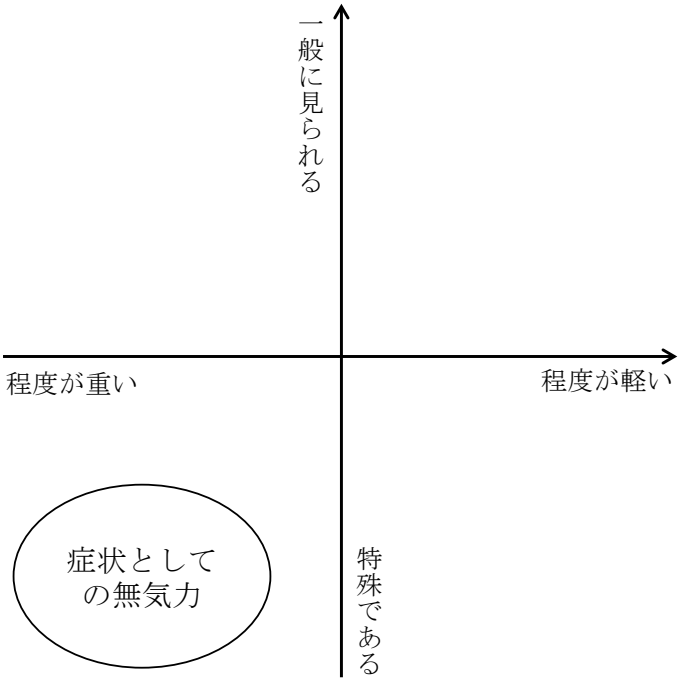


Figure 1-2．2010年代以降における海外の無気力の捉え方

日本における無気力研究

高度経済成長やベビー・ブームの波に伴い，大学の在籍者数は 1960 年には約 50 万人だったのが，1970 年には約 140 万人にまで上昇した（文部科学省，2019)。一方で，大学紛争が活発化し，留年者も急増した。とくに 1970 年度は，学生の無期限ストライキや試験拒否，試験時における機動隊の大学構内への出動などにより国立大学教養部の学生の半数以上が留年する事態が起こり（松原，1979)，社会問題として顕在化した。1960～70 年代における留年の多くは，大学への対抗意識や意思表示としての，意欲的な面が含まれているであろう。しかし，こうした留年者の中に，空虚感や無感動を示す，「意欲減退型」の一群が見られることが指摘された（丸井，1967)。

笠原は，Walters のスチューデント・アパシーの概念を用いて，部分的特徴の指摘に留まっていた大学生の無気力に関する概念の明確化を行った（笠原，1977)。その際，Walters のスチューデント・アパシーをそのまま引用したのではなく，病前性格に強迫性の視点を加えており，米国とは異なる日本独特のスチューデント・アパシーの特徴を示したと指摘されている（下山，1996)。スチューデント・アパシーに陥る男子大学生の特徴として，「力強く，権威的で，過干渉である」父親の存在が示唆されており，成功者であり権威を持つ父親が大きな壁となり，自分の能力に限界を感じることで無気力になると推測されていた（Walters,

1961 笠原・岡本訳 1975)。それに対して，日本では父親が実質的・心理的に家庭において不在であることが一般的である（柏木・2003)。日本におけるスチューデント・アパシーになる大学生の家族の特徴にも，「父親の存在感が薄く父親よりも母親が全権を握っている」ことが挙げられている（土川，1981)。父親がほとんど家庭にいない場合，母親が父親的な役割を果たすために，子どもと情緒的な関わりをせず，学習関連に偏った知的・攻撃的な関わり方ばかりするようになる（山田，1992)。つまり，日本では母親が父親の代わりに子どもの壁になっているのである。こうした無気力になる学生の家庭環境の差異も，大学生の無気力が日本独特のものであるという認識に繋がったのであろう。

日本のスチューデント・アパシーの特徴として，男子大学生に見られ，学業に対してのみ選択的に意欲の減退を示し，一方でサークルやアルバイトには積極的に参加する。本人は無気力であることに焦りや不安を感じておらず，留年や退学の危機に瀕して，周りに促されてようやく相談室に赴く（笠原，1977)。ここまでは Walters（1961 笠原・岡本訳 1975）の事例と一致しているが，笠原（1984）はさらに，無気力の特殊な心理状態として，何をしても本当に楽しいという感覚が希薄化すること（アンヘドニア）を強調している。無気力的な行動をとっていることだけでなく，無気力になった学生の内面にも着目しているのである。

海外においてスチューデント・アパシーは流布しなかったが，日本では「一般学生のアパシー化」（土川，1985）を契機にさらなる展開を見せる。それまでの事例などから無気力の要因が整理され，測定するための尺度も作成された（鉄島，1993)。臨床場面での事例研究から，調査研究へ無気力研究の中心が移行することになった。神経症の一つとして捉えられていた無気力は，「精神病の無気力と異なり，心理的原因で主として学生の本業である学問に対しての意欲の減退を示すこと」（鉄島，1993）と定義づけられ，精神疾患や神経症とは異なるものとして位置づけられるようになった。無気力になる大学生も，当初は男子大学生に限定して調査が行われていたが（下山，1995)，女性の進学率上昇に伴い，女性に対しても同じように調査が行われるようになり（福岡，2000；下坂，2001 など)，女性も男性と同様に無気力を示すことが明らかにされた（本間・松田，2012)。大学生の男女誰にでも起こり得る身近な問題として，無気力の認識が改められたと言える。

Figure 1-3 に，無気力の程度の重さと，誰にでも見られるものかどうかで，1960 年代からの日本の無気力を分類した。笠原（1977）の定義づけたスチューデント・アパシーは，強迫性や完全主義といった病前性格を持つ男子大学生に起こるものであり，症状としては快感情の希薄化が見られ，相談室に訪れるごく限られた一群に見られる特殊なものであると考えられる。神経症に分類されていたことから，程度としては比較的重いと言えよう。一方で，一般学生のアパシー化（土川，1985）以降は，スチューデント・アパシー的な無気力ではあるものの，大学生なら性別問わず起こる可能性があり，精神疾患や神経症の症状とは異なるとされている。したがって，程度としては軽いと考えられる。

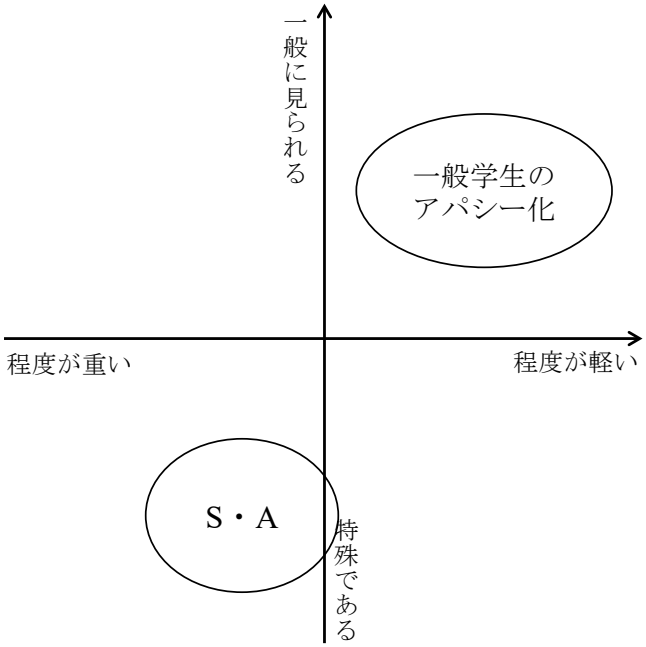


Figure 1-3．1960～90年代における日本の無気力の捉え方

一般化された無気力研究だが，ふたつの視点の無気力が混在して測定されているという指摘がある（狩野・津川，2008，2011；大西，2016）。ひとつがスチューデント・アパシーの視点，もうひとつは抑うつの視点である。スチューデント・アパシーは先述した通り，学業に対する選択的な意欲の減退を示すものである。一方で，抑うつの視点からの無気力研究は，LH 理論（Seligman & Maier，1967）に関連したもので，大学生の無気力が抑うつ状態と等価的に扱われ，日常生活全般に対する意欲の減退を示すものである。ただし，海外の無気力とは異なり，あくまで一般の学生に起こる，精神疾患や神経症によるものではない意欲の減退を意味している（下坂，2001）。海外研究では，スチューデント・アパシーが展開されず，LH 理論における無気力は完全に異なるものとして捉えられていた。しかし，日本では，大学生の無気力がスチューデント・アパシーとして概念化され，そこに LH 理論が加えられる形になったため，このような混在が起きたと考えられる。さらに，調査の際には，「授業に出る気がしない」，「何となく授業をさぼることがある」（下山，1995）といった無気力によって起こる行動を測定している。快感情の希薄化（笠原，1984）といった，抑うつとは異なるスチューデント・アパシー特有の心理的な状態が排除されていることも，ふたつの視点が混ざった要因であると推測される。

Figure 1-4 に，現在の日本における無気力の捉え方を示した。スチューデント・アパシー的な無気力と抑うつ的な無気力は，完全には弁別されていない。また，どちらも一般学生に起こるものとされているが，より無気力の範囲が広い抑うつ的な無気力の方が，程度としては重いと考えられる。

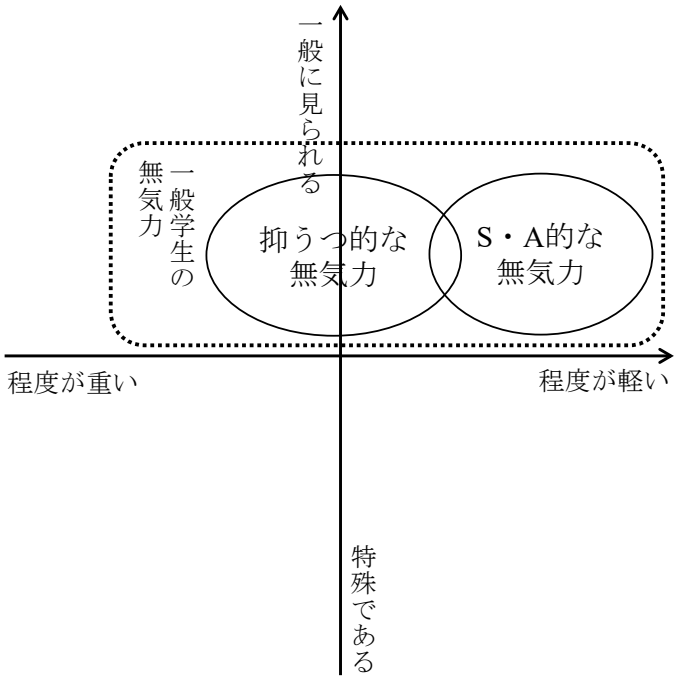


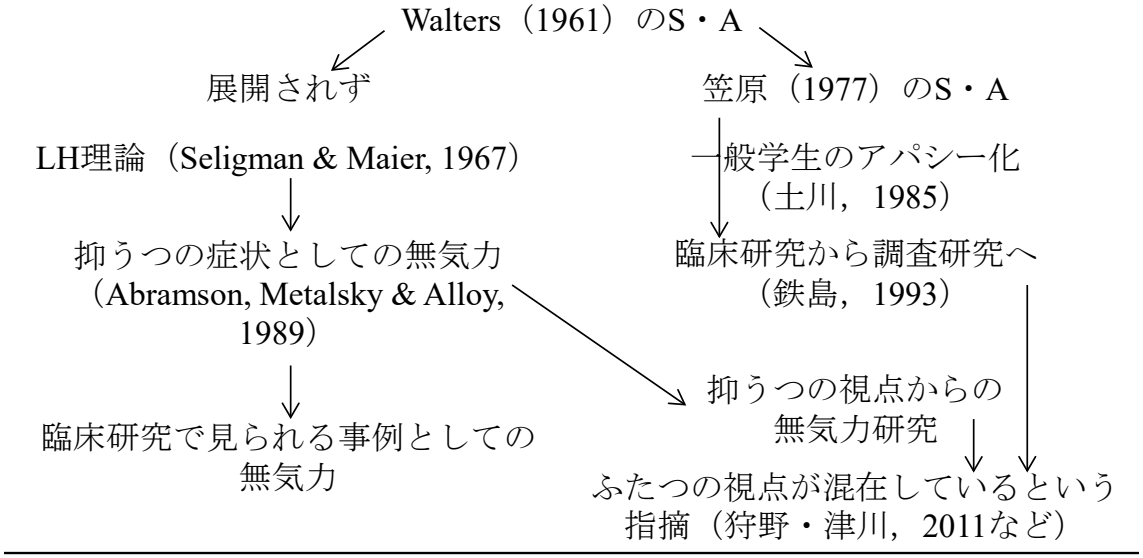
Figure 1-4．2010年代以降における日本の無気力の捉え方

日本の無気力研究の特徴

ここまで，海外と日本の無気力研究の流れを整理してきた。以下，Table 1-1 にそれぞれの概略を示した。海外と日本，どちらも共通して，無気力研究は男子大学生の学業に対する選択的な意欲の減退（スチューデント・アパシー）が始まりである。そこから，海外では，無気力は大学生特有のものではなく，LH 理論（Seligman & Maier，1967）をきっかけに特定の患者に見られるものとして捉えられている。研究の中心は臨床場面での事例研究であり，無気力になると興味や感情の喪失を示し，動機づけの低下が見られることが挙げられている（Marin，1991）。無気力が誰に起こるものなのか，どういうものなのか，一貫した定義づけがされていると言える。

それに対して，日本では，大学生特有の学業への意欲の減退を明確化するために，スチューデント・アパシーの概念が取り入れられた。男子大学生のみに見られるものという認識から，大学生の男女誰にでも起こり得るものとして，研究の中心が臨床研究から調査研究へと移行した。加えて，学業に限らず，日常生活全般に対する意欲の減退を説明するのに，LH 理論（Seligman & Maier，1967）も関連づけられ，複数の視点から無気力が論じられるようになった。スチューデント・アパシー的な無気力は抑うつ状態とは異なる様態を示し，学業に対する選択的な意欲減退をする。抑うつ的な無気力は抑うつ状態と同じような様態であり，日常生活全般に対して意欲の減退が起きる。海外のように研究の断絶がなかったために，両者が明確に区別されず，無気力がどのような大学生に起こるものなのか，無気力とはどういうものなのか，曖昧な状態であると言える。

Table 1-1．日本と海外の無気力研究の流れ



海外の無気力研究ではスチューデント・アパシーが展開されなかった一方で，日本では現在においてもスチューデント・アパシーの視点から無気力が検討されている。この相違点から，日本の大学生の無気力は，下山（1995）や山形・繁桝（2003）が指摘していたように，日本の社会的背景に基づいた日本独自の問題であると言えよう。そうした日本独自の無気力の概念を明確化する際に，海外の無気力の概念を引用しているが，元々海外の無気力は特定の条件下の事例によるものであり、一般化した日本の大学生の無気力にそのまま合致するわけではない。そのため，複数の視点の混合や，日本独自の解釈が加えられ，結果として大学生の無気力の実態が不鮮明になっていると考えられる。

以上，海外と日本の無気力研究の比較を通して，日本の無気力は独自性を持つ一方で，海外のような一貫性が見られないことが明らかになった。日本の大学生の無気力は，海外に比べれば程度の軽いものであり，治療するものというよりは改善するものである。ふたつの視点の無気力の特徴を明らかにすることで，それぞれの無気力に陥った学生に適したサポートを行うことができるであろう。

大学生を取り巻く社会的背景の変化

ここまで，無気力研究における大学生の無気力の定義の変遷を見てきた。ここからは大学生を取り巻く環境の変化を参照していく。

大学生が無気力になった背景として，当初は豊かな社会の出現が挙げられていた。戦後の高度経済成長に伴い，優秀な人材を得るために学歴が重視されるようになった。その結果，青年期が延長し，アイデンティティが確立しにくくなったことが示唆されている（笠原，

1984)。アイデンティティの不確かさから，はっきりとした目標が持てず，自分が現在学んでいる内容に疑問を持ち，進路などに迷いが生じた結果，無気力になると考察されている（笠原，1977；土川，1990)。それに加えて，無気力の背景として効力感の欠如が挙げられている（波多野・稲垣，1981)。効力感とは，自分の行動が結果をコントロールできるという感覚であり（鎌原, 2005), 努力すれば自分の望ましい結果を得られるという自信を指す。波多野・稲垣（1981）によると，豊かな社会の中で，青年は生産性至上主義の管理社会下に置かれ，大きな失敗を犯す機会は減った。その一方で，自分で工夫や努力をして物事を成し遂げたという経験が極端に減ったことで効力感が得られにくくなり，無気力になっていくのだとされていた。つまり，大学生は自己を規定できないことにより，努力の方向性を定められない，またはやりがいを感じられないことにより，無気力に陥りやすくなっていると考えられていた。

しかし，こうした大学生を取り巻く社会的背景は変化してきている。1990 年代に入り，「平成不況」と呼ばれる低迷期に突入した（山本，1994)。とくに 1998 年の日本経済は,「日本列島総不況」と呼ばれるほどに厳しいものであり，全国的に企業の倒産や雇用情勢の悪化が続いていた（経済企画庁調査局，1999)。2008 年にはリーマン・ショックにより世界規模での大不況が起こった。また，日本国内では災害も相次いでいる。2004 年の新潟県中越地震では，21 世紀に入って初めて震度 7 を記録し，2011 年の東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）は国内史上最大の地震であり，大津波や福島第一原子力発電所事故なども発生した。2017 年，2018 年では西日本を中心に各所で豪雨による被害が出て，2019 年には台風により関東地方や東北地方で浸水や停電などの被害が出た。

その中でもとりわけ大学生に大きな影響を与えたのが，2019 年より発生した COVID-19（新型コロナウイルス感染症）であろう。2020 年から世界的に感染が拡大し，パンデミックを引き起こした。人が密集しやすい大学は感染対策のため休校措置が取られ，2020，2021 年度は多くの大学で対面ではなくオンライン形式での受講に切り替えられた。サークルや部活の集まり，飲み会なども自粛され，コロナ禍において大学生の学生生活や対人関係は一変したと考えられる。コロナ禍について大学生のおよそ 3 割がマイナスに捉えており（ベネッセ教育総合研究所，2021)，オンデマンド型の授業の負担感や，コロナ禍における経済状況の悪化が大学生の精神的健康を損なうことも明らかにされている（飯田他，2021)。

これらを踏まえると，現在の大学生は，日本の経済状況の悪化，天災やコロナ禍により，これから生きていく社会に対する見通しの悪さや，個人の努力ではどうにもならない状況をより強く感じているのではないだろうか。大学生を対象とした意識調査（ベネッセ教育総合研究所，2021）でも，大学の講義に対して楽に単位を取りたいと考える傾向があり，留学を考える大学生は増加していない。また，悩みは自分で解決せず，保護者に支援を求める大学生が増加していることも示されている。つまり，努力しても無駄，またはそもそもやろうとしない状態に変化してきていることが考えられる。

先述したように，無気力は男子大学生のみ起こる病理的な症状から，大学生なら男女誰に

でも起こり得る状態へと変化している。それだけでなく，大学生を取り巻く背景も大きく変化している。同じ「無気力」という言葉が使われているが，現在の大学生の無気力と，1970年代ごろに取り上げられた無気力とでは，関連する要因や実態に異なる側面があるのではないだろうか。例えば，Walters の報告を基に笠原（1977）が定義づけたスチューデント・アパシーと，ふたつの視点が混在しているという狩野・津川（2008）の定義づけたスチューデント・アパシー的な無気力は，学業に対して意欲の減退を示す点では共通している。しかし，前者が臨床研究で得られた知見に対して，後者は調査研究によって示された結果である。無気力的な行動を取っていても，実態は変化しているであろう。スチューデント・アパシー的な無気力と抑うつ的な無気力について，どのような点が臨床研究における無気力と共通しているのか，または異なっているのか検討することで，現在の大学生の無気力を正確に把握することができると考えられる。

第 3 節　抑うつ的な無気力における過去・現在の対人関係との関連

臨床研究と調査研究の知見の違い

本節から，現在の無気力研究におけるふたつの視点について，それぞれ検討していく。まず，一般学生の無気力化（土川，1985）が指摘されて以降加えられた抑うつの視点から参照していく。

一般学生の無気力を調査するための尺度を作成する際に，鉄島（1993）はこれまでの諸研究で指摘された無気力の要因を①個人的要因，②家族要因，③学校要因の 3 つに大別・整理していた。個人的要因としてはアイデンティティの拡散や未確立など，確立過程にまつわる葛藤を挙げている。家族要因については，両親に対するやさしやや誠実さなどのイメージを取り上げている。学校要因には，進学動機に関する言及が多いことを挙げている。主体的に大学進学を選択しなかったことが，入学後の不適応につながるというものである（土川，1981）。これら 3 つの要因と一般学生の無気力傾向との関連を検討したところ，学生生活からの退却については，個人的要因からの寄与が大きいことが示されていた。これは，「大学での勉強もアルバイト活動などもあまりやる気が起こらない」など，日常生活全般に対する意欲の減退を示すものであり，狩野・津川（2008）の挙げていた抑うつ的な無気力に近いものであろう。

だが，無気力に対する調査研究が進められてからは，抑うつ的な無気力は対人関係との関連が注目されるようになっている（福岡，2000；下坂，2001；本間・松田，2012 など）。一般学生のアパシー化により，無気力は精神医学的な問題というよりも，大学生の日常生活に起こり得る身近な健康心理学的問題として取り上げられるようになった（本間・松田，2012）。無気力に陥る要因の検討よりも，無気力の状態を改善する対処法を探す方に関心の傾向が高まったことが考えられる。国立大学の学生を対象とした実態調査で，勉学意欲の減退・喪失が休学・退学理由で最も多く，大学生のメンタル面のサポートの重要性が強調され（内田，2009），実際に家族や友人関係からのソーシャル・サポートが無気力の抑制と関連することが明らかにされている（福岡・橋本，1997；福岡，2000：下坂，2001；本間・松田，2012）。具体的には，必要に応じて友人からのサポートを得られると達成動機が高まり（福岡，2000），対人関係に対する不満感や将来に対する不安感が軽減されることや（下坂，2001），ストレスを抱えているときに家族や友人など親しい関係からサポートを受けるほど，無気力状態の悪化が抑制されることが明らかにされている（本間・松田，2012）。これらの研究から，他者からの支援を得られると認識していたり，支援を受けやすい状態であったりすると，大学生の抱えるストレスや悩みなどが取り除かれ，無気力になりにくいことが言えるであろう。したがって，抑うつ的な無気力の改善に，対人関係が深く関わっていることが調査研究では示されている。

一方で，それまでの無気力に関する臨床研究では，むしろ対人関係は無気力を促進するものとして捉えられていた。親の過保護・過干渉な養育態度や友人に対するふれ合い恐怖などが，大学生の無気力を促進する要因として示唆されている（笠原，1977；山田，1992 など）。

この見解の違いはなぜ生じたのか。以下の 2 点の理由が考えられる。

第一に，臨床研究と調査研究で捉えられている無気力が異なるためである。無気力研究が臨床場面を中心に行われていた 1960～90 年代では，学生の無気力は神経症の一部とされていた。対象としていた学生は，単位を落として留年しそうであり，周りから言われてようやく相談室に訪れるといったように，学生生活に支障をきたすほど無気力が深刻化していた状態であった（笠原，1977）。それに対して調査研究における無気力は，誰にでも起こり得る状態であり，精神病による無気力とは異なるものであると定義づけられていた（笠井他，1995；下坂，2001）。下山（1995）は無気力の調査を行う際に，2 年生以上は無気力傾向が強くなり，そもそも授業に出席しないという推測から 1 年生を対象に設定していた。また，下坂（2001）の作成した無気力感尺度では，自分の将来に対する無気力など，長期的な視点に対する意欲の減退だけでなく，「日々の生活で体がだるいと感じている」といったその日の気分状態に左右されるような，短期的な視点での無気力も測定されている。調査研究で対象とされる無気力の学生は，少なくとも授業に参加して質問紙に回答する意欲はあり，そこで測定される尺度も，比較的程度の軽い内容が含まれている。その結果，臨床研究と調査研究とで，無気力と対人関係との関連に異なる見解が出たということが考えられる。

第二に，臨床研究と調査研究では，着目している対人関係の時間軸が異なるためである。臨床研究では，無気力に陥りやすい大学生の特徴を明らかにするために，それまでの対人関係がどのようなものであったかに焦点を当てていた（笠原，1977，1984；山田，1992）。権威のある親の存在に押しつぶされたり（Walters，1961 笠原・岡本訳 1975），友人と関係をうまく深めることができず助けが必要な場面で支援を求められなかったり（山田，1992）した結果，意欲の減退が起こると考えられていた。他方，調査研究では，過去ではなく現在の対人関係を対象に検討が行われている（福岡，2000；下坂，2001；本間・松田，2012 など）。縦断調査を行った場合でも，約 3 ヶ月の変化が検討されているのみである（本間・松田，2012）。臨床研究では，無気力を引き起こす要因として過去の対人関係を見ているのに対して，調査研究では無気力を改善する手段として現在の対人関係に着目している。時間軸による見方の違いがあると言える。

先述したように，現在の調査研究における抑うつ的な無気力は，臨床研究とは異なるものである。臨床研究における示唆を，調査研究にそのまま組み込むことはできない。だが，臨床研究において，過去の対人関係における不和が積み重なって無気力として表出することが指摘されている。現在の対人関係からのソーシャル・サポートが無気力の改善に効果があるとされているものの，過去の対人関係における躓きが，現在の対人関係からのサポートを妨げる結果になっている学生もいるのではないだろうか。例えば，友人との関わりを避ける傾向のある学生は，ソーシャル・サポート受容が低く，援助要請を回避することが示されている（永井，2016）。友人に対して適切な関係を築くのが難しい学生は，友人からの支援を求めにくく，自身の抱える悩みや問題が解決しない結果，より無気力が深刻化しやすくなると考えられる。

以上を踏まえて，本研究では現在だけでなく過去の対人関係と抑うつ的な無気力がどのように関連しているのか，検討していく。それにより，抑うつ的な無気力に対する支援をより効果的に発揮する方策を考えることができるであろう。なお，過去の対人関係について尋ねる際，現在の気分状態が回答に影響することが推測される。専門学校生を対象とした調査（多田，1998）では，ポジティブな気分状態のときはポジティブな記憶が想起されやすいなど，日常生活の中で思い出す過去経験には対象者の気分が影響することが示されていた。現在の気分状態によって，想起されやすい過去の感情価も異なってくるであろう。そこで，現在の気分状態を通して，過去の対人関係と現在の無気力との関連を検討していく。また，過去の対人関係との関連と比較することを容易にするために，現在の対人関係からのソーシャル・サポートとの関連を調べる際も，同様に現在の気分状態を通して検討を行う。

過去の養育者との関連

臨床研究において，過去の親の養育態度と無気力との関連が多く指摘されていた。最初にスチューデント・アパシーを報告した Walters（1961 笠原・岡本訳 1975）は，無気力になりやすい大学生の特徴に，「力強く，権威的で，過干渉である」父親の存在を挙げていた。成功し権威のある父親が子どもにとって大きな壁として立ちふさがり，結果自身の能力に限界を感じて無気力に陥るのだと考えられていた。しかし，日本では父親が実質的・心理的に家庭において不在であることが一般的である（柏木，2003）。一見，海外の報告が日本の大学生の無気力には当てはまらないように思われる。だが，子どもの壁となる親は，形を変えて日本にも存在することが指摘されている。日本におけるスチューデント・アパシーになりやすい大学生の家族の特徴の 1 つに，「父親の存在感が薄く父親よりも母親が全権を握っている」ことが挙げられている（土川，1981）。母親が父親代わりに子どもへ学習関連に偏った知的・攻撃的な関わり方をし，結果，情緒的な関わり方をされてこなかった子どもは，喜びを分かち合うような友好的で深い人間関係の形成の仕方がわからないまま成長する（山田，1992）。即ち，母親が子どもの壁になっているのである。

そうした過干渉な親と無気力との関連が示唆される一方で，深谷（1990）は，やさしい親の存在と子どもの無気力との関連を論じている。女性の社会進出や核家族化といった家庭環境の変化により，父親と子どもの距離が縮まった（深谷，1996）。その影響で厳しい父親とやさしい母親の区別がなくなり，両親のどちらもやさしいという同質化が起こった。やさしい親に依存すること，または超えるべき壁がなくなり明確な目標を持てなくなったことが，子どもの無気力の促進に関連すると考えられている（深谷，1990）。やさしさは行き過ぎると過保護になる。親が子に対して過保護であると，子どもが失敗する前にトラブルや問題を解決してしまい，子どもの葛藤処理能力が身に付かなくなる。結果として，誰かに援助を求めるなど，人との感情的交流ができなくなるとされている（山田，1992）。幼児を対象とした調査ではあるが，母親が過保護であったり甘やかす態度をとったりしていると，子どもが自己主張しにくくなるという結果も得られている（戸田，2006）。親の過保護・過干渉

な態度が，子どもが自ら何かをしたり，誰かに助けを求めたりする際の弊害となり，それが大学生の無気力につながることが考えられる。

また，親の養育態度は，親と子どもの性別によっても変化するものである。例えば，親に対する子どもの意識調査（田中，2006）では，息子は父親が自分に対して厳しいと捉えており，娘は父親が自分に対して受容的でやさしいと感じていた。母親については，息子と娘どちらも，厳しいか，受容的でやさしいと回答していた。関係性の強さでは，息子は父親と母親どちらも直接的な関係を持つが，娘の場合，父親は母親からの評価を通した間接的な関係であることが示されている（大島，2013）。母親については，娘に対しては支配的に接することで自分の地位を高め，息子に対しては服従的に接して庇護対象になることで結びつきを強くすることも示唆されている（信田，2008）。母親は息子と娘どちらとも深く関わり，娘に対してはやや過干渉な態度を取る傾向があると推測される。一方で父親は，息子に比べ娘に情緒的な応答をするものの，結びつきは弱いと考えられる。ただし，娘は父親から自立性を尊重されていると認識すると自尊心が高まり，安定した性同一性を確立できることから（伊藤，1995，2001），間接的であるものの少なからず影響力はあると言えるであろう。

これらを踏まえて，卒業論文の一部のデータを用いて，高校生までの父親と母親の養育態度が大学生の抑うつ的な無気力とどう関連するのか，男女別に分析を行った。まず，親の養育態度が性別によって異なるのか検討したところ，男性に比べて女性の方が，父親が過干渉な関わり方をしていると認識していた。母親について，性差は見られなかった。次に，無気力との関連を見たところ，男性の場合，主に父親の過干渉な態度が無気力の促進と関連していた。母親から情緒的な関わりがあり，父親の過干渉な態度が少ない場合は無気力の抑制に効果が見られる一方で，父親の過干渉な態度が強ければ強いほど，母親から情緒的な関わり方をされていても無気力の促進に繋がることが示されていた。女性の場合，主に母親の情緒的な関わりが無気力の抑制と関連していた。父親の養育態度との直接的な関連は見られなかった。母親から情緒的な態度を受けていて，さらに父親も情緒的な関わり方をしていた場合，無気力の抑制と関連があった一方で，母親から情緒的な関わりがあまりされていない場合は，父親からどれほど情緒的な関わり方をされていても，無気力の抑制ではなく促進に効果があることが示されていた。また，抑うつ的な無気力の中でも，女性は自分の将来という長期的なスパンに対する意欲の減退と親の養育態度に関連があったのに対して，男性は対人関係や日々の生活など現在の状況に対する意欲の減退と養育態度に関連が見られたという違いがあった。

分析の結果から，過去の親の養育態度が大学生の抑うつ的な無気力と関連があることが示された。さらに，親と子の性別によって無気力との関連に違いが見られることも明らかにされた。男性（息子）は父親と母親両方と直接的な関係を持つが，父親は息子に対して厳しい態度をとる一方で母親は服従的な態度をとって結びつきを深める（信田，2008；大島，2013）。下手に出やすい母親に比べ，父親は男性にとって対等または強い存在である。これは Walters（1961 笠原・岡本訳 1975）の取り上げていた厳しい父親像とも合致する。結果と

して，男性は父親からの過干渉に疲れを感じたり，人との関わりから遠ざかろうとしたりするのではないかと考えられる。女性（娘）は，母親とは直接的な関係を持つが，父親とは母親の評価越しの間接的な関係である（大島，2013）。母親からの情緒的な関わりが低い場合，父親から情緒的な関わりがあっても無気力の抑制に効果がなかったのは，母親と温かみのあるやり取りがされず父親の良い評価が女性に与えられていないため，父親の態度が女性に肯定的に伝わらなかったのではないか。加えて，親の情緒的な関わりが女性の無気力の抑制に関連が見られたのは，親の過保護・過干渉な態度が無気力の促進と関連するという示唆（Walters，1961 笠原・岡本訳 1975；深谷，1990）と対照的であると言える。

しかし，養育態度と無気力との関連は示唆されたものの，その度合いは全体的に小さく，とくに女性はほとんど関連が見られなかった。臨床研究で検討される無気力の大学生は，男性のみ，学業にのみ意欲が減退するといった，特殊な枠組みである。一方で，調査研究では，一般学生の無気力を対象としている。青年期は心理的離乳と呼ばれる，親からの精神的な自立を試みる時期である（Hollingworth，1928）。高校生の時期を転換期に，親との関係は中学生と大学生とで大きく変わる。中学生では親が子を守る関係であるが，大学生になると親が子を頼りにする関係になり，子が親から信頼・承認されている関係だと捉えている（落合・佐藤，1996a）。多くの大学生は親と対等な関係を築き，親の価値観や生き方をひとつのモデルとして客観的に受け入れられるようになる。そのため，過去の親の養育態度についても，そういうものであると受容し，現在の自分の状態とは切り離して捉えることができ，結果として無気力との関連がそれほど強く出なかったのではないだろうか。

だが，現在の大学生を取り巻く環境は急激な変化を迎えた。コロナ禍による感染対策のため，2020 年 7 月時点で全国の大学の 8 割以上で遠隔授業または面接・遠隔を併用したハイブリッド型の授業形式が行われることになった（文部科学省，2020）。学外施設の利用も制限され，学生たちは相対的に大学よりも家で過ごす時間が増えたと考えられる。コロナ前のデータだが，大学生の居住形態は 6 割近くが自宅，4 割近くが一人暮らしであると回答していた（ベネッセ教育総合研究所，2008）。コロナ禍において，半数以上の大学生が，親と過ごす時間が増えたと推測される。以前よりも親の支援を求めやすい環境にあるのではないか。実際，大学生の生活実態調査（ベネッセ教育総合研究所，2021）において，コロナ前（2008 年）とコロナ禍（2021 年）の結果を比較したところ，保護者との関係について変化が見られていた。具体的には，物事の決定は自分ではなく保護者のアドバイスや意見に従うことが多いと回答した学生が，2008 年時には 4 割程度であったのに対し，2021 年時は 5 割程度に増加していた。また，自分が困ったとき，自力で解決するのではなく保護者が助けてくれると回答した学生は，2008 年時が約 4 割であるのに対して 2021 年時に約 6 割の増加が見られた。親に決定を委ねる学生が増えている傾向にあると言えるであろう。

子どもへどのような養育態度を取っているか保護者に尋ねたところ，子どもを甘やかさない，厳しい親でありたいと回答する保護者は全体の 1 割程度であり，できるだけ子どもの自由を尊重する親でありたい，または子どもの言い分を聞いてやる親でありたいと考えて

いる保護者が多数であった（NHK 放送文化研究所，2013）。親が子どもに強く期待することとして，自分の意見をはっきり言うことという回答が最も多かった（国立女性教育会館，2005）。現在の親は，子どもの自由を尊重し自立を促そうとする姿勢であると考えられる。だが，現状として，コロナ禍において大学生は自分の意思とは関係なく自粛生活を求められている。深谷（1990）の指摘していたような，やさしい親に依存する傾向に陥りやすくなっているのではないだろうか。

また，家族の形態も無気力との関連に影響を与えていることが推測される。卒業論文では，両親の養育態度の同質化が起こっているという示唆（深谷，1990）から父親と母親それぞれの養育態度を尋ねていた。しかし，質問紙の回答に参加した学生の中には，親のどちらかが不在であるために両方の養育態度を回答できず，分析から除外した者がいた。ひとり親世帯は，現在はほぼ横ばい傾向であるものの，1993 年から 2003 年までの 10 年間では 94.7 万世帯から 139.9 万世帯へと約 5 割増加しており，ひとり親世帯のうち 8 割以上が母子世帯である（男女共同参画局，2019）。育児休業取得率を男女別に参照すると，在職中に出産した女性のうち，2007 年以降 80%以上の人が育児休業を開始しているのに対し，配偶者が出産した男性の中で育児休業を開始した人は 2020 年になってようやく 10%を超えていた（厚生労働省，2021）。依然として父親に比べて母親の方が育児に関わる機会が多い状態であり，土川（1981）が無気力の学生の特徴に挙げていた家庭の全権を握る母親は，現在も少なくないのではないかと考えられる。

卒業論文の調査データからは母親と大学生の抑うつ的な無気力との直接的な関連はあまり見られなかった。だが，母親は子どもと関わる機会が多く，現在の大学生を取り巻く環境の変化により親と過ごす時間が増えていると推測される。親に支援を求めやすくなった一方で，決定を親に委ねやすくなっている。過去の親の養育態度との関連について，また異なる結果が見られることが考えられる。したがって，過去の親の養育態度と大学生の無気力との関連について，もう一度検討していく。その際，母親との関連を他の家族形態と比較検討できるよう，父親と母親両方の養育態度を尋ねるのではなく，養育者の態度を尋ね，どのような養育者を想定したのか併せて大学生に回答してもらう。これにより，すべての大学生に対して調査，分析をすることができ，より的確に現在の大学生の無気力と養育者の養育態度との関連を把握することができると考えられる。

過去の友人関係との関連

友人関係について，臨床研究では，無気力になる大学生はそれまでの交友関係が乏しいことや，友人との深い関わりを恐れるふれ合い恐怖の心性を持っていることを指摘している（笠原，1977；山田，1992）。ふれ合い恐怖は，従来の対人恐怖症とは異なるものであるとされている（山田，1992）。対人恐怖症は不安障害における社会恐怖に類似する概念であり，よく知らない人の前に出るような状況に対して，自分の赤面や体臭，視線が相手に不快感を与えるのではと持続的な恐怖感情を抱くものである（内閣府，2007）。それに対して，ふれ

合い恐怖は，初対面の人と会う場面や人の集まる場ではなく，顔見知りから親密な関係に発展するふれ合い場面において困難が見られ，情緒的な深まりを欠いた関係になりやすくなるものである（山田，1992）。したがって，人と顔を合わせる場面で緊張や恐怖感情を抱くのではなく，より深い対人関係を結ぶことが難しく，表面的な関係に留まろうとするものである。実際に対人恐怖的心性を持つ大学生とふれ合い恐怖的心性を持つ大学生の特徴を比較したところ，対人恐怖的心性を持つ大学生は公的場面や年長者の前での不安が高く，ふれ合い恐怖的心性を持つ大学生は近しい他者の前での不安が高かった（岡田，2002）。友人との関わりを避ける傾向のある大学生は，ソーシャル・サポート受容が低く，援助要請も回避し，学校適応感も低いことが示されている（永井，2016）。友人に対してふれ合い恐怖を持ち，一定の距離を保っていると，必要な場面で友人からの支援を求めにくく，よりストレスや悩みが深刻化しやすいということが考えられる。

調査研究（福岡，2000；下坂，2001；本間・松田，2012）では，現在の友人からのソーシャル・サポートと無気力との関連は実証されているものの，こうした過去の友人に対するふれ合い恐怖との関連は臨床研究の示唆に留まっている。ただし，ふれ合い恐怖ではないが，過去の出来事が現在の無気力に影響を与えることがいくつかの研究で示されている。例えば，LH 理論（Seligman & Maier，1967；Abramson et al.1978）では，コントロール不能の出来事を何度も経験することで無力感が生じ，その後別の学習場面において，自発的に行動しなくなることが示されていた。さらに，本間・松田（2012）の縦断研究では，1 回目から 2 回目の調査までの 3 ヶ月間にストレッサー量が増加した大学生で，サポートをあまり受けなかったと感じた人ほど，無気力傾向になることが示されていた。これらの研究からも，無気力は大学生になって突然なるものではなく，過去の何らかの出来事や困難さをきっかけとしていたり，より悪化したりするものであると言えよう。現在のソーシャル・サポートだけでなく，過去の友人に対するふれ合い恐怖と抑うつ的な無気力との関連を検討することで，大学生の無気力の実態をより正確に把握できると考えられる。

青年期において，友人関係は親との関係よりも重視される（平石，2011）。無気力との関連も，親よりも友人の方がより強いことが推測される。だが，友人関係は学校段階ごとに変化していく。例えば，中学生のときは浅く広い付き合い方が多く，高校生では深く広い付き合い方，大学生になると深く狭い付き合い方が増えていく傾向にある（落合・佐藤，1996b）。中学から高校，大学と学校段階が移行し，クラス替えなども定期的に行われる。周囲の人間が一変し，これまでとまったく違う友人関係を築く青年も少なくないであろう。大学生の過去の友人関係について，養育者のように一括りに捉えることは難しいと言える。

本研究では，大学生にとって直近の過去である高校生の頃の友人に対するふれ合い恐怖との関連に着目する。理由は次の通りである。友人からの慰め方による受け手の感情への影響を検討した調査（小川，2014）によると，友人が励ましや共感などの慰めをせず，自分から離れてそっとしておく行動を取った場合，中学生や大学生に比べ，高校生が最も強く反発を感じていた。友人との関わりを避けて支援を得られないとき，高校生は他の学校段階より

もネガティブな影響を受けやすいことが考えられる。したがって，高校生の頃のふれ合い恐怖を検討することが妥当であると言えよう。

ここまで過去の友人に対するふれ合い恐怖と大学生の無気力との関連について述べてきたが，具体的にどのような友人関係が大学生の無気力と関連するのかは明らかにされていない。上述のように，青年期における友人関係は，浅く広い関わりから深く狭い関わりへと発達的に変化していく（落合・佐藤，1996b）。高校生の頃にふれ合い恐怖を抱いていた友人関係と，現在ソーシャル・サポートを求める友人関係は，種類が異なることが考えられる。また，吉岡（2001）が中高生を対象に友人関係の満足感を尋ねた際，調査項目の「友人」をあえて限定せずに調査を行ったところ，「どの友人を対象にしていいかわからなかった」との感想があったことが報告されている。同じ高校生時代，大学生時代の友人関係であっても，学生が想定する友人はそれぞれ異なることが推測される。そのため，どのような友人関係が無気力と関連しているのか，友人との関係性を検討する必要がある。

本研究では，関係性の基準として友人との親密さに着目する。親友や友人との比較から青年期における仲間の位置づけを行った面接調査（難波，2005）では，仲間は人数の規模が大きく，目的や行動の共有をする関係であり，親友や友人に比べて親密さは低いことが示されていた。つまり，親密さは友人との関係性を規定する際に，重要な観点の一つになると言える。これに加えて，親密さは友人からの支援の求めやすさにも影響している。大学生を対象に，友人の親密段階ごとの相手への期待度を比較検討した調査（下斗米，2000）では，親密段階が上がるにつれ友人からの支援への期待度が高まることが明らかにされている。友人との関わりを避けていると支援を求めにくいという永井（2016）の指摘も踏まえると，より高い親密さが友人からのソーシャル・サポートを受ける機会を与えやすくし，結果として無気力の抑制・改善に繋がるのではないかと考えられる。ふれ合い恐怖やソーシャル・サポートと無気力との関連は，友人との親密さによって異なることが予測される。

以上を踏まえて，現在の友人からのソーシャル・サポートだけでなく，過去（高校）の友人に対するふれ合い恐怖が，大学生の抑うつ的な無気力と関連があるのか，友人との親密さごとに探索的に検討していく。

過去・現在の教師との関連

本研究では，高校，大学における教職員をすべて教師として文言を統一して使用していく。親や友人とは異なり，教師との関係は無気力研究ではあまり重要視されていない。臨床研究において，大学生が周囲と比較することでアイデンティティがうまく確立できず，挫折して無気力になると示唆されていた（笠原，1977，1984；土川，1981；山田，1992）。教師との関係は，この「周囲」に含まれるのみである。無気力の大学生は，自分とは違ってアイデンティティが確立されているように見える友人や教師に劣等感を覚え，援助を避けようとする傾向があることが指摘されている（笠原，1977，1984）。厳しい父親が大学生にとって壁となっていたように（Walters，1961 笠原・岡本訳 1975），教師も大学生にとって遠い存在で

支援を求めにくいものとして捉えられていたことが考えられる。

調査研究においても，対人関係からのソーシャル・サポートと無気力との関連について，友人や親は多く検討されているものの（福岡・橋本，1997；福岡，2000；本間・松田，2012など），教師との関係が取り上げられているのはごく一部である（下坂，2001）。大学の教師との関係について，「気軽に相談できる」「ふだんから気にかけてくれる」と回答していた大学生は4割程度で，教師と「授業や研究活動以外の場で交流がある」と回答した学生は3割にも満たなかった（ベネッセ教育総合研究所，2021）。大学生にとって教師との関わりは薄く，友人や親に比べて重要度が低いことが推測される。

だが，大学進学以前の教師との関係はどうであろうか。鉄島（1993）は，無気力の要因のひとつに学校要因を取り上げており，先行研究ではとくに進学動機に関する言及が多いと述べている。無気力の大学生の特徴として，進学動機が無目的であり，自分の進路に対して主体的な選択がされていないことが挙げられている（土川，1981）。自分から進んで大学への進学を決めたわけではないため，大学生活や学業に対して意義が見出せず，無気力になっていたと考えられる。また，先述した周囲との比較により挫折するという示唆（笠原，1977，1984；土川，1981；山田，1992）を踏まえると，自分は進路をうまく決定できない一方で周囲は自分の進路を主体的に決定しているように見えて，それに対して劣等感を覚えていることが推測される。こうした進路の選択場面において，教師との関係は重要になると考えられている（笠井，2005）。大学への進学を目指す受験生を対象とした調査では（東，2004），学校または塾の教師からの支援が少ないと感じている人ほど，試験に対する不安感が高まっていた。進路選択という人生の岐路において，教師の存在は青年の心理的不安を取り除く一助になっているのであろう。

進路選択場面に限らず，中学，高校では教師の存在は青年にとって重要なものであると考えられる。不登校傾向のある中学生に対して，担任教師が生徒を理解し早期に働きかけたところ，生徒の不登校感情が改善の方向に向かった結果が出ている（三浦，2006）。中学生の教師に対する信頼感と学校適応感との関連を検討した調査では，教師に対して安心感を持っていると学校適応感が高まり，不信感が強いと学習意欲や進路意識などが低下することが示されていた（中井・庄司，2008）。高校生に対する調査でも，同様の結果が見られている（中本・森・屋良，2007）。教師への信頼感を測る尺度（中井・庄司，2006，2008）には，「先生は私の立場で気持ちを理解してくれていると思う」「私が不安なとき，先生に話を聞いてもらうと安心する」といった項目が含まれている。教師が自分のことをきちんと理解し，困った場面で援助してくれるという感覚が，中・高校生に肯定的な影響を与えることが考えられる。

先述したように，大学生は中・高校生と比べ教師との関わりが薄い。しかし，現在の大学は，大学生が自律的に研究していく場から，与えられた課題をこなし，資格や証書の取得だけを目標とする勉強の場へと変化，即ち「学校化」していると指摘されている（山内，2010）。さらに，男性のみであるが，現在の教師からのソーシャル・サポートが，大学生の無気力の

抑制と関連があった（下坂，2001）。現在の大学生は，高校から大学へ移行する際に教師との関係が一変するのではなく，地続きのものとして捉え，大学入学以前と同じように教師へ支援を求めやすくなってきているのではないだろうか。高校生の頃の教師に対する信頼感も，現在の大学生の無気力と関連が見られるかもしれない。

こうした教師との関係について，性差があることが推測される。大学生の男女を対象とした調査では，男性に比べ，女性は基本的信頼感や家族以外の重要な他者との関わりが強く，女性の心理的自立は様々な対人関係的要因と強く関連していた（山田，2011）。女性は，親や友人以外の対人関係も重視しやすい傾向があると考えられる。教師に対する信頼感については，安心感は男性の方が高く，不信感は女性の方が高いことが示されている（中井・庄司，2009）。それだけでなく，男性は教師に認められることを通して教師への信頼感を高めるが，女性はそうした行為では信頼感を高めることはなかった（中本他，2007）。教師に対する信頼感の持ち方は，男女によって異なるのであろう。

これらを踏まえて，現在の教師からのソーシャル・サポートと，過去（高校）の教師に対する信頼感が大学生の無気力とそれぞれ関連があるのか，男女別に検討を行っていく。

第 4 節　スチューデント・アパシー的な無気力の捉え方

自分が無気力であることに対する大学生の感情の違い

第 3 節では，抑うつ的な無気力と対人関係との関連について論じてきた。本節からは，スチューデント・アパシー的な無気力について述べていく。一般学生のアパシー化（土川，1985）が指摘され無気力研究の中心が臨床研究から調査研究に移行した当初は，男子学生のみ，学業に対する意欲の減退のみに着目して検討が行われていた（下山，1995）。しかし，調査研究が進む中，Walters（1961 笠原・岡本訳 1975）のスチューデント・アパシーの概念に LH 理論（Seligman & Maier，1967）が加えられたことで，無気力の混在が起こった。抑うつ的な無気力には，日々の生活に対する疲れや対人関係など現在の状況に対する意欲の減退だけでなく，自分や自分の将来に対する意欲の減退といった長期的な視点も含まれている（下坂，2001）。狩野・津川（2008）が問題視するまで，スチューデント・アパシー的な無気力は学業に対する意欲の減退という抑うつ的な無気力の一側面として捉えられていたと考えられる。改めて，狩野・津川（2008，2011）の定義づけていたふたつの視点の無気力はそれぞれどのようなものなのか整理していく。

まず，抑うつ的な無気力とスチューデント・アパシー的な無気力では，意欲の減退が見られる範囲が異なっている。長内（2009）は，大学生が捉える無気力を領域全般的な無気力と領域固有的な無気力に分類している。前者は，特定の対象と言うより生活全般に意欲の減退を感じるもので，指向性を欠く拡散的なものであり，後者は特定の課題に対する無気力で，日常的に誰にでも感じうる意欲の減退であるとしている。抑うつ的な無気力は日常生活全般に対する意欲の減退であり，上述のように現在の状況だけでなく将来に対する視点など，幅広い範囲を含めている（下坂，2001）。一方で，スチューデント・アパシー的な無気力は学生の本業である学問に対してのみ選択的に意欲が減退するものである（鉄島，1993）。領域全般的な無気力が抑うつ的な無気力，領域固有的な無気力がスチューデント・アパシー的な無気力に該当するであろう。何に対して意欲が減退しているのかという，無気力的な行動が見られる範囲に違いがあると言える。

次に，ふたつの視点の無気力では，無気力に伴う感情が異なることが考えられる。抑うつ的な無気力は，LH 理論（Seligman & Maier，1967）に関連づけられた研究が行われ，大学生の無気力の状態を抑うつ状態と等価的に扱っている（桜井，2000；下坂，2001 など）。人が LH になる過程として，ネガティブなライフイベントに直面した際に，ネガティブな結果と無力感を予期することで抑うつになるとされており，そのときに動機づけの低下や悲嘆の感情が現れるといった症状が見られる（Abramson, et al，1989）。抑うつ的な無気力においても，落ち込みや憂鬱な気分が継続することが指摘されている（桜井，2000）。抑うつ的な無気力に陥った大学生は，人付き合いを避け大学生活に積極的に打ち込めないなど（下山，1995）消極的な行動を取っており，さらに，自分のそういった無気力的な行動に対してネガティブな感情を抱いていると言える。

一方で，スチューデント・アパシー的な無気力はどうであろうか。これは，学業に対して選択的に意欲が減退するというスチューデント・アパシーの概念（Walters，1961 笠原・岡本訳 1975；笠原，1977）に基づくものであり，抑うつ状態とは異なるものとして捉えられている（鉄島，1993）。まず，臨床研究においてスチューデント・アパシーの学生はどのような感情を抱いていたのか参照していく。無気力に伴う感情は，単一ではなく複雑なものであると示唆されている（西平，1981；吉田・鈴木，1985）。孤独感や不安，劣等感や倦怠感，自己嫌悪感，希望の喪失，社会に対する不信・無感動など，多くの感情が合わさっているとされている（西平，1981）。自分が無気力であることに対して，否定的に捉え，ネガティブな感情を持っていると言える。しかし，スチューデント・アパシーの学生は，無関心・無気力・無感動を自覚する一方で，不安や焦燥など，神経症のようなネガティブな感情を伴わず，留年等の危機に瀕し周りに促されてようやく相談室に赴いていたことが事例として取り上げられている（笠原，1984）。スチューデント・アパシーの学生は，無気力であることに焦りや不安といったネガティブな感情が必ずしも連動しないという特徴があると考えられる。

ただし，それは自分が無気力であることを楽観的に捉えているというわけではない。スチューデント・アパシーになりやすい学生の病前性格として，几帳面で，完全主義であることが挙げられている（笠原，1984）。スチューデント・アパシーになると，予想される敗北や失敗を恐れ，学業における競争を回避しようとする反応を見せる（Walters，1961 笠原・岡本訳 1975）。何事もきちんと完璧にやろうとするため，うまくできないと挫折してしまったり，失敗しそうな場面を避けたりする傾向があると言えるであろう。実際に心理検査や面接をスチューデント・アパシーの学生へ丁寧に行うと，不安得点が高く出たり，無気力な生活が不本意であると認めたりする（土川，1981）。無気力の状態が続くと，やらなければならないという感情と実際にやれていないという事実とのギャップから，焦燥感や劣等感が生まれることも指摘されている（高野，1988）。無気力であることを楽観視しているというより，本当は完璧にこなしたいのに，実際はそうできていない現実に直面することを避けているのである。また，日本のスチューデント・アパシーの独自性として，何をしても本当に楽しいという感覚が希薄化していること（アンヘドニア）が強調されている（笠原，1984）。失敗を恐れ競争場面などから回避した結果，物事を成し遂げる喜びが得られず，生活の中に達成感や充足感，やりがいなどが感じられにくくなっているのではないかと考えられる。

一般学生のアパシー化（土川，1985）の警鐘により，スチューデント・アパシーは特定の学生だけでなく，誰にでも起こり得る状態として捉えられるようになった（鉄島，1993）。臨床研究で取り上げられていたスチューデント・アパシーの学生の特徴を，現在のスチューデント・アパシー的な無気力の学生にそのまま当てはめて考えることは難しいであろう。だが，無気力であることに対して，抑うつ的な無気力のようにネガティブな気持ちを伴わない点は共通していることが考えられる。スチューデント・アパシー的な無気力の学生は，自分自身や問題について真剣に考えられない，考えようとしない特徴や，周りの期待に応え自分を保とうとする適応強迫的性格を持つことが指摘されている（下山，2000）。加えて，学業

にのみ意欲の減退を示す学生は，抑うつ症状を示す学生に比べて，私的自己意識や否定的考え込み，分析的考え込みの傾向が低いことが調査で示されている（狩野・津川，2008，2011）。抑うつ的な無気力の学生と異なり，スチューデント・アパシー的な無気力の学生は，自分が無気力であることをそれほど深刻に捉えていないことが考えられる。さらに，大学生の実態調査によると，アクティブ・ラーニングを導入した授業の増加を全体の 60%以上の大学が目指しており，「授業で出された宿題や課題はきちんとやる」「履修した科目は途中で投げ出さない」という項目に 80%以上の学生が「とてもあてはまる」と回答していた（ベネッセ教育総合研究所，2016）。学生が主体的に学ぶ機会を大学が設けつつあり，学生自身も授業に対する態度は「まじめ化」（渡部，2005）している。学業に対して意欲が減退していたとしても，授業自体には参加できているため，それほど焦りや不安を感じにくいのではないだろうか。

無気力の調査研究で使用される尺度（下山，1995；下坂，2001）では，こうした無気力に対する感情については触れられておらず，言及されるのは自分が特定の場面にて意欲が減退しているかどうかのみである。しかし，スチューデント・アパシー的な無気力は必ずしも学業にのみ意欲の減退を示すとは限らない。例えば，学業に対して意欲の減退を示す学生は，大学生活や授業に対する意欲の減退も含むアパシー傾向測定尺度の得点も高く見られていた（狩野・津川，2008）。学業への意欲の減退と，大学生活に対する張りのなさや確固とした自分のなさとの関連も示されている（下山，1995）。さらに，狩野・津川（2011）の縦断調査にて，継続的な学習意欲の減退を示す群が，意欲の高い群に比べて学生生活に対しても意欲が減退するようになる結果が見られた。つまり，スチューデント・アパシー的な無気力は，学業に対する意欲の減退を中心に，勉学の場への意欲の減退が見られたり，時間の経過でより深刻化したりすることがある。何に対して意欲が減退しているかという点だけでは，全般的な意欲の減退が見られる抑うつ的な無気力との弁別は難しいであろう。

そこで，本研究では，自分が無気力であることに対する感情に着目する。スチューデント・アパシーの学生が時間の経過により，学業以外にも意欲が減退するのは，周りと比較して自分だけができていないことに次第に焦りなどの感情が生じるためであると考えられている（笠原，1984）。実際に，本間・松田（2012）の縦断研究においても，1 回目から 2 回目までの 3 ヶ月間にストレッサー体験量が多く，適当なサポートを受けられなかった学生は，心理状態が悪化し無気力傾向が高まることが示されていた。したがって，スチューデント・アパシーの学生は，無気力になった当初はあまりそれを深刻に捉えていないが，無気力に対して適切な支援が行われず，その状態が続くと，やがてネガティブな感情が高まり，より広範な対象に意欲の減退を示すことが推測される。

だが，先述したように，臨床研究の行われていた 1970 年代と現在とで，学生を取り巻く環境は変化している。学生の「まじめ化」（渡部，2005）に伴い，現在のスチューデント・アパシー的な無気力は，臨床研究で指摘されていたほど深刻化・蔓延化に至らないとの指摘もある（大西，2016）。無気力に対する感情を縦断的に測定することで，現在の一般学生に

おけるスチューデント・アパシー的な無気力の新たな特徴が見られるのか検討することが求められる。

縦断的な調査は，無気力に対する感情の時間的変化を見るだけでなく，無気力そのものが一時的なものか継続的なものか区別するためにも必要である。例を挙げると，下坂（2001）の作成した無気力感尺度には，将来への見通しのような長期的な視点を持つ「自己不明瞭」だけでなく，日々の生活に対する疲れなど短期的に感じられる「疲労感」も因子に含まれる。測定される無気力には，その日の気分や体調などの一時的な個人の状態に左右されるものもあると言える。狩野・津川（2011）も，自身の以前の研究の課題点として，横断調査で無気力を測定したことを挙げている。1 時点のみの調査では，測定した無気力が下坂（2001）の「疲労感」のような，一時的なものなのか判断がしづらい。大学生の継続的な無気力を測るためには，縦断的にデータを収集する必要がある。

また，継続的な無気力は，一定の水準を保ったり，次第にその傾向が高まったりするとは限らない。実際の大学生活が期待していたよりも時間的にゆとりのある生活であった場合，アパシー傾向が最も高まっていた（千島・水野，2015）。例えば，新学期が開始したばかりの頃や期末試験の近い時期などは，大学生に緊張感や期待感をもたらし，やらなければいけないことが明白である。反対に，それ以外の時期は，自由に使える時間をどう使ってよいのかわからず，大学生活の目的や意義を見失い，結果として意欲の減退につながることが推測される。これは，学業に対する意欲の減退が，大学生活への張りのなさや自分のなさと関連していた下山（1995）の研究とも一致する。そのため，継続的な無気力は，時期によってその傾向に高低があることも考慮しなければならないであろう。

以上を踏まえて，本研究では，大学生の無気力と無気力に対する感情を縦断的に測定する。そこで，スチューデント・アパシー的な無気力における学業への意欲減退が，無気力に対する感情に影響を及ぼすのか検討を行う。さらに，時間の経過により，自身が無気力であることに焦りや不安といったネガティブな感情が高まるのか，学業以外に対しても意欲の減退が見られるのか，併せて明らかにし，現在の一般学生におけるスチューデント・アパシー的な無気力の実態を掴んでいく。

時間の経過によるスチューデント・アパシー的な無気力の捉え方の変化

抑うつ的な無気力との混在が起こっていたものの，学業に対して意欲が減退するスチューデント・アパシー的な無気力については，1970 年代から現在まで研究が続けられていた。スチューデント・アパシーに陥ると，大学生に大きな影響が見られるからであろう。学生にとって本業であるはずの学業に対して意欲が減退した結果，学生は怠学傾向を示すようになる（齋藤，2005）。学業に対する怠惰的な態度は，なまけ傾向尺度（橋本・久村・浜上・飯村，2015）が作成されるように，不適応な状態として捉えられている。国立大学を対象に学生の休学，退学の理由を調査すると，最も多いのが勉強意欲の減退・喪失を指す「消極低理由」であった（内田，2009）。学業に対する意欲の減退が続くと，大学生の現在だけでな

く，将来にも影響を及ぼしかねない。そのため大学生が無気力になることは防がなければならないものであり，長年研究が続けられてきたことが考えられる。

しかし，中学生を対象とした無気力研究では，無気力の別の側面が見出されている。小・中学生を対象に無気力の様態を検討したところ，中学生は日常生活における集中のできなさや身体的なだるさを強く感じていた（笠井他，1995）。こうした中学生の無気力を抑制・改善するには，中学生本人がコーピング・エフィカシー（ストレス事態における対処行動への自信）を持つことや，勉強への偏った思考を持たないよう友人関係の改善や教師への信頼感の構築が重要であると示唆されている（牧，2011）。笠井（2005）によると，中学生の無気力は発達過程に生じる一時的なものであり，中学に移行したことで一変した授業内容や友人関係に対応するための充電期間であると考察している。中学生が今後大きな飛躍を遂げるための必要な過程として，無気力を肯定的に捉えていると言えよう。学業への意欲の減退を，失敗を恐れ，競争場面を回避するための反応（Walters，1961 笠原・岡本訳 1975）として見ていた大学生の無気力研究とは対照的な捉え方である。

大学生自身は，自分が無気力であることをどのように捉えているのだろうか。先述したように，多くの大学が，学生が主体的に学ぶ機会を設けつつあり（ベネッセ教育総合研究所，2016），学生自身も授業に対する態度は「まじめ化」（渡部，2005）している。学業への意欲の減退を覚えても，授業自体には出席しているため，単位を落としたり留年したりするなど，大きな問題が起こりにくくなっている。現在の大学生は，無気力に対してそれほど否定的な感情を抱いていないのではないか。さらに，コロナ禍において大学生活は一変した。これは大学生に大きな影響を及ぼしていることが推測される。

元来，臨床研究において，几帳面で完全主義，凝り性の傾向のある大学生が周囲と比較することによって自身のアイデンティティがうまく確立できず，挫折して無気力に陥ることが考えられていた（笠原，1977，1984；土川，1981；山田，1992）。その特徴として，学業のような優劣がつく競争場面を避ける一方で，アルバイトやサークルなどには積極的に参加する（Walters，1961 笠原・岡本訳 1975；笠原，1977）。だが，アイデンティティが確立しているように見える友人や教師のそばにいると，アイデンティティが拡散している状態にある自分自身の存在が脅かされているように感じ，彼らから離れようとする。結果として，学業だけでなく対人関係を築くことにも意欲が減退し，さらに無気力が深刻化する過程が示唆されている。つまり，大学生は学生生活を過ごす中で，周囲に対する劣等感をきっかけに無気力に至る。最初は学業に対する選択的な意欲の減退であるが，対人関係に引け目を感じ支援を求められない結果，他の場面でも意欲の減退を示すようになるのである。

それでは，コロナ禍で大学生はどのような状況に置かれているのか。学習やスポーツで競い合う友人はいないと回答した学生は，2016 年から 2021 年で約 40%から約 50%に増加していた（ベネッセ教育総合研究所，2021）。オンライン形式に授業が切り替わり，自宅にて一人で受講するようになった。学業の習熟度など他の学生との優劣が見えにくくなったことで，周囲に対する劣等感を覚えにくい状況にあることが推測される。加えて，オンライン

授業のメリットとして，通学時間がない分自由時間が増えることや，自分の好きな場所，好きなペースで学習ができることを半数以上の学生が挙げていた（ベネッセ教育総合研究所，2021）。これは，学生が主体的に学ぼうとする機会を設ける大学の方針（ベネッセ教育総合研究所，2016）とも合致しており，学生が自分から行動を起こしやすい環境にあると言える。一見，スチューデント・アパシー的な無気力に陥りにくい状況にあるように思われる。

しかし，一方で，コロナ禍によるマイナスの影響も示されている。授業の選択の仕方として，単位をとるのが難しいが自分の興味のある授業よりも，あまり興味はないが単位を取りやすい授業を選択すると回答した学生は，2008 年時に 5 割未満であったのに対して 2021 年時は 6 割以上に増加していた（ベネッセ教育総合研究所，2021）。自由に時間が取れるようになったが，そこで自主的に勉学に励むのではなく，より楽な方向に行こうとする学生が増えていると推測される。臨床研究では，無気力の学生はサークルやアルバイトには積極的に参加することが述べられていた（笠原，1977）。現在の学生も，時間に融通が利くようになった分，学業以外の場面で積極的に活動を行っているのだろうか。しかし実際のところ，現在は感染対策のため，学内施設の利用を全面的に認めている大学は 1 割程度に留まっており，多くの大学で授業以外での施設利用は制限されていた（文部科学省，2020）。友人になるきっかけとして部活動・サークルと回答した学生が 2012 年から 2021 年にかけて 20%近く減少している（ベネッセ教育総合研究所，2021）ことからも，学業以外の活動は縮小傾向にあることが推測される。

オンライン授業のデメリットとして，一方的な授業が多いことや，対話や議論がしにくいことが最も回答に上がっていた（ベネッセ教育総合研究所，2021）。直接的な競争場面が減った反面，友人など周囲と協働で行う機会も減少し，何かをやり遂げる達成感を得られにくい状況にあると考えられる。ライブ型授業の履修コマ数やオンデマンド型授業の負担感が学生の精神的健康に関連することも明らかにされている（飯田他，2021）。オンライン授業は学生が受けたい時に受けられるメリットがある一方で，課題が多く出されたり授業の準備に手間取ったりする。そうした疲労が積み重なることと，コロナ禍で自由な行動が制限されることが，学生が主体的に何かをする意欲を減退させることに繋がっているのではないだろうか。スチューデント・アパシーとは異なり，一般学生におけるスチューデント・アパシー的な無気力は，周囲との比較ではなく学生生活に対する意義が見出せないことが，無気力のきっかけになると考えられる。学生を取り巻く環境が一変し，無気力に至る過程やその様態も変化していることが推測される。

そこで，本研究では，学生生活においてスチューデント・アパシー的な無気力を経験したことのある学生に対して面接調査を行う。何を契機に学業への意欲が減退したのか，他の場面でも意欲の減退を感じたか尋ね，スチューデント・アパシー的な無気力に至る過程と様態を明らかにしていく。また，大学生本人が無気力状態にあったことを如何に捉えていたか併せて尋ねることで，無気力の新たな側面を見出していく。

スチューデント・アパシー的な無気力に付随する意欲の減退と対人関係との関連

臨床研究において，スチューデント・アパシーの学生は，時間の経過とともに他の場面でも意欲が減退することが示唆されている（笠原，1977，1984；山田，1992）。学業に対する意欲が減退する状態が続くと，自分と違ってできているように見える周りに引け目を感じ，他者と関わることに対しても意欲の減退が生じる。周りからの支援が得られず，さらに自信を失い，意欲の減退を示す場面が拡大していくとされている。スチューデント・アパシーは学業に対して選択的に意欲が減退するもの（土川，1985）とされているが，それは一時点における特徴であり，適切な支援を受けないとより無気力が深刻化すると言える。

狩野・津川（2011）がスチューデント・アパシー的な無気力と抑うつ的な無気力の弁別を行った際，参加した 155 名の学生のうちスチューデント・アパシー的な無気力に分類されたのは 14 名であった。スチューデント・アパシー的な無気力は，学生の本業である学業に対して意欲の減退を示すものとして定義づけられているが（鉄島，1993），実際のところ，厳密に学業に対してのみ意欲が減退している学生は少ないことが考えられる。先述した狩野・津川（2011）の縦断調査でも，スチューデント・アパシー的な無気力を示す群は，意欲の高い群と比べて学生生活に対しても意欲の減退が見られていた。他にも，学業に対して意欲の減退を示す学生が，大学生活や授業に対する意欲の減退も見られていたことや（狩野・津川，2008），大学生活に対する張りのなさや確固とした自分のなさとの関連することも示されている（下山，1995）。学業を中心に，勉学の場にも意欲の減退が見られることがあると言えるであろう。とくに現在は，コロナ禍の影響で大学の授業がオンライン形式になり，学内施設の利用も一部制限されている（文部科学省，2020）。オンライン授業は自分のペースで学習できるメリットがある一方で，一方的な講義になるデメリットがある（ベネッセ教育総合研究所，2021）。他者との双方向でのやり取りが難しく，自分の行動も制限がかけられているため，大学生は，学業以外の面でも意欲の減退しやすい状態にあると考えられる。狩野・津川（2008，2011）は無気力研究ではスチューデント・アパシー的な無気力と抑うつ的な無気力のふたつの視点が混在していることを指摘していた。現在，スチューデント・アパシー的な無気力は学業を中心に様々な場面で意欲が減退しやすい状況にあり，日常生活全般で意欲の減退が見られる抑うつ的な無気力と，より区別がつきにくくなっていることが推測される。

抑うつ的な無気力へのアプローチとして，第 3 節では過去と現在の対人関係を取り上げていた。スチューデント・アパシー的な無気力に付随して起こっている意欲の減退でも，対人関係は同様の効果が得られるのであろうか。スチューデント・アパシー的な無気力は，Walters（1961 笠原・岡本訳 1975）のスチューデント・アパシーの報告に基づいたもので，精神疾患による無気力とは異なると位置づけられている（鉄島，1993；下山，1995）。一方，抑うつ的な無気力は LH 理論（Seligman & Maier，1967）に関連づけられ，無気力の状態と抑うつ状態を等価的に扱っている（下坂，2001）。無気力研究の流れが異なり，抑うつ状態と等価的に扱われているかどうかという点から，ふたつの視点の無気力は質的に違うもの

である。対人関係との関連も，抑うつ的な無気力とは異なることが考えられる。だが，見かけ上はふたつの視点の無気力の区別がつきにくい状態にある。抑うつ的な無気力と同じようにスチューデント・アパシー的な無気力へ支援を行い，それがかえって無気力の深刻化を招きかねない。スチューデント・アパシー的な無気力に付随した様々な場面に対する意欲の減退について，対人関係とどのような関連があるのか明らかにする必要があるだろう。

先述したように，スチューデント・アパシー的な無気力は，勉学の場である大学生活において意欲の減退が見られていた。中学生を対象とした調査ではあるが（林田・黒川・喜田，2018），親の愛着及び教師・友人関係に対する満足感が高いと，学校適応感も高くなることが示されていた。さらに，親子関係が不安定であっても，教師や友人関係など学校内の対人関係が良好であれば，学校適応感が高められることや，学校内の対人関係に満足していないと，親子関係が良好であるか否かに関わらず，高い学校適応感が得られにくいことが明らかにされていた。中・高校生を対象とした調査でも（大久保，2005），学校適応感に友人関係が強い影響を与えていた。学校生活で関わる機会の多い対人関係ほど，学校での適応に影響が強いことが考えられる。そこで，勉学の場を中心に意欲の減退が起こるスチューデント・アパシー的な無気力では，過去の対人関係について，友人と教師との関連を検討していく。

また，抑うつ的な無気力では，主に現在の親や友人からのソーシャル・サポートが無気力の抑制に関連していることが示されている（福岡・橋本，1997；福岡，2000：下坂，2001；本間・松田，2012）。だが，現在はコロナ禍にあり，人と直接やり取りをすることが難しい。大学生の約 4 割が一人暮らしをしており（ベネッセ教育総合研究所，2008），物理的に親への支援を求めにくい。大学での友人関係も，悩み事を相談できる友人がいないまたは一人と回答した学生は，2012 年では 30%程度であったのに対し，2021 年では 40%程度に増加していた（ベネッセ教育総合研究所，2021）。大学生によって，支援を求めやすい特定の対象にばらつきがあろう。そのため，スチューデント・アパシー的な無気力に付随する意欲の減退については，対象を限定せず，現在の対人関係からのソーシャル・サポートとの関連を明らかにしていく。

スチューデント・アパシー的な無気力と抑うつ的な無気力の大きな違いとして，無気力に対する感情の持ち方を既述していた。抑うつ的な無気力は，落ち込みや憂鬱な気分が継続するが（桜井，2000），スチューデント・アパシー的な無気力は自分が無気力であることをそれほど深刻に捉えない傾向にある（下山，2000；狩野・津川，2008）。こうした無気力に対する感情にも，対人関係との関連はあるのだろうか。臨床研究において，スチューデント・アパシーの学生は自分が無気力であることに焦りや不安を覚えないが，その状態が続くと，競争場面で周囲と優劣がつくのを恐れ，やがて対人関係からも退却していくことが示唆されている（笠原，1977，1984；土川，1981；山田，1992）。学業意欲への減退に，当初はネガティブな感情が連動していないが，周りに対して劣等感を覚えることで，無気力が深刻化していくことが考えられる。それに加えて，日本のスチューデント・アパシーの学生は快感情の希薄化も強調されている（笠原，1984）。現在，大学ではオンライン形式の授業が多く

（文部科学省，2020），大学生が直接周囲と競い合う場面は少ない。学業を中心に大学生活に対して意欲が減退していても，周囲と比較することがなく，焦りや不安をより抱きにくいことが推測される。一方で，悩み事を相談したり，学習や広く社会の課題などを議論したりする友人も減少している（ベネッセ教育総合研究所，2021）。周りと協力して何かを成し遂げたり挑戦したりする機会がなく，支援を求めにくい状況にある。対人関係の希薄化が，現在の大学生活に意義を見いだせず，学業以外の場面でも意欲の減退が起こることに繋がっているのではないか。対人関係について，スチューデント・アパシー的な無気力に対する焦りや不安といったネガティブな感情や快感情とどう関連しているのか，明らかにしていくことが求められる。

ここまで，コロナ禍によって大学生を取り巻く環境が大きく変化していることを述べてきた。しかし，大学生の心理的な問題にコロナ禍が実際にどれだけ影響を与えたかについては，紀要論文や学会発表に留まっており（遠藤・鈴木・窪谷・馬場，2022；川原，2022；松本，2022 など），実証的な研究は現状として少ない（飯田他，2021 など）。そこで，コロナ前とコロナ禍における調査でそれぞれ得られた対人関係と大学生の無気力のデータを比較することで，影響の度合いについて明らかにしていく。

以上を踏まえて，本研究では，スチューデント・アパシー的な無気力に付随して起こっている意欲の減退と，それに対する感情について，過去と現在の対人関係と関連が見られるのか検討していく。また，コロナ前とコロナ禍における無気力の調査データの比較を行い，現在の大学生の無気力の実態を把握する。

第 5 節　本研究における目的と検討方法

大学生の無気力研究で残された問題点と本研究の方針に基づいて，以下の 2 点を明らかにしていく。

第 1 に，過去と現在の対人関係が，抑うつ的な無気力と関連があるのか検討する。

第 2 に，スチューデント・アパシー的な無気力とそれに対する感情に着目し，大学生が無気力を如何に捉えているのか検討する。

これらを踏まえて大学生の無気力の実態をより正確に把握し，早期の段階での適切な支援策を講じることを本研究の目的とする。

本研究は文献研究，実証研究，総合討論から成り，全体で 8 章の構成によって討論する。第 1 章は文献研究，第 2 章から 7 章までが実証研究，第 8 章が総合討論である。各章の目的・構成と概要は以下の通りである。

第 1 章では，これまでの先行研究のレビューをし，本研究の目的と方針を明らかにしてきた。第 1 節では，現在，無気力がどのように定義づけられているのか述べた。第 2 節では，海外研究と比較しながら日本における無気力研究の流れを整理し，先行研究における限界点を述べた上で，それを改善する方法として本研究の方針を提示した。第 3 節以降は抑うつ的な無気力，スチューデント・アパシー的な無気力それぞれについて述べていった。第 3 節では，過去と現在の対人関係が抑うつ的な無気力とどう関連していると考えられるか，親子関係，友人関係，教師との関係それぞれ整理を行った。第 4 節では，抑うつ的な無気力とは異なる特徴として，スチューデント・アパシー的な無気力に対する感情に着目し，コロナ禍において大学生が無気力をどのように捉えているのか検討を行った。第 5 節にあたる本節では，本研究の目的と研究方法，構成をまとめている。

第 2～7 章の実証研究は大きくわけて 3 段階の構造を持つ。第 1 段階として第 2～4 章があり，目的 1 を明らかにするために過去と現在の対人関係に関して検討していく。第 2 段階として第 5，6 章では目的 2 を明らかにするためにスチューデント・アパシー的な無気力とそれに対する感情に着目した調査を行う。第 3 段階の第 7 章では，目的 1，2 のまとめ上げとしてスチューデント・アパシー的な無気力に付随する様々な場面での無気力と，それに対する感情が，過去と現在の対人関係とどう関連するのか検討していく。

第 2 章では，養育者と抑うつ的な無気力との関連を検討する。第 1 節では過去の養育者の養育態度が無気力と関連があるのか，第 2 節では現在の養育者からのソーシャル・サポートが無気力と関連するのか見ていく。第 3 章は，友人関係と抑うつ的な無気力との関連を検討する。第 1 節では過去の友人に対するふれ合い恐怖が無気力と関連があるのか，第 2 節では現在の友人からのソーシャル・サポートが無気力と関連があるのかそれぞれ検討していく。第 4 章では，教師と抑うつ的な無気力との関連を検討する。第 1 節では過去の教師に対する信頼感が無気力と関連があるのか，第 2 節では現在の教師からのソーシャル・サポートが無気力と関連があるのか検討を行う。

第 5 章では，スチューデント・アパシー的な無気力とそれに対する感情が時間の経過によって変化が見られるのか縦断的に検討していく。まず，調査開始時点で学業に対して意欲が減退していると，それに連動して焦りや不安といったネガティブな感情を抱くのか調べていく。次に，時間の経過によって，学業に対して無気力であることにネガティブな感情が高まり，他の場面に対しても意欲が減退するのか検討していく。

第 6 章では，スチューデント・アパシー的な無気力の形成過程を半構造化面接によって調べていく。どのようなきっかけで無気力に陥り，無気力状態からどのように回復し意欲のある状態を維持しているのかストーリーラインを立てていく。また，スチューデント・アパシー的な無気力に対人関係との関係はあったのか，自分が無気力であることをどのように捉えていたのか，学業以外の場面でも無気力を感じていたかどうかも併せて調べていく。

第 7 章では，これまでの研究を踏まえ，過去と現在の対人関係と無気力，無気力に対する感情との関連を検討する。スチューデント・アパシー的な無気力の傾向が高い学生は他の場面に対する無気力と，それに対する感情が，過去と現在の対人関係とどう関連するのか，詳しく見ていく。

最後に，第 8 章では，本研究で得られた知見をまとめ，これまでの文献研究と実証研究から総合的な議論を行っていく。第 1 節では第 2〜7 章で得られた知見を整理し，第 2 節で大学生の無気力の討論を示し，最終的な結論を述べる。第 3 節では，本研究から得られた今後の展望を述べる。

以上に基づいて，本研究の構成を Figure 1-5 に示した。

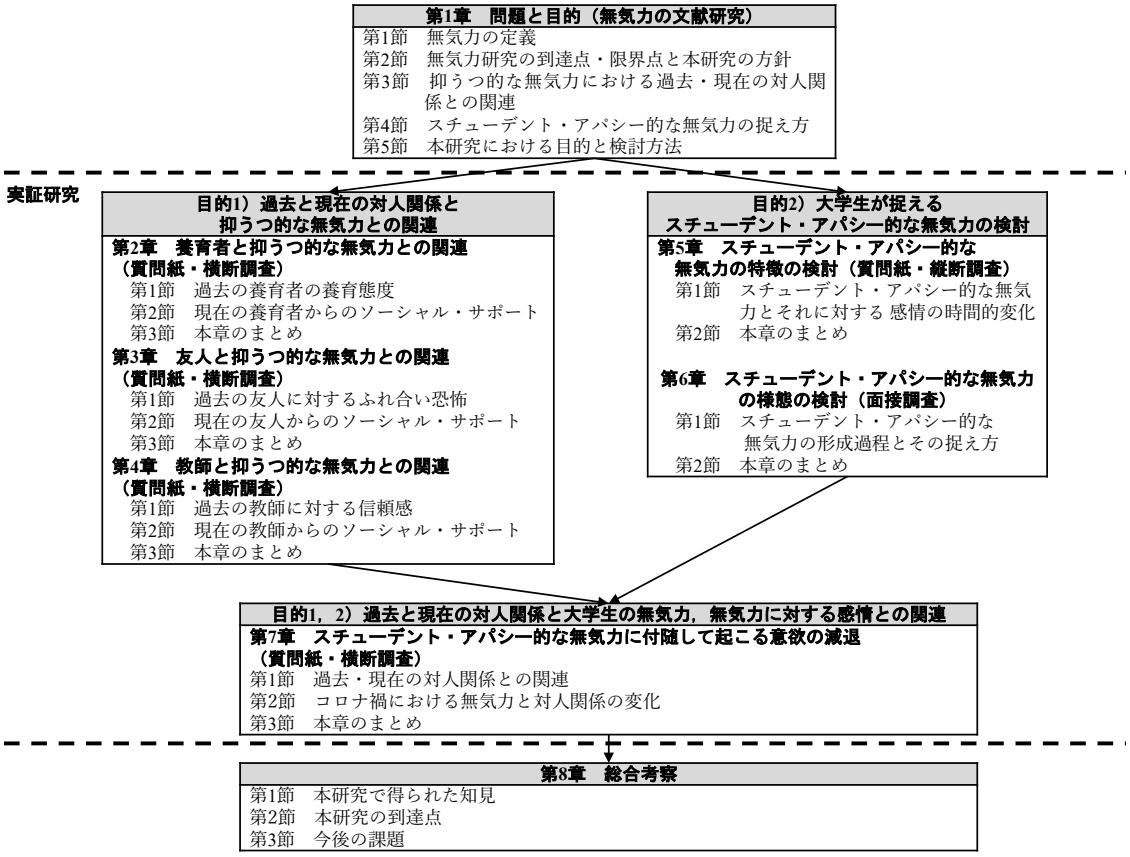


Figure 1-5. 博士論文の構成

目的 1）過去と現在の対人関係と抑うつ的な無気力との関連

第 2 章　養育者と抑うつ的な無気力との関連

第 1 節　過去の養育者の養育態度（調査 1）

目的

本節では，過去の養育者の態度が大学生の抑うつ的な無気力と関連があるのか，養育者の形態別に明らかにしていくことを目的とした。

方法

調査時期と対象者

関東圏内の私立大学に通う男女を対象に，2021 年 4 月に調査を実施した。Google フォームにて重複していた回答を除いたところ，調査に参加した学生は 112 名（男性 18 名・女性 93 名・その他 1 名，平均年齢 18.99 歳・標準偏差 0.98）であった。学年の内訳として，1 年生 38 名，2 年生 58 名，3 年生 14 名，4 年生以上 2 名であった。

調査内容

1）フェイスシート

性別，年齢，所属する学部，学年について尋ねた。

2）無気力感尺度

下坂（2001）の作成した無気力感尺度を使用して，現在どの程度無気力を感じているか尋ねた。この尺度は「自己不明瞭（自分の将来を真剣に考える気にはならない，など）」9 項目，「他者不信・不満足（周りの人たちとの付き合いは退屈だと感じる，など）」6 項目，「疲労感（日々の生活で体がだるいと感じる，など）」4 項目の 3 因子 19 項目から構成された。回答は「1．全くあてはまらない」～「6．よくあてはまる」の 6 件法で，無気力傾向が高いほど得点が高くなるよう設定した。

3）Parental Bonding Instrument　（以下，PBI）尺度

Parker, Tupling & Brown（1979）の PBI 尺度の日本語訳版（小川，1991）を用いて，高校生までの養育者の養育態度を尋ねた。PBI 尺度は「養護（暖かく，親しみのある声で話しかけてくれた，など）」12 項目，「過保護（私を子ども扱いしがちだった，など）」13 項目の 2 因子 25 項目から構成された。「1．全くあてはまらない」～「4．よくあてはまる」の 4 件法で回答を求め，養育者が養護的な，または過保護的な態度を取っていたと感じるほど得点が高くなるよう設定した。

4）一般感情尺度

小川・門地・菊谷・鈴木（2000）が作成した一般感情尺度で現在の気分状態を尋ねた。「肯定的感情（楽しい，など）」8 項目，「否定的感情（緊張した，など）」8 項目，「安静状態（平

穏な，など)」8 項目の 3 因子 24 項目から構成された。「1．まったく感じていない」～「4．非常に感じている」の 4 件法で，それぞれの感情が強いほど得点が高くなるよう設定した。

5）想定した養育者

3）でどのような養育者を想定したのか回答させた。項目は，「1．母」「2．父」「3．祖母」「4．祖父」「5．きょうだい」「6．親戚（叔父，叔母など)」「7．その他（自由回答)」であり，複数回答可とした。データを入力する際は，母と父の両方を選択していた場合は 1（両親)，母のみ選択していた場合は 2（母)，それ以外の回答（両親以外を選択していた，または両親の他に別の養育者を加えていた場合など）は 3（その他）と入力した。

実施手続きと倫理的配慮

大学のオンライン授業内にて Google フォームを用いて調査を実施した。事前に対象者には調査の趣旨について十分な説明を行うと共に，調査への参加は強制ではないこと，調査への協力を拒否しても対象者には不利益は生じないこと，測定されたデータは匿名化されて使用されるため個人情報は保護されることを事前に伝え，調査への参加ならびにデータ使用の同意を事前に確認した。Google フォーム内にも，同様の説明を冒頭に記述し，回答が難しいあるいは回答したくない場合には回答を途中で止めても構わないという旨を明確にした。

結果

各尺度の内的整合性の確認と記述統計

以降の分析には HAD ver.15.0（清水，2016）を用いた。各尺度の下位因子の α 係数を測定したところ，一般感情尺度では肯定的感情が α＝.94，否定的感情が α＝.91，安静状態が α＝.89，PBI 尺度では養護が α＝.91，過保護が α＝.86 であった。無気力感尺度は自己不明瞭が α＝.85，他者不信・不満足が α＝.79，疲労感が α＝.83 であり，いずれも十分な信頼性が確認された。したがって，一般感情尺度は 24 項目，PBI 尺度は 25 項目，無気力感尺度は 19 項目を以降の分析に使用した。

各変数の平均値と標準偏差について，Table 2-1-1 に示した。各変数を従属変数，想定した養育者のタイプを独立変数として分散分析を行ったところ，一般感情尺度の安静状態のみ得点に差が見られた。Holm 法による多重比較の結果，想定していた養育者が両親の場合，その他よりも安静状態の得点が低いことが示された。

Table 2-1-1. 全体並びに想定した養育者ごとの記述統計量

	全体（112名）		想定した養育者ごとの分類						分散分析		多重比較
			両親（49名）		母親（32名）		その他（31名）				
	平均値	*SD*	平均値	*SD*	平均値	*SD*	平均値	*SD*	*F*値	偏η^2	
一般感情尺度											
肯定的感情	24.26	5.59	25.31	5.98	22.81	4.46	24.10	5.81	1.98	0.04	
否定的感情	15.54	5.89	16.00	5.81	15.31	6.82	15.03	5.08	0.28	0.01	
安静状態	22.99	5.22	22.16	5.56	22.38	5.02	24.94	4.44	3.11*	0.05	両親＜その他
PBI											
養護	40.49	6.82	41.04	6.30	40.88	6.55	39.23	7.86	0.74	0.01	
過保護	23.79	6.94	23.33	8.08	23.31	5.60	25.03	6.23	0.68	0.01	
無気力感尺度											
自己不明瞭	27.96	8.43	28.90	8.77	27.56	8.79	26.90	7.56	0.58	0.01	
他者不信・不満足	14.23	5.53	14.35	4.99	14.25	5.91	14.03	6.10	0.03	0.00	
疲労感	15.63	4.72	15.61	4.41	16.44	4.56	14.84	5.32	0.90	0.02	

Note. *p<.05，多重比較はHolm法（5%水準）による

各変数の相関分析

想定した養育者ごとに相関分析を行い，一般感情尺度，PBI 尺度，無気力感尺度の各下位因子との相関を検討した（Table 2-1-2，Table 2-1-3，Table 2-1-4）。一般感情尺度の肯定的感情について，両親を想定していた場合，無気力感尺度の各下位因子と中程度の負の相関があった。母を想定していた場合，自己不明瞭と他者不信・不満足は中程度，疲労感は弱い負の相関が見られた。その他の場合，自己不明瞭と他者不信・不満足で強い負の相関があった。否定的感情について，両親を想定していた場合，無気力感尺度の各下位因子と中程度の正の相関があり，母を想定した場合は自己不明瞭，他者不信・不満足と中程度の正の相関，疲労感と弱い正の相関があった。安静状態について，母を想定した場合に他者不信・不満足と中程度の負の相関，その他の場合に他者不信・不満足と疲労感で中程度の負の相関が見られた。

次に，PBI 尺度の養護について，両親を想定していた場合は他者不信・不満足と疲労感で弱い負の相関が見られた。母を想定した場合は無気力感尺度の各下位因子と中程度の負の相関があり，その他の場合は他者不信・不満足と負の相関があった。過保護について，両親を想定した場合，他者不信・不満足と疲労感で弱い正の相関，母を想定した場合に他者不信・不満足と疲労感で中程度の正の相関が見られた。

Table 2-1-2．各下位因子の相関（両親を想定していた場合）

		1	2	3	4	5	6	7	8
一般感情	1 肯定的感情	－							
	2 否定的感情	−.30*	－						
	3 安静状態	.28*	.06	－					
PBI	4 養護	.25	−.34*	.16	－				
	5 過保護	−.26	.45**	.05	−.65**	－			
無気力感	6 自己不明瞭	−.55**	.41**	−.10	−.26	.16	－		
	7 他者不信・不満足	−.60**	.44**	−.10	−.33*	.33*	.49**	－	
	8 疲労感	−.58**	.51**	−.12	−.29*	.33*	.55**	.59**	－

Note．*p<.05，**p<.01

Table 2-1-3．各下位因子の相関（母を想定していた場合）

		1	2	3	4	5	6	7	8
一般感情	1 肯定的感情	－							
	2 否定的感情	−.16	－						
	3 安静状態	.18	.04	－					
PBI	4 養護	.47**	−.47**	.13	－				
	5 過保護	−.23	.31	−.19	−.67**	－			
無気力感	6 自己不明瞭	−.41*	.45**	−.12	−.58**	.30	－		
	7 他者不信・不満足	−.51**	.45**	−.40*	−.59**	.49**	.44*	－	
	8 疲労感	−.36*	.38*	−.18	−.56**	.40*	.37*	.42*	－

Note．*p<.05，**p<.01

Table 2-1-4．各下位因子の相関（その他の場合）

		1	2	3	4	5	6	7	8
一般感情	1 肯定的感情	－							
	2 否定的感情	.03	－						
	3 安静状態	.44*	−.25	－					
PBI	4 養護	.37*	−.04	.22	－				
	5 過保護	−.33	.13	−.32	−.67**	－			
無気力感	6 自己不明瞭	−.75**	−.09	−.27	−.28	.30	－		
	7 他者不信・不満足	−.82**	.12	−.40*	−.37*	.25	.75**	－	
	8 疲労感	−.30	.19	−.43*	−.22	.22	.11	.39*	－

Note．*p<.05，**p<.01

無気力感尺度を従属変数としたポアソン回帰分析

コルモゴロフ・スミルノフ検定を用いて，無気力感尺度の各下位尺度の正規性を検討した。検定の結果，下位尺度の自己不明瞭と疲労感は正規分布に従っているということが示された（順に，$D=0.09$，$p>.05$，$D=0.07$，$p>.05$）。一方，他者不信・不満足は正規分布ではないということが示された（$D=0.13$，$p<.05$）。そのため，他者不信・不満足の検討はポアソン回帰分析を用いた。他の 2 つの下位尺度についても，結果の比較のためポアソン回帰分析を行った。

想定した養育者ごとに 2 ステップからなるポアソン回帰分析を行い，現在の気分状態で統制した養育者からの養育態度と大学生の無気力との関連を検討した。第 1 ステップでは一般感情尺度の各下位因子を加え，第 2 ステップでは PBI 尺度の各下位因子を投入した。以下に，無気力感尺度の自己不明瞭，他者不信・不満足，疲労感それぞれを従属変数としたときの結果を順に述べていく。

まず，自己不明瞭を従属変数としたときの結果を Table 2-1-5 に示した。いずれの場合も，第 1 ステップにおける調整済み決定係数（AdjustR^2）は有意であったが，第 2 ステップにおける有意な増分は見られなかった。第 1 ステップにおける標準偏回帰係数（β）を見ると，いずれの場合も肯定的感情に負の関連が見られた。また，両親または母を想定していた場合は，否定的感情と正の関連も見られた。

Table 2-1-5. 自己不明瞭に対するポアソン回帰分析

	想定した養育者	両親			母			その他		
モデル	独立変数	AdjustR^2	ΔR^2	β	AdjustR^2	ΔR^2	β	AdjustR^2	ΔR^2	β
1	現在の気分状態	.38**			.32**			.52**		
	肯定的感情			−.48**			−.34*			−.74**
	否定的感情			.27**			.38**			−.03
	安静状態			.03			−.08			.05
2	養育態度	.40**	.02		.40**	.09		.53**	.01	
	養護									
	過保護									
			［95%CI］			［95%CI］			［95%CI］	
	肯定的感情		−.69	−.28		−.59	−.08		−.97	−.52
	否定的感情		.08	.45		.11	.66		−.25	.19
	安静状態		−.20	.27		−.32	.15		−.25	.35
	養護									
	過保護									

Note. *$p<.05$，**$p<.01$，β値はΔR^2が有意であった最終モデルでの値

次に，他者不信・不満足を従属変数にしたときの結果を Table 2-1-6 に示した。両親を想定していた場合，その他の場合は，第 1 ステップの AdjustR^2 は有意であったが，有意な増分は見られなかった。第 1 ステップから，両親を想定していた場合，β は肯定的感情と負の関連，否定的感情と正の関連が見られた。その他の場合，β は肯定的感情と負の関連があった。母を想定していた場合，第 1 ステップの AdjustR^2 が有意であり，第 2 ステップで有意な増分が見られた。第 2 ステップの β は，肯定的感情と安静状態が負の関連，否定的感情が正の関連を示していた。

Table 2-1-6. 他者不信・不満足に対するポアソン回帰分析

	想定した養育者	両親			母			その他		
モデル	独立変数	AdjustR^2	ΔR^2	β	AdjustR^2	ΔR^2	β	AdjustR^2	ΔR^2	β
1	現在の気分状態	.43**			.52**			.69**		
	肯定的感情			−.52**			−.32**			−.83**
	否定的感情			.28*			.31**			.19
	安静状態			.05			−.31**			.02
2	養育態度	.44**	.01		.57**	.06*		.71**	.01	
	養護						−.14			
	過保護						.13			
			［95%CI］			［95%CI］			［95%CI］	
	肯定的感情		−.73	−.31		−.54	−.10		−1.04	−.62
	否定的感情		.06	.51		.15	.47		−.03	.42
	安静状態		−.17	.27		−.46	−.16		−.23	.27
	養護					−.51	.23			
	過保護					−.15	.40			

Note. *p<.05，**p<.01，β値はΔR^2が有意であった最終モデルでの値

最後に，従属変数が疲労感のときの結果を Table 2-1-7 に示した。両親を想定していた場合，その他の場合は，第 1 ステップの AdjustR^2 は有意であったが，有意な増分は見られなかった。第 1 ステップから，両親を想定した場合は肯定的感情に負の関連，否定的感情に正の関連があり，その他の場合は肯定的感情に負の関連があった。母を想定した場合は，第 2 ステップで R^2 の有意な増分が見られた。第 2 ステップから，いずれの因子も有意な関連は見られなかった。

Table 2-1-7. 疲労感に対するポアソン回帰分析

	想定した養育者	両親			母			その他		
モデル	独立変数	AdjustR^2	ΔR^2	β	AdjustR^2	ΔR^2	β	AdjustR^2	ΔR^2	β
1	現在の気分状態	.42**			.25**			.19**		
	肯定的感情			−.43**			−.15			−.14
	否定的感情			.37**			.18			.11
	安静状態			−.01			−.12			−.31
2	養育態度	.42**	.00		.34**	.09*		.19**	.01	
	養護						−.34			
	過保護						.04			
			［95%CI］			［95%CI］			［95%CI］	
	肯定的感情		−.63	−.23		−.49	.19		−.53	.24
	否定的感情		.17	.57		−.02	.38		−.23	.45
	安静状態		−.24	.23		−.38	.14		−.64	.01
	養護					−.80	.12			
	過保護					−.34	.42			

Note. *p<.05，**p<.01，β値はΔR^2が有意であった最終モデルでの値

考察

本節では，大学生の想定した養育者を両親，母親，その他に分類し，過去の養育者の態度が大学生の抑うつ的な無気力と関連があるのか検討すること目的としていた。以下に，結果を示しつつ先行研究と照らし合わせて検討していく。

ポアソン回帰分析の結果から，無気力は，両親，母親，その他，いずれの場合の養育態度と関連は見られず，現在の気分状態と関連があった。先行研究における見解として，母親が父親代わりに子どもの壁となり，その壁を乗り越えられず挫折してしまうことや（Walters, 1961 笠原・岡本訳 1975；山田，1992），やさしい両親に依存して無気力になるとされていた（深谷，1990）。本節の結果は，そうした見解とは異なるものである。本節の調査はオンライン形式の授業内にて Google フォームを用いて実施した。調査の参加者は，少なくともオンライン用の授業資料を開き，QR コードを読み込んで回答をするだけの意欲があったことが言える。臨床研究で対象とされていた，留年や退学の危機に瀕しているような無気力の学生（笠原，1984）ほど，無気力の程度が重くないことが考えられる。気分状態との関連が見られたことからも，現在の大学生の抑うつ的な無気力は，その日の気分に左右されるようなものであり，そのため過去の養育態度との関連があまり見られなかったのであろう。

母親は，子どもの性別関係なく直接的で強い関係を持つ（信田，2008；大島，2013）。子どもと結びつきが強い母親が，先述した過干渉な態度を子どもに取ることで無気力が促進されることが示唆されていた（山田，1992）。しかし本節では，抑うつ的な無気力と母親の過干渉な態度との関連は見られなかった。子どもの話を聞き，自立を促す姿勢を取っている親が現在は多い（国立女性教育会館，2005；NHK 放送文化研究所，2013）。臨床研究で指摘されていた，子どもが何かを成し遂げようとする気持ちを阻害するほどの過干渉な態度は，現在の母親は取らない傾向があると推測される。ただし，母親の情緒的な態度も，大学生の無気力とは関連が見られなかった。過去に母親から自立を促す関わり方をされていても，大学生は現在コロナ禍の自粛生活で自分から行動を起こすことが難しいため，無気力の抑制に繋がらなかったのであろう。

両親からの養育態度を想定していた場合も，情緒的な関わりと抑うつ的な無気力に関連は見られなかった。コロナ禍で家族と過ごす時間が増え，深谷（1990）の指摘していたやさしい親により依存しやすくなるのではという予測からは外れている。だが，大学生の多くは，親と対等な関係を築くようになる（落合・佐藤，1996a）。過去に両親が子どもを依存させるような態度を取り，現在両親と過ごす時間が多い状況であっても，大学生自身は心理的に両親から一定の距離を保つことができているために，無気力と関連が見られなかったのだと考えられる。

第 2 節　現在の養育者からのソーシャル・サポート（調査 1）

目的

本節では，現在の養育者からのソーシャル・サポートが大学生の無気力と関連があるのか，養育者の形態別に明らかにしていくことを目的とした。

方法

調査時期と対象者

本調査の調査協力者は第 1 節と同一である。2021 年に実施し，関東圏内の大学生 112 名（男性 18 名，女性 93 名，その他 1 名，平均年齢 18.99 歳，標準偏差 0.98）が分析対象者であった。

調査内容

1）フェイスシート

第 1 節と同様であった。

2）無気力感尺度

第 1 節と同様，下坂（2001）の作成した無気力感尺度を使用し，現在どれぐらい無気力を感じているか尋ねた。

3）学生用ソーシャル・サポート尺度（Scale of Expectancy for Social Support：以下，SESS）

久田・千田・箕口（1989）が作成した SESS で，大学生が現在の養育者にどれだけソーシャル・サポートを期待しているのか調べた。「あなたが落ち込んでいると，元気づけてくれる」などの全 16 項目からなり，「1．絶対ちがう」～「4．きっとそうだ」の 4 件法でソーシャル・サポートを受けていると感じているほど得点が高くなるよう設定した。本来は各項目に対して，父親・母親・きょうだい・教師・友人のサポートを，それぞれどれだけ期待しているのか答えるものであるが，本調査では養育者との関係に焦点を当てるため，養育者のみに回答を限定した。

4）一般感情尺度

第 1 節と同様に，小川他（2000）が作成した一般感情尺度で現在の気分状態を尋ねた。

5）想定した養育者

第 1 節と同様に，3）でどのような養育者を想定したのか回答させた。項目は，「1．母」「2．父」「3．祖母」「4．祖父」「5．きょうだい」「6．親戚（叔父，叔母など）」「7．その他（自由回答）」であり，複数回答可とした。データを入力する際は，母と父の両方を選択していた場合は 1（両親），母のみ選択していた場合は 2（母），それ以外の回答（両親以外を選択していた，または両親の他に別の養育者を加えていた場合など）は 3（その他）と入力した。

実施手続きと倫理的配慮

第 1 節と同一の実施手続きを踏んで調査を行った。調査対象者には調査の趣旨について十分な説明を行うと共に，調査への参加は強制ではないこと，調査への協力を拒否しても対象者には不利益は生じないこと，測定されたデータは匿名化されて使用されるため個人情報は保護されることを事前に伝え，調査への参加ならびにデータ使用の同意を事前に確認した。

結果

各尺度の内的整合性の確認

以降の分析には HAD ver.15.0（清水，2016）を用いた。各尺度の下位因子の α 係数を測定したところ，一般感情尺度では肯定的感情が α＝.94，否定的感情が α＝.91，安静状態が α＝.89，SESS は α＝.91，無気力感尺度は自己不明瞭が α＝.85，他者不信・不満足が α＝.79，疲労感が α＝.83 であり，いずれも十分な信頼性が確認された。したがって，一般感情尺度は 24 項目，SESS は 16 項目，無気力感尺度は 19 項目を以降の分析に使用した。

各変数の平均値と標準偏差について，Table 2-1-1 に示した。各変数を従属変数，SESS で想定した養育者のタイプを独立変数として分散分析を行ったところ，いずれの変数でも差は見られなかった。

Table 2-2-1. 全体並びに想定した養育者ごとの記述統計量

	全体（112名）		想定した養育者ごとの分類						分散分析	
			両親（49名）		母親（35名）		その他（28名）			
	平均値	*SD*	平均値	*SD*	平均値	*SD*	平均値	*SD*	*F*値	偏η^2
一般感情尺度										
肯定的感情	24.26	5.59	24.59	5.73	23.54	4.82	24.57	6.32	0.41	0.01
否定的感情	15.54	5.89	15.65	5.44	15.80	7.25	15.00	4.85	0.16	0.00
安静状態	22.99	5.22	22.08	5.33	23.03	5.19	24.54	4.83	2.01	0.04
SESS	53.75	9.07	54.39	9.89	53.77	8.31	52.61	8.68	0.34	0.01
無気力感尺度										
自己不明瞭	27.96	8.43	28.90	9.14	27.26	8.18	27.21	7.52	0.53	0.01
他者不信・不満足	14.23	5.53	14.49	4.88	14.51	5.96	13.43	6.15	0.39	0.01
疲労感	15.63	4.72	15.08	4.69	16.17	4.77	15.93	4.75	0.61	0.01

各変数の相関分析

想定した養育者ごとに相関分析を行い，一般感情尺度，SESS，無気力感尺度の各下位因子との相関を検討した（Table 2-2-2，Table 2-2-3，Table 2-2-4）。一般感情尺度の肯定的感情について，両親を想定していた場合，無気力感尺度の各下位因子と中程度の負の相関があった。母を想定していた場合，自己不明瞭と疲労感は中程度，他者不信・不満足は弱い負の相関が見られた。その他の場合，自己不明瞭と疲労感で中程度，他者不信・不満足で強い負の相関があった。否定的感情について，両親を想定していた場合，自己不明瞭と他者不信・不満足で弱い正の相関，疲労感で中程度の正の相関があった。母を想定した場合は自己不明瞭で弱い正の相関，他者不信・不満足で中程度の正の相関があった。安静状態について，その他の場合のみ，無気力感尺度の各下位因子で中程度の負の相関が見られた。

次に，SESS について，両親を想定していた場合は自己不明瞭と中程度の負の相関が見られた。母を想定した場合は自己不明瞭と他者不信・不満足で中程度の負の相関があり，疲労感で弱い負の相関があった。

Table 2-2-2．各下位因子の相関（両親を想定していた場合）

		1	2	3	4	5	6	7
一般感情	1 肯定的感情	－						
	2 否定的感情	－.26	－					
	3 安静状態	.17	－.08	－				
	4 SESS	.38**	－.30*	.03	－			
無気力感	5 自己不明瞭	－.55**	.33*	－.06	－.41**	－		
	6 他者不信・不満足	－.69**	.35*	－.08	－.26	.56**	－	
	7 疲労感	－.46**	.54**	－.21	－.22	.49**	.54**	－

Note．*p<.05，**p<.01

Table 2-2-3．各下位因子の相関（母を想定していた場合）

		1	2	3	4	5	6	7
一般感情	1 肯定的感情	－						
	2 否定的感情	－.13	－					
	3 安静状態	.23	.23	－				
	4 SESS	.51**	－.19	.24	－			
無気力感	5 自己不明瞭	－.45**	.37*	－.09	－.50**	－		
	6 他者不信・不満足	－.35*	.51**	－.26	－.63**	.42*	－	
	7 疲労感	－.41*	.30	－.17	－.35*	.34*	.41*	－

Note．*p<.05，**p<.01

Table 2-2-4．各下位因子の相関（その他の場合）

		1	2	3	4	5	6	7
一般感情	1 肯定的感情	－						
	2 否定的感情	－.05	－					
	3 安静状態	.55**	－.37	－				
	4 SESS	.36	－.19	.38*	－			
無気力感	5 自己不明瞭	－.65**	.25	－.42*	－.14	－		
	6 他者不信・不満足	－.82**	.12	－.52**	－.26	.71**	－	
	7 疲労感	－.41*	.24	－.47*	－.22	.23	.47*	－

Note．*p<.05，**p<.01

無気力感尺度を従属変数としたポアソン回帰分析

コルモゴロフ・スミルノフ検定を用いて，無気力感尺度の各下位尺度の正規性を検討した。検定の結果，下位尺度の自己不明瞭と疲労感は正規分布に従っているということが示された（順に，D＝0.09，p＞.05，D＝0.07，p＞.05）。一方，他者不信・不満足は正規分布ではないということが示された（D＝0.13，p＜.05）。そのため，他者不信・不満足の検討はポアソン回帰分析を用いた。他の 2 つの下位尺度についても，結果の比較のためポアソン回帰分析を行った。

想定した養育者ごとに 2 ステップからなるポアソン回帰分析を行い，現在の気分状態で統制した養育者からの SESS と大学生の無気力との関連を検討した。第 1 ステップでは一般感情尺度の各下位因子を加え，第 2 ステップでは SESS を投入した。以下に，無気力感尺度の自己不明瞭，他者不信・不満足，疲労感それぞれを従属変数としたときの結果を順に述べていく。

まず，自己不明瞭を従属変数としたときの結果を Table 2-2-5 に示した。両親を想定していた場合とその他の場合，第 1 ステップにおける AdjustR^2 は有意であったが，第 2 ステップにおける有意な増分は見られなかった。第 1 ステップにおける β を見ると，どちらも肯定的感情に負の関連が見られた。また，両親を想定していた場合は，否定的感情と正の関連も見られた。母を想定していた場合，第 1 ステップにおける AdjustR^2 が有意であり，第 2 ステップにおいて有意な増分が見られた。第 2 ステップから，β は否定的感情と正の関連，SESS と負の関連が見られた。

Table 2-2-5. 自己不明瞭に対するポアソン回帰分析

	想定した養育者	両親			母			その他		
モデル	独立変数	AdjustR^2	ΔR^2	β	AdjustR^2	ΔR^2	β	AdjustR^2	ΔR^2	β
1	現在の気分状態	.34**			.31**			.46**		
	肯定的感情			−.51**			−.26			−.63**
	否定的感情			.19*			.29**			.23
	安静状態			.07			−.05			.00
2	ソーシャル・サポート	.36**	.03		.36**	.06*		.49**	.03	
	SESS						−.29*			
			［95%CI］			［95%CI］			［95%CI］	
	肯定的感情		−.72	−.30		−.52	.01		−.91	−.35
	否定的感情		.00	.38		.07	.51		−.15	.60
	安静状態		−.15	.29		−.25	.16		−.33	.34
	SESS					−.54	-.03			

Note. *p<.05，**p<.01，β値はΔR^2が有意であった最終モデルでの値

次に，他者不信・不満足を従属変数にしたときの結果を Table 2-2-6 に示した。両親を想定していた場合とその他の場合，第 1 ステップにおける AdjustR^2 は有意であったが，第 2 ステップにおける有意な増分は見られなかった。第 1 ステップの β を見ると，どちらも肯定的感情に負の関連が見られた。母を想定していた場合，第 1 ステップにおける AdjustR^2 が有意であり，第 2 ステップにおいて有意な増分が見られた。第 2 ステップの β は否定的感情と正の関連，安静状態，SESS と負の関連が見られた。

Table 2-2-6. 他者不信・不満足に対するポアソン回帰分析

	想定した養育者	両親			母			その他		
モデル	独立変数	AdjustR^2	ΔR^2	β	AdjustR^2	ΔR^2	β	AdjustR^2	ΔR^2	β
1	現在の気分状態	.50**			.42**			.70**		
	肯定的感情			−.65**			.01			−.75**
	否定的感情			.17			.47**			.08
	安静状態			.08			−.27**			−.11
2	ソーシャル・サポート	.50**	.00		.59**	.17**		.71**	.01	
	SESS						−.47**			
			［95%CI］			［95%CI］			［95%CI］	
	肯定的感情		−.84	−.47		−.14	.16		−.94	−.57
	否定的感情		−.03	.36		.31	.62		−.12	.28
	安静状態		−.11	.28		−.46	−.07		−.36	.13
	SESS					−.64	−.30			

Note. **p<.01，β値はΔR^2が有意であった最終モデルでの値

最後に，従属変数が疲労感のときの結果を Table 2-2-5 に示した。いずれの場合も，第 1 ステップにおける AdjustR^2 は有意であったが，第 2 ステップにおける有意な増分は見られなかった。第 1 ステップから，両親または母を想定した場合は肯定的感情と疲労感に負の関連，否定的感情と疲労感に正の関連が示された。

Table 2-2-7．疲労感に対するポアソン回帰分析

	想定した養育者	両親			母			その他		
モデル	独立変数	AdjustR^2	ΔR^2	β	AdjustR^2	ΔR^2	β	AdjustR^2	ΔR^2	β
1	現在の気分状態	.37**			.24**			.23**		
	肯定的感情			−.29**			−.34**			−.24
	否定的感情			.43**			.28*			.11
	安静状態			−.11			−.15			−.27
2	ソーシャル・サポート	.37**	.00		.25**	.01		.23**	.00	
	SESS									
			［95%CI］			［95%CI］			［95%CI］	
	肯定的感情		−.49	−.09		−.58	−.10		−.65	.18
	否定的感情		.20	.67		.03	.53		−.20	.43
	安静状態		−.38	.16		−.40	.11		−.65	.12
	SESS									

Note. *p＜.05，**p＜.01，β値はΔR^2が有意であった最終モデルでの値

考察

本節では，大学生の想定した養育者を両親，母親，その他に分類し，現在の養育者からのソーシャル・サポートが，大学生の抑うつ的な無気力と関連が見られるか検討を行った。ポアソン回帰分析の結果から，現在のソーシャル・サポートと無気力との関連が一部で見られた。母親を想定していた場合，無気力と負の関連があり，想定した養育者が両親またはその他の場合は関連が見られなかった。先行研究にて，家族からのソーシャル・サポートが無気力の抑制に関連があることは示されていたが（福岡・橋本，1997；福岡，2000；下坂，2001），家族との具体的な関係性までは明らかにされていなかった。本節の結果は，無気力の改善に有効な支援を考える一助になると言えよう。

だが，なぜ両親を想定した場合は関連がなく，母親を想定した場合に関連があったのか。現在はコロナ禍により自宅で過ごすことが多く，大学生は父親と母親両方と関わる時間が増えたはずである。これには，次の 2 つの理由が考えられる。1 点目は，調査に参加した大学生のほとんどが女性であったことである。女性は，父親とは母親を通した間接的な関係であるが，母親とは直接的な関係を取る（大島，2013）。より強い結びつきを持つ母親に女性は支援を求めやすいため，母親からのソーシャル・サポートと関連が見られたのであろう。2 点目は，父親に比べ母親の方が依然として子どもと関わる機会が多いためである。ひとり親世帯のうち 8 割以上が母子世帯であり（男女共同参画局，2019），育休率も女性が圧倒的に高い（厚生労働省，2021）。普段から母親とよく関わるため，大学生が支援を求める相手として母親が選ばれやすく，結果無気力との関連が見られたのではないか。

母親からのソーシャル・サポートは，抑うつ的な無気力の中でも自己不明瞭と他者不信・不満足と関連が見られた。他者不信・不満足は周囲に対する不信感や不満感を意味している（下坂，2001）。母親から支援を受け，周りは自分を助けてくれるという信頼感が生まれたのであろう。この結果は，下坂（2001）の調査とも一致している。自己不明瞭は，自分や自分の将来に対する意欲の減退である（下坂，2001）。将来に対する目標が持てなかったり，将来に向けて物事に取り組む気力がなかったりするときに，母親からの支援を求めている

と言える。自分の将来について自主的に考えることが難しく，母親に頼りがちになっていると思われる。

また，両親のソーシャル・サポートが無気力と関連がなかったのは，次のことが考えられる。大学生が自分にソーシャル・サポートをしてくれる養育者として，父親と母親のどちらかではなく両親を想定していたのは，母親を想定していた場合と対比的に捉えると，父親と母親両方が同程度育児に参加していたことが推測される。父親と母親両方と関わる機会があったため，どちらかに依存してしまうことなく，心理的離乳（Hollingworth，1928）を経て対等な関係を築けるようになっていたのではないか。憶測にすぎないが，両親から支援を受けても，それに頼りすぎてしまうことがないため，それほど無気力と関連が見られなかったのであろう。

抑うつ的な無気力の中でも，疲労感は現在の気分状態のみ関連があり，養育者からのソーシャル・サポートとの関連はなかった。疲労感は日々の生活に対する意欲の減退であり，短期的なスパンで感じられるものである（下坂，2001）。そのため，対人関係よりも，その日の気分や体調など，短期的な個人の状態によるものであったことが考えられる。

第 3 節　本章のまとめ

本章では，大学生の抑うつ的な無気力が，過去の養育者の態度と現在の養育者からのソーシャル・サポートと関連が見られるか，想定した養育者別に検討を行っていた。ポアソン回帰分析の結果から，過去の養育者と無気力との関連はいずれの養育者を想定していた場合でも見られなかった。これは臨床研究における示唆とは異なる結果であったが，現在の一般学生における抑うつ的な無気力が比較的程度の軽い意欲の減退であることと，当時と現在とで養育者の子どもへの関わり方が変化していることによると考えられた。

現在の養育者からのソーシャル・サポートについては，想定した養育者が母親の場合のみ，無気力と負の関連があることが示され，無気力の改善に効果のある具体的な家族関係が見出された。ただし，自分の将来に対する意欲の減退について母親の支援を求めていたことから，無気力に対する支援が主体的な行動をむしろ阻害している可能性が示唆された。

次章では，過去と現在の友人関係が大学生の抑うつ的な無気力とどのように関連しているのか検討を行っていく。

第 3 章　友人と抑うつ的な無気力との関連

第 1 節　過去の友人に対するふれ合い恐怖（調査 2）

目的

本節では，過去（高校）の友人に対するふれ合い恐怖と大学生の無気力に関連があるのか，友人との親密さごとに探索的に検討することを目的とした。

方法

調査時期と対象者

2016 年 7 月～8 月に実施し，関東圏内の四年制の私立大学（A～D 大学）に通う男女が回答した。回答に著しい偏りがあったもの，問いに対する回答が不適切であったものなどを除いて，244 名（男性 135 名・女性 109 名，1 年生 91 名・2 年生 59 名・3 年生 50 名・4 年生 44 名，平均年齢 19.8 歳・標準偏差 1.70）を分析対象者とした。内訳として，A 大学が 102 名（男性 74 名・女性 28 名），B 大学 48 名（男性 25 名・女性 23 名）であった。C 大学は 27 名（男性 8 名・女性 19 名），D 大学は 67 名（男性 28 名・女性 39 名）であった。調査を行った 2016 年の時点で，A 大学と C 大学は在籍する学生の総数が 1 万人を超える大規模な大学であり，B 大学と D 大学は学生数が 5000 人未満の中規模な大学であった。

調査内容

1）フェイスシート

性別，年齢，所属する大学，学年について尋ねた。

2）無気力感尺度

下坂（2001）の作成した無気力感尺度を使用して，現在の無気力感を尋ねた。この尺度は「自己不明瞭（自分の将来を真剣に考える気にはならない，など）」9 項目，「他者不信・不満足（周りの人たちとの付き合いは退屈だと感じる，など）」6 項目，「疲労感（日々の生活で体がだるいと感じる，など）」4 項目の 3 因子 19 項目から構成された。回答は「1．全くあてはまらない」～「6．よくあてはまる」の 6 件法で，無気力傾向が高いほど得点が高くなるよう設定した。

3）ふれ合い恐怖尺度

岡田（2002）の作成した尺度を過去形に変更し，過去（高校）の友人に対するふれ合い恐怖を尋ねた。教示にも，「以下の項目で示される内容は，高校生のときのあなたに」という表現を加えた。「対人退却（友だちと一緒に食事をするのは好きでない，など）」10 項目，「関係調整不全（他人とちょうどよい距離をとるのが難しい，など）」7 項目の 2 因子からなり，全 17 項目であった。「1．全くあてはまらない」～「6．とてもあてはまる」6 件法で，友人に対するふれ合い恐怖が強いほど得点が高くなるように設定した。

4）一般感情尺度

小川他（2000）が作成した尺度で現在の気分状態を尋ねた。「肯定的感情（楽しい，など）」8 項目，「否定的感情（緊張した，など）」8 項目，「安静状態（平穏な，など）」8 項目の 3 因子 24 項目から構成された。評定は「1．まったく感じていない」～「4．非常に感じている」の 4 件法で、それぞれの感情が強いほど得点が高くなるよう設定した。

5）想定した友人

3）のふれ合い恐怖尺度でどのような友人を想定したのか（性別，人数，友人との関係）を自由回答させた。難波（2005）の親友や友人に比べて仲間は親密さが低いという指摘と，回答の傾向から分類を行った。データを入力する際は，同じ高校またはクラスメイトと答えていた場合は 1, 部活仲間と答えていた場合は 2, 親友または友だちの場合は 3 と入力した。その他（幼馴染など）や記入なしは 4 と入力し，友人との親密さごとの分析では除外した。複数の友人関係を記入していた場合は，最初に記入した友人関係のみを入力した。例えば，「同じ高校の友だち」とあった場合は，「同じ高校」として 1 と入力した。つまり，友人との関係を親密さによって 3 つに分類したということである。

実施手続きと倫理的配慮

A，C 大学では，大学の教室，食堂等で授業や自主学習などの活動の妨げにならないことを配慮して質問紙を配布した。その場で調査内容について説明し，対象者が回答を終えた後，回収した。B，D 大学での調査は，所属している教師に配布を依頼した。授業の空き時間等を利用して対象者に配布され，教師からの直接の手渡しまたは郵送にてすべての質問紙が回収された。調査対象者には調査の趣旨について十分な説明を行うと共に，調査への参加は強制ではないこと，調査への協力を拒否しても対象者には不利益は生じないこと，測定されたデータは匿名化されて使用されるため個人情報は保護されることを事前に伝え，調査への参加ならびにデータ使用の同意を事前に確認した。

結果

ふれ合い恐怖尺度の因子分析と各尺度の内的整合性の確認

以降の分析には HAD ver.15.0（清水，2016）を用いた。本研究の目的に合わせてふれ合い恐怖尺度の質問項目を過去形にしていたため，確認的因子分析を行った（Table 3-1-1）。その結果，適合度は *CFI*＝.836，*RMSEA*＝.114，*AIC*＝559.774 であった。内容が類似した質問項目に誤差共分散を設定したところ，*CFI*＝.924，*RMSEA*＝.083，*AIC*＝375.785 まで適合度が上昇し，岡田（2002）の研究通り 2 因子構造であることが確認された。誤差共分散を設定したのは，友人と一緒にいるときの困難さを表す項目（1，8，12），友人と食事をとることへの感情を示す項目（2，4，9），複数の友人と過ごす場面に関する項目（5，14），一人で過ごすことの好ましさを表す項目（6, 7, 13），他人との距離感のとり方の難しさを表す項目（10，11，15），他人と関わることの回避を示す項目（16，17）であった。対人退却と関係調整不

全どちらも α 係数の値が十分な信頼性を示しており（Table 3-1-1），ふれ合い恐怖尺度は全 17 項目を以降の分析に使用した。他の変数の α 係数は，一般感情尺度では肯定的感情が α＝.93，否定的感情が α＝.89，安静状態が α＝.91，無気力感尺度は自己不明瞭が α＝.87，他者不信・不満足が α＝.70，疲労感が α＝.88 であり，いずれも十分な信頼性が確認された。したがって，一般感情尺度は 24 項目，無気力感尺度は 19 項目を以降の分析に使用した。

Table 3-1-1．ふれ合い恐怖尺度の確認的因子分析結果

項目	F1	F2	*M*	*SD*
F1＝対人退却（10項目，α＝.90）				
2 できれば食事は一人でとりたかった	**.78**		2.31	1.29
4 昼食は友だちと一緒に食べるのが好きだった*	**.54**		3.12	1.46
5 友だち数人でいる場面は苦手だった	**.74**		2.97	1.41
6 友だちと一緒にいるよりも一人でいる方が気が楽だった	**.65**		2.84	1.37
7 人間と関わるよりも物と付き合っている方が楽だった	**.71**		2.39	1.20
9 友だちと一緒に食事をするのは好きでなかった	**.79**		2.34	1.34
13 一人で趣味に没頭していたかった	**.67**		2.07	1.08
14 大勢の友だちとワイワイ騒ぐのが好きだった*	**.46**		2.95	1.47
16 他人と親しくなるのはうっとうしかった	**.69**		2.18	1.15
17 できることなら人とあまり関わりたくなかった	**.72**		2.23	1.31
F2＝関係調整不全（7項目，α＝.86）				
1 友だちと2人きりでいる場面は苦手だった		**.67**	2.26	1.31
3 人と雑談するのは苦手だった		**.78**	3.12	1.58
8 人といる場面で，言葉がなくなってしーんとしてしまわないかと不安になった		**.47**	2.11	1.30
10 他人の本音で，自分が傷つけられそうな気がした		**.48**	2.42	1.26
11 他人とちょうどよい距離をとるのが難しかった		**.63**	3.02	1.42
12 人といても話題がなくて困ることが多かった		**.74**	2.65	1.34
15 他の人は自分を受け入れてくれなかった		**.67**	2.77	1.49
因子間相関	F1	F2		
F1	－	.81		
F2		－		

*は逆転項目

各変数の記述統計と差の検討

各変数の平均値と標準偏差について，全体の人数と友人との親密さごとに Table 3-1-2 に示した。友人との親密さについて，難波（2005）の青年期における仲間の位置づけを参考にし，回答の傾向から，ふれ合い恐怖尺度では同じ学校・クラス，部活仲間，親友・友だちに分類し，それに該当しなかった者または記入のなかった者は分析から除外した。

各変数とふれ合い恐怖尺度で想定した友人の人数を従属変数，想定した友人関係のタイプを独立変数として分散分析を行ったところ，想定した友人の人数の得点に差が見られた。Holm 法による多重比較の結果，想定した友人が部活仲間の場合，親友・友だちよりも友人

の人数をより多く想定していたことが示された。

Table 3-1-2. 全体並びに友人との親密さごとの記述統計量

	全体（244名）		友人との親密さの分類（227名）						分散分析		多重比較
			同じ学校・クラス（120名）		部活仲間（41名）		親友・友だち（66名）				
	平均値	*SD*	平均値	*SD*	平均値	*SD*	平均値	*SD*	*F*値	偏η^2	
一般感情尺度											
肯定的感情	23.00	4.93	22.99	4.66	23.24	4.93	23.11	5.34	0.22	0.00	
否定的感情	16.97	4.93	16.55	4.78	17.49	5.24	17.36	5.35	0.58	0.01	
安静状態	20.85	5.41	21.07	5.25	21.93	5.44	19.88	5.77	1.35	0.02	
ふれ合い恐怖尺度											
対人退却	24.75	9.56	25.06	9.39	24.37	8.66	24.33	9.47	0.11	0.00	
関係調整不全	19.01	7.17	19.46	6.89	19.27	6.20	18.42	8.12	0.95	0.01	
想定した友人の人数	4.21	3.61	4.31	2.96	5.39	5.31	3.62	3.21	2.83 *	0.03	部活仲間＞親友・友だち
無気力感尺度											
自己不明瞭	28.84	6.75	29.14	6.70	27.95	6.73	28.94	6.88	0.33	0.00	
他者不信・不満足	16.35	4.85	16.65	5.17	15.49	4.73	16.32	4.27	0.58	0.01	
疲労感	15.37	4.77	15.29	4.88	15.34	5.21	15.52	4.53	0.03	0.00	

Note. *p<.05，多重比較はHolm法（5%水準）による，全体の人数にはその他に分類された者も含まれる

想定した友人関係における各変数の相関分析

想定した友人関係ごとに相関分析を行い，一般感情尺度，ふれ合い恐怖尺度，ふれ合い恐怖尺度で想定した友人の人数と無気力感尺度の各下位因子との相関を検討した（Table 3-1-3，Table 3-1-4，Table 3-1-5）。一般感情尺度の肯定的感情について，いずれの場合も無気力感尺度の各下位因子と中程度の負の相関があった。否定的感情について，同じ学校・クラスを想定していた場合，無気力感尺度の各下位因子と弱い正の相関があり，部活仲間を想定した場合は疲労感と弱い正の相関があった。親友・友だちを想定していた場合，自己不明瞭と他者不信・不満足と弱い正の相関が見られた。安静状態について，部活仲間を想定した場合に疲労感と弱い負の相関が見られた。

次に，ふれあい恐怖尺度の対人退却について，同じ学校・クラスまたは親友・友だちを想定していた場合，自己不明瞭と弱い正の相関，他者不信・不満足と中程度の正の相関が見られた。部活仲間の場合，他者不信・不満足と中程度の正の相関があった。関係調整不全について，同じ学校・クラスの場合，自己不明瞭，他者不信・不満足で中程度の正の相関があり，部活仲間の場合，無気力感尺度の各下位因子と中程度の正の相関があった。親友・友だちの場合，自己不明瞭，他者不信・不満足と中程度の正の相関，疲労感と弱い正の相関があった。

Table 3-1-3. 各変数の相関（同じ学校・クラスを想定していた場合）

		1	2	3	4	5	6	7	8	9
一般感情	1 肯定的感情									
	2 否定的感情	−.26**	−							
	3 安静状態	.12	−.12	−						
ふれ合い	4 対人退却	−.31**	.27**	.02	−					
	5 関係調整不全	−.35**	.35**	−.08	.68**	−				
	6 友人の人数	−.05	−.07	.18*	−.12	.04	−			
無気力感	7 自己不明瞭	−.65**	.37**	.00	.36**	.46**	−.02	−		
	8 他者不信	−.55**	.26**	−.04	.58**	.46**	−.05	.64**	−	
	9 疲労感	−.51**	.28**	−.14	.04	.15	.12	.51**	.39**	−

Note. *p<.05, **p<.01

Table 3-1-4. 各変数の相関（部活仲間を想定していた場合）

		1	2	3	4	5	6	7	8	9
一般感情	1 肯定的感情									
	2 否定的感情	−.05	−							
	3 安静状態	.23	−.32*	−						
ふれ合い	4 対人退却	−.45**	.00	.24	−					
	5 関係調整不全	−.46**	.26	−.18	.35*	−				
	6 友人の人数	.16	.06	−.16	−.32*	−.08	−			
無気力感	7 自己不明瞭	−.62**	.29	−.28	.26	.47**	−.06	−		
	8 他者不信	−.63**	.29	−.02	.56**	.52**	−.14	.68**	−	
	9 疲労感	−.45**	.38*	−.35*	.18	.44**	.09	.67**	.61**	−

Note. *p<.05, **p<.01

Table 3-1-5. 各変数の相関（親友・友だちを想定していた場合）

		1	2	3	4	5	6	7	8	9
一般感情	1 肯定的感情									
	2 否定的感情	−.32**	−							
	3 安静状態	−.09	−.13	−						
ふれ合い	4 対人退却	−.48**	.32**	.05	−					
	5 関係調整不全	−.45**	.37**	.04	.64**	−				
	6 友人の人数	.20	.00	−.18	−.16	−.07	−			
無気力感	7 自己不明瞭	−.63**	.32**	.12	.28*	.47**	−.23	−		
	8 他者不信	−.54**	.25*	.06	.54**	.47**	−.29*	.59**	−	
	9 疲労感	−.41**	.08	−.15	.12	.33**	−.09	.28*	.20	−

Note. *p<.05, **p<.01

無気力感尺度を従属変数とした階層的重回帰分析

友人との親密さごとに 2 ステップからなる階層的重回帰分析を行い，現在の気分状態で統制した過去の友人に対するふれ合い恐怖と大学生の無気力との関連を検討した。第 1 ステップでは一般感情尺度の各下位因子を加え，第 2 ステップではふれ合い恐怖尺度の各下位因子を投入した。以下に，無気力感尺度の下位因子である自己不明瞭，他者不信・不満足，疲労感それぞれを従属変数としたときの結果を順に述べていく。

まず，自己不明瞭を従属変数としたときの結果を Table 3-1-6 に示した。友人との親密さの分類で同じ学校・クラスまたは親友・友だちの場合，第 1 ステップにおける調整済み決定係数（AdjustR^2）が有意であり，第 2 ステップにおける決定係数の増加量（ΔR^2）が有意であった。第 2 ステップにおいて，標準偏回帰係数（β）は一般感情尺度の肯定的感情が自己不明瞭と負の関連が見られ，ふれ合い恐怖尺度の関係調整不全が自己不明瞭と正の関連を示した。同じ学校・クラスの場合は否定的感情も自己不明瞭と正の関連があった。部活仲間の場合，どのステップでも AdjustR^2 は有意であったが，ΔR^2は有意ではなかった。第 1 ステップの β は，肯定的感情と自己不明瞭に負の関連があった。

Table 3-1-6. 自己不明瞭に対する階層的重回帰分析

	友人との親密さ	同じ学校・クラス			部活仲間			親友・友だち		
モデル	独立変数	AdjustR^2	ΔR^2	β	AdjustR^2	ΔR^2	β	AdjustR^2	ΔR^2	β
1	現在の気分状態	.46**			.41**			.40**		
	肯定的感情			−.54**			−.59**			−.54**
	否定的感情			.15*			.24			.10
	安静状態			.11			−.07			.09
2	ふれ合い恐怖	.50**	.05*		.39**	.02		.45**	.07*	
	対人退却			−.07						−.25
	関係調整不全			.29**						.36**
				［95%CI］			［95%CI］			［95%CI］
	肯定的感情		−.68	−.40		−.84	−.34		−.76	−.32
	否定的感情		.01	.29		−.02	.50		−.11	.30
	安静状態		−.02	.24		−.33	.20		−.10	.27
	対人退却		−.27	.13					−.50	.00
	関係調整不全		.09	.49					.10	.62

Note. *p＜.05，**p＜.01，β値はΔR^2が有意であった最終モデルでの値

次に，他者不信・不満足を従属変数にしたときの結果を Table 3-1-7 に示した。どの友人との親密さでも，第 1 ステップの AdjustR^2 が有意であり，第 2 ステップで R^2 の有意な増分が見られた。第 2 ステップから，β はすべて肯定的感情が他者不信・不満足と負の関連があった。加えて，友人との親密さが同じ学校・クラスまたは親友・友だちの場合は，対人退却が他者不信・不満足と正の関連を示した。

Table 3-1-7．他者不信・不満足に対する階層的重回帰分析

	友人との親密さ	同じ学校・クラス			部活仲間			親友・友だち		
モデル	独立変数	AdjustR^2	ΔR^2	β	AdjustR^2	ΔR^2	β	AdjustR^2	ΔR^2	β
1	現在の気分状態	.30**			.48**			.26**		
	肯定的感情			−.40**			−.44**			−.33**
	否定的感情			.01			.26*			.00
	安静状態			.00			.13			.01
2	ふれ合い恐怖	.47**	.17**		.54**	.08*		.35**	.10 **	
	対人退却			.37**			.24			.30*
	関係調整不全			.11			.18			.11
			［95%CI］			［95%CI］			［95%CI］	
	肯定的感情		−.54	−.25		−.73	−.16		−.57	−.10
	否定的感情		−.14	.15		.02	.50		−.22	.23
	安静状態		−.13	.14		−.13	.39		−.20	.21
	対人退却		.17	.57		−.05	.53		.03	.58
	関係調整不全		−.10	.32		−.10	.47		−.17	.40

Note. *p＜.05，**p＜.01，β値はΔR^2が有意であった最終モデルでの値

最後に，従属変数が疲労感のときの結果を Table 3-1-8 に示した。いずれの友人関係でも，第 1 ステップの AdjustR^2 は有意であったが，第 2 ステップにおける有意な増分は見られなかった。第 1 ステップにおいて，β はすべて肯定的感情と疲労感に負の関連があった。部活仲間を想定した場合は，否定的感情と疲労感に正の関連も見られた。

Table 3-1-8．疲労感に対する階層的重回帰分析

	友人との親密さ	同じ学校・クラス			部活仲間			親友・友だち		
モデル	独立変数	AdjustR^2	ΔR^2	β	AdjustR^2	ΔR^2	β	AdjustR^2	ΔR^2	β
1	現在の気分状態	.27**			.30**			.17**		
	肯定的感情			−.46**			−.40**			−.46**
	否定的感情			.15			.30*			−.09
	安静状態			−.06			−.16			−.20
2	ふれ合い恐怖	.28**	.02		.27*	.02		.21**	.06	
	対人退却									
	関係調整不全									
			［95%CI］			［95%CI］			［95%CI］	
	肯定的感情		−.62	−.30		−.68	−.12		−.70	−.22
	否定的感情		−.01	.31		.02	.59		−.33	.15
	安静状態		−.22	.09		−.45	.13		−.43	.03
	対人退却									
	関係調整不全									

Note. *p＜.05，**p＜.01，β値はΔR^2が有意であった最終モデルでの値

考察

本節では，高校生の頃の友人に対するふれ合い恐怖と現在の抑うつ的な無気力との関連を，友人との親密さごとに検討した。階層的重回帰分析の結果から，以下の 3 つの点が明らかになった。

1 つ目に，高校での友人に対するふれ合い恐怖と抑うつ的な無気力との関連が確認された。親密さごとの無気力との関連の仕方について，同じ学校・クラスまたは親友・友だちに対してふれ合い恐怖を抱いていた場合，無気力になることが示された。一方で，部活仲間にふれ合い恐怖を感じていた場合は，無気力との関連が見られなかった。より親密な関係になろうとするのを避けた結果，同じ学校やクラスメイト，親友や友だちに対して支援を求められず，自身の抱える問題が深刻化していったことが考えられる。部活仲間との関連が見られなかったのは，難波（2005）の調査から，部活仲間はクラスの友人や親友とは異なる位置づけにあるためであると思われる。部活仲間は，親友や友だちに比べると親密さは低いが，大会やコンクールで優勝するなど，クラスや学校単位の集団と比べて明確で具体的な目標を共有して活動する集団である。部活仲間に対してふれ合い恐怖を抱いていても，目標への到達に向けてお互いに協力し合う機会がつくられやすいため，無気力との関連があまり見られなかったと言えよう。

2 つ目に，ふれ合い恐怖と無気力との関連について，関係調整不全は自己不明瞭と正の関連があり，対人退却は他者不信・不満足と正の関連があった。関係調整不全は関係が深まるような行動を取ろうとする際に生じる困難さを指しており（岡田，2002），自己不明瞭は自分自身や将来に対する意欲の減退で，現在と未来への方向性が未分化な状態である（下坂，2001）。どちらも関係や観点を一歩成熟させていく際に起こる問題であるという共通点があるため，この 2 つの間に関連が見られたと考えられる。次に，対人退却は他者と関係を持つ行動そのものについての困難さであり（岡田，2002），他者不信・不満足は対人関係に対する意欲の減退である（下坂，2001）。他者との関係がうまく取れないことで，必要な場面で友人からの支援を得られず，その結果他者への不信感や不満感が生じたと考えられる。これは，友人との関わりを回避する大学生は，友人からのソーシャル・サポート受容や援助要請を回避し，適応感が低いという永井（2016）の結果とも合致する。

3 つ目に，現在の気分状態と無気力との関連が見られた。その中でも，疲労感は，気分状態とは関連が見られたが，過去の友人関係とは関連がなかった。この結果は，調査を行ったのが大学の教室や食堂などで，少なくとも大学に来る意欲はある学生を対象としていたことを留意する必要がある。疲労感は日々の生活に対する意欲の減退であり，自己不明瞭のような長期的な視点での意欲の減退に比べ，短期的に感じられるものである（下坂，2001）。即ち，時間軸の観点で，疲労感は他の，将来や対人関係への意欲の減退と質的に異なるものである。疲労感は，対人関係よりもその日の気分や体調など，短期的な個人の状態に影響されるものなのであろう。

第 2 節　現在の友人からのソーシャル・サポート（調査 2）

目的

本節では，現在（大学）の友人からのソーシャル・サポートは抑うつ的な無気力と関連するのか，友人との親密さごとに探索的に検討することを目的とした。

方法

調査時期と対象者

本調査の調査協力者は第 1 節と同一であった。そのため，2016 年 7 月～8 月に実施し，関東圏内の四年制の私立大学（A～D 大学）に通う男女 244 名が分析対象であった。

調査内容

1）フェイスシート

第 1 節と同様に，性別，年齢，所属する大学，学年について尋ねた。

2）無気力感尺度

第 1 節と同様に，下坂（2001）の作成した無気力感尺度を使用して，大学生の現在の無気力感を尋ねた。

3）SESS

久田他（1989）が作成した SESS で，大学生が現在の友人にどれだけソーシャル・サポートを期待しているのか調べた。「あなたが落ち込んでいると，元気づけてくれる」などの全 16 項目であった。評定は「1．絶対ちがう」～「4．きっとそうだ」の 4 件法でソーシャル・サポートを受けていると感じているほど得点が高くなるように設定した。本来は各項目に対して，父親・母親・きょうだい・教師・友人のサポートを，それぞれどれだけ期待しているのか答えるものであるが，本調査では友人との関係に焦点を当てるため友人のみに回答を限定した。

4）一般感情尺度

第 1 節と同様に，小川他（2000）が作成した尺度で現在の気分状態を尋ねた。

5）想定した友人

第 1 節と同様に，3）の SESS でどのような友人を想定したのか（性別，人数，友人との関係）を自由回答させた。難波（2005）の親友や友人に比べて仲間は親密さが低いという指摘と，回答の傾向から分類を行った。データを入力する際は，同じ大学，専攻の場合は 1，サークルや部活仲間の場合は 2，親友，友だちの場合は 3 と入力した。その他（幼馴染など）や記入なしは 4 と入力し，友人との親密さごとの分析では除外した。複数の友人関係を記入していた場合は，最初に記入した友人関係のみを入力した。例えば，「同じ大学の友だち」とあった場合は，「同じ大学」として 1 と入力した。つまり，友人との関係を親密さによって 3 つに分類したということである。

実施手続きと倫理的配慮

第 1 節と同一の実施手続きを踏んで調査を行った。調査対象者には調査の趣旨について十分な説明を行うと共に，調査への参加は強制ではないこと，調査への協力を拒否しても対象者には不利益は生じないこと，測定されたデータは匿名化されて使用されるため個人情報は保護されることを事前に伝え，調査への参加ならびにデータ使用の同意を事前に確認した。

結果

各尺度の内的整合性の確認と記述統計

以下，HAD ver.15.0（清水，2016）を用いて分析を行った。使用した尺度の内的整合性を検討したところ，一般感情尺度では肯定的感情が α＝.93，否定的感情が α＝.89，安静状態が α＝.91 であり，SESS は α＝.95，無気力感尺度は自己不明瞭が α＝.87，他者不信・不満足が α＝.70，疲労感が α＝.88 で，十分な信頼性が確認された。そのため，一般感情尺度は 24 項目，SESS は 16 項目，無気力感尺度は 19 項目を以降の分析に使用した。

各変数の平均値と標準偏差について，全体の人数と友人との親密さごとに Table 3-2-1 に示した。友人との親密さについて，難波（2005）の青年期における仲間の位置づけを参考にし，回答の傾向から，同じ大学・専攻，部活・サークル仲間，親友・友だちに分類し，それ以外の者はその他として分析から除外した。各変数と SESS で想定した友人の人数を従属変数，SESS で想定した友人関係のタイプを独立変数として分散分析を行ったところ，想定した友人の人数の得点に差が見られた。Holm 法による多重比較の結果，想定した友人が同じ大学・専攻または部活・サークル仲間の場合，親友・友だちよりも友人の人数をより多く想定していたことが示された。

Table 3-2-1. 全体並びに友人との親密さごとの記述統計量

	全体（244名）		友人との親密さの分類（208名）						分散分析		多重比較
			同じ大学・専攻（80名）		部活・サークル仲間（56名）		親友・友だち（72名）				
	平均値	*SD*	平均値	*SD*	平均値	*SD*	平均値	*SD*	*F*値	偏η^2	
一般感情尺度											
肯定的感情	23.00	4.93	23.05	4.89	23.23	4.95	23.33	5.00	0.76	0.01	
否定的感情	16.97	4.93	16.24	4.69	17.70	5.93	16.68	5.07	1.64	0.02	
安静状態	20.85	5.41	21.09	5.49	21.29	5.78	20.53	5.19	0.39	0.00	
SESS	48.34	9.43	48.09	9.95	47.09	8.01	50.31	9.99	1.67	0.02	
想定した友人の人数	3.98	3.42	4.44	3.20	4.59	4.25	3.06	2.84	2.90*	0.03	同じ大学，部活・サークル仲間＞親友・友だち
無気力感尺度											
自己不明瞭	28.84	6.75	29.38	7.04	27.71	6.56	28.72	6.49	0.87	0.01	
他者不信・不満足	16.35	4.85	16.29	4.59	16.18	5.05	16.13	4.85	0.44	0.01	
疲労感	15.37	4.77	15.98	4.44	14.68	5.09	14.81	4.95	1.55	0.02	

Note. *p<.05，多重比較はHolm法（5%水準）による，全体の人数にはその他に分類された者も含まれる

想定した友人関係における各変数の相関分析

想定した友人関係ごとに相関分析を行い，一般感情尺度，SESS，SESS で想定した友人の人数と無気力感尺度の各下位因子との相関を検討した（Table 3-2-2，Table 3-2-3，Table 3-2-4）。一般感情尺度の肯定的感情について，同じ大学・専攻または部活・サークル仲間を想定していた場合，無気力感尺度の各下位因子と中程度の負の相関があった。親友・友だちを想定していた場合，自己不明瞭，他者不信・不満足と中程度の負の相関，疲労感と弱い負の相関があった。否定的感情について，同じ大学・専攻を想定していた場合，自己不明瞭と弱い正の相関があり，部活・サークル仲間を想定した場合は自己不明瞭，疲労感と弱い正の相関があった。親友・友だちを想定していた場合，自己不明瞭と中程度の正の相関，他者不信・不満足と弱い正の相関が見られた。安静状態について，部活・サークル仲間を想定した場合に疲労感と中程度の負の相関が見られた。

次に，SESS について，同じ大学・専攻または親友・友だちを想定していた場合，自己不明瞭，他者不信・不満足と中程度の負の相関が見られた。部活・サークル仲間の場合，自己不明瞭と弱い負の相関，他者不信・不満足と中程度の負の相関があった。

Table 3-2-2．各変数の相関（同じ大学・専攻を想定していた場合）

		1	2	3	4	5	6	7	8
一般感情	1 肯定的感情								
	2 否定的感情	−.22*	−						
	3 安静状態	−.02	−.14	−					
	4 SESS	.48**	−.08	−.04	−				
無気力感	5 友人の人数	−.13	.21	.05	−.13	−			
	6 自己不明瞭	−.68**	.26*	.14	−.42**	.20	−		
	7 他者不信	−.54**	.14	.07	−.60**	.12	.59**	−	
	8 疲労感	−.54**	.17	−.07	−.19	.11	.51**	.43**	−

Note．*p<.05，**p<.01

Table 3-2-3．各変数の相関（部活・サークル仲間を想定していた場合）

		1	2	3	4	5	6	7	8
一般感情	1 肯定的感情								
	2 否定的感情	−.16	−						
	3 安静状態	.27*	−.13	−					
	4 SESS	.41**	−.01	−.02	−				
無気力感	5 友人の人数	.17	.10	−.12	.38**	−			
	6 自己不明瞭	−.53**	.33*	−.12	−.32*	−.11	−		
	7 他者不信	−.46**	.23	.06	−.53**	−.21	.61**	−	
	8 疲労感	−.44**	.35**	−.45**	−.05	.08	.43**	.24	−

Note．*p<.05，**p<.01

Table 3-2-4. 各変数の相関（親友・友だちを想定していた場合）

		1	2	3	4	5	6	7	8
一般感情	1 肯定的感情								
	2 否定的感情	−.27*	−						
	3 安静状態	−.03	−.19	−					
	4 SESS	.63**	−.34**	.24*	−				
無気力感	5 友人の人数	.03	−.14	.03	.11	−			
	6 自己不明瞭	−.67**	.44**	.03	−.42**	−.16	−		
	7 他者不信	−.61**	.35**	−.01	−.48**	−.08	.69**	−	
	8 疲労感	−.39**	.19	−.10	−.16	.12	.43**	.37**	−

Note. *p<.05, **p<.01

無気力感尺度を従属変数とした階層的重回帰分析

友人との親密さごとの 2 ステップからなる階層的重回帰分析を行い，現在の気分状態で統制した現在の友人からのソーシャル・サポートと，大学生の無気力との関連を検討した。第 1 ステップでは一般感情尺度の各下位因子を加え，第 2 ステップでは SESS を投入した。以下に，無気力感尺度の下位因子である自己不明瞭，他者不信・不満足，疲労感それぞれを従属変数としたときの結果を順に述べていく。

まず，自己不明瞭を従属変数としたときの結果を Table 3-2-5 に示した。いずれの友人関係でも，第 1 ステップの AdjustR^2 は有意であったが，第 2 ステップにおける有意な増分は見られなかった。どの友人関係でも，第 1 ステップにおいて，β は肯定的感情と疲労感に負の関連があった。部活・サークル仲間または親友・友だちの場合は，それに加えて，否定的感情が自己不明瞭と正の関連があった。

Table 3-2-5. 自己不明瞭に対する階層的重回帰分析

	友人との親密さ	同じ大学・専攻			部活・サークル仲間			親友・友だち		
モデル	独立変数	AdjustR^2	ΔR^2	β	AdjustR^2	ΔR^2	β	AdjustR^2	ΔR^2	β
1	現在の気分状態	.47**			.31**			.50**		
	肯定的感情			−.64**			−.50**			−.58**
	否定的感情			.14			.26*			.30**
	安静状態			.15			.05			.08
2	ソーシャル・サポート	.48**	.01		.31**	.01		.50**	.00	
	SESS									
				［95%CI］			［95%CI］			［95%CI］
	肯定的感情		−.81	−.47		−.74	−.26		−.76	−.41
	否定的感情		−.03	.31		.03	.49		.12	.48
	安静状態		−.02	.31		−.19	.28		−.09	.25
	SESS									

Note. *p＜.05, **p＜.01, β値はΔR^2が有意であった最終モデルでの値

次に，他者不信・不満足を従属変数にしたときの結果を Table 3-2-6 に示した。友人との親密さが同じ学校・クラスまたは部活・サークル仲間の場合，第 1 ステップの AdjustR^2 が有意であり，第 2 ステップで R^2 の有意な増分があった。第 2 ステップから，いずれの β も肯定的感情と SESS が他者不信・不満足と負の関連があった。親友・友だちの場合は，第 1 ステップの AdjustR^2 は有意であったが，第 2 ステップの ΔR^2は有意ではなかった。第 1 ステップの β は，肯定的感情が他者不信・不満足と負の関連，否定的感情が正の関連を示した。

Table 3-2-6．他者不信・不満足に対する階層的重回帰分析

	友人との親密さ	同じ大学・専攻			部活・サークル仲間			親友・友だち		
モデル	独立変数	AdjustR^2	ΔR^2	β	AdjustR^2	ΔR^2	β	AdjustR^2	ΔR^2	β
1	現在の気分状態	.27**			.24*			.38**		
	肯定的感情			−.32**			−.31*			−.55**
	否定的感情			.04			.19			.21*
	安静状態			.05			.16			.01
2	ソーシャル・サポート	.41**	.15 **		.37**	.13*		.38**	.01	
	SESS			−.44**			−.40**			
				［95%CI］			［95%CI］			［95%CI］
	肯定的感情		−.52	−.12		−.56	−.06		−.75	−.36
	否定的感情		−.14	.22		−.03	.41		.01	.40
	安静状態		−.12	.23		−.07	.39		−.18	.20
	SESS		−.63	−.24		−.64	−.16			

Note. *p<.05，**p<.01，β値はΔR^2が有意であった最終モデルでの値

最後に，疲労感を従属変数にしたときの結果を Table 3-2-7 に示した。いずれの友人関係でも，第 1 ステップの AdjustR^2 は有意であったが，第 2 ステップにおける有意な増分はなかった。すべての友人関係で，第 1 ステップにおいて，β は肯定的感情と疲労感に負の関連があった。部活仲間の場合は，さらに，否定的感情が正の関連，安静状態が負の関連を示した。

Table 3-2-7．疲労感に対する階層的重回帰分析

	友人との親密さ	同じ大学・専攻			部活・サークル仲間			親友・友だち		
モデル	独立変数	AdjustR^2	ΔR^2	β	AdjustR^2	ΔR^2	β	AdjustR^2	ΔR^2	β
1	現在の気分状態	.27**			.34**			.14**		
	肯定的感情			−.53**			−.31**			−.38**
	否定的感情			.04			.25*			.07
	安静状態			−.08			−.34**			−.10
2	ソーシャル・サポート	.27**	.01		.33**	.01		.15**	.03	
	SESS									
				［95%CI］			［95%CI］			［95%CI］
	肯定的感情		−.73	−.34		−.54	−.08		−.61	−.15
	否定的感情		−.16	.24		.03	.47		−.17	.30
	安静状態		−.27	.12		−.56	−.11		−.33	.12
	SESS									

Note. *p<.05，**p<.01，β値はΔR^2が有意であった最終モデルでの値

考察

本節は，友人との親密さごとに，現在の友人からのソーシャル・サポートと，大学生の抑うつ的な無気力との関連を検討した。階層的重回帰分析の結果から，大きく分けて 3 つの点が明らかになった。

1 つ目に，現在の友人からのソーシャル・サポートと無気力との関連が一部で示された。親密さが高まるほど，友人からの支援の期待も高まるため（下斗米，2000），親密度の高い友人関係からのサポートを求めやすく，より無気力を抑制しやすいことが予測された。しかし，親密さごとの無気力との関連の仕方を見ると，同じ大学・専攻または部活・サークル仲間からのソーシャル・サポートは無気力と負の関連があったが，親友・友だちからのサポートは関連が見られなかった。

これらの結果について，次のことが考えられる。大学は，高校生の頃と比べて，受講する授業や入るサークルなどを自分で選ぶ機会が多くなる。そのため，同じ大学や専攻，サークル仲間は，共通した課題を課せられていたり，同じ趣味を共有していたりすることが多い。結果として，類似した悩みを持ち相談がしやすいため，無気力の抑制や改善に繋がったのであろう。それに加えて，小川（2014）の調査では，大学生は友人が何もせずそっと離れておくという行動をとった際には感謝の気持ちが高かったが，励ましや共感という行動の際は反発や自責が高校生に比べてやや高い結果が出ていた。親友や友だちからのソーシャル・サポートを期待する一方で，サポートの仕方によっては反発を覚え，あまり効果が得られないことが推測される。また，同じ大学・専攻や部活・サークル仲間の場合は物理的に同じ空間を共有する機会が多い。対する親友・友だちは心理的な距離は密接ではあるが，物理的に近い距離にいるとは限らない。実際に支援が得られる距離にいないため，悩みを相談することができないことが考えられる。

2 つ目に，ソーシャル・サポートと無気力との関連について，他者不信・不満足のみ負の関連が見られた。他者不信・不満足は，「私には本当に困ったときに助けてくれる人がいない」（下坂，2001）といった周りに対する不信感や不満感を含んでいる。友人に悩みを打ち明けたり，支援を受けたりすることで，こうした他者に対する不信感が払拭されたのであろう。

3 つ目に，抑うつ的な無気力の中でも，疲労感は現在の気分状態のみ関連があり，ソーシャル・サポートとの関連は見られなかった。前節でも述べたが，疲労感は「日々の生活で体がだるいと感じている」（下坂，2001）など，短期的なスパンで起こる意欲の減退であるため，友人関係よりもその日の気分や体調などと関わりが強くなったと考えられる。

第 3 節　本章のまとめ

本章では，これまで調査研究で検討されていた現在の友人からのソーシャル・サポートだけでなく，臨床研究での示唆に留まっていた過去の友人に対するふれ合い恐怖が大学生の抑うつ的な無気力と関連があるのか検討を行った。階層的重回帰分析の結果，高校生の頃のふれ合い恐怖が大学生の無気力と関連があることが示された。大学生の抑うつ的な無気力を改善していくには，現在の友人からソーシャル・サポートを得られるかどうかだけでなく，そもそも友人に対して支援を求められるような状態であったのかどうか，着目していく必要があると言えよう。

他にも，友人との親密さによって，ふれ合い恐怖とソーシャル・サポートの無気力の関連の仕方が異なることが明らかにされた。ふれ合い恐怖では，同じ目標に向かって協力する部活仲間を想定していた場合無気力との関連が見られず，ソーシャル・サポートでは，類似した悩みを持ちやすい同じ大学・専攻または部活・サークル仲間を想定していた場合無気力と負の関連があった。友人との共通項が，相手との関係の取りやすさや支援の求めやすさに繋がったことが考えられた。

次章では，過去と現在の教師との関係が大学生の抑うつ的な無気力とどのように関連しているのか検討を行っていく。

第 4 章　教師と抑うつ的な無気力との関連

第 1 節　過去の教師に対する信頼感（調査 3）

目的

本節では，過去（高校）の頃の教師に対する信頼感と大学生の無気力に関連があるのか，男女別に検討することを目的とした。

方法

調査時期と対象者

2016 年 7 月～8 月に実施し，関東圏内の四年制の私立大学（A～D 大学）に通う男女のうち回答に著しい偏りがあったもの，問に対する回答が不適切であったものなどを除いて，198 名（男性 93 名・女性 105 名，1 年生 15 名・2 年生 122 名・3 年生 27 名・4 年生 34 名，平均年齢 19.9 歳・標準偏差 1.18）を分析対象者とした。内訳として，A 大学 41 名（男性 36 名・女性 5 名），B 大学 51 名（男性 25 名・女性 26 名）であった。C 大学は 24 名（男性 9 名・女性 15 名），D 大学は 82 名（男性 23 名・女性 59 名）であった。調査を行った 2016 年の時点で，A 大学と C 大学は在籍する学生の総数が 1 万人を超える大規模な大学であり，B 大学と D 大学は学生数が 5000 人未満の中規模な大学であった。

調査内容

1）フェイスシート

性別，年齢，所属する大学，学年について尋ねた。

2）無気力感尺度

下坂（2001）の作成した無気力感尺度を使用して，現在の無気力感を尋ねた。この尺度は「自己不明瞭（自分の将来を真剣に考える気にはならない，など）」9 項目，「他者不信・不満足（周りの人たちとの付き合いは退屈だと感じる，など）」6 項目，「疲労感（日々の生活で体がだるいと感じる，など）」4 項目の 3 因子 19 項目から構成された。回答は「1．全くあてはまらない」～「6．よくあてはまる」の 6 件法で，無気力傾向が高いほど得点が高くなるよう設定した。

3）生徒の教師に対する信頼感尺度（Students’ Trust in Teachers：以下，STT 尺度）

中井・庄司（2006，2008）が作成した STT 尺度を使用して，過去の教師に対する信頼感を尋ねた。本来は「安心感」，「不信」，「役割遂行評価」の 3 因子からなる尺度だが，本研究の調査の趣旨に合わせ，「役割遂行評価」に該当する項目は削除した。「安心感（先生は私を大事にしてくれていると感じる，など）」11 項目，「不信（先生は自分の考えを押し付けてくると思う，など）」10 項目の全 21 項目を使用した。評定は「1．全くそう思わなかった」～「4．非常にそう思った」の 4 件法で，教師に対する安心感または不信が強いほど得点が高くなるよう設定した。

調査対象者の高校生の時期の教師との関係について尋ねるため，大石（2013）の調査を参考に，各質問項目の内容を過去形にした。例えば，「先生は私を大事にしてくれていると感じる」を「先生は私を大事にしてくれていると感じた」と変更した。教示にも，「以下の項目で示される内容は，高校生のときのあなたに」という表現を加えた。

4）一般感情尺度

小川他（2000）が作成した尺度で現在の気分状態を尋ねた。「肯定的感情（楽しい，など）」8 項目，「否定的感情（緊張した，など）」8 項目，「安静状態（平穏な，など）」8 項目の 3 因子 24 項目から構成された。評定は「1．まったく感じていない」～「4．非常に感じている」の 4 件法で、それぞれの感情が強いほど得点が高くなるよう設定した。

5）想定した教師

3）の STT 尺度でどのような教師を想定したのか（性別，人数，友人との関係）を自由回答させた。教師の性別について，同性か異性かに〇をつけてもらい，同性の場合は 1，異性の場合は 2，未回答の場合は 0 と入力した。

実施手続きと倫理的配慮

A，C 大学では，大学の教室，食堂等で授業や自主学習などの活動の妨げにならないことを配慮して質問紙を配布した。その場で調査内容について説明し，対象者が回答を終えた後，回収した。B，D 大学での調査は，所属している教師に配布を依頼した。授業の空き時間等を利用して対象者に配布され，教師からの直接の手渡しまたは郵送にてすべての質問紙が回収された。調査対象者には調査の趣旨について十分な説明を行うと共に，調査への参加は強制ではないこと，調査への協力を拒否しても対象者には不利益は生じないこと，測定されたデータは匿名化されて使用されるため個人情報は保護されることを事前に伝え，調査への参加ならびにデータ使用の同意を事前に確認した。

結果

各尺度の因子分析と内的整合性の確認

以降の分析には HAD ver.15.0（清水，2016）を用いた。本研究の目的に合わせて STT 尺度の質問項目を一部抜粋し，過去形に変えて使用していたため確認的因子分析を行ったところ，適合度は *CFI*＝.822，*RMSEA*＝.103，*AIC*＝668.054 であった。そこで，探索的因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行った（Table 4-1-1）結果，すべての項目の因子負荷量が.40 以上であり，複数の項目に対して負荷量が高い項目も見られなかった。信頼性を検討するために α 係数を算出したところ，すべての下位因子で十分な信頼性を示した（Table 4-4-1）。したがって，STT 尺度は 21 項目すべてを以降の分析に使用した。

他の変数の信頼性係数を算出したところ，一般感情尺度では肯定的感情が α＝.91，否定的感情が α＝.89，安静状態が α＝.90，無気力感尺度では自己不明瞭が α＝.85，他者不信・不満足が α＝.77，疲労感が α＝.87 であり，十分な信頼性を示した。したがって，一般感情尺度

は 24 項目，無気力感尺度は 19 項目を以降の分析に使用した。

Table 4-1-1．STT尺度の探索的因子分析結果（最尤法・プロマックス回転）

項目	F1	F2	*M*	*SD*
F1＝安心感（11項目，α＝.91）				
7 私が不安なとき，先生に話を聞いてもらうと安心した	**.74**	－.06	2.46	0.92
15 先生にならいつでも相談ができると感じた	**.74**	.03	2.55	0.96
16 私は先生と話すと気持ちが楽になることがあった	**.74**	－.03	2.50	0.95
11 将来のことがわからないときは先生に相談してみようという気になった	**.73**	－.04	2.58	0.99
1 先生は私を大事にしてくれていると感じた	**.73**	－.02	2.78	0.89
14 先生と話していると困難なことに立ち向かう勇気がわいた	**.72**	.06	2.43	0.90
4 先生はいつも私のことを気にかけてくれると思った	**.70**	.01	2.70	0.89
5 先生は私の立場で気持ちを理解してくれていると思った	**.68**	.02	2.68	0.85
2 先生なら私との約束や秘密を守ってくれると思った	**.65**	－.10	2.79	0.90
18 私が悩んでいるとき，先生が私を支えてくれていると感じた	**.65**	.02	2.52	0.93
3 私が失敗したとき，先生なら私の失敗をかばってくれると思った	**.58**	.09	2.44	0.90
F2＝不信（10項目，α＝.88）				
10 たとえ間違っているときでも，先生は自分の間違いを認めないと思った	.04	**.78**	2.23	0.94
12 先生は一部の人を，ひいきしていると思った	.12	**.72**	2.39	1.03
20 先生の性格には裏表があるように感じた	.03	**.71**	2.15	1.00
17 先生は威張っているように感じた	.03	**.70**	2.16	1.01
13 先生の考え方は否定的だと思った	.04	**.70**	2.10	0.91
9 先生は自分の考えを押し付けてくると思った	－.05	**.64**	2.27	0.95
21 先生は他の生徒と私を比べていると感じた	－.05	**.58**	2.18	0.98
19 先生は一度言ったことを，ころころ変えると感じた	－.15	**.58**	2.00	0.88
8 先生は自分の機嫌で態度が変わると思った	－.06	**.56**	2.28	0.96
6 先生は言っていることと，やっていることに矛盾があると思った	.01	**.50**	2.32	0.94
因子間相関	F1	F2		
F1	－	－.46		
F2		－		

各変数の記述統計と男女差の検討

各変数の平均値を算出し，男女差があるのか Welch 検定を行った。各変数の平均値と標準偏差，Welch 検定の結果を Table 4-1-2 に示した。Welch 検定の結果，想定した教師が同性かどうかでは，男女差が見られ，男性に比べ女性は異性の教師をより想定していたことが示された。

Table 4-1-2. 各変数の記述統計量および男女差

	全体（198名）		男性（93名）		女性（105名）		Welch検定		
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	*t*値	*df*	Cohen's *d*
一般感情尺度									
肯定的感情	22.54	4.84	23.00	5.62	22.12	4.02	1.25	164.27	0.18
否定的感情	16.30	5.17	16.29	6.01	16.31	4.33	−0.03	165.07	0.00
安静状態	20.88	5.37	21.15	5.95	20.64	4.81	0.66	176.89	0.09
STT尺度									
安心感	28.42	7.37	28.27	7.47	28.56	7.32	−0.28	192.06	−0.04
不信	22.09	6.64	21.97	6.94	22.19	6.40	−0.23	188.23	−0.03
同性の教師の想定	1.31	0.55	1.14	0.43	1.47	0.61	−4.41 **	187.80	−0.61
無気力感尺度									
自己不明瞭	28.30	8.19	27.76	7.58	28.78	8.71	−0.88	195.95	−0.12
他者不信・不満足	16.53	5.33	16.16	5.48	16.85	5.20	−0.90	190.18	−0.13
疲労感	15.24	4.59	15.06	5.18	15.39	4.02	−0.49	172.78	−0.07

Note. **p < .01

各変数における相関分析

男女別に相関分析を行い，一般感情尺度，STT 尺度，無気力感尺度の各下位因子との相関を検討した。男性の結果は Table 4-1-3 の右上に，女性の結果は Table 4-1-3 の左下に示した。男性は，一般感情尺度の肯定的感情が無気力感尺度の各下位因子と中程度の負の相関があり，否定的感情が他者不信・不満足，疲労感と弱い正の相関があった。STT 尺度の安心感は，他者不信・不満足のみ弱い負の相関があった。不信は，無気力感尺度との相関は見られなかった。

女性は，一般感情尺度の肯定的感情が自己不明瞭，他者不信・不満足と中程度の負の相関を，疲労感と弱い負の相関を示した。否定的感情は自己不明瞭，他者不信・不満足と弱い正の相関を示した。STT 尺度の安心感は自己不明瞭，他者不信・不満足と弱い負の相関があった。不信は他者不信・不満足のみ弱い正の相関があった。

Table 4-1-3. 各下位因子の相関

		1	2	3	4	5	6	7	8	9
一般感情	1 肯定的感情	−	−.11	.39 **	.19	.02	.03	−.58 **	−.42 **	−.45 **
	2 否定的感情	−.21 *	−	.04	−.19	.26 *	−.02	.20	.25 *	.33 **
	3 安静状態	.23 *	.01	−	.22 *	−.06	−.05	−.15	−.12	−.12
STT	4 安心感	.25 *	−.24 *	.02	−	−.40 **	.25 *	−.19	−.21 *	−.04
	5 不信	−.16	.09	−.12	−.44 **	−	−.20 *	.15	.16	.15
	6 同性の教師の想定	.05	−.06	-.04	-.01	-.06	−	−21 *	−12	.11
無気力感	7 自己不明瞭	−.43 **	.23 *	.14	−.37 **	.19	−.03	−	.48 **	.48 **
	8 他者不信・不満足	−.45 **	.21 *	−.05	−.37 **	.35 **	.04	.63 **	−	.32 **
	9 疲労感	−.36 **	.16	−.15	−.05	.18	−.16	.35 **	.36 **	−

Note. *p<.05, **p<.01, 右上：男性，左下：女性

無気力感尺度を従属変数としたポアソン回帰分析

コルモゴロフ・スミルノフ検定を用いて，無気力感尺度の各下位尺度の正規性を検討した。検定の結果，自己不明瞭は正規分布に従っていることが示された（$D=0.05$, $p>.05$）。一方，他者不信・不満足と疲労感は正規分布ではなかった（他者不信・不満足，$D=0.08$，$p<.05$；疲労感，$D=0.09$，$p<.05$）。そのため，他者不信・不満足，疲労感の検討はポアソン回帰分析を用いた。自己不明瞭についても，他の 2 つの下位尺度との結果の比較のため，ポアソン回帰分析を用いた。

男女別に 2 ステップからなるポアソン回帰分析を行い，現在の気分状態で統制した教師に対する信頼感と大学生の無気力との関連を検討した。第 1 ステップには一般感情尺度の各下位因子を投入し，第 2 ステップには STT 尺度の各下位因子を投入した。以下に，無気力感尺度の下位因子である自己不明瞭，他者不信・不満足，疲労感それぞれを従属変数としたときの結果を順に述べていく。

まず，自己不明瞭を従属変数としたときの結果を Table 4-1-4 に示した。男性は，第 1 ステップの 調整済み決定係数（AdjustR^2）が有意であったが，第 2 ステップにおける有意な増分は見られなかった。第 1 ステップの標準偏回帰係数（β）は，一般感情尺度の肯定的感情と負の関連が見られた。女性は，第 1 ステップで R^2が有意であり，第 2 ステップにて AdjustR^2の有意な増分が見られた。第 2 ステップの β は，肯定的感情と STT 尺度の安心感が自己不明瞭と負の関連があった。一般感情尺度の安静状態は自己不明瞭と正の関連を示した。

Table 4-1-4．自己不明瞭に対するポアソン回帰分析

	性別	男性					女性				
モデル	独立変数	AdjustR^2	ΔR^2	β	［95%CI］		AdjustR^2	ΔR^2	β	［95%CI］	
1	現在の気分状態	.36**					.25**				
	肯定的感情			−.60**	−.80	−.40			−.39**	−.58	−.20
	否定的感情			.12	−.01	.25			.08	−.07	.22
	安静状態			.09	−.12	.31			.24**	.09	.40
2	教師への信頼感	.38**	.02				.31**	.06*			
	安心感								−.22*	−.42	−.03
	不信								.06	−.13	.24

Note．*$p<.05$，**$p<.01$，β値はΔR^2が有意であった最終モデルでの値

次に，他者不信・不満足を従属変数としたときの結果を Table 4-1-5 に示した。男性は，第 1 ステップの AdjustR^2が有意であったが，第 2 ステップにおける有意な増分は見られなかった。第 1 ステップの β は，肯定的感情が他者不信・不満足と負の関連が見られた。女性は，第 1 ステップにおける R^2が有意であり，第 2 ステップにて AdjustR^2の有意な増分が見られた。第 2 ステップの β は，肯定的感情が他者不信・不満足と負の関連があった。STT 尺度の不信は他者不信・不満足と正の関連が見られた。

Table 4-1-5．他者不信・不満足に対するポアソン回帰分析

	性別	男性					女性				
モデル	独立変数	AdjustR^2	ΔR^2	β	［95%CI］		AdjustR^2	ΔR^2	β	［95%CI］	
1	現在の気分状態	.21 **					.22 **				
	肯定的感情			−.41 **	−.62	−.20			−.38**	−.54	−.22
	否定的感情			.19	−.02	.41			.06	−.10	.22
	安静状態			.04	−.18	.27			.07	−.12	.26
2	教師への信頼感	.23 **	.02				.32 **	.10 **			
	安心感								−.16	−.34	.03
	不信								.23 **	.07	.40

Note．**$p < .01$，β値はΔR^2が有意であった最終モデルでの値

最後に，疲労感を従属変数としたときの結果を Table 4-1-6 に示した。男性と女性ともに，第 1 ステップの AdjustR^2が有意であったが，第 2 ステップで有意な増分は見られなかった。第 1 ステップの β は，男性は肯定的感情が疲労感と負の関連があり，否定的感情が正の関連を示した。女性は，肯定的感情が疲労感と負の関連があった。

Table 4-1-6．疲労感に対するポアソン回帰分析

	性別	男性					女性				
モデル	独立変数	AdjustR^2	ΔR^2	β	［95%CI］		AdjustR^2	ΔR^2	β	［95%CI］	
1	現在の気分状態	.26 **					.14 **				
	肯定的感情			−.42 **	−.65	−.20			−.32 **	−.53	−.11
	否定的感情			.26 **	.07	.46			.10	−.07	.27
	安静状態			.04	−.19	.27			−.08	−.25	.10
2	教師への信頼感	.29 **	.03				.17 **	.03			
	安心感										
	不信										

Note．**$p < .01$，β値はΔR^2が有意であった最終モデルでの値

考察

本節では，高校生の頃の教師に対する信頼感と大学生の抑うつ的な無気力に関連があるのか男女別に検討することを目的としていた。ポアソン回帰分析を行ったところ，次の 2 点が明らかになった。

1 点目は，女性のみ，高校での教師に対する信頼感と無気力との関連が見られたことである。ここで女性が想定していた教師は，Welch 検定の結果より異性の教師の割合が高いと推測される。女性は家庭において母親との結びつきが強く（信田，2008；大島，2013），女性の心理的自立には様々な対人関係が関連している（山田，2011）。様々な価値観に触れ自立していくために，家庭内でよく関わる同性の母親とは対照的に，家庭外で異性の教師との関わりを深めた結果，無気力との関連が見られたのであろう。

続いて 2 点目は，女性における教師に対する信頼感と無気力との関連について，安心感は自己不明瞭と負の関連があり，不信は他者不信・不満足と正の関連があったことである。安心感には，「先生にならいつでも相談できると感じる」「私は先生と話すと気持ちが楽になることがある」（中井・庄司，2008）など，自分の悩みを教師に打ち明けることで安心を得る項目が含まれている。女性は，教師に自分の悩みを相談して心の安定を得て，未確定な将来に対しても積極的に向き合えるようになったのではないか。これは，学校や塾の教師からの支援が少ないと試験に対する不安感が高まる結果（東，2004）と対比的な示唆であるとも言えよう。次に，不信は，安心感とは反対に教師に対する不信を示すものである（中井・庄司，2008）。高校生の頃，教師が自分の悩みを打ち明けるに値しない存在であると捉えていた結果，大学生になってからも助けが必要なとき周りに支援を求められず，他者に対する意欲の減退に繋がったのだと考えられる。

第 2 節　現在の教師からのソーシャル・サポート（調査 3）

目的

本節では，現在の教師からのソーシャル・サポートが大学生の無気力と関連するのか，男女別に検討することを目的とした。

方法

調査時期と対象者

本調査の調査協力者は第 1 節と同一であった。2016 年 7 月～8 月に実施し，関東圏内の四年制の私立大学（A～D 大学）に通う男女 198 名（男性 93 名・女性 105 名，年齢 19.9 歳・標準偏差 1.18）を分析対象とした。

調査内容

1）フェイスシート

第 1 節と同じく，性別，年齢，所属する大学，学年について尋ねた。

2）無気力感尺度

第 1 節と同じく，下坂（2001）の作成した無気力感尺度を使用して大学生の無気力感を尋ねた。

3）SESS

久田他（1989）が作成した SESS で，大学生が現在の教師にどれだけソーシャル・サポートを期待しているのか調べた。「あなたが落ち込んでいると，元気づけてくれる」などの全 16 項目であった。評定は「1．絶対ちがう」～「4．きっとそうだ」の 4 件法でソーシャル・サポートを受けていると感じているほど得点が高くなるように設定した。元々は各項目に対して，父親・母親・きょうだい・教師・友人のサポートを，それぞれどれだけ期待しているのか答えるものであるが，本調査では教師との関係に焦点を当てるため教師のみに回答を限定した。

4）一般感情尺度

第 1 節と同じく，小川他（2000）が作成した尺度で現在の気分状態を尋ねた。

5）想定した教師

3）の SESS でどのような教師を想定したのか（性別，人数，友人との関係）を自由回答させた。想定した教師の性別について，同性か異性かに〇をつけてもらい，同性の場合は 1，異性の場合は 2，未回答の場合は 0 と入力した。

実施手続きと倫理的配慮

第 1 節と同一の実施手続きを踏んで調査を行った。調査対象者には調査の趣旨について十分な説明を行うと共に，調査への参加は強制ではないこと，調査への協力を拒否しても対象者には不利益は生じないこと，測定されたデータは匿名化されて使用されるため個人情

報は保護されることを事前に伝え，調査への参加ならびにデータ使用の同意を事前に確認した。

結果

各尺度の内的整合性の確認と記述統計

以降の分析には HAD ver.15.0（清水，2016）を用いた。各変数の信頼性係数を算出したところ，一般感情尺度では肯定的感情が α＝.91，否定的感情が α＝.89，安静状態が α＝.90，SESS では α＝.96，無気力感尺度では自己不明瞭が α＝.85，他者不信・不満足が α＝.77，疲労感が α＝.87 であり，十分な信頼性を示した。したがって，一般感情尺度は 24 項目，SESS は 16 項目，無気力感尺度は 19 項目を以降の分析に使用した。

各変数の平均値を算出し，Welch 検定で男女差を確認した。各変数の平均値と標準偏差，Welch 検定の結果を Table 4-2-1 に示した。Welch 検定の結果，SESS では女性の得点の方が高く，SESS で想定した教師は，男性よりも女性の方が異性を想定していた。

Table 4-2-1. 各変数の記述統計量および男女差

	全体（198名）		男性（93名）		女性（105名）		Welch検定		
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	*t*値	*df*	Cohen's *d*
一般感情尺度									
肯定的感情	22.54	4.84	23.00	5.62	22.12	4.02	1.25	164.27	0.18
否定的感情	16.30	5.17	16.29	6.01	16.31	4.33	−0.03	165.07	0.00
安静状態	20.88	5.37	21.15	5.95	20.64	4.81	0.66	176.89	0.09
SESS	36.52	11.31	33.86	12.29	38.88	9.84	−3.14**	175.90	−0.45
同性の教師の想定	1.23	0.64	1.09	0.60	1.36	0.65	−3.10**	195.67	−0.44
無気力感尺度									
自己不明瞭	28.30	8.19	27.76	7.58	28.78	8.71	−0.88	195.95	−0.12
他者不信･不満足	16.53	5.33	16.16	5.48	16.85	5.20	−0.90	190.18	−0.13
疲労感	15.24	4.59	15.06	5.18	15.39	4.02	−0.49	172.78	−0.07

Note. **p<.01

各変数における相関分析

男女別に相関分析を行い，一般感情尺度，SESS，無気力感尺度の各下位因子との相関を検討した。男性の結果は Table 4-2-2 の右上に，女性の結果は Table 4-2-2 の左下に示した。

男性は，一般感情尺度の肯定的感情が無気力感の各下位因子と中程度の負の相関があり，否定的感情が他者不信・不満足，疲労感と弱い正の相関があった。SESS は無気力感尺度とは相関が見られなかった。

女性は，一般感情尺度の肯定的感情が自己不明瞭，他者不信・不満足と中程度の負の相関があり，疲労感は弱い負の相関があった。否定的感情は自己不明瞭，他者不信・不満足と弱い正の相関が見られた。SESS は自己不明瞭，他者不信・不満足と弱い負の相関があった。

Table 4-2-2. 各下位因子の相関

		1	2	3	4	5	6	7	8
一般感情	1 肯定的感情	－	－.11	.39**	.02	－.02	－.58**	－.42**	－.45**
	2 否定的感情	－.21*	－	.04	－.01	.05	.20	.25*	.33**
	3 安静状態	.23*	.01	－	－.03	.03	－.15	－.12	－.12
	4 SESS	.25*	－.24*	.08	－	.19	－.07	－.16	.07
	5 同性の教師の想定	.02	－.19*	－.04	.14	－	－	－.04	－.01
無気力感	6 自己不明瞭	－.43**	.23*	.14	－.25*	－.11	－	.48**	.48**
	7 他者不信・不満足	－.45**	.21*	－.05	－.23*	－.12	.63**	－	.32**
	8 疲労感	－.36**	.16	－.15	.02	－.13	.35**	.36**	－

Note. *p<.05, **p<.01, 右上:男性, 左下:女性

無気力感尺度を従属変数としたポアソン回帰分析

コルモゴロフ・スミルノフ検定を用いて，無気力感尺度の各下位尺度の正規性を検討した。検定の結果，自己不明瞭は正規分布に従っていたが（D＝0.05，p＞.05），他者不信・不満足と疲労感は正規分布ではないことが示された（他者不信・不満足，D＝0.08，p＜.05；疲労感，D＝0.09，p＜.05）。そのため，他者不信・不満足，疲労感の検討はポアソン回帰分析を用いた。自己不明瞭についても，他の二つの下位尺度との結果の比較のため，ポアソン回帰分析を用いた。

男女別に 2 ステップからなるポアソン回帰分析を行い，現在の気分状態で統制した現在の教師からの SESS と大学生の無気力との関連を検討した。第 1 ステップには一般感情尺度の各下位因子を投入し，第 2 ステップで SESS を投入した。以下に，無気力感尺度の下位因子である自己不明瞭，他者不信・不満足，疲労感それぞれを従属変数としたときの結果を順に述べていく。

まず，自己不明瞭を従属変数としたときの結果を Table 4-2-3 に示した。男性は，第 1 ステップの AdjustR^2が有意であったが，第 2 ステップにおける有意な増分は見られなかった。第 1 ステップの β は，一般感情尺度の肯定的感情と自己不明瞭に負の関連があった。女性は，第 1 ステップで AdjustR^2が有意であり，第 2 ステップにて有意な増分があった。第 2 ステップの β は，肯定的感情と SESS が自己不明瞭と負の関連が見られた。一般感情尺度の安静状態は自己不明瞭と正の関連を示した。

Table 4-2-3．自己不明瞭に対するポアソン回帰分析

	性別	男性					女性				
モデル	独立変数	AdjustR^2	ΔR^2	β	［95%CI］		AdjustR^2	ΔR^2	β	［95%CI］	
1	現在の気分状態	.36**					.25**				
	肯定的感情			−.60**	−.80	−.40			−.43**	−.61	−.26
	否定的感情			.12	−.01	.25			.09	−.05	.23
	安静状態			.09	−.12	.31			.26**	.09	.43
2	ソーシャル・サポート	.36**	.00				.29**	.04*			
	SESS								−.20*	−.38	−.01

Note．*p<.05，**p < .01，β値はΔR^2が有意であった最終モデルでの値

次に，他者不信・不満足を従属変数としたときの結果を Table 4-2-4 に示した。男性は，第 1 ステップにおける AdjustR^2が有意であったが，第 2 ステップにおける有意な増分は見られなかった。第 1 ステップの β は，肯定的感情が他者不信・不満足と負の関連が見られた。女性は，第 1 ステップで AdjustR^2が有意であり，第 2 ステップにて有意な増分を示した。第 2 ステップの β は，肯定的感情と SESS が他者不信・不満足と負の関連があった。

Table 4-2-4．他者不信・不満足に対するポアソン回帰分析

	性別	男性					女性				
モデル	独立変数	AdjustR^2	ΔR^2	β	［95%CI］		AdjustR^2	ΔR^2	β	［95%CI］	
1	現在の気分状態	.21**					.22**				
	肯定的感情			−.41**	−.62	−.20			−.43**	−.59	−.27
	否定的感情			.19	−.02	.41			.08	−.10	.25
	安静状態			.04	−.18	.27			.06	−.16	.28
2	ソーシャル・サポート	.23**	.02				.25**	.03*			
	SESS								−.17**	−.32	−.03

Note．*p<.05，**p < .01，β値はΔR^2が有意であった最終モデルでの値

最後に，疲労感を従属変数としたときの結果を Table 4-2-5 に示した。男女ともに，第 1 ステップの AdjustR^2が有意であったが，第 2 ステップにおける有意な増分は見られなかった。男性は，第 1 ステップの β は，肯定的感情が疲労感と負の関連があり，否定的感情が正の関連があった。女性は，肯定的感情が疲労感と負の関連があった。

Table 4-2-5．疲労感に対するポアソン回帰分析

	性別	男性					女性				
モデル	独立変数	AdjustR^2	ΔR^2	β	［95%CI］		AdjustR^2	ΔR^2	β	［95%CI］	
1	現在の気分状態	.26**					.14**				
	肯定的感情			−.42**	−.65	−.20			−.32**	−.53	−.11
	否定的感情			.26**	.07	.46			.10	−.07	.27
	安静状態			.04	−.19	.27			−.08	−.25	.10
2	ソーシャル・サポート	.27**	.01				.15	.03			
	SESS										

Note．**p < .01，β値はΔR^2が有意であった最終モデルでの値

考察

本節では，男女別にポアソン回帰分析を行い，現在の教師からのソーシャル・サポートと大学生の抑うつ的な無気力との関連を検討した。以下に，明らかになった事柄を述べていく。

まず，現在のソーシャル・サポートと無気力との関連は，女性のみ見られた。下坂（2001）の調査では，男性のみソーシャル・サポートと無気力との関連があったが，本節では男性では関連が見られなかった。大学生は中・高校生に比べて授業以外の場で教師との交流があまりされない（ベネッセ教育総合研究所，2021）。大学生が支援を求める対象として大学の教師は普段想定されにくいものであったと考えられる。だが，女性は家族以外の重要な他者との関わりが強い（山田，2011）。男性に比べ，女性は大学生の教師と関わる傾向があると推測される。さらに，現在は大学が研究の場から勉強の場へと変化し，「学校化」している（山内，2010）。授業後に教師に質問をしに行くなど，大学の教師に対して中・高校生の頃と同じような関わり方をして交流を深めているのではないだろうか。その結果，女性は支援を求める対象に教師も含まれ，無気力との関連が見られたのであろう。

次に，女性におけるソーシャル・サポートと無気力との関連について，自己不明瞭と他者不信・不満足と負の関連があった。自己不明瞭は自分や将来に対する意欲の減退で，他者不信・不満足は他者に対する不信感である（下坂，2001）。中学・高校時の示唆であるが，進路選択場面において，教師との関係は重要であるとされている（笠井，2005）。大学の教師は研究分野に対する専門性が高い。自分の興味・関心のある分野について教師に尋ね知識を深めることで，自分の将来に対する見通しを立てることに繋がったのではないか。また，そうした自分の将来に関してなど重要な局面で教師から支援を得られたために，自分が困っているときに周りは助けてくれるという感覚を持ち，他者に対する不信感が軽減したと推測される。

第 3 節　本章のまとめ

これまでの無気力研究では，あまり教師との関係については注目されてこなかった。しかし，本節で過去の教師に対する信頼感と現在の教師からのソーシャル・サポートが，大学生の抑うつ的な無気力と関連するかそれぞれ検討したところ，どちらも女性のみではあるが関連が見られた。女性にとって，教師は自分の心の安定を得るために必要な存在であり，過去の信頼感でも現在のソーシャル・サポートでも，教師が自分の悩みを理解し適切な支援をしてくれるという感覚が，無気力の抑制に繋がったと考えられる。一方で，過去に教師に対して不信感を持つと，他者に支援を求めにくくなり，対人関係への意欲の減退が起こっていた。教師との関わり方には性差があり，大学生の無気力にアプローチする際は，性差によって対人関係の重要度が異なることに注意する必要があると言える。

ここまで，抑うつ的な無気力と過去・現在の対人関係との関連について検討してきた。次章からは，スチューデント・アパシー的な無気力の実態を捉えていく。

目的 2)大学生が捉えるスチューデント・アパシー的な無気力の検討

第 5 章　スチューデント・アパシー的な無気力の特徴の検討

第 1 節
スチューデント・アパシー的な無気力とそれに対する感情の時間的変化(調査 4)

目的

本節では，無気力とそれに対する感情を縦断的に測定し，1）調査開始時点における学業への意欲減退は無気力に対する感情に影響を与えるか，2）時間の経過により，無気力へのネガティブな感情が高まり学業以外にも意欲の減退が見られるか，検討することを目的とした。

方法

調査時期と対象者

2019 年 6 月上旬に調査 1 回目（T1），3 週間後の 6 月下旬から 7 月上旬に 2 回目（T2），さらに 3 週間後の 7 月下旬に 3 回目（T3）を関東圏内の私立大学で実施した。T1 には 135 名，T2 には 132 名，T3 には 134 名の大学生が参加した。その内，3 回の調査すべてに参加し，質問紙の回答に不備が見られなかった男女 121 名（男性 13 名・女性 108 名，平均年齢 18.86 歳・標準偏差 0.82）を分析対象とした。学年の内訳として，1 年生 44 名・2 年生 33 名・3 年生 3 名・4 年生 41 名であった。

調査内容

1）フェイスシート

性別，年齢，学部，学年について尋ねた。また，3 回分のデータを同定するために携帯電話またはスマートフォンの電話番号下 4 桁を尋ねた。

2）意欲低下領域尺度

下山（1995）の意欲低下領域尺度を用いて，学業に対しての意欲の減退を感じているか尋ねた。「学業意欲低下（勉強に関する本を読んでいてもすぐに飽きてしまう，など）」5 項目，「授業意欲低下（何となく授業をさぼることがある，など）」5 項目，「大学意欲低下（大学にいるより，自分ひとりでいるほうがいい，など）」5 項目の 3 因子 15 項目から構成された。「1．全くあてはまらない」～「5．非常にあてはまる」の 5 件法で，無気力傾向が高いほど得点も高くなるよう設定した。

3）無気力感尺度

下坂（2001）の作成した無気力感尺度で，学業以外の場面で意欲の減退があるか尋ねた。自分や将来への無気力である「自己不明瞭（自分の将来を真剣に考える気にはならない，など）」9 項目，対人関係の構築に関する無気力である「他者不信・不満足（周りの人たちと

の付き合いは退屈だと感じる，など)」6 項目，日々の生活の疲れなどを測定する「疲労感（日々の生活で体がだるいと感じる，など)」4 項目の 3 因子 19 項目からなった。「1．全くあてはまらない」～「6．かなりあてはまる」の 6 件法で，無気力傾向が高いほど得点も高くなるように設定した。

4）心のゆとり感尺度

富田（2008）の心のゆとり感尺度を用い，前述の意欲低下領域尺度と無力感尺度で回答した自身の無気力傾向に対する感情を尋ねた。教示として，「p.2 の問 1，p.3 の問 2 のご自身の回答をもう一度，簡単に見返してください。問 1，2 で答えた内容に対して，どのように感じていますか」という文を付けた。「心の充足・開放性（充実感を感じる，など)」17 項目，「切迫・疲労感（焦りを感じる，など)」12 項目，「対他的ゆとり（他人のことも思いやれる余裕があると感じる，など)」6 項目の 3 因子 35 項目で構成されていた。評定は「1．全くあてはまらない」～「6．とてもあてはまる」の 6 件法であり，心のゆとりがあるほど心の充足・開放性と対他的ゆとりの得点が高くなり，切迫・疲労感の得点が低くなるよう設定した。

実施手続きと倫理的配慮

当時筆者の所属機関に倫理委員会が運用されておらず，当該研究とは関係のない同専攻の教員及び院生に以下の手続きを示し，調査の実施が倫理的に問題ないことを確認した。

大学の学内にて，授業の空き時間を利用して参加者に配布し，自記式調査を実施した。各回の調査データを一致させるために参加者のスマートフォンの電話番号下 4 桁を尋ねた。参加者には調査の趣旨を伝え，調査への参加は強制ではないこと，調査への協力を拒否しても不利益は生じないこと，回答しにくい場合は途中で中止しても構わないこと，測定されたデータは匿名化されて使用されるため個人情報は保護されることを教室内のスクリーンに示して質問紙の配布前に説明を行った。質問紙の冒頭にも同様の旨を明記し，調査への参加並びにデータ使用の同意を事前に確認した。

結果

各尺度の内的整合性の確認と記述統計

各変数の平均値と標準偏差を Table 5-1 に示した。各変数の平均値を確認すると，無気力感尺度の自己不明瞭と意欲低下領域尺度の学業意欲低下，心のゆとり感尺度の切迫・疲労感では，T2 の値が T1，T3 に比べやや低くなっていた。心のゆとり感尺度の心の充足・開放性と対他的ゆとりは T2 の値が T1，T3 に比べやや高くなっており，T1 から T3 にかけて線形ではない変化をしていることが推測された。

各尺度の下位因子の α 係数を測定し，内的整合性の確認を行った（Table 5-1)。意欲低下領域尺度の学業意欲低下で α 係数の値が低かったが，項目数が少ないこと，逆転項目が含まれる質問内容であることを考慮し，以降も全項目を分析に使用した。他の尺度も十分な信頼

性が確認されたため，項目数は変更せず以降の分析に使用した。

Table 5-1. 測定時点ごとの各尺度の記述統計量

	信頼性係数	平均値	*SD*		信頼性係数	平均値	*SD*
無気力感尺度				**心のゆとり感尺度**			
自己不明瞭(T1)	.85	28.18	7.43	心の充足・開放性(T1)	.94	68.02	14.36
自己不明瞭(T2)	.86	27.69	7.32	心の充足・開放性(T2)	.95	68.35	14.37
自己不明瞭(T3)	.86	28.31	7.44	心の充足・開放性(T3)	.96	68.26	14.41
他者不信・不満足(T1)	.83	15.59	5.29	切迫・疲労感(T1)	.91	41.40	10.61
他者不信・不満足(T2)	.85	15.58	5.36	切迫・疲労感(T2)	.92	40.68	11.02
他者不信・不満足(T3)	.85	15.85	5.21	切迫・疲労感(T3)	.93	42.40	11.06
疲労感(T1)	.87	15.79	4.05	対他的ゆとり(T1)	.82	21.91	4.21
疲労感(T2)	.90	15.66	4.13	対他的ゆとり(T2)	.83	22.09	4.27
疲労感(T3)	.91	15.71	4.39	対他的ゆとり(T3)	.81	21.75	4.07
意欲低下領域尺度							
学業意欲低下(T1)	.56	14.21	3.22	大学意欲低下(T1)	.77	12.07	3.94
学業意欲低下(T2)	.50	14.05	3.09	大学意欲低下(T2)	.76	12.26	3.86
学業意欲低下(T3)	.59	14.32	3.14	大学意欲低下(T3)	.78	12.39	3.94
授業意欲低下(T1)	.63	10.09	3.34				
授業意欲低下(T2)	.70	10.02	3.57				
授業意欲低下(T3)	.75	10.25	4.00				

測定時点による無気力と感情の変化

Amos 27.0 を使用し，集団全体の学業以外に対する無気力と無気力に対する感情の時間的な変化を潜在曲線モデルによって検討した。まず，学業以外に対する意欲の減退として自己不明瞭と他者不信・不満足，無気力に対する感情として心のゆとり感尺度の各下位尺度に対して，線形モデルを仮定して母数の推定を行った。その際，無気力感尺度の疲労感は，他の 2 因子と異なり短期的に感じられる無気力を扱ったもので（下坂，2001），持続的な無気力とは言えないため，モデルから除外した。3 時点で観測された自己不明瞭の得点をモデルに投入したところ，推定値の分散が正でないエラーが起こり，Table 5-1 で示唆されたようにデータが線形モデルに適合しない可能性が示された。他の変数でも同様のエラーが見られたため，入江他（2015）と湯・外山（2016）の手法を参考に，傾き因子から T2 の観測変数への負荷を自由推定させるという処理を行い，Figure 5-1 に示したような非線形モデルにデータを当てはめた。また，湯・外山（2016）は T1 から調査の間隔が 1 ヶ月空いている T2 の観測変数への負荷を 1，T1 から 5 ヶ月空いている T3 の観測変数への負荷を 5 としていた。本研究では T1～3 の調査間隔がそれぞれ 1 ヶ月未満であることと，値の推移が非線形であることを考慮して，T3 の観測変数への負荷を 0.5 とした。これにより，どの変数でも満足できるモデルの適合度が得られた。各母数の推定値，標準誤差および適合度を Table 5-2 に

示した。

分析の結果，切片（μ_α）の推定値は，自己不明瞭が 28.296（p＜.001，SE＝0.675），他者不信・不満足が 15.572（p＜.001, SE＝0.482），心の充足・開放性が 68.015（p＜.001, SE＝1.306），切迫・疲労感が 41.113（p＜.001，SE＝0.969），対他的ゆとりが 21.923（p＜.001，SE＝0.384）であった。傾き（μ_β）の推定値は，切迫・疲労感において有意な正の値が得られた（μ_β＝2.637, p＜.05，SE＝1.180）。ただし，切片と傾きの共分散は有意な値が見られなかったため，無気力とその感情の T1 における得点と，その後の T2，T3 の得点の伸びとの関連は示されなかった。

次に，T1 の個人差を示す切片の分散（$\sigma^2_{\alpha\alpha}$）では，自己不明瞭，他者不信・不満足，心の充足・開放性，切迫・疲労感，対他的ゆとりのすべてで有意な値が得られた（順に，$\sigma^2_{\alpha\alpha}$＝49.203，p＜.001，SE＝7.095；$\sigma^2_{\alpha\alpha}$＝25.276，p＜.001，SE＝3.610；$\sigma^2_{\alpha\alpha}$＝180.597，p＜.001，SE＝26.629；$\sigma^2_{\alpha\alpha}$＝95.881，p＜.001，SE＝13.605；$\sigma^2_{\alpha\alpha}$＝14.090，p＜.001，SE＝2.326）。変化パターンの個人差を示す傾きの分散（$\sigma^2_{\beta\beta}$）では，心の充足・開放性において有意な値が得られた（$\sigma^2_{\beta\beta}$＝95.179，p＜.05，SE＝39.111）。また，観測変数の分散の推定値（VAR($\mathcal{E}_t$)）が大きいことから，個人差を説明する要因を検討する必要性が示唆された。本研究の目的に従い，以下に学業意欲低下を説明変数に加えたモデルによる検討を行った。

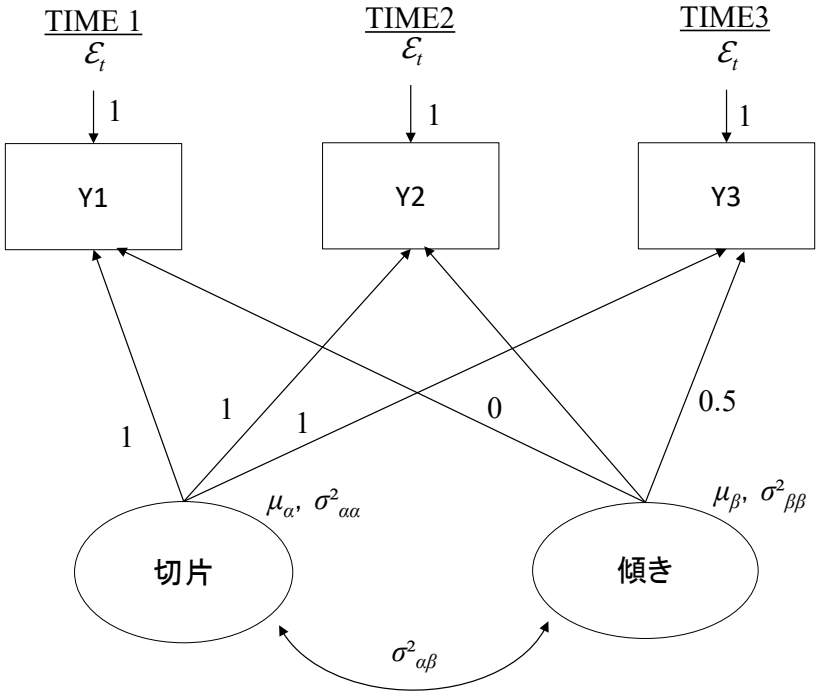


Figure 5-1．潜在曲線モデル

注）T2における自由母数の推定値は，自己不明瞭が.842，他者不信・不満足が.447，心の充足・開放性が.624，切迫・疲労感が－.067，対他的ゆとりが.460であった

Table 5-2．学業以外の無気力と無気力への感情に関する，潜在曲線モデルにおける母数の推定値と標準誤差およびモデルの適合度

		推定値		適合度
		b	*SE*	
学業以外の無気力				
自己不明瞭	μ_α	28.296***	(0.675)	
	μ_β	−0.526	(0.484)	CFI＝0.997
	$\sigma^2_{\alpha\alpha}$	49.203***	(7.095)	IFI＝0.997
	$\sigma^2_{\beta\beta}$	7.999	(6.252)	TLI＝0.991
	$\sigma^2_{\alpha\beta}$	−3.967	(3.987)	RMSEA＝0.064
	VAR(ε_t)	6.099***	(0.787)	χ^2=3.067，*df*=2
他者不信・不満足	μ_α	15.572***	(0.482)	
	μ_β	0.316	(0.461)	CFI＝0.999
	$\sigma^2_{\alpha\alpha}$	25.276***	(3.610)	IFI＝0.999
	$\sigma^2_{\beta\beta}$	8.200	(4.310)	TLI＝0.998
	$\sigma^2_{\alpha\beta}$	−2.159	(2.626)	RMSEA＝0.033
	VAR(ε_t)	2.595***	(0.335)	χ^2=2.280，*df*=2
無気力に対する感情				
心の充足・開放性	μ_α	68.015***	(1.306)	
	μ_β	0.520	(1.321)	CFI＝1.000
	$\sigma^2_{\alpha\alpha}$	180.597***	(26.629)	IFI＝1.006
	$\sigma^2_{\beta\beta}$	95.179*	(39.111)	TLI＝1.017
	$\sigma^2_{\alpha\beta}$	−27.605	(21.177)	RMSEA＝0.000
	VAR(ε_t)	24.835***	(3.205)	χ^2=0.203，*df*=2
切迫・疲労感	μ_α	41.113***	(0.969)	
	μ_β	2.637*	(1.180)	CFI＝0.994
	$\sigma^2_{\alpha\alpha}$	95.881***	(13.605)	IFI＝0.994
	$\sigma^2_{\beta\beta}$	20.675	(23.363)	TLI＝0.983
	$\sigma^2_{\alpha\beta}$	−1.500	(11.130)	RMSEA＝0.078
	VAR(ε_t)	20.647***	(2.665)	χ^2=3.571，*df*=2
対他的ゆとり	μ_α	21.923***	(0.384)	
	μ_β	−0.018	(0.494)	CFI＝0.996
	$\sigma^2_{\alpha\alpha}$	14.090***	(2.326)	IFI＝0.996
	$\sigma^2_{\beta\beta}$	6.070	(5.349)	TLI＝0.989
	$\sigma^2_{\alpha\beta}$	−1.886	(2.459)	RMSEA＝0.057
	VAR(ε_t)	3.586***	(0.463)	χ^2=2.847，*df*=2

Note. μ＝平均，σ^2＝分散，*p＜.05，***p＜.001

学業意欲低下による無気力と感情の変化

学業に対する意欲の減退が他の場面に対する無気力と無気力に対する感情に与える影響を，条件付き潜在曲線モデルによって検討した。Figure 5-1 の潜在曲線モデルをもとに，切片が T1 時点における学業意欲低下から影響を受ける条件付き潜在曲線モデルを仮定し，無気力と無気力に対する感情についてそれぞれ母数の推定を行った。その際，学業意欲低下は連続変数として投入した。Table 5-2 より，心の充足・開放性は傾きの分散に，切迫・疲労感

は傾きの推定値に有意な値が得られたため，傾きへの影響も併せて検討した。変数を線形モデルに投入したところ推定値の分散が正でないエラーが起こったため，傾きから観測変数への負荷に対して，Figure 5-1 と同様の処置を行った。仮定した条件付き潜在曲線モデルを Figure 5-2 に，母数の推定値を Table 5-3 に示した。切迫・疲労感について，適合度指標の RMSEA が.10 を上回っていたが，サンプルサイズが小さい場合は RMSEA が高くなりやすいこと，CFI，IFI はいずれも.95 を上回っていることから，このモデルのまま分析を継続した。

学業意欲低下から切片への影響は，学業以外の無気力では，自己不明瞭に対して有意な正の影響があり（β_1＝0.668，p＜.001，SE＝0.190），他者不信・不満足は有意ではなかった（β_1＝0.171，*n.s.*，SE＝0.143）。無気力に対する感情では，切迫・疲労感は有意ではなく（β_1＝－0.047，*n.s.*，SE＝0.299），心の充足・開放性と対他的ゆとりで有意な負の影響が見られた（順に，β_1＝－0.914，p＜.05，SE＝0.398；β_1＝－0.214，p＜.05，SE＝0.107）。次に，学業意欲低下から傾きへの影響は，心の充足・開放性，切迫疲労感ともに有意ではなかった（順に，β_1＝0.120，*n.s.*，SE＝0.408；β_1＝0.651，*n.s.*，SE＝0.395）

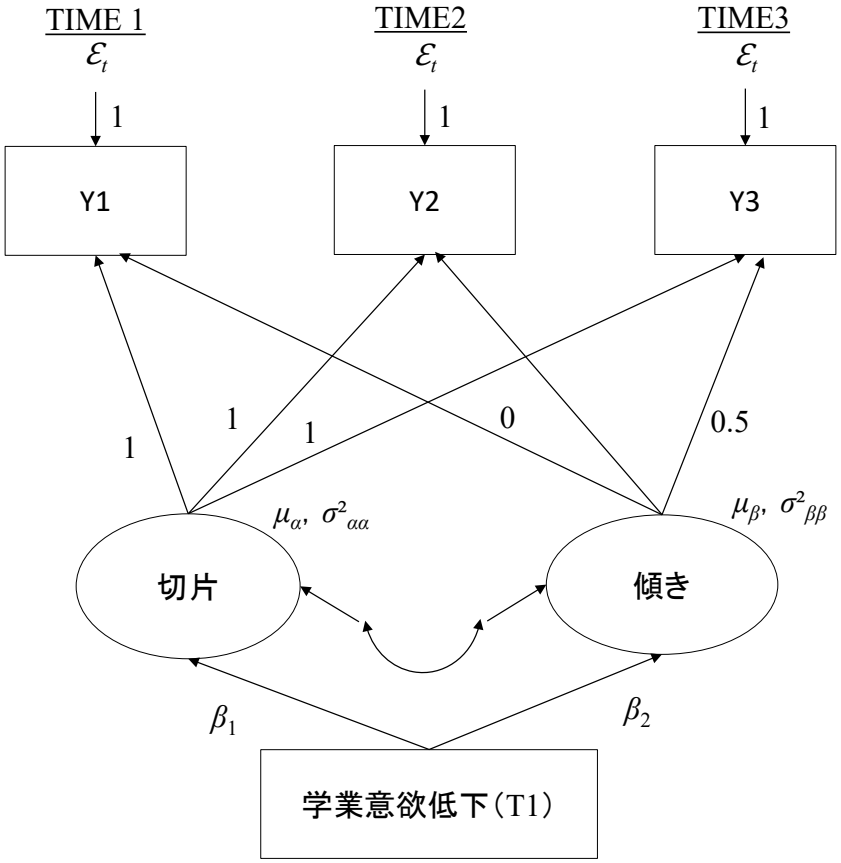


Figure 5-2．条件付き潜在曲線モデル

注）β_2は心の充足・開放性と切迫・疲労感のみ検討した

Table 5-3．学業以外の無気力と無気力への感情に関する，条件付き（学業意欲低下）潜在曲線モデルにおける母数の推定値，標準誤差およびモデルの適合度

		推定値		適合度	
		b	*SE*		
学業以外の無気力					
自己不明瞭	β_1	0.668***	(0.190)	CFI＝0.994 IFI＝0.994 TLI＝0.984	χ^2=6.287，*df*=4 RMSEA＝0.066
他者不信・不満足	β_1	0.171	(0.143)	CFI＝1.000 IFI＝1.004 TLI＝1.011	χ^2=2.332，*df*=4 RMSEA＝0.000
無気力に対する感情					
心の充足・開放性	β_1	−0.914*	(0.398)	CFI＝1.000 IFI＝1.003 TLI＝1.009	χ^2=2.117，*df*=3 RMSEA＝0.000
	β_2	0.120	(0.408)		
切迫・疲労感	β_1	−0.047	(0.299)	CFI＝0.971 IFI＝0.972 TLI＝0.905	χ^2=11.119，*df*=3 RMSEA＝0.144
	β_2	0.651	(0.395)		
対他的ゆとり	β_1	−0.214*	(0.107)	CFI＝0.990 IFI＝0.991 TLI＝0.976	χ^2=6.304，*df*=4 RMSEA＝0.067

Note. *p＜.05，***p＜.001

考察

本節では，一般学生のスチューデント・アパシー的な無気力の実態を明らかにするために縦断研究を行い，1）調査開始時点で学業への意欲の減退は無気力に対する感情に影響を与えるか，2）時間の経過により，無気力へのネガティブな感情が高まり学業以外にも意欲の減退が見られるか検討した。

第一の目的について，条件付き潜在曲線モデルの結果から，学業意欲低下は切迫・疲労感の切片に対して有意な影響があるとは言えず，調査開始時点で学業への意欲の減退と無気力に対するネガティブな感情は連動していないことが示された。スチューデント・アパシーの学生は，怠学傾向を示す一方で不安や焦燥といったネガティブな感情を持たず（笠原，1984），抑うつ的な無気力のような，憂鬱の気分が継続する状態（桜井，2000）と異なる特徴が示唆されていた。今回の結果は，臨床研究における見解を支持するものであったと言えよう。また，調査は授業内で実施したため，学業への意欲の減退を感じているものの授業を受ける程度の意欲はあり，ネガティブな感情が生じにくかったことが推測される。

しかし，学業意欲低下は，心の充足・開放性と対他的ゆとりには負の影響を与えていた。調査では，自身の無気力の度合いを意識させ，それに対する心のゆとり感を評定するように教示していた。上記の結果と併せると，学業意欲の減退を意識しても，ネガティブな感情は連動しない一方で，心のゆとりを無くしていることが言える。心の充足・開放性の項目には「毎日が楽しいと感じる」（富田，2008）といった日々の生活への充実感が含まれる。学業

への積極性が減ったことで，課題をやり遂げたことの達成感などが得られにくくなっているのではないだろうか。

対他的ゆとりに関して，学業意欲低下から対人関係に対する無気力である他者不信・不満足への影響は見られなかった。このことから，学業意欲が減退しても，他者との関わりへの意欲は減退しない一方で，他者に対する心のゆとりがあまり無い状態であることが考えられる。対他的ゆとりには，「自分のことで精一杯だと感じる（逆転項目）」（富田，2008）といった項目が含まれる。現在の大学生は「まじめ化」（渡部，2005）しており，意欲の減退の有無に関わらず授業自体には参加している。他者との関係が自然とつくりやすい環境にあるものの，授業の参加や他者との関わりといった日常生活におけるタスクが多いとも言える。そのため他者との関わりに対する意欲自体は減退しにくく，他方，学業に対して意欲が減退していると，それ以外のことに意識を割く余裕がないと感じやすいのであろう。スチューデント・アパシー的な無気力の学生は，自分自身や問題について考え込まない心理状態にあると指摘されていた（下山，2000；狩野・津川，2008，2011）。だが，実際には，他者に対する余裕が無くなっていると思う程度には，無気力である状態を深刻に捉えていることが考えられよう。また，推測にすぎないが，意欲のある他者と接する機会が増えるにつれ，無気力である自分について意識を向けざるをえなくなったのであろう。結果として，自他に対する心のゆとりがあまり無い状態になったと思われる。

第二の目的について，条件付き潜在曲線モデルにより，学業意欲低下は，心の充足・開放性と切迫・疲労感の増加に影響を与えていなかった。つまり，時間の経過によって無気力へのネガティブな感情が高まることは無く，心のゆとりがさらに失われたり，反対にゆとりができたりするわけでもないことが示された。授業自体には参加しているため，臨床場面で示唆されていたような（笠原，1984），無気力への焦りや不安が生じにくいのであろう。一方で，3 回目の調査は学期末に行っており，意欲の減退の有無に関わらず授業の単位や課題に直面せざるをえない時期である。そのため，毎日の生活に対する楽しさなども感じにくい状態であったとも考えられる。

条件付き潜在曲線モデルから，学業意欲低下から切迫・疲労感の傾きに影響は見られず，それに伴って，学業以外の，より広い範囲に意欲の減退が起こるかも今回の研究では明らかにならなかった。しかし，調査開始時点にて，学業意欲低下は自分や将来に対する無気力である自己不明瞭に正の影響を及ぼしていた。これは，スチューデント・アパシーは学業にのみ選択的に意欲が減退するという報告（Walters，1961 笠原・岡本訳 1975）と一見そぐわない結果である。だが，自己不明瞭は「自分の将来を真剣に考える気にはならない」，「私は自分から進んで物事を行う熱意がないと感じる」などの現在と未来への長期的な視点を持つ無気力である（下坂，2001）。学業に対する意欲の減退に付随して，卒業に必要な単位が取れるのかといった将来に対する見通しや，授業で課された課題などへの積極性が弱まっていたことが考えられる。大学生活に余裕があるときに，アパシー傾向が高まることが示されている（千島・水野，2015）。これを踏まえて，調査を開始した時期が，新学期が開始して

2 ヶ月経った 6 月上旬であった点にも留意する必要がある。1 年生は大学生活に慣れ，当初抱いていた緊張や不安が緩和し，2 年生以上も期末試験がまだ先で課題等も少ない時期であるため，中だるみが生じていた可能性がある。

無気力に対するふたつの視点が混在したまま調査研究が行われていたことで（狩野・津川，2008，2011），臨床場面における示唆（笠原，1977，1984）以降不透明であったスチューデント・アパシー的な無気力について，上記の結果を踏まえて特徴を整理していく。まず，学業への意欲の減退と，無気力に対するネガティブな感情が連動していなかったことは，臨床場面における示唆（笠原，1977，1984）を支持していた。これは，時代的変化や環境にあまり影響されない，スチューデント・アパシー固有の特徴であろう。

それに対して，先行研究でほとんど触れられていなかった結果も 2 つ見られた。これは，学生を取り巻く環境の変化が影響しているのであろう。第一に，自分が無気力であることに焦りは感じていないが，心のゆとりを無くしており，その後の心のゆとりの増減に無気力が影響を与えていなかったことである。第二に，学業への意欲が減退するほど，自分自身や将来に対しても意欲が減退していたことである。スチューデント・アパシー的な無気力は抑うつ的な無気力に比べて程度が軽いと認識されていた（下山，1995；狩野・津川，2011；大西，2016）。加えて，現在の大学生は授業自体には参加しており，無気力であると気付かれにくい。しかし，スチューデント・アパシー的な無気力はネガティブな感情を伴わないものの，心のゆとりが生じにくくなる。いずれ，桜井（2000）が挙げていた落ち込み，憂鬱な気分が継続する抑うつ的な無気力に近い状態になる可能性がある。早期の段階での支援が必要であろう。

第 2 節　本章のまとめ

本章から，これまで抑うつ的な無気力と混在していたスチューデント・アパシー的な無気力について，大学生がどのように捉えているのか検討を行った。本節では，スチューデント・アパシー的な無気力を学業に対して意欲が減退している状態として捉え縦断研究を実施した。条件付き潜在曲線モデルの結果，スチューデント・アパシー的な無気力は焦りや不安といったネガティブな感情は伴わない一方で，心のゆとりをなくしている状態であり，その後も感情の増減に変化はなかった。学業に対してだけでなく自分や将来に対する意欲の減退も付随して起こっており，スチューデント・アパシー的な無気力の大学生は自身の状態を楽観的に捉えているわけではないことが考えられた。スチューデント・アパシー的な無気力の実態を把握し，早期に支援を行うことが求められる。

次章では，大学生がスチューデント・アパシー的な無気力に陥る過程について，面接調査を行っていく。

第 6 章　スチューデント・アパシー的な無気力の様態の検討

第 1 節　スチューデント・アパシー的な無気力の形成過程とその捉え方(調査 5)

目的

本節では，大学生活の中でスチューデント・アパシー的な無気力になったことがある学生に面接調査を行い，どのようなきっかけで無気力に陥ったのかその過程を検討することを目的とした。また，自身が無気力であることをどう捉えていたのかも併せて尋ねた。

方法

調査時期と対象者

2021 年 8 月～9 月上旬にかけて，関東圏内の大学に通う男女 24 名（男性 13 名・女性 11 名，平均年齢 21.26 歳・標準偏差 1.40）が参加した（Table 6-1）。募集方法として，大学の OB，OG からサークルや部活で呼びかけ，研究室でのチラシ配布を行った。参加希望者には Google フォームの URL を送り，希望する調査の日程，連絡先，所属と名前，調査で使用するオンラインの形式（Zoom，Webex，Skype），謝礼の方法（QUO カード Pay，銀行振込，Amazon ギフト券）を回答してもらい，回答から 1，2 日以内に調査者が調査の日程について連絡し，調査日の前日に調査の同意書と調査で使用するオンラインの URL を送った。

Table 6-1．調査対象者一覧

	年齢	性別	所属	面接場所
A	18	男性	C大学	自宅
B	21	男性	A大学	大学構内
C	22	女性	G大学	自宅
D	21	女性	A大学	自宅
E	21	男性	D大学	自宅
F	21	女性	C大学	自宅
G	22	男性	D大学	自宅
H	22	男性	B大学	自宅
I	22	女性	A大学	カフェ，マスク着用
J	21	男性	J大学	自宅
K	18	男性	B大学	自宅
L	21	女性	A大学	自宅
M	21	女性	A大学	自宅
N	22	男性	A大学	カフェ，マスク着用
O	22	男性	B大学	自宅
P	21	男性	B大学	自宅
Q	21	女性	A大学	自宅
R	21	男性	F大学	自宅
S	19	男性	B大学	本人の希望により音声のみ
T	22	男性	D大学	カフェ，マスク着用
U	22	女性	B大学	自宅
V	21	女性	C大学	自宅
W	20	女性	D大学	自宅
X	21	女性	B大学	自宅

調査内容と実施手続き

コロナ禍であるため感染対策の観点から，面接はすべて Zoom や Webex などを用いたオンライン形式であった。面接日の前日に調査の同意書と使用するオンラインの URL を，事前の Google フォームに記載された連絡先に送信し，同意書に署名をした対象者に対し，面接を行った。面接時間は一人につき 20 分～45 分で，平均約 26 分であった。

主な質問内容は，「例えば，大学生活において，どんな状態が『勉学に対してやる気がない』に当てはまると考えますか」,「あなた自身が，大学生活の中で，勉学に対してやる気がないと感じたのは，どのようなときですか」,「自分がやる気のない状態であることについて，どのように感じましたか」,「自分がやる気のない状態であることについて，周りはどのような反応をしていたと感じますか」,「やる気があるときとないときとで，自分の中にどんな違いがあると感じますか」であった。

最後に，「わかりにくい質問はありませんでしたか。また，答えにくい質問はありましたか」と尋ね，その回答を踏まえて，質問の表現を適宜修正，変更した。例えば，「自分がやる気のない状態であることについて，どのように感じましたか」を「自分が勉学に対してやる気のない状態であることについて，どのように感じますか」と何に対する意欲の減退なのか明確にした。面接中も，質問の表現や順序を文脈に合わせて変更し，必要に応じて質問を追加した。コロナ禍であることを鑑みて，大学生活や対人関係などに変化があったのかどうかも尋ねた。また，現在とくに学業に対して意欲の減退を感じていないと回答した学生に対しては，どんなきっかけで意欲が向上したのかなどを尋ねることにより，無気力から脱却した後の過程についての情報を収集した。

倫理的配慮

面接日前日に送った調査の同意書は，次のような内容を明記した。調査の参加は強制ではないこと，どうしても回答したくない，回答していて気分が優れないといった場合は調査を途中で中断して構わないこと，回答が難しいものは回答を拒否することができることであった。また，調査の内容は記録されるが，研究以外の目的で使用されることはなく，論文内でも個人名や所属先は伏せて使用され，個人が特定されることはないことも併記した。さらに，調査の記録は厳重に保管され，調査者以外がその内容を知ることはなく，論文使用後，記録ファイルはすべて調査者が責任をもって破棄・消去し，外部に情報が漏れることはないと記した。これらの内容を確認し，同意できる場合はその日の日付と署名をし，Google フォームを用いて送信してもらった。併せて，結果のフィードバックを希望するかどうか尋ねた。

調査の当日は最初に所属と名前を照らし合わせて本人確認をし，前日に送った同意書の内容を改めて確認した。音声，通信環境を確認した後，録画または録音が可能かどうかを尋ねた後，調査を開始した。面接中はプレッシャーを与えないようにするため，ゆったりとしたペースで話すことを意識し，対象者が質問に対して沈黙した際も回答を急かさないよう

注意した。調査終了後は録画を止め参加のお礼を述べ，通信環境等の不具合がなかったか確認した。その後謝礼の形式について確認し，他に質問事項がなければそれで調査を終了し，一週間以内に謝礼を送金した。

分析方法

本研究では，検討がこれまで十分に行われていない内容を扱うため，半構造化面接によって質的なデータを収集し，探索的な分析を行った。得られたデータに根差した仮説を生成するため，修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach；以下 M-GTA）を用いた（木下，1999）。

木下（2016）の手続きに準拠し，次のように分析を行った。まず，鉄島（1993）の定義からスチューデント・アパシー的な無気力を精神疾患による無気力とは異なり，学業に対して意欲が減退している状態とした。それに合わせて分析テーマを「大学生がどのように学業に対する意欲の減退に至り，またそれに対してどのような捉え方をしているのか」，分析対象者を「学業意欲の減退を経験したことのある一般の大学生」と設定し，分析対象者にとっての主観的な体験とはどのようなものかという視点からデータの解釈を行った。なお，分析過程において学業意欲の減退から回復していく過程が確認されたため，分析テーマを「大学生がどのように学業への減退に至り回復していくのか，またそれに対してどのような捉え方をしているのか」と修正した。また，H と W は本人の申告により精神疾患による無気力状態であったため，分析焦点者の枠組みから外れると判断し，以降の分析から除外した。

次に，概念生成の段階では最も語りが豊かであった L から分析を行った。1 概念に対して 1 分析シートを作成し，L から導き出された概念を基に，他の学生のデータを検証し概念に該当する具体例を抽出した。その際，類似例だけでなく対極例の有無も確認することで解釈が恣意的にならないように注意した。対極例があった場合は，そこから新たな概念を生成した。

概念が徐々に増えていくにしたがい，概念と概念を個別に比較検討し，複数の概念の関係を検討し，カテゴリーの生成を行った。具体例が豊富に出てこなかった概念については有効でないと判断し，削除または他の概念へと統合した。

最後に，カテゴリー間の関係の検討を行った。カテゴリー相互の関係から全体の流れを整理し，矢印によってカテゴリー間の関係を示し，全体的なプロセスを表す結果図とストーリーラインを作成した。分析の過程において心理学専攻の教員 1 名，大学院生 1 名にも検討に参加してもらい，分析結果の妥当性を確保した。

結果

以下，カテゴリーを＜　＞，概念を『　』，具体例を「　」で表記した。学生の実際の発言は斜体にした。M-GTA による分析の結果，大学生のスチューデント・アパシー的な無気力による学業への意欲の減退に関して，5 つのカテゴリーが抽出された。＜学業意欲減退のきっかけ＞，＜学業意欲減退の状態＞，＜学業意欲減退に対する感情＞，＜学業意欲減退の回復＞，＜学業意欲の維持＞の 5 つであった。またこれらの概念に関連するカテゴリーとして，＜大学生活における対人関係のあり方＞，＜学業以外の活動＞，＜自分らしさ＞の 3 つのカテゴリーが見出された。学業意欲の減退に関する概念（以下，学業意欲減退概念）は 13 概念，関連する概念（以下，関連概念）は 11 概念の合計 24 の概念が生成された。以下，生成されたカテゴリー，概念及びその定義を Table 6-2，Table 6-3 に示した。

学業意欲減退に関するカテゴリーの概観

各カテゴリーに含まれる概念について説明していく。

＜学業意欲減退のきっかけ＞カテゴリー

『やる気のない周りにつられる』,『周囲からの肯定』,『環境の変化』の 3 つの概念が含まれていた。

概念同士の関係を論じていく。L 曰く,「*入学した当初は,*（中略）*学習に対するモチベーションもすごく高かった*」が,「*いざ大学に入ってみると，周りの，同期とか,*（中略）*自分のやりたい学問っていうよりかは，早く単位取りたいみたいな理由で授業を取ってたりしたので*」(『やる気のない周りにつられる』)，それに合わせて自分も，興味がある授業というより楽に単位が取れる授業を取っていたという具体例が得られていた。また，T から「*けっこう同じように授業とか出なくて単位ぼろぼろ落っことすみたいな人がけっこういて，ああお前もかーみたいな*」(『周囲からの肯定』）という具体例が出ている。周囲の学業への消極的な態度につられ，自身も学業に対して消極的になり，さらに周囲はその態度に同調していたことが読み取れる。ここから,『やる気のない周りにつられる』と『周囲からの肯定』は相互に関連し合っている概念であることが見出された。

コロナ禍の影響について，B から「*オンデマンド授業とかその，動画を，いつ観てもいいからこそ，なんかこう怠けてしまうというか，あの，動画を観るのを忘れてしまうというか*」(『環境の変化』）という具体例が得られた。コロナ禍等，授業に対して消極的な態度を取りやすい環境にあり，より『やる気のない周りにつられる』状態につながりやすいことが考えられた。

＜学業意欲減退の状態＞カテゴリー

このカテゴリーには,『学業への興味のなさ』,『将来に繋がらない』,『集中できない』という 3 つの概念が含まれていた。

概念同士の関係について参照していく。F から，学業意欲の減退に対して「*何のためにや*

っているのかもわからない」状態であったという具体例が出た。また，O によると，「*将来のこと考えたとき，*（中略）*今の大学の勉強と，その，将来のこと，が繋がる気があんまり，実感が得られない*」という具体例も見られた。自分が何のために学んでいるのか目的を見出せず（『学業への興味の無さ』），それが将来への見通しの無さに繋がっている（『将来に繋がらない』）ことが考えられた。

『集中できない』という概念について，V から「*対面のときより，ぼーっとしてたり，とか，あとは携帯をいじるとか他のことができちゃうので*（中略）*授業に集中できないみたいな*」という具体例があった。類似例として J から「*勉強するときになんか他の考え事をしてしまう*」との発言が見られ，授業がオンライン形式に変わるなど環境の影響で授業への集中が難しく，学業の意義が見出せないことがさらにそれを促進することに繋がると推測された。

＜学業意欲減退に対する感情＞カテゴリー

『無気力に対する部分的否定』,『自分に対する振り返り』,『割り切る』という 3 つの概念から構成されていた。

自身が無気力であることに対して，やや否定的な感情がある一方で，肯定的に受け入れている部分もあった。また，無気力であったことに「*余裕がなかったのかなって思います，当時は*」（D,『自分に対する振り返り』）と冷静に自分の状態を見返している様子もあった。とくに A は「*将来のこととか考えるとけっこう不安なので，ずっとこの状態が続くのは良くないっていうか嫌だなーって思います*」（『無気力に対する部分的否定』）と発言しながら，「*まあ，しょうがないのかなーって感じですね*」と無気力であることに『割り切る』態度も取っていた。良い状態ではないと思いつつも，仕方ないとその状態を受け入れており，無気力に対して完全にネガティブな印象を抱いているわけではないことが見出された。

＜学業意欲減退の回復＞カテゴリー

現在は学業に対する意欲の減退を感じていないという学生に追加で質問をし，『環境へ適応していく』,『やる気のある周りにつられる』の 2 つの概念が見出されていた。

L によると，留学した先で「*海外の学生が，自分の夢とか目標に向かって勉強する姿を見た*」ことをきっかけに，自分の大学での過ごし方を見直し，「*学びたい科目を，取るようになったし，4 年生になって思ったのは，（中略）学べる最後の機会だから学んでおこう*」と学業に対して積極的な態度を取るようになった（『環境へ適応していく』）という。また，サークルの引退やコロナ禍の影響で，学業へ消極的な態度を取っていた「*人と会う機会が圧倒的に少なくなった*」（L）ことや，学業に対して積極的な他者と会うことで「*あー自分は何やってたんだろうなーっていう*」（N）気持ちになり，『やる気のある周りにつられる』ことで学業への意欲が上向いていた。つまり，自身の学業への態度を見直すような環境に身を置かれ，そこで意欲の低い他者から離れたり，意欲のある他者に触発されたりすることで，学業

へ再び積極的になれたということが考えられる。

＜学業意欲の維持＞カテゴリー

これまでの大学生活の中で，そこまで強く学業意欲の減退を感じたことがないという学生や，現在は学業意欲の減退を感じていないという学生に対して，意欲が減退しないようどのようなことを心掛けているか質問した。そこから，『目的を持って行動している』，『やる気の出る環境にいる』の 2 つの概念が抽出された。

自分自身に課していることとして，C は「*大学に入ったら 1 位を取り続けるっていう目標を掲げ*」ていた（『目的を持って行動している』）と答えていた。S からは「*友だちとかライバルとかいると，けっこう，僕自身も，負けないようにとかそういう，形でやるので*」（『やる気の出る環境にいる』）という具体例が見出されていた。したがって，自分がなぜ学ぶのか目標を明確にし，学業への積極的な態度を取れるような環境づくりを意識していることが考えられた。

カテゴリー間の関係の説明

次に，カテゴリーを横断した概念間の繋がりを説明し，カテゴリー間の関係を示していく。

＜学業意欲減退のきっかけ＞と＜学業意欲減退の状態＞の関係

A は，「*対面でやると（中略）どうせここにいるんだから，ちょっと図書館に寄ってこうかなって気になるんですけど，オンラインだとそういうのがないってのはありますね*」（『環境の変化』）と発言しており，大学生はコロナ禍により行動に制限がかけられている状態であったことが考えられた。学業に集中できる場に赴くことができないために，「*家とかで受けるときって，その，結局，聞いているか聞いてないかわからないみたいな状況がけっこう起こってしまう*」（S），「*もう，ずーっと家にいると，内容が頭に入ってこない*」（V）という『集中のできなさ』に繋がったと言えよう。

＜学業意欲減退の状態＞と＜学業意欲減退の回復＞の関係

先述したように，大学生は環境の変化により学業に対して集中できない状態であった。また，「*授業受けるのは一人なので，なかなか，そういった意味で楽しさっていうのが薄れているのかなって思います*」（B）という発言も出ており，周囲と交流ができないことも『集中のできなさ』に拍車をかけている様子であった。そこから，B は現在の状況として「*最近はやっぱり少しずつオンライン授業にも慣れてきた感じなので（中略）電話とか，あのーLINE でこう，授業に関して，こう同じ授業を取っている友だちとコンタクトを取ったりとか*」（『環境へ適応していく』）と述べている。コロナ前のように直接交流することはできないが，現在の状況に合わせた形で学業に関する情報共有を取れるようになっており，それが学業意欲への減退から回復することに繋がったのであろう。

＜学業意欲減退の回復＞と＜学業意欲の維持＞の関係

『環境へ適応していく』中で，大学生は周囲と再び交流を取るようになった。「*近況を報告し合って今どんな感じ？（中略）とかそんな話を聞くと，あっ，友だちも頑張っているからやらなきゃ，とか思う*」(D) ようになり，『やる気のある周りにつられる』ことで，学業意欲の減退から回復していった。回復した＜学業意欲の維持＞のために，『やる気の出る環境にいる』ようにしている。その際は，「*似たような属性の子だけで固まるのも問題だと思っているので，まあそれこそ，就活のインターンで会った他大の，体育会系の学生とかと最近は，話す機会を意識的に設けるようにはしてますね*」(R)，「*一緒に勉強してくれる――意欲的な子，とかと友だちになるとか*」(I) といった発言が見られた。自分にとって刺激となるような相手との交流を続けることで，学業意欲を維持していると考えられる。

Table 6-2. 学業意欲減退に関するカテゴリー並びに概念一覧

学業意欲減退カテゴリー	概念	定義	具体例（人数）
学業意欲減退のきっかけ	やる気のない周りにつられる	周りに合わせて学業を疎かにする	同期は自分のやりたい学問っていうよりかは，早く単位取りたいみたいな理由で授業を取ってたりしたので（6）
	周囲からの肯定	学業意欲低下に対する周りの肯定	けっこう同じように授業とか出なくて単位ぼろぼろ落っことすみたいな人がけっこういて（8）
	環境の変化	コロナ禍により変化した学習環境に適応できない	授業，たまに受けるのを忘れてしまったりとか（4）
学業意欲減退の状態	学業への興味のなさ	自分が学んでいる内容に目的を見出せず興味・関心が薄い	なんか目的がない状態っていう（9）
	将来に繋がらない	学んでいることが自分の将来への見通しに繋がらない	今の大学の勉強と，将来のことが繋がる実感が得られない（5）
	集中できない	環境の影響により集中して取り組めない	対面のときより，ぼーっとしてたりとか（11）
学業意欲減退に対する感情	無気力に対する部分的否定	無気力に対して比較的否定的に受け止めている	ずっとこの状態が続くのは良くないっていうか（8）
	自分に対する振り返り	無気力である自分に対する評価	余裕がなかったのかなって思います（6）
	割り切る	無気力である状態をそういうものであるとして比較的肯定的に割り切る	これから頑張ればいいや，単位取り返せばいいやぐらいに思ってたんで（12）
学業意欲減退の回復	環境へ適応していく	環境の変化や現在の環境に慣れたことで学業への意識が上向く	学べる最後の機会だから学んでおこうみたいな（3）
	やる気のある周りにつられる	意欲のある周りの人間に影響を受けて意欲が向上する	先輩がかっこいいプレゼンテーションされてて，あー自分は何やってたんだろうなーっていう（6）
学業意欲の維持	目的を持って行動している	自分のやることが明確であるためやる気が維持されている	1位を取り続けるっていう目標を掲げていて（3）
	やる気の出る環境にいる	自分のやる気を損なわないような環境に身を置く	ライバルとかいると，僕自身も負けないようにとか（6）

関連カテゴリーの概観

続いて，関連カテゴリーに含まれる概念と，学業意欲減退カテゴリーにどう関連しているのかを説明していく。

＜大学生活における対人関係のあり方＞カテゴリー

友人関係について『友人関係が縮小している』，親子関係について『親からの放任的な態度』，『自分から親に話す』，教師との関係について『教師とあまり関わらない』，『特定の教師と会話をする』の 5 つの概念が見出された。

コロナ禍により，大学生活における友人関係は「*けっこう疎遠に*」（C）なったと感じている学生が何名か見られた。「*高校のときとかは友だちとなんか，授業終わって，まあ 1，2 分ぐらいその授業の話して*」（A）授業の振り返りをしていたが，オンライン授業で直接友人と関わり授業について話をする機会が減った。＜学業意欲減退のきっかけ＞の『環境の変化』に繋がると考えられる。

親子関係について，10 名以上の学生が親からは放任的な態度を取られており，大学生活に対して「*何も言われなかった*」（N）と話していた。「*単位を取って，しっかり卒業してくれればそれでいいっていうスタンス*」（R）であり，それが楽に単位が取れる授業を選択するなど，＜学業意欲減退のきっかけ＞の『やる気のない周りにつられる』ことを後押ししたのだと考えられる。それに対し，少数ながら自分から親に大学生活について話したり相談に乗ってもらったりする学生もいた。学業だけでなく就職活動などもどんな状態か話し，「*コミュニケーションはすごく取れているのかな*」（B）という感覚を覚えており，それが＜学業意欲の維持＞における『やる気の出る環境にいる』ことに影響していると推測される。

教師との関係について，とくに 1，2 年生のころは履修している学生が多いことや教師に話しかけづらかったことから，「*あまり，関わらなかった*」（G）ことが多かったと答えていた。授業に関して質問をすることもなく，学業への意義が見出せず＜学業意欲減退の状態＞の『学業への興味の無さ』に繋がっていったと考えられる。しかし，3，4 年生になりゼミに所属することで，「*ゼミの先生，（中略）夏休み期間でもまあいろんなことでメールをくれ──いただいたり，（中略）相談に乗っていただくってことが結構あります*」（I）と特定の教師と積極的にコミュニケーションが取れるようになったとも回答していた。こうした環境の変化が，自身の学業意欲を上向かせるきっかけ（＜学業意欲減退の回復＞『環境へ適応していく』）になったと考えられる。

＜学業以外の活動＞カテゴリー

学業以外の場面で意欲が減退することはあったか尋ねたところ，『部活やサークル，バイトに打ち込む』，『部活やサークル，バイトへの意欲減退』の 2 つの概念が見出された。

L 曰く，バイトやサークル活動に積極的で，「*その 2 つで手一杯だったんだと思います*」（『部活やサークル，バイトに打ち込む』）とのことだった。学業以外の活動にのめり込むことで，学業に対して積極性が薄れたことが考えられる。一方でバイトやサークル活動などに対しても「*ちょっとつまんないなーって思ったことがあって*」（N）意欲の意欲を見せていた学生もいた（『部活やサークル，バイトへの意欲減退』）。学業に限らず，日常生活全般に意欲が減退していたと思われる。

＜自分らしさ＞カテゴリー

やる気があるときとないとき，どちらが自分らしいかという質問への回答に基づき，『やる気があるときが自分らしい』，『どちらの状態も自分らしい』，『周りとの付き合いやすさ』，『人への気遣い』の 4 つの概念が見出された。

「*やる気あるとき，積極的なときの方が，なんか，勉強しててもあんま苦にならないですし…いい状態だなって思います*」（G）と，半数以上の学生が意欲のある状態の方が自分らしいと答えていた（『やる気があるときが自分らしい』）。対人関係の面から見ても，「*いい感じの雰囲気で，周りに接することができてる*」（G）と意欲のある状態の方が良好な関係をつくりやすいという発言が見られた（『周りとの付き合いやすさ』）。言い換えれば意欲が減退している状態は自分らしくなく，それが学業意欲の減退に対する否定的な態度（『無気力に対する部分的否定』）に繋がったと推測できる。しかし，中には「*どっちもなんか，自分って感じしますね*」（J）と意欲のある状態，減退している状態どちらも自分であると回答する学生もいた（『どちらの状態も自分らしい』）。A は，意欲が「*あるときはあるときとで，突っ走っちゃうので*」，意欲が「*あるときとないときに左右するぐらいがちょうどいいんじゃないか*」と発言していた。対人関係の面からも，O は「*元気ないときの方が人に気を遣えると思ってて。なんか，めちゃくちゃこう，エネルギーが溢れているときって，こう，自分が自分がってなってしまうことが多いなって*」（『人への気遣い』）と回答していた。つまり意欲のある状態が必ずしも良いことであるとは限らないと認識しており，それが＜学業意欲減退に対する感情＞の『割り切る』態度に繋がったと考えることができる。

Table 6-3．関連カテゴリー並びに概念一覧

関連カテゴリー	概念	定義	具体例（人数）
大学生活における対人関係のあり方	友人関係が縮小している	環境の変化によって友人関係が縮小していると感じている	けっこう疎遠になっちゃいましたね（6）
	親からの放任的な態度	親はそれほど大学生活に関して口出しして来ない	だいぶ放任ですね（11）
	自分から親に話す	大学生活について自分から親に話したり相談に乗ってもらったりする	コミュニケーションはすごく取れているのかなって（5）
	教師とあまり関わらない	大学の教師とは関係性が薄いという認識	あまり，関わらなかったです（8）
	特定の教師と会話をする	ゼミの教授や興味のある授業の教師とは積極的にコミュニケーションをとる	相談に乗っていただくってことが結構あります（9）
学業以外の活動	部活やサークル，バイトに打ち込む	学業以外には積極的に活動していたという認識	アルバイトとか，サークル活動とかもしっかり行ってて（4）
	部活やサークル，バイトへの意欲減退	学業以外でも意欲の減退を覚える場面があったという認識	アルバイトとか，ちょっとつまんないなーって（10）
自分らしさ	やる気があるときが自分らしい	やる気がある状態の方が自分らしいという気持ち	いい状態だなって（16）
	どちらの状態も自分らしい	やる気のある状態もない状態もどちらも自分らしいという気持ち	どっちもなんか，自分って感じしますね（6）
	周りとの付き合いやすさ	やる気があるときの方が人と良い関係づくりができるという認識	いい感じの雰囲気で，周りに接することができてるのかなって（7）
	人への気遣い	やる気がないときの方が人に気を遣えるという認識	元気ないときの方が人に気を遣えると思ってて（3）

結果図とストーリーライン

分析結果を図式化したものを Figure 6-1 に示した。まず，第 1 段階は，＜学業意欲減退のきっかけ＞である。この背景には，＜学業以外の活動＞の『部活やサークル，バイトに打ち込む』状態や『友人関係の縮小』『親からの放任的な態度』（＜大学生活における対人関係のあり方＞）があり，学業に打ち込む時間がなくそれを咎める人がいない，むしろやる気のない周りにつられたり周囲の環境が変化したりすることで，学業に対して意欲が減退していく契機となっている。

第 2 段階では＜学業意欲減退の状態＞が出現する。第 1 段階にてやる気のない周囲に同調して，興味・関心があるかどうかより楽に単位が取れる授業を優先的に履修していた。『教師とあまり関わらない』（＜大学生活における対人関係のあり方＞）ことも影響して，『学業への興味のなさ』が起きる。加えて，学んでいる内容が『将来に繋がらない』と感じている。こうした自分の今やっていることが将来に生かせるのかという疑問は，学業以外の場面でも生じており，『部活やサークル，バイトへの意欲減退』（＜学業以外の活動＞）が起きている学生もいる。また，授業の形式が対面からオンライン形式になったことで，うまく授業に『集中できない』ために学業への意欲が減退している例も見られた。

＜学業意欲減退に対する感情＞を尋ねたところ，自分の状態に焦りや不安など否定的な感情を持つ（『無気力に対する部分的否定』）一方で，自分の状態に対して冷静に評価し（『自分に対する振り返り』），仕方ないと『割り切る』態度も見られた。こうした感情の持ち方は，意欲が減退している状態を自分らしいと感じているかどうかで異なると考えられる。やる気のあるときと，ないときのどちらが自分らしいか（＜自分らしさ＞）尋ねたところ，『やる気のあるときが自分らしい』，周囲とも付き合いやすい（『周りとの付き合いやすさ』）と回答していた学生は，無気力に対して否定的な感情を持つ傾向にあった。それに対して，やる気のあるときとないときの『どちらの状態も自分らしい』，やる気のないときの方が『人への気遣い』ができると回答していた学生は，無気力に対して『割り切る』態度が見られていた。

第 3 段階は＜学業意欲減退の回復＞である。＜学業意欲減退のきっかけ＞において，『環境の変化』が起こり，『集中できない』という＜学業意欲減退の状態＞に陥っていた。しかし，学年が上がりゼミに所属することで『特定の教師と会話する』（＜大学生活における対人関係のあり方＞）ようになり，自分が興味・関心のある学業の『環境へ適応していく』ことで，意欲の減退からの回復が見られた。さらに，そうした環境の変化に伴い，周囲にやる気のある人が増えた。＜学業意欲減退のきっかけ＞とは対照的に，『やる気のある周りにつられる』ことで今の無気力の状態を良くないと思い，積極的に学業に打ち込むようになっていた。

そして，最終段階として，回復した＜学業意欲の維持＞が出現する。学業に打ち込む意義を見出すために，『目的を持って行動している』。それだけでなく，『やる気のない周りにつられる』（＜学業意欲減退のきっかけ＞）ことがないよう，学業の相談事を『自分から親に話す』（＜大学生活における対人関係のあり方＞）などして，『やる気の出る環境にいる』ようにしている。自身の学業への意欲の減退を引き起こさないよう，周囲の環境に気を配っていることが読み取れる。

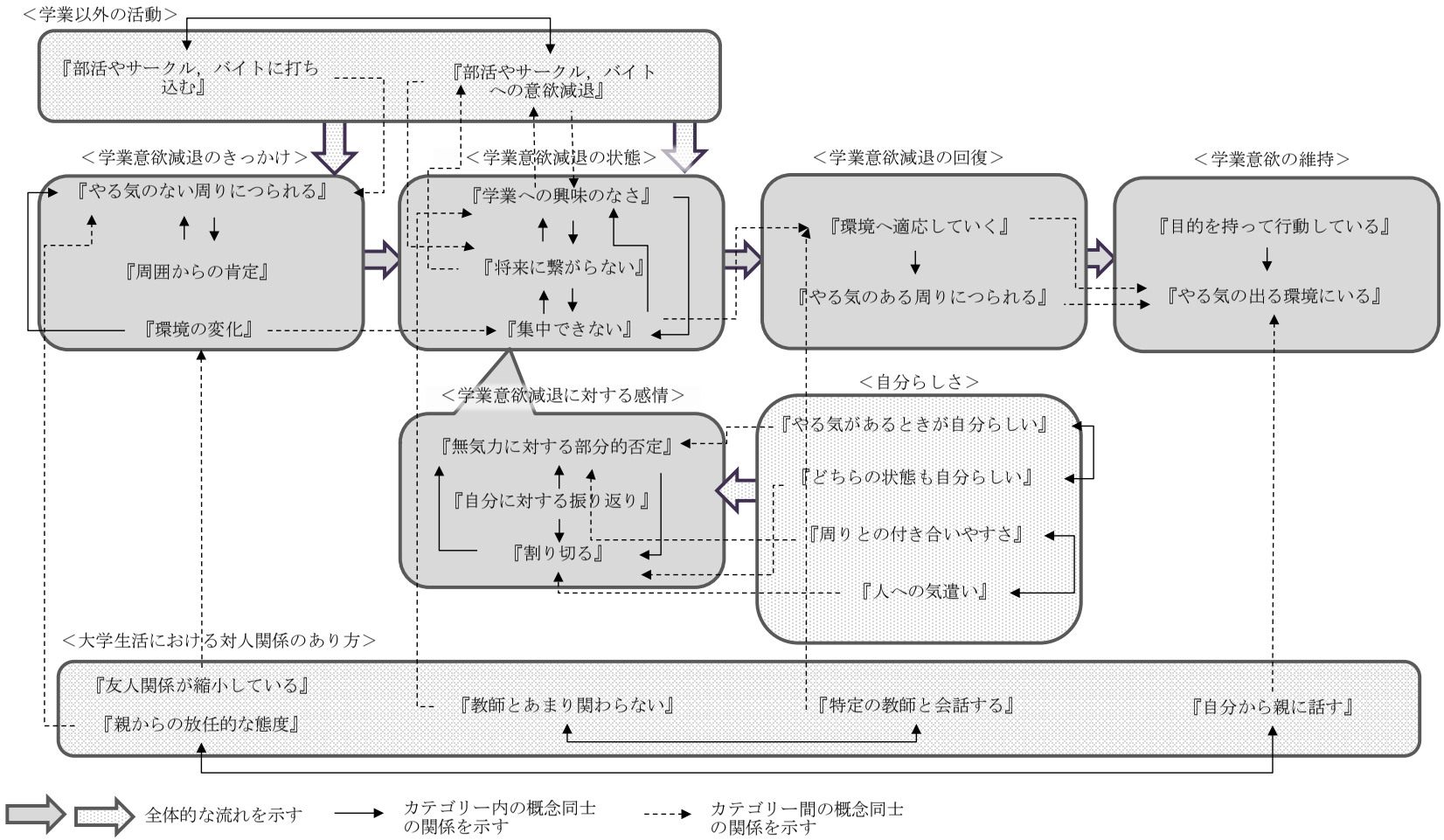


Figure 6-1．学業意欲減退に関する結果図

考察

本節では，スチューデント・アパシー的な無気力になったことがある学生に面接調査を行い，無気力に至る過程と様態を明らかにしていくことを目的とした。また，自分が無気力であることを大学生はどう捉えているかも併せて検討を行った。

まず，大学生がスチューデント・アパシー的な無気力に至るきっかけには，大きく分けて次の 2 点が関係していた。1 点目は学業への意欲がない周囲の存在である。周囲につられ，自分が興味・関心のある授業よりも楽に単位が取れる授業を履修し，周りがそれに同調してさらに楽な方向へ進む傾向にあった。大学生の実態調査でも同様に，単位を取りやすい授業を選択している学生が多かった（ベネッセ教育総合研究所，2021）。こうした背景には，部活やサークル，アルバイトなど，学業以外の場面に積極的に参加していることや，親から放任されていることが挙げられていた。学業へ割く時間が十分になく，また，学生の本業である学業を軽んじるような行動を咎める人がいない状態にあったと言える。学業に対して意欲が減退している一方で，部活やアルバイトなどに積極的であるのは，臨床研究におけるスチューデント・アパシーの特徴（Walters，1961 笠原・岡本訳 1975；笠原，1977）と合致している。ただし，無気力のきっかけや背景として放任的な親の存在や周囲の同調があることは，臨床研究での見解とは異なっている。スチューデント・アパシーに至る学生は，親が子どもの自立の壁となっている（Walters，1961 笠原・岡本訳 1975；山田，1992）ことや，病前性格として几帳面で完全主義であること（笠原，1984）が述べられていた。親を乗り越えられず，自分より優れている友人に劣等感を覚えて無気力に至ることも示唆されている（笠原，1984）。だが，現在は誰にでも起こり得るものとして無気力になる学生の範囲が拡大した。一般的に青年期は親よりも友人関係に重きが置かれるようになる（平石，2011）。その結果，意欲のない周囲の友人につられてしまい，無気力に至ったことが考えられる。

2 点目はコロナ禍による学習環境の変化である。大学の授業がオンライン形式に切り替わった他，友人関係の縮小も見られた。大学生が図書館に赴いて興味・関心のある事柄を調べたり，授業後に友人と授業の内容について話し合ったりする機会が減り，自分から学習を深めようとする機会が減った状態にあったと言えよう。オンライン授業は自分の好きなように時間が使えるが，授業が一方的で議論がしにくいことが挙げられていた（ベネッセ教育総合研究所，2021）。前述した点も踏まえると，大学生は自分から積極的に学ぼうとする環境が整っていない状態に置かれていたことが推測される。

次に，スチューデント・アパシー的な無気力の様態として，学業に対して意義が見出せない状態であった。コロナ禍により家で授業を一人で受けるが集中できず，周りにつられて興味・関心のない授業を取っていたため，今学んでいる内容が将来につながるのか疑問が生じた。結果，学ぶ意義が見出せずますます学業への意欲が減退している状態に陥っていた。同様に，部活やサークル，アルバイトなど学業以外の活動に対しても，将来に生かせないと感じて意欲が減退している例もあった。臨床研究において，周囲に劣等感を覚えることで，時間の経過とともに対人関係など学業以外の場面で意欲の減退が起こるとされていた（笠原，

1977，1984；土川，1981；山田，1992）。だが，現在は自分の意思とは関係なく，コロナ禍により他者との交流が取りにくい状況である。大学生が一人で過ごす時間が増えたため，周囲との比較よりも，将来に繋がるかといった自分にとってメリットがあるか否かに比重が置かれるようになったのではないだろうか。

こうしたスチューデント・アパシー的な無気力の改善にも，周囲の環境が影響していることが推察された。留学や学年が上がったことで自分の周囲の環境が一変しただけでなく，現在のオンライン形式の授業に慣れてきたことも挙げられている。環境が変化し意欲のある周囲に刺激を受けたことや，友人と電話や SNS を利用して学習した内容について理解を深めることで，学業に対する意義を見出し，学業意欲が回復することに繋がったのであろう。さらに，回復した学業意欲を維持する方法として，目的を持つことや意欲の出やすい環境に身を置くことが挙げられていた。具体的には，授業で良い成績を取ることを自分に課していたり，周囲と競争関係になって相手に負けないよう奮起したりすることである。優劣がつくのを恐れ，競争場面を避けようとするスチューデント・アパシーの学生（Walters，1961 笠原・岡本訳 1975）とは真逆の行動を取っていると言える。先述したように，現在はコロナ禍で他者と直接交流が取りにくく，授業は自分一人で受講する形式である。競争場面は他者と優劣をつけるものというより，自分にとって良い刺激を与えてくれるものとして肯定的に受容されていることが推測される。抑うつ的な無気力の改善には，家族や友人からの支援が重視されていたが（福岡，2000；下坂，2001；本間・松田，2012 など），スチューデント・アパシー的な無気力の改善には，大学生本人に働きかけるだけでなく，学業への関心が高まるような環境を整えることも有効な手段であると考えることができる。

最後に，スチューデント・アパシー的な無気力を大学生がどのように捉えていたのか論じていく。大学生の中で，意欲のない状態に対する評価が異なっていることが明らかになった。意欲のない状態を否定的に捉える学生は，意欲のある方が自分らしく，周囲とも積極的にコミュニケーションが取れると考えており，学業に対して意欲が減退していたことに焦りや不安を感じたり，今振り返って後悔したりしていた。一方で，意欲のある状態とない状態どちらも通常の状態であると捉えていた学生は，どちらの状態も自分らしく，むしろ意欲のないときの方が周囲に気遣うことができる場合もあり，学業への意欲の減退も仕方ないと割り切る態度を取っていた。意欲のある状態を否定的に捉えるか，平常な状態として受容するかによって，学業への意欲減退に対する感情も異なっていたと言える。これまで無気力研究では，大学生の無気力は怠学傾向に繋がるため（齋藤，2005；内田，2009），改善すべき状態とされていた。しかし，学生の中には無気力に対してそれほど否定的に捉えていない者もいるため，大学生の無気力を全般的に不適切な状態として検討を行うのは，かえって正確な理解を阻害する可能性がある。大学生の無気力の捉え方の多面性を理解していくことが求められる。

第 2 節　本章のまとめ

抑うつ的な無気力と混在して研究が行われ，不透明な状態であったスチューデント・アパシー的な無気力について，無気力に至る過程とそれに対する感情を面接調査にて検討した。M-GTA により概念とカテゴリーの生成を行ったところ，スチューデント・アパシー的な無気力に至る契機にも回復にも，周囲の環境が影響していることが見出された。意欲のない周囲につられて楽な方に進み，学業への意義が見出せずに意欲が減退する一方で，意欲のある周囲に刺激されることで自身も奮起して学業へ取り組むようになっていた。コロナ禍により周囲と交流が取りづらい状態であったのも，時間の経過により今の状態に慣れ，状況に適した形で学びを深めようとしていた。スチューデント・アパシー的な無気力の改善には，周囲の環境を整えることも重要であることが示唆された。また，無気力に対する感情は大学生によって異なっており，意欲が減退したことを必ずしも否定的に捉えているわけではないことが明らかになった。

次章では，スチューデント・アパシー的な無気力に付随する意欲の減退と，無気力に対する感情が対人関係とどう関連しているか検討を行う。

目的 1，2）過去と現在の対人関係と大学生の無気力，無気力に対する感情との関連

第 7 章
スチューデント・アパシー的な無気力に付随して起こる意欲の減退

第 1 節　過去と現在の対人関係との関連（調査 6）

目的

本調査では，過去・現在の対人関係が，スチューデント・アパシー的な無気力に付随して起こる様々な場面への意欲減退と，それに対する感情にどう関連しているかを探索的に検討することを目的とした。

方法

調査時期と対象者

2021 年 7 月～9 月，2022 年 5 月に実施し，複数の四年制の私立大学に通う男女が回答した。Google フォームにて重複していた回答や留学生の回答を除いたところ，調査に参加した学生は 274 名（男性 76 名・女性 196 名・その他 2 名，1 年生 110 名・2 年生 97 名・3 年生 40 名・4 年生以上 27 名，平均年齢 19.30 歳・標準偏差 1.26）であった。内訳として，A 大学 195 名（男性 46 名・女性 148 名・その他 1 名），B 大学 28 名（男性 12 名・女性 15 名・その他 1 名），C 大学 13 名（男性 4 名・女性 9 名），その他 10 名未満の複数の大学の学生が合計 38 名（男性 14 名・女性 24 名）であった。調査を行った 2022 年の時点で，C 大学とその他に該当する大学のうち 2 校は学生の総数が 1 万人を超える大規模な大学であり，それ以外の大学は学生数が 5000 人未満の中規模な大学であった。

調査内容

学生の負担を考慮し，いくつか変数の質問項目を減らした。

1）フェイスシート

性別，年齢，所属する大学と学部，学年，留学生かどうかについて尋ねた。

2）無気力感尺度

下坂（2001）の作成した無気力感尺度を用いて学生の無気力を測定した。無気力感尺度は「自己不明瞭」「他者不信・不満足」「疲労感」の 3 因子から構成されるが，「疲労感」はその日の気分状態に左右されるような短期的な無気力であることから，尺度から除外した。「自己不明瞭（自分の将来を真剣に考える気にはならない，など）」9 項目，「他者不信・不満足（周りの人たちとの付き合いは退屈だと感じる，など）」6 項目の全 15 項目を使用した。評定は「1. 全くあてはまらない」～「6. よくあてはまる」の 6 件法で無気力傾向が高いほど得点も高くなるよう設定した。

3）意欲低下領域尺度

下山（1995）の作成した意欲低下領域尺度のうち，学業に対する意欲の減退のみに焦点を当てるため,「学業意欲低下（勉強に関する本を読んでいてもすぐに飽きてしまう，など)」5 項目のみ使用した。評定は「1．全くあてはまらない」～「4．非常にあてはまる」の 4 件法であり，学業に対する意欲が低いほど得点が高くなるよう設定した。

4）心のゆとり感尺度

富田（2008）の心のゆとり感尺度を用いて，前述の無気力感尺度と意欲低下領域尺度で回答した自身の無気力傾向に対する感情を尋ねた。教示として,「前ページの問 1，問 2 のご自身の回答を思い返してください（戻るボタンを押して前のページを見返しても構いません)。問 1，2 で答えたような自分の普段の生活態度や行動に対して，あなたはどのように感じていますか」という文を載せた。本来の項目数は 35 項目であるが, 学生の負担を考慮し，富田（2008）の因子分析で負荷量の高い順から 17 項目を抽出した。したがって,「心の充足・開放性（充実感を感じる，など)」8 項目,「切迫・疲労感（焦りを感じる，など)」6 項目,「対他的ゆとり（他人のことも思いやれる余裕があると感じる，など)」3 項目の 3 因子 17 項目を使用した。評定は「1．全くあてはまらない」～「6．とてもあてはまる」の 6 件法であり, 心のゆとりがあるほど心の充足･開放性と対他的ゆとりの得点が高くなり, 切迫･疲労感の得点が低くなるよう設定した。

5）ふれ合い恐怖尺度

岡田（2002）の作成した尺度を過去形に変更し，過去（高校）の友人に対するふれ合い恐怖を尋ねた。「対人退却（友だちと一緒に食事をするのは好きでない，など)」10 項目,「関係調整不全（他人とちょうどよい距離をとるのが難しい，など)」7 項目の 2 因子 17 項目で構成された。評定は「1．全くあてはまらない」～「6．とてもあてはまる」の 6 件法で，友人に対するふれ合い恐怖が強いほど得点が高くなるよう設定した。教示にも,「以下の項目で示される内容は，高校生のときのあなたに」という表現を加えた。併せて，どのような友人関係を想定したのか,「同じ高校の人やクラスメイト」「同じ部活やクラブの人」「親友，友人」「その他（自由回答)」から選んでもらった（複数回答可)。

6）STT 尺度

中井・庄司（2006，2008）が作成した尺度を過去形に変更し，過去（高校）の教師に対する信頼感を尋ねた。本来は「安心感」,「不信」,「役割遂行評価」の 3 因子からなる尺度だが, 本研究の調査の趣旨に合わせ,「役割遂行評価」に該当する項目は削除した。また，学生の負担を考慮し，中井・庄司（2008）の因子分析から，因子負荷量の高い順から 11 項目を抽出した。「安心感（私は先生と話すと気持ちが楽になることがある，など)」6 項目,「不信（先生は自分の考えを押し付けてくると思う)」5 項目の全 11 項目を使用した。評定は「1．全くそう思わなかった」～「4．非常にそう思った」の 4 件法であり，教師への安心感または不信があるほど得点が高くなるよう設定した。また，どのような教師を想定したのか,「担任の先生」「部活やクラブの顧問の先生」「養護教諭」「その他（自由回答)」から選んでもら

った（複数回答可）。

7）SESS

久田他（1989）が作成した SESS で，大学生が現在，周囲にどれだけソーシャル・サポートを期待しているのか調べた。その際に，調査の目的から外れないよう，「回答の際は，養育者，友人，教師いずれかを思い浮かべて回答してください」という教示文を添えた。「あなたが落ち込んでいると，元気づけてくれる」などの全 16 項目 4 件法（「1．絶対ちがう」～「4．きっとそうだ」の 4 段階）で，ソーシャル・サポートを期待すればするほど得点が高くなるように設定した。加えて，この質問に対して養育者，友人，教師のうち誰を想定したのか尋ねた。さらに，想定した人との関係を回答してもらった。例えば，養育者の場合，項目は，「母」「父」「祖母」「祖父」「きょうだい」「親戚（叔父や叔母など）」「その他（自由回答）」であった。友人の場合，「同じ大学や専攻の人」「同じ部活やサークルの人」「親友，友人」「その他（自由回答）」であった。教師の場合は，「履修している授業の先生」「部活やサークルの顧問の先生」「クラスやゼミの先生」であった（いずれも複数回答可）。

8）一般感情尺度

小川他（2000）が作成した一般感情尺度で現在の気分状態を尋ねた。本来は「肯定的感情」「否定的感情」「安静状態」の 3 因子からなる尺度だが，学生の負担を考慮して「肯定的感情（楽しい，など）」8 項目のみ使用した。評定は「1．まったく感じていない」～「4．非常に感じている」の 4 件法で，肯定的感情が高いほど得点が高くなるように設定した。

実施手続きと倫理的配慮

Google フォームを用いて調査を実施した。A 大学ではオンライン授業内にて調査を行い，B，C 大学では所属している教師や院生に Google フォームの URL 配布を依頼した。その他の大学では，第 6 章の面接調査に参加した学生に，自身の所属する大学や知り合いへ URL を拡散してもらうよう依頼した。

A 大学は筆者が直接，それ以外の大学では依頼相手に調査の趣旨と次のことを説明するよう申し伝えた。それは，調査への参加は強制ではないこと，調査への協力を拒否しても対象者には不利益は生じないこと，測定されたデータは匿名化されて使用されるため個人情報は保護されることである。これらを調査の事前に伝え，調査への参加ならびにデータ使用の同意を事前に確認した。Google フォーム内にも，同様の説明を冒頭に記述し，回答が難しいあるいは回答したくない場合には回答を途中で止めても構わないという旨を明確にした。

結果

各尺度の内的整合性の確認

分析は HAD ver.15.0（清水，2016）を用いた。学生の負担を軽減させるために項目数を減らしていた尺度に対して，それぞれ確認的因子分析を行った。

まず，無気力感尺度について，適合度は *CFI*＝.822，*RMSEA*＝.114，*AIC*＝469.459 であった。内容が類似した質問項目に誤差共分散を設定したところ，*CFI*＝.913，*RMSEA*＝.085，*AIC*＝430.994 まで適合度が上昇した。誤差共分散を設定したのは，普段意欲的な行動ができていないことを示す項目（1，11），将来への意欲のなさを表す項目（3，4，7，11），自分のなさに関する項目（4，9，14），将来に対する見通しのなさを示す項目（7，9，12），周囲への興味のなさに関する項目（2，8）であった。自己不明瞭と他者不信・不満足どちらも α 係数の値が十分な信頼性を示しており（Table 7-1-1），無気力感尺度は全 15 項目を以降の分析に使用した。

Table 7-1-1. 無気力感尺度の確認的因子分析結果

項目	F1	F2	*M*	*SD*
F1＝自己不明瞭（9項目，α＝.88）				
1 日ごろ目的のない生活をしていて自分がだらけていると感じる	**.53**		3.96	1.46
3 私は何事にも前向きに取り組む意欲があると思う*	**.59**		3.18	1.32
4 私は自分らしさを持っていると思う*	**.57**		2.70	1.32
5 私の未来には希望が持てないと感じる	**.79**		3.23	1.53
7 自分の将来を真剣に考える気にはならない	**.57**		2.34	1.39
9 自分の将来を考えるとうんざりする	**.80**		3.31	1.63
11 私は自分から進んで物事を行う熱意がないと感じる	**.69**		3.21	1.47
12 私は将来の目標を持って生きている*	**.62**		2.95	1.53
14 私は自分がつまらない人間のように感じる	**.72**		3.38	1.65
F2＝他者不信・不満足（6項目，α＝.79）				
2 私の周りの人たちは面白みに欠けると思う		**.49**	2.26	1.33
6 周りの人に助けを求めれば応えてくれると思う*		**.66**	2.26	1.21
8 周囲の人たちとの付き合いは退屈だと感じる		**.60**	2.33	1.38
10 自分がひとりぼっちだという寂しさがある		**.68**	2.95	1.62
13 私には本当に困ったときに助けてくれる人がいない		**.69**	1.84	1.17
15 私を本当に理解してくれる人は少ないと思う		**.62**	3.65	1.66
因子間相関	F1	F2		
F1	―	.73		
F2		―		

*Note.**は逆転項目

次に，意欲低下領域尺度について，適合度は *CFI*＝.882，*RMSEA*＝.130，*AIC*＝48.328 であった。内容が類似した質問項目に誤差共分散を設定したところ，*CFI*＝.996，*RMSEA*＝.027，*AIC*＝26.831 まで適合度が上昇した。誤差共分散を設定した項目は自分から意欲的に学習しようとする姿勢（1，4）を表すものであった。α 係数の値がやや低いが（Table 7-1-2），項目数が少ないこと，逆転項目が多いことを考慮し，意欲低下領域尺度は全 5 項目を以降の分析に使用した。

Table 7-1-2. 意欲低下領域尺度の確認的因子分析結果

項目	F1	*M*	*SD*
F1＝学業意欲低下（5項目，α＝.67）			
1 教師に言われなくても自分から進んで勉強する*	**.75**	2.91	1.10
2 勉強に関する本を読んでいてもすぐに飽きてしまう	**.46**	3.40	1.18
3 勉強で疑問に思ったことはすぐ調べる*	**.50**	2.28	1.02
4 必要な単位以外でも，関心のある授業はとるようにしている*	**.55**	2.69	1.29
5 大学で勉強することで自分の関心を深めている*	**.59**	2.25	1.01
因子間相関	F1		
F1	－		

*Note.**は逆転項目

続いて，心のゆとり感尺度の場合，適合度は *CFI*＝.905，*RMSEA*＝.096，*AIC*＝484.269 であった。やや RMSEA が高いものの，心の充足・開放性，切迫・疲労感，対他的ゆとりのいずれも α 係数の値が十分な信頼性を示しているため（Table 7-1-3），3 因子 17 項目そのまま分析に使用した。

さらに，ふれ合い恐怖尺度の適合度は *CFI*＝.825，*RMSEA*＝.128，*AIC*＝717.989 であった。内容が類似した質問項目に誤差共分散を設定したところ，*CFI*＝.915，*RMSEA*＝.096，*AIC*＝462.003 まで適合度が上昇した。誤差共分散を設定した項目は，食事を一人でとるなど集団での行動を避けるもの（2，4，7，9，14，17），集団へのいづらさを感じるもの（5，13，14），一人で過ごす気楽さを表すもの（6，13，16），人との関わりを避けようとするもの（16，17），人との適切な距離の取りにくさを表すもの（3，10，11），周囲への気まずさ（8，15）であった。対人退却，関係調整不全どちらも α 係数の値が十分な信頼性を示しているため（Table 7-1-4），2 因子 17 項目を分析に使用した。STT 尺度についても，*CFI*＝.951，*RMSEA*＝.081，*AIC*＝165.589 で，十分な適合度を示しており，安心感，不信どちらも α 係数の値が十分な信頼性を示しているため（Table 7-1-5），2 因子 11 項目を使用した。

Table 7-1-3．心のゆとり感尺度の確認的因子分析結果

項目	F1	F2	F3	*M*	*SD*
F1＝心の充足・開放性（8項目，α＝.93）					
7 前向きにものごとを考えられていると感じる	**.72**			3.82	1.48
8 自分の好きなことかできていると感じる	**.74**			4.25	1.34
9 自分の生活に満足していると感じる	**.84**			3.92	1.43
10 充実感を感じる	**.91**			3.90	1.44
11 毎日か楽しいと感じる	**.89**			3.97	1.42
12 生きかいかあると感じる	**.75**			4.14	1.48
13 自分はのびのびと生きていると感じる	**.74**			4.30	1.39
16 心身ともに満たされている感じがする	**.82**			3.64	1.39
F2＝切迫・疲労感（6項目，α＝.88）					
2 不安を感じる		**.73**		4.15	1.47
3 焦りを感じる		**.74**		4.19	1.42
4 時間を追われていると感じる		**.62**		4.36	1.41
14 息苦しい感じがする		**.81**		3.01	1.52
15 きつい，つかれたと感じる		**.70**		3.88	1.53
17 おしつぶされそうな感じがする		**.83**		2.97	1.61
F3＝対他的ゆとり（3項目，α＝.78）					
1 他人に寛容になれると感じる			**.49**	4.51	1.11
5 自分のことだけでなく人のことも考えられると感じる			**.74**	4.20	1.31
6 他人のことも思いやれる余裕かあると感じる			**.97**	4.00	1.31

因子間相関	F1	F2	F3
F1	－	－.62	.54
F2		－	－.39
F3			－

Table 7-1-4．ふれ合い恐怖尺度の確認的因子分析結果

項目	F1	F2	*M*	*SD*
F1＝対人退却（10項目，α＝.93）				
2 できれば食事は一人でとりたかった	**.80**		1.99	1.53
4 昼食は友だちと一緒に食べるのが好きだった*	**.78**		1.97	1.45
5 友だち数人でいる場面は苦手だった	**.71**		2.46	1.61
6 友だちと一緒にいるよりも一人でいる方が気が楽だった	**.77**		2.75	1.58
7 人間と関わるよりも物と付き合っている方が楽だった	**.82**		2.46	1.56
9 友だちと一緒に食事をするのは好きでなかった	**.85**		1.82	1.33
13 一人で趣味に没頭していたかった	**.77**		2.93	1.58
14 大勢の友だちとワイワイ騒ぐのが好きだった*	**.55**		2.81	1.66
16 他人と親しくなるのはうっとうしかった	**.71**		1.91	1.31
17 できることなら人とあまり関わりたくなかった	**.76**		1.91	1.41
F2＝関係調整不全（7項目，α＝.84）				
1 友だちと2人きりでいる場面は苦手だった		**.56**	2.04	1.36
3 人と雑談するのは苦手だった		**.79**	2.17	1.52
8 人といる場面で，言葉がなくなってしーんとしてしまわないかと不安になった		**.62**	3.38	1.84
10 他人の本音で，自分が傷つけられそうな気がした		**.54**	3.23	1.65
11 他人とちょうどよい距離をとるのが難しかった		**.73**	3.14	1.72
12 人といても話題がなくて困ることが多かった		**.81**	2.90	1.65
15 他の人は自分を受け入れてくれなかった		**.60**	2.11	1.29
因子間相関	F1	F2		
F1	－	.81		
F2		－		

*は逆転項目

Table 7-1-5．STT尺度の確認的因子分析結果

項目	F1	F2	*M*	*SD*
F1＝安心感（6項目，α＝.92）				
1 私が不安なとき，先生に話を聞いてもらうと安心した	**.81**		2.47	1.05
4 将来のことがわからないときは先生に相談してみようという気になった	**.76**		2.58	1.05
5 先生と話していると困難なことに立ち向かう勇気がわいた	**.84**		2.37	1.02
6 先生にならいつでも相談ができると感じた	**.80**		2.29	1.04
7 私は先生と話すと気持ちが楽になることがあった	**.87**		2.47	1.07
9 私が悩んでいるとき，先生が私を支えてくれていると感じた	**.75**		2.49	1.02
F2＝不信（5項目，α＝.81）				
2 先生は自分の機嫌で態度が変わると思った		**.56**	2.15	1.04
3 先生は自分の考えを押し付けてくると思った		**.83**	2.11	1.03
8 先生は威張っているように感じた		**.77**	1.75	0.94
10 先生は一度言ったことを，ころころ変えると感じた		**.62**	1.74	0.91
11 先生の性洛には裏表があるように感じた		**.61**	2.02	1.00
因子間相関	F1	F2		
F1	－	－.35		
F2		－		

一般感情尺度の適合度は，*CFI*＝.948，*RMSEA*＝.131，*AIC*＝146.818 であった。内容が類似した質問項目に誤差共分散を設定したところ，*CFI*＝.982，*RMSEA*＝.087，*AIC*＝88.886 まで適合度が上昇した。誤差共分散を設定したのは，意欲のある状態を示した項目（1，8），充足感を表す項目（2，3），生活の楽しさを表す項目（4，5），生活の満足感を示す項目（5，8）であった。α係数の値も十分な信頼性を示しているため（Table 7-1-6），8 項目そのまま使用することとした。最後に，SESS では α＝.95 という十分な信頼性を示したため，以降の分析では SESS16 項目そのまま使用した。

Table 7-1-6.
一般感情尺度の確認的因子分析結果

項目	F1	*M*	*SD*
F1＝肯定的感情 （8項目，α＝.94）			
1 活気のある	**.82**	2.68	0.90
2 楽しい	**.79**	3.09	0.87
3 充実した	**.77**	2.92	0.91
4 陽気な	**.87**	2.72	1.00
5 愉快な	**.85**	2.80	0.96
6 元気な	**.89**	2.85	0.93
7 快調な	**.85**	2.78	0.91
8 やる気に満ちた	**.64**	2.57	0.91
因子間相関	F1		
F1	－		

各変数の記述統計と男女差の検討

各変数の平均値と標準偏差を算出し，Table 7-1-7 に示した。スチューデント・アパシー的な無気力は学業に対して意欲の減退が見られることから（鉄島，1993），意欲低下領域尺度の学業意欲低下の平均値で 2 群に分けた。学業意欲低下の得点が高い群をスチューデント・アパシー的な無気力群（以下，S・A 群），学業意欲低下の得点が低い群を統制群とした。

Welch 検定を行い 2 つの群間の差を検討した。その結果，一般感情尺度の肯定的感情，STT 尺度の安心感，SESS，心のゆとり感尺度の心の充足・開放性，対他的ゆとりでは統制群の方が S・A 群よりも得点が高かった。反対に，ふれ合い恐怖尺度の関係調整不全，無気力感尺度の自己不明瞭と他者不信・不満足，心のゆとり感尺度の切迫・疲労感では，S・A 群が統制群よりも高い得点を示していた。

Table 7-1-7. 全体並びに学業意欲の高低ごとの記述統計量

	全体（274名）		統制群（149名）		S・A群（125名）		Welch検定		
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	*t*値	*df*	Cohen's *d*
一般感情尺度									
肯定的感情	22.42	6.23	23.92	5.68	20.64	6.40	4.45**	250.49	0.54
ふれ合い恐怖尺度									
対人退却	23.00	11.74	22.44	11.54	23.68	11.97	−0.87	260.22	−0.11
関係調整不全	18.98	7.99	17.99	7.98	20.16	7.86	−2.26*	265.09	−0.27
STT尺度									
安心感	14.68	5.26	15.48	5.14	13.71	5.25	2.81**	261.87	0.34
不信	9.77	3.72	9.72	3.71	9.84	3.74	−0.27	263.21	−0.03
SESS	53.93	9.35	55.46	8.16	52.10	10.34	2.94**	233.94	0.36
意欲低下領域尺度									
学業意欲低下	13.53	3.68	10.83	2.02	16.75	2.41	−21.80**	242.59	−2.68
無気力感尺度									
自己不明瞭	28.27	9.62	25.17	8.70	31.96	9.38	−6.16**	255.91	−0.75
他者不信・不満足	15.30	5.92	14.53	6.10	16.21	5.59	−2.37*	269.86	−0.28
心のゆとり感尺度									
心の充足・開放性	31.95	9.40	34.06	8.69	29.43	9.63	4.14**	252.44	0.51
切迫・疲労感	22.57	7.09	21.68	6.99	23.62	7.10	−2.28*	262.20	−0.28
対他的ゆとり	12.71	3.12	13.46	2.85	11.82	3.20	4.44**	250.87	0.54

Note. *p<.05, **p<.01

各変数における相関分析

すべての尺度の各変数の相関を学業意欲低下の高低別に検討した。統制群の結果は Table 7-1-8 の右上に，S・A 群の結果は Table 7-1-8 の左下に示した。

統制群について，無気力感尺度との相関を見ると，一般感情尺度の肯定的感情が無気力感尺度の各下位因子と中程度の負の相関があった。ふれ合い恐怖尺度の対人退却と関係調整不全は，自己不明瞭と弱い正の相関，他者不信・不満足と中程度の正の相関があった。STT 尺度の安心感は，無気力感尺度の各下位因子と弱い負の相関が見られた。SESS は，無気力感尺度の各下位因子と中程度の負の相関が見られた。意欲低下領域尺度の学業意欲低下とは，肯定的感情，ふれ合い恐怖尺度，STT 尺度，SESS，いずれも相関が見られなかった。心のゆとり感尺度との相関を見ると，肯定的感情は心の充足・開放性と強い正の相関，対他的ゆとりと中程度の正の相関があり，切迫・疲労感と中程度の負の相関があった。対人退却は心の充足・開放性と対他的ゆとりと弱い負の相関があり，切迫・疲労感と中程度の正の相関があった。関係調整不全は，切迫・疲労感と中程度の正の相関，対他的ゆとりと弱い負の相関が見られた。STT 尺度の不信は切迫・疲労感と弱い正の相関があった。SESS は心の充足・開放性と中程度の正の相関，切迫・疲労感と中程度の負の相関があった。学業意欲低下は心の充足・開放性と弱い負の相関があり，切迫・疲労感，対他的ゆとりとは相関が見られなかった。自己不明瞭，他者不信・不満足は心の充足・開放性と中程度の負の相関，対他的ゆとりと弱い負の相関，切迫・疲労感と中程度の正の相関があった。

S・A 群について，無気力感尺度との相関を見ると，肯定的感情が無気力感尺度の各下位因子と高い負の相関が見られた。対人退却と関係調整不全は無気力感尺度の各下位因子と

中程度の正の相関があったが，STT 尺度は無気力感尺度の各下位因子と相関が見られなかった。SESS は無気力感尺度の各下位因子と中程度の負の相関があった。学業意欲低下は，SESS のみ弱い負の相関があった。心のゆとり感尺度との相関を見ると，肯定的感情は心の充足・開放性と強い正の相関，対他的ゆとりと中程度の正の相関があり，切迫・疲労感と中程度の負の相関があった。対人退却は心の充足・開放性，対他的ゆとりと中程度の弱い負の相関があり，切迫・疲労感と弱い正の相関があった。関係調整不全は，心の充足・開放性と弱い負の相関，対他的ゆとりと中程度の負の相関，切迫・疲労感と弱い正の相関が見られた。STT 尺度の各下位因子は心のゆとり感尺度のいずれとも相関が見られなかった。SESS は心の充足・開放性，対他的ゆとりと中程度の正の相関，切迫・疲労感と弱い負の相関があった。学業意欲低下は対他的ゆとりと弱い負の相関があり，心の充足・開放性，切迫・疲労感とは相関が見られなかった。自己不明瞭は心の充足・開放性と強い負の相関，対他的ゆとりと中程度の負の相関，切迫・疲労感と中程度の正の相関があった。他者不信・不満足は心の充足・開放性，対他的ゆとりと中程度の負の相関，切迫・疲労感と中程度の正の相関があった。

Table 7-1-8. 各下位因子の相関

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1 肯定的感情	—	−.38**	−.31**	.25**	−.09	.45**	−.01	−.59**	−.57**	.72**	−.51**	.44**
2 対人退却	−.51**	—	.71**	−.18*	.16	−.34**	−.15	.32**	.59**	−.27**	.45**	−.32**
3 関係調整不全	−.43**	.68**	—	−.24**	.21*	−.40**	−.07	.36**	.63**	−.18*	.52**	−.26**
4 安心感	.10	−.11	−.15	—	−.45**	.21**	−.04	−.20*	−.25**	.16*	−.12	.14
5 不信	.09	.03	−.02	−.08	—	−.24**	.01	.16	.19*	−.11	.32**	−.13
6 SESS	.60**	−.45**	−.32**	.04	−.04	—	−.04	−.42**	−.52**	.41**	−.45**	.16*
7 学業意欲低下	−.11	.09	.13	.00	−.18*	−.20*	—	.18*	−.06	−.20*	−.04	−.13
8 自己不明瞭	−.72**	.49**	.57**	−.15	−.17	−.53**	.30**	—	.57**	−.63**	.57**	−.38**
9 他者不信・不満足	−.67**	.56**	.47**	−.01	.12	−.61**	.13	.60**	—	−.57**	.63**	−.33**
10 心の充足・開放性	.82**	−.40**	−.37**	.14	.14	.54**	−.17	−.73**	−.63**	—	−.56**	.43**
11 切迫・疲労感	−.52**	.25**	.32**	-.07	.03	−.31**	.03	.47**	.49**	−.58**	—	−.21**
12 対他的ゆとり	.52**	−.44**	−.45**	.14	.06	.49**	−.29**	−.54**	−.46**	.50**	−.31**	—

Note. *p<.05, **p<.01, 右上:統制群, 左下:S・A群

無気力感尺度を従属変数とした階層的重回帰分析

学業意欲低下の高低ごとに 3 ステップからなる階層的重回帰分析を行い，現在の気分状態で統制した過去と現在の対人関係と大学生の無気力との関連を検討した。第 1 ステップでは一般感情尺度の各下位因子を加え，第 2 ステップでは過去の対人関係に該当するふれ合い恐怖尺度と STT 尺度の各下位因子を投入した。第 3 ステップでは，現在の対人関係に該当する SESS を投入した。以下に，無気力感尺度の下位因子である自己不明瞭，他者不信・不満足それぞれを従属変数としたときの結果を順に述べていく。

まず，自己不明瞭を従属変数としたときの結果を Table 7-1-9 に示した。統制群は，第 1 ステップにおける調整済み決定係数（AdjustR^2）が有意であったが，第 2，3 ステップで有意な増分は見られなかった。第 1 ステップの標準偏回帰係数（β）は，肯定的感情と負の関連が見られた。S・A 群では，第 1 ステップにおいて AdjustR^2 が有意であり，第 2，3 ステップにおいて有意な増分が見られた。最終ステップの第 3 ステップにおける β は，肯定的感情，不信, SESS が自己不明瞭と負の関連があり, 関係調整不全が自己不明瞭と正の関連を示した。

Table 7-1-9. 自己不明瞭に対する階層的重回帰分析

	学業意欲低下	統制群					S・A群				
モデル	独立変数	AdjustR^2	ΔR^2	β	［95%CI］		AdjustR^2	ΔR^2	β	［95%CI］	
1	現在の気分状態	.35 **					.51 **				
	肯定的感情			−.59 **	−.73	−.46			−.50 **	−.65	−.35
2	過去の対人関係	.37 **	.04				.60 **	.10 **			
	対人退却								−.06	−.22	.11
	関係調整不全								.33 **	.18	.49
	安心感								−.06	−.17	.06
	不信								−.13 *	−.24	−.02
3	現在の対人関係	.38 **	.01				.61 **	.01 *			
	SESS								−.15 *	−.29	−.01

Note. *p<.05，**p < .01，β値はΔR^2が有意であった最終モデルでの値

次に，他者不信・不満足を従属変数にしたときの結果を Table 7-1-10 に示した。統制群，S・A 群，いずれも第 1 ステップの AdjustR^2 が有意であり，第 2，3 ステップで R^2 の有意な増分があった。最終モデルの第 3 ステップの β から，統制群は肯定的感情と SESS が他者不信・不満足と負の関連があり，対人退却，関係調整不全と正の関連があった。S・A 群は肯定的感情と SESS が他者不信・不満足と負の関連があり，不信が他者不信・不満足と正の関連を示した。

Table 7-1-10．他者不信・不満足に対する階層的重回帰分析

	学業意欲低下	統制群					S・A群				
モデル	独立変数	AdjustR^2	ΔR^2	β	［95%CI］		AdjustR^2	ΔR^2	β	［95%CI］	
1	現在の気分状態	.32 **					.44 **				
	肯定的感情			−.32 **	−.45	−.19			−.40 **	−.56	−.24
2	過去の対人関係	.55 **	.24 **				.53 **	.11 **			
	対人退却			.16 *	.01	.32			.16	−.01	.33
	関係調整不全			.33 **	.18	.49			.12	−.04	.28
	安心感			−.02	−.14	.10			.09	−.03	.21
	不信			.01	−.11	.13			.15 *	.03	.27
3	現在の対人関係	.58 **	.02 **				.57 **	.04 **			
	SESS			−.18 **	−.31	−.06			−.26 **	−.41	−.11

Note. *p<.05，**p < .01，β値はΔR^2が有意であった最終モデルでの値

心のゆとり感尺度を従属変数とした階層的重回帰分析

先述と同じ尺度を用いた 3 ステップからなる階層的重回帰分析を行い，学業意欲低下の高低ごとに過去と現在の対人関係と無気力に対する感情との関連を検討した。以下に，心のゆとり感尺度の各下位因子である心の充足・開放性，切迫・疲労感，対他的ゆとりそれぞれを従属変数としたときの結果を順に述べていく。

まず，心の充足・開放性を従属変数としたときの結果を Table 7-1-11 に示した。統制群は，第 1 ステップにおいて AdjustR^2 が有意であり，第 3 ステップにおいて有意な増分が見られた。第 3 ステップにおける β は，肯定的感情と SESS が心の充足・開放性と正の関連を示した。S・A 群では，第 1 ステップにおける AdjustR^2 が有意であったが，第 2，3 ステップで有意な増分は見られなかった。第 1 ステップの β は，肯定的感情と正の関連が見られた。

Table 7-1-11．心の充足・開放性に対する階層的重回帰分析

	学業意欲低下	統制群					S・A群				
モデル	独立変数	AdjustR^2	ΔR^2	β	［95%CI］		AdjustR^2	ΔR^2	β	［95%CI］	
1	現在の気分状態	.51 **					.67 **				
	肯定的感情			.68 **	.55	.81			.82 **	.72	.92
2	過去の対人関係	.51 **	.01				.67 **	.01			
	対人退却			-.04	-.20	.12					
	関係調整不全			.11	-.06	.28					
	安心感			-.04	-.17	.09					
	不信			-.06	-.19	.07					
3	現在の対人関係	.52 **	.01 *				.68 **	.01			
	SESS			.14 *	.00	.27					

Note. *p<.05，**p < .01，β値はΔR^2が有意であった最終モデルでの値

次に，切迫・疲労感を従属変数としたときの結果を Table 7-1-12 に示した。統制群は，第 1 ステップにおいて AdjustR^2 が有意であり，第 2 ステップにおいて有意な増分が見られた。第 2 ステップにおける β は，肯定的感情が切迫・疲労感と負の関連があり，関係調整不全，安心感と不信は切迫・疲労感と正の関連を示した。S・A 群では，第 1 ステップにおける AdjustR^2 が有意であったが，第 2，3 ステップで有意な増分は見られなかった。第 1 ステップの β は，肯定的感情と負の関連が見られた。

Table 7-1-12．切迫・疲労感に対する階層的重回帰分析

	学業意欲低下	統制群					S・A群				
モデル	独立変数	AdjustR^2	ΔR^2	β	［95%CI］		AdjustR^2	ΔR^2	β	［95%CI］	
1	現在の気分状態	.25**					.26**				
	肯定的感情			−.41**	−.54	−.28			−.52**	−.67	−.36
2	過去の対人関係	.46**	.23**				.27**	.03			
	対人退却			.03	−.14	.20					
	関係調整不全			.36**	.19	.53					
	安心感			.21**	.07	.35					
	不信			.30**	.17	.44					
3	現在の対人関係	.47**	.01				.26**	.00			
	SESS										

Note. **p < .01，β値はΔR^2が有意であった最終モデルでの値

最後に，対他的ゆとりを従属変数としたときの結果を Table 7-1-13 に示した。統制群は，第 1 ステップにおける AdjustR^2 が有意であったが，第 2，3 ステップで有意な増分は見られなかった。第 1 ステップの β は，肯定的感情と正の関連が見られた。S・A 群では，第 1 ステップにおいて AdjustR^2 が有意であり，第 2，3 ステップにおいて有意な増分が見られた。最終モデルの第 3 ステップにおける β は，肯定的感情，SESS が対他的ゆとりと正の関連，関係調整不全が負の関連を示した。

Table 7-1-13．対他的ゆとりに対する階層的重回帰分析

	学業意欲低下	統制群					S・A群				
モデル	独立変数	AdjustR^2	ΔR^2	β	［95%CI］		AdjustR^2	ΔR^2	β	［95%CI］	
1	現在の気分状態	.19**					.27**				
	肯定的感情			.44**	.30	.59			.24*	.05	.43
2	過去の対人関係	.20**	.03				.32**	.07*			
	対人退却								−.05	−.26	.16
	関係調整不全								−.23*	−.43	−.03
	安心感								.07	−.08	.21
	不信								.05	−.10	.19
3	現在の対人関係	.21**	.01				.35**	.04**			
	SESS								.25**	.07	.44

Note．*p<.05，**p < .01，β値はΔR^2が有意であった最終モデルでの値

考察

本節では，大学生のスチューデント・アパシー的な無気力に付随した様々な場面での意欲の減退とそれに対する感情について，過去と現在の対人関係と関連が見られるのか検討を行った。スチューデント・アパシー的な無気力を学業意欲が減退している状態（鉄島，1993）として，意欲低下領域尺度における学業意欲低下の得点の高低で群分けを行い，学業意欲低下の得点が高い群（S・A 群）をスチューデント・アパシー的な無気力を示している群とした。群ごとに階層的重回帰分析を実施した結果，以下の 2 点が明らかになった。

1 点目は，S・A 群における無気力と過去・現在の対人関係に関連が見られたことである。まず，過去の対人関係は，自己不明瞭では友人に対する関係調整不全と正の関連，教師に対する不信と負の関連が見られた。自己不明瞭は長期的なスパンを含む自分自身や将来に対する意欲の減退で（下坂，2001），関係調整不全は友人関係の深めにくさを指すものである（岡田，2002）。どちらも現在の状況から一歩深化させていく際に起こる問題であるために，関連が見られたのであろう。不信は，「先生は自分の考えを押し付けてくると思う」（中井・庄司，2008）といった教師に対する不信感を表している。今後は教師を信頼しないという方向性に定まったため，自分の将来に対しての意欲の減退と負の関連があったと推測される。一方で，他者不信・不満足では，教師に対する不信と正の関連があった。他者不信・不満足は「私には本当に困ったときに助けてくれる人がいない」（下坂，2001）など他者に対する不信感を指すものである。教師は信頼に値しないと感覚を得たことを契機に，教師以外の他者に対してもより不信感を強めていったことが考えられる。統制群では自己不明瞭，他者不信・不満足いずれも過去の教師に対する信頼感とは関連が見られなかった。S・A 群はスチューデント・アパシー的な無気力に付随して生じた意欲の減退であると想定している。教師は勉学の場で関わりの深い存在であるため，S・A 群で関連があったのであろう。

次に現在の対人関係について，自己不明瞭，他者不信・不満足ともに他者からのソーシャル・サポートと負の関連が見られた。コロナ禍により人との直接のやり取りが難しく，先行きの見づらい状況の中において他者から支援を得られたことによって，将来への意欲の向上や他者に対する不信感の払拭に繋がったと言える。

2 点目は，S・A 群における無気力に対する感情と過去・現在の対人関係について，一部関連が見られたことである。過去・現在の対人関係どちらも，対他的ゆとりのみ関連があった。まず過去の対人関係について，友人に対する関係調整不全と対他的ゆとりに負の関連が見られた。対他的ゆとりは，周囲に合わせたり配慮したりする要素が含まれている（富田，2008）。元々周囲と適度な距離を持つことに苦手意識があったため，意欲が減退した際に，より他者に対するゆとりが失われていったと推測される。次に，現在の対人関係について，ソーシャル・サポートと正の関連が見られた。意欲の減退という問題に対して他者から支援を受け，周りを気遣う余裕ができたことが考えられよう。

他方，心の充足・開放性，切迫・疲労感は過去・現在の対人関係どちらとも関連が見られなかった。対他的ゆとりが他者に向けての感情であるのに対し，心の充足・開放性と切迫・

疲労感は自分自身に関する対自的なものである（富田，2008）。現在の気分状態とは関連が見られていることからも，他者との関わりよりも自分自身の状態に影響を受けやすい感情なのであろう。ただし，相関分析の結果から，S・A 群は学業意欲低下と心の充足・開放性，切迫・疲労感と相関が見られなかった。学業に対する意欲の減退が強まっても，それに対して焦りや不安が高まるわけではないが，自分の生活に満足を覚えることもないのであろう。これは，自分が無気力であることに焦りや不安といったネガティブな感情を覚えない一方で，快感情が希薄化しているというスチューデント・アパシーの学生の特徴（笠原，1984）と合致する。コロナ禍で人との交流が減り，自分の意欲が減退している状態を他者と比較する機会が減ったため，焦りや不安をそれほど感じないが，将来や対人関係から意欲が減退し，生活に意義を見出したり周りと喜びを分かち合ったりすることが難しくなったことで，心のゆとりが高まりにくい状態に繋がったと推測される。

第 2 節　コロナ禍における無気力と対人関係の変化（調査 2，3，6）

目的

コロナ前とコロナ禍における無気力と対人関係の得点を比較し，コロナ禍の影響を明らかにすることを目的とした。

方法

使用する調査データの選定

複数の大学に通う男女を対象とした横断調査であるという共通点から，3 章と 4 章で使用した 2016 年 7～8 月に実施した 2 回の調査をコロナ前のデータ, 7 章第 1 節で使用した 2021 年 7 月～9 月, 2022 年 5 月に実施した調査をコロナ禍におけるデータとして分析を行った。コロナ前の 2 回の調査について，3 章で使用したものをコロナ前 1 群，4 章で使用したものをコロナ前 2 群，コロナ禍で調査したものをコロナ禍群とする。

コロナ前 1 群で対象となった学生は 244 名（男性 135 名・女性 109 名，平均年齢 19.8 歳・標準偏差 1.70），コロナ前 2 群は 198 名（男性 93 名・女性 105 名，平均年齢 19.9 歳・標準偏差 1.18）であった。コロナ禍群で参加した学生は 274 名（男性 76 名・女性 196 名・その他 2 名，平均年齢 19.30 歳・標準偏差 1.26）であった。また，調査の手続きとして，コロナ前の 2 回の調査は質問紙を学生に直接配布して行っていたが，コロナ禍はオンラインでの授業で Google フォームを用いて調査を実施していた。

分析に使用した尺度

コロナ禍での調査は学生の負担を考慮し，尺度の質問項目を減らしていた。それに合わせて，コロナ前での調査データの尺度も質問項目を減らして比較検討を行った。無気力に関する尺度として，他に意欲低下領域尺度（下山，1995）と心のゆとり感尺度（富田，2008）を使用していたが，コロナ前の調査では測定を行っていないため，本節では除外した。対人関係に関する尺度では，PBI 尺度（Parker, et al.，1979）と SESS（久田他，1989）もコロナ前，コロナ禍どちらも調査を行っていた。だが，PBI 尺度はコロナ前の調査では父親と母親それぞれ設定して尋ねた一方で，コロナ禍の調査では養育者の態度を尋ねていた。また，SESS もコロナ前では友人や教師に限定して測定を行っていたが，コロナ禍の調査では学生に養育者，友人，教師から選んで回答させていた。測定の仕方が異なるため，本節の分析からは除外した。

1）無気力感尺度

下坂（2001）の無気力感尺度を用いて抑うつ的な無気力を測定していた。この尺度は 3 因子から構成されるが，コロナ禍の調査で「疲労感」を除外していたため，「自己不明瞭（自分の将来を真剣に考える気にはならない，など）」9 項目，「他者不信・不満足（周りの人たちとの付き合いは退屈だと感じる，など）」6 項目の全 15 項目を使用した。評定は「1．全くあてはまらない」～「6．よくあてはまる」の 6 件法で無気力傾向が高いほど得点も高く

なるよう設定していた。

2）ふれ合い恐怖尺度

岡田（2002）の作成した尺度を過去形に変更し，過去（高校）の友人に対するふれ合い恐怖を尋ねていた。「対人退却（友だちと一緒に食事をするのは好きでない，など）」10 項目，「関係調整不全（他人とちょうどよい距離をとるのが難しい，など）」7 項目の 2 因子 17 項目で構成された。評定は「1．全くあてはまらない」～「6．とてもあてはまる」の 6 件法で，友人に対するふれ合い恐怖が強いほど得点が高くなるよう設定した。

3）STT 尺度

中井・庄司（2006，2008）が作成した尺度を過去形に変更し，過去（高校）の教師に対する信頼感を尋ねていた。本来は 3 因子から構成されているが，コロナ前，コロナ禍どちらも目的に合わせて「役割遂行評価」を除外していた。また，コロナ禍の調査で他の 2 つの下位因子の項目数を減らしていた。そのため，「安心感」6 項目（私は先生と話すと気持ちが楽になることがある，など），「不信」5 項目（先生は自分の考えを押し付けてくると思う）の全 11 項目を使用した。評定は「1．全くそう思わなかった」～「4．非常にそう思った」の 4 件法であり，教師への安心感または不信があるほど得点が高くなるよう設定していた。

4）一般感情尺度

小川他（2000）が作成した一般感情尺度で現在の気分状態を尋ねていた。3 因子からなる尺度だが，コロナ禍での調査では「肯定的感情（楽しい，など）」8 項目のみ選出していたため，分析でもこの下位因子のみ使用した。評定は「1．まったく感じていない」～「4．非常に感じている」の 4 件法で，肯定的感情が高いほど得点が高くなるように設定していた。

結果

各変数の比較

以降，分析には HAD ver.15.0（清水，2016）を用いた。一般感情尺度と無気力感尺度の各下位因子は，コロナ前 1 群，コロナ前 2 群，コロナ禍群どの場合でも調査を行っていた。3 群で分散分析を行い，平均値の差を検討した。Table 7-2-1 に各変数の記述統計量と分散分析の結果を示した。一般感情尺度は，平均値の差は見られなかった。無気力感尺度は，他者不信・不満足で得点に差があった。Holm 法による多重比較の結果，コロナ前 2 群がコロナ禍群よりも他者不信・不満足の得点が高いことが示された。

Table 7-2-1. 全体並びに群ごとの記述統計量と分散分析

	全体（716名）		コロナ前1群（244名）		コロナ前2群（198名）		コロナ禍群（274名）		分散分析		多重比較
	平均値	*SD*	平均値	*SD*	平均値	*SD*	平均値	*SD*	*F*値	偏η^2	
一般感情尺度											
肯定的感情	22.65	5.44	23.00	4.93	22.54	4.84	22.42	6.23	0.80	0.00	
無気力感尺度											
自己不明瞭	28.47	8.33	28.84	6.75	28.30	8.19	28.27	9.62	0.36	0.00	
他者不信・不満足	15.99	5.43	16.35	4.85	16.53	5.33	15.30	5.92	3.76*	0.01	コロナ前2群＞コロナ禍群

Note. *p<.05，多重比較はHolm法（5%水準）による

ふれ合い恐怖尺度はコロナ前 1 群とコロナ禍群，STT 尺度はコロナ前 2 群とコロナ禍群にてデータを収集していた。それぞれ Welch 検定を行い，平均値の差を検討した。各変数の記述統計量と Welch 検定の結果を Table 7-2-2 に示した。ふれ合い恐怖尺度について，関係調整不全でコロナ禍群の得点の方がコロナ前 1 群の得点よりも高かった。STT 尺度では，不信の得点がコロナ禍群よりもコロナ前 2 群の方が高かった。

Table 7-2-2. 全体並びに群ごとの記述統計量とWelch検定

	全体（518名）		コロナ前1群（244名）		コロナ禍群（274名）		Welch検定		
	平均値	*SD*	平均値	*SD*	平均値	*SD*	*t*値	*df*	Cohen's *d*
ふれ合い恐怖尺度									
対人退却	23.82	10.79	24.75	9.56	23.00	11.74	1.86	512.03	0.16
関係調整不全	16.78	7.32	14.31	5.55	18.98	7.99	−7.80**	487.94	−0.67

Note. **p＜.01

	全体（472名）		コロナ前2群（198名）		コロナ禍群（274名）		Welch検定		
	平均値	*SD*	平均値	*SD*	平均値	*SD*	*t*値	*df*	Cohen's *d*
STT尺度									
安心感	14.82	4.95	15.03	4.49	14.68	5.26	0.79	456.88	0.07
不信	10.23	3.68	10.87	3.54	9.77	3.72	3.25**	436.36	0.30

Note. **p＜.01

考察

本節では，コロナ前，コロナ禍に実施した調査データで分散分析と Welch 検定を行い，コロナ禍により無気力と対人関係にいかなる変容があったか検討した。

まず，一般感情尺度ではコロナ前とコロナ禍で得点に差は見られなかった。これは現在の気分状態を測定するものである（小川他，2000）。短期的なスパンでの感情は，環境の変化にそれほど影響を受けないのであろう。次に，現在の無気力と過去の教師に対する信頼感では，コロナ前の方が高い得点が出ていた。得点に差があったのは，他者不信・不満足と不信である。他者不信・不満足は他者に対する不信感であり（下坂，2001），不信は教師に対する不信感を指し（中井・庄司，2008），いずれも相手を信頼できないという感覚である。コロナ禍にある現在，授業はオンライン形式に切り替えられ，友人関係は学内と学外ともに縮小傾向にある（ベネッセ教育総合研究所，2021）。他者との交流が減り，信頼のしにくい相手とも関わる機会が減ったために，コロナ禍において得点が低くなったと考えられる。

最後に，過去の友人に対するふれ合い恐怖では，コロナ禍の方が高い得点を出していた。得点に差があった関係調整不全は，友人との関係の深めにくさを表している（岡田，2002）。回答者が大学 1，2 年生は高校在学中，大学 3 年生以上の場合，高校卒業後にコロナ禍によって友人との直接の交流が困難になった。大学 1，2 年生はクラスメイトなど高校での友人とさらに関係を深める機会を失い，大学 3 年生以上は卒業後も関係を続けることが難しくなり，結果としてコロナ前よりも関係の深めにくさを感じるようになったのであろう。

第 3 節　本章のまとめ

本章では，コロナ禍により環境が一変したことで大学生の無気力と対人関係に変容があったか検討した。スチューデント・アパシー的な無気力に付随する意欲の減退とそれに対する感情が対人関係とどう関連するか検討したところ，無気力は過去・現在の対人関係どちらにも関連が見られた。一方で，無気力に対する感情は過去・現在の対人関係とそれほど関連が見られなかった。コロナ禍により人と直接会わず他者と比較する機会が減少したため，自分が無気力であることにそれほど焦りや不安を感じないが，一方で人と協働でやり遂げることもないため，心のゆとりもそれほど高まらない状態にあることが推測された。

コロナ前とコロナ禍において実際に無気力と対人関係に違いがあるか検討したところ，他者に対する意欲の減退と教師に対する不信感はコロナ前の方が高く，友人に対する関係の深めにくさはコロナ禍の方が高く感じていた。いずれも対人関係に関わるものであり，コロナ禍の影響で他者と交流する機会が減ったことが考えられた。

ここまで，大学生の無気力について検討を行ってきた。最後に，本研究で得られた知見についてまとめていく。

第 8 章　総合考察

第 1 節　本研究で得られた知見

本研究では，大学生の無気力について次の 2 点の検討を行った。1 点目は，過去と現在の対人関係が，抑うつ的な無気力と関連があるのかである。2 点目は，スチューデント・アパシー的な無気力とそれに対する感情に着目し，大学生が無気力を如何に捉えているのかである。これらを踏まえて大学生の無気力の実態を把握し，適切な支援策を講じることを目的としていた。第 2 章から 7 章までの実証研究で得られた知見を，以下にまとめていく。

第 2 章から 4 章では，目的 1 に則って抑うつ的な無気力と過去・現在の対人関係との関連を検討していた。第 2 章は，過去の養育者の態度と現在の養育者からのソーシャル・サポートとの関連を養育者の形態別に見た。まず，過去の養育者の態度について，大学生が想定した養育者が両親，母親，その他いずれの場合でも，無気力との関連は見られなかった。養育者から過干渉・過保護な態度を取られても無気力の促進に繋がらない一方で，養育者から情緒的な関わりをされていても無気力の抑制と関連が示されなかった。他方，現在の気分状態と無気力との関連はあり，臨床研究で取り上げられていた無気力よりも，現在の無気力はその日の気分状態で左右されるような程度の軽い状態であることが推測された。次に，現在の養育者からのソーシャル・サポートでは，母親を想定した場合に無気力の抑制と関連が見られた。大学生は同程度自分に関わる両親に対しては心理的に距離を置くようになり，両親からの支援があっても頼りすぎないため，無気力とあまり関連が見られなかったのであろう。対して母親は大学生の男女どちらとも関係が深いが故に，自主的に問題に取り組むことが難しく，母親の支援を求めやすくなっていたと考えられた。

第 3 章は，過去（高校）の友人に対するふれ合い恐怖と現在の友人からのソーシャル・サポートが大学生の無気力と関連があるのか，友人との親密さごとに検討した。過去の友人に対するふれ合い恐怖は，親密さによって無気力との関連に違いが見られた。同じ学校・クラスまたは親友・友だちを想定していた場合，ふれ合い恐怖は無気力と関連があり，部活仲間を想定していた場合は関連が見られなかった。部活仲間は親密さこそ親友・友だちより低いが，目標の到達に向けて協働する機会がつくられやすいために無気力と関連がなかったのであろう。さらに，ふれ合い恐怖の中でも友人関係の取りにくさは他者に対する不信感と関連があり，友人との関係の深めにくさは将来に対する意欲の減退と関連が見られていた。友人関係がうまくつくれず，支援を得られないことで他者への不信感が強まったと考え得る。関係の深めにくさ，将来に対する意欲の減退は，どちらも未分化な状態を一歩深化させていく際に起こるものであるため，関連が見られたのであろう。現在の友人からのソーシャル・サポートは，無気力との関連が一部示された。同じ大学・専攻，部活・サークル仲間を想定した場合は関連があったが，最も親密さが高いであろう親友・友だちからのソーシャル・サポートは関連が見られなかった。同じ大学・専攻や部活・サークル仲間は共通の課題を持ち，同じ趣味を共有することが多く，類似した悩みを分かち合いやすいため，無気力の抑制に繋

がったと考えられた。また，友人からのソーシャル・サポートについて，他者に対する不信感と関連があり，友人からの支援により他者へのネガティブな感情が払拭されたことが言えた。抑うつ的な無気力の中でも，日々の生活に対する疲労感は現在の気分状態のみ関連があり，過去・現在の対人関係とは関連が見られず，その日の気分に影響される軽度の意欲の減退であると考えられた。

第 4 章は，過去（高校）の教師に対する信頼感，教師からのソーシャル・サポートと無気力との関連を男女別に分析した。過去，現在いずれも女性は教師との関係が無気力と関連があることが示された。女性は男性よりも多様な対人関係を取る傾向があるために，こうした結果が出たのであろう。過去の教師に対する信頼感について，教師への安心感が将来に対する無気力の抑制と関連し，教師への不信が他者に対する不信感の促進に関連していた。自分の悩みを教師に相談し心の安定を得たことによって，未確定な自分の将来にも積極的に向き合えるようになったと言えよう。反対に，教師は信頼できず自分の悩みを打ち明けられない存在であると捉えると，大学生になってからも周囲に助けを求められず，不信感がより強まったことが考えられた。現在の教師からのソーシャル・サポートは，将来に対する意欲の減退と他者に対する不信感どちらにも関連が見られた。自分の関心のある研究分野について専門性の高い教師に感化されるに伴い，将来に対する見通しを立てられるようになったのであろう。そうした教師からの支援が，他者に対する不信感を軽減させていくことにも繋がったと推測された。

第 5 章，6 章では，目的 2 を踏まえてスチューデント・アパシー的な無気力とそれに対する感情について時間的な変化を検討した。まず，第 5 章では，縦断調査を行い，1）学業に対する意欲の減退が無気力に対する感情に影響するのか，2）時間の経過で無気力へのネガティブな感情が高まり，学業以外の場面でも意欲の減退が見られるか分析していった。1 点目について，学業に対する意欲の減退があっても焦りや不安といったネガティブな感情は連動しない一方で，自他に対する心のゆとりをなくしている状態であった。学業意欲が減退していても授業自体には出席しているため，ネガティブな感情は覚えにくいが，学業への積極性が減少し課題をやり遂げたことの達成感などが得られにくくなったのであろう。2 点目について，時間の経過によって無気力に対するネガティブな感情が高まることはないが，心のゆとりが増減するわけでもないことがわかった。3 回目の調査は意欲の有無に関わらず授業の単位や課題に直面せざるをえない学期末に実施していた。授業には出ているものの，毎日の生活に対する楽しさなどは感じにくい状態であったのであろう。感情の時間的な変化に伴う学業以外の広い範囲への意欲減退は見られなかった。しかし，調査開始時点にて学業意欲の減退は将来に対する意欲の減退に影響を及ぼしており，スチューデント・アパシー的な無気力は学業に対してだけでなく，他の場面でも意欲の減退が起こり得ることが示唆された。

次に，第 6 章は，面接調査によってスチューデント・アパシー的な無気力に至る過程とその様態，大学生が無気力をどう捉えていたのか検討を行った。大学生のスチューデント・ア

パシー的な無気力に至るきっかけ，またその後意欲が回復し維持させていくには，どちらも周囲の環境の影響が大きいことが示唆された。大学生は，部活やサークル，アルバイトなどに積極的に参加することで学業へ割く時間が減り，学業に意欲的でない周囲につられ楽に単位がとれるような授業を履修していた。コロナ禍で授業がオンライン形式に切り替わり，友人関係が縮小した。自分の学業に対する疎かな態度を咎める存在がなく，友人と話し合って学んだ内容の理解を深める機会も減った。さらに自分が興味・関心のない授業を取っているために今学んでいる内容に意義が見出せず，ますます意欲が減退している状態に陥っていた。そこから，大学生は留学などで意欲のある周囲に刺激を受けたり，現在の授業の形式に適応したりする中で，学業意欲が回復していった。回復した学業意欲の維持には，目的を持ち学ぶことの意義を見出すことや，周囲と競争関係になり奮起することが挙げられていた。それに加えて，こうした自分の無気力の状態について，大学生の中で捉え方が異なっていた。意欲のある状態が一番良い状態であるとしていた学生は，無気力であったことを否定的に捉えていた。他方，意欲のある状態もない状態もどちらも自分らしいとしていた学生は，無気力に対して冷静に受け止め，割り切る態度を取っていた。大学生の無気力の見方には多面性があることが推察された。

第 7 章第 1 節では，目的 1，2 を踏まえて，スチューデント・アパシー的な無気力に付随して起こる意欲の減退とそれに対する感情が，過去・現在の対人関係と関連があるのか明らかにした。まず，スチューデント・アパシー的な無気力に付随して起こる意欲の減退について，過去と現在どちらの対人関係も関連が見られた。過去の対人関係は，自分の将来に対する意欲の減退には友人関係の深めにくさが促進に関連し，教師に対する不信が抑制に関連していた。関係を深めていく，未分化な状態に目を向けていく，という共通点があるために，関連があったことが推測された。教師については，信頼に値しない方向性を定めたことが，将来に向けての視点を確定することに繋がったのであろう。教師に対する不信は，他者への不信感の促進にも関連が見られた。教師へ支援を求めにくい感覚を持つが故に，他の対人関係に対してもより不信感を強めていったことが考えられた。現在の対人関係からのソーシャル・サポートは，将来に対する意欲の減退，他者に対する不信感の抑制に関連があった。人と直接交流しにくく先行きが見づらいコロナ禍においても，他者から支援を受けて，将来へ目を向けることや他者への不信感の払拭に繋がったと言える。

一方で，無気力に対する感情について，対他的な感情は過去・現在の対人関係と関連があったが，対自的な感情はどちらとも関連が見られなかった。対人関係について，過去の友人への関係の深めにくさが他者を気遣う余裕の抑制に関連し，現在の他者からのソーシャル・サポートが促進に関連していた。周囲と適度な距離を保つことに苦手意識があり意欲が減退した際にますます他者に対する心のゆとりが減少したのであろう。そこから，自身の問題に対して他者から支援を受けることで，周りを気遣えるようになったと考えられた。生活の満足感や焦り，疲労感について関連が見られなかったのは，どちらも自分自身に向けての感情であり，他者よりも自分の状態に影響を受けやすいからだと推測された。ただし，スチュ

ーデント・アパシー的な無気力は対自的な感情との相関が見られず，学業への意欲の減退が強まってもそれに対して焦ることはないものの，自分の生活に満足感を覚えることもないことが示唆された。コロナ禍で他者と比較する機会が減り自分の状態に危機感を覚えにくいが，生活に意義を見出し，周囲と喜びを共有することもないため，満足感も得られにくかったのであろう。

最後に，第 7 章第 2 節では，コロナ前とコロナ禍で行った調査データを用いて，無気力と対人関係についてコロナ禍の影響があったのか比較検討をした。コロナ禍による他者との交流の減少が，無気力と対人関係に良くも悪くも影響していることが推察された。コロナ禍で苦手な相手との交流が途切れたため，コロナ前よりもコロナ禍の方が，過去の教師と現在の他者に対する不信感が低いという結果になったのであろう。一方で，コロナ禍で仲の良い友人と交流する機会を失い，コロナ禍の方が過去の友人に対する関係の深めにくさをより強く感じるようになったと考えられた。

第 2 節　本研究の到達点

日本における大学生の無気力研究は，抑うつの視点とスチューデント・アパシーの視点のふたつの無気力が混在していることが問題視されていた（狩野・津川，2008，2011）。そこで，本研究では，抑うつ的な無気力，スチューデント・アパシー的な無気力，それぞれ検討を行い，曖昧な状態であった大学生の無気力の実態を明らかにした。

まず，抑うつ的な無気力について，元来臨床研究では過去の親の過保護・過干渉な態度や友人に対するふれ合い恐怖が無気力を促進することが示唆されていた（笠原，1977；深谷，1990；山田，1992 など）。一方で，一般学生のアパシー化（土川，1985）以降，調査研究では現在の家族や友人からソーシャル・サポートを受けることが，無気力の抑制に繋がるとされている（福岡，2000；下坂，2001；本間・松田，2012 など）。臨床研究では大学生の過去の対人関係に着目し，調査研究では現在の対人関係を対象としている。時間軸のズレが，見解の相違に繋がったと言える。そこで，本研究では両者の研究を繋ぎ合わせ，現在だけでなく過去の対人関係と抑うつ的な無気力の関連を検討した。結果として，次の 4 点が明らかになった。

第一に，現在の養育者，友人からのソーシャル・サポートが無気力の抑制に関連があるとわかった。これは，これまでの調査研究で得られた知見（福岡，2000；下坂，2001；本間・松田，2012 など）と合致する。本研究ではさらに，どのような相手からのソーシャル・サポートが有効か明確にした。養育者では，母親からのソーシャル・サポート，友人関係では，同じ大学・専攻または部活・サークル仲間からのソーシャル・サポートが関連することが示されていた。第二に，過去の対人関係が無気力と関連することが実証された。過去の友人に対するふれ合い恐怖が，大学生の無気力の促進と関連が見られた。臨床研究の見解（山田，1992）を証明したと言えよう。現在の大学生の無気力にアプローチする際に，過去の友人関係の在り様を考慮することで，現在の母親や友人からの支援をより効果的に発揮することができるのではないだろうか。

第三に，過去の養育者の態度は無気力と関連しないことが示された。スチューデント・アパシーが報告された当初から，大学生の無気力には過去の親の養育態度との関連が臨床研究では注目されていた（Walters，1961 笠原・岡本訳 1975；土川，1981；山田，1992 など）。だが，現在は調査研究に移行したことで対象となる大学生の範囲が拡大した。臨床研究で示唆されていたような，過干渉・過保護な態度を取る養育者（深谷，1990；山田，1992）の存在が相対的に減ったことが考えられる。一方で，養育者からの情緒的な関わりも無気力との関連が見られなかった。現在はコロナ禍により大学生は自分から行動を起こすことが難しい。過去に養育者から自立を促す態度を取られていても，実際の行動に繋がりにくい状態にあったことが推測された。第四に，女性の場合，過去・現在の教師との関係が無気力と関連があった。臨床，調査研究いずれにおいても教師に関する言及は少なく（笠原，1977，1984；下坂，2001 など），親や友人との関連の方が重視されていた。だが，女性は多様な対人関係を取る傾向にあり（山田，2011），現在は大学が「学校化」（山内，2010）しつつあるため，

大学の教師に対しても高校生の頃と同じような支援を求めていたと推測された。

第一，第二の点はそれぞれ調査研究と臨床研究での見解を裏付けるものであった。これは，時代的な変化や環境にあまり影響されない，抑うつ的な無気力の特徴であると考えられる。友人関係を中心に，過去の対人関係の取り方に着目することで，現在の大学生の無気力に効果的な支援を講じることができるであろう。第三，第四の点は本研究で得られた新たな知見である。コロナ禍や大学の「学校化」（山内，2010）など大学生を取り巻く環境の変化が影響していると考えられる。臨床研究では厳しい父親の存在（Walters, 1961 笠原・岡本訳 1975）など，無気力の大学生の家庭環境に注目していたが，現在の大学生はむしろ，友人や教師など，学校や大学での対人関係を重視している。大学生の学習環境を整えることが大学生の抑うつ的な無気力の抑制に繋がるのではないか。臨床，調査研究の見解を併せて検討することによって，現在の大学生の無気力の実態を正確に把握する一助になったと言えよう。

次に，スチューデント・アパシー的な無気力について，臨床研究ではスチューデント・アパシーの学生は焦りや不安の感情を伴わず，なかなか自分から相談室に赴いたりしないことが挙げられていた（笠原，1984）。しかし，調査研究ではそうした無気力に対する感情が調査項目に含まれず，結果として抑うつ的な無気力とスチューデント・アパシー的な無気力の混在が起こっていた。そこで，本研究では無気力に対する感情に着目し，時間の経過の中でスチューデント・アパシー的な無気力とそれに対する感情がどのように変容していくのか検討した。結果として，以下の事柄が明らかになった。

まず，スチューデント・アパシー的な無気力は，無気力に対する焦りなどネガティブな感情と連動していないことがわかった。これは臨床場面における示唆（笠原，1984）を支持するものであり，憂鬱な気分が続く（桜井，2000）抑うつ的な無気力とは異なる，スチューデント・アパシー的な無気力の特徴であると言える。また，本研究ではスチューデント・アパシー的な無気力の新たな特徴が見出された。ひとつは，自分が無気力であることにネガティブな感情は抱いていない一方で心のゆとりをなくしており，その後の心のゆとりの増減に無気力が影響していなかったことである。もうひとつは，学業への意欲が減退するほど，将来に対する意欲の減退も起こっていたことである。スチューデント・アパシー的な無気力は学業に対して選択的に意欲が減退するもので，日常生活全般に意欲が減退する抑うつ的な無気力に比べて程度の軽い状態であるとされていた（下山，1995；狩野・津川，2011；大西，2016）。さらに，現在の大学生は「まじめ化」（渡部，2005）して授業そのものには参加しているため，無気力であると周囲に気づかれにくい。だが，スチューデント・アパシー的な無気力の学生は，実際のところ自分の状態をそれほど楽観的に捉えているわけではなく，将来に対する見通しも失っている。早期の段階での支援が求められる。

次に，スチューデント・アパシー的な無気力は，周囲の環境からの影響が大きいことが示唆された。大学生は，周囲が学業に対して積極的でないと，それにつられて学業が疎かになり，反対に学業に対して意欲のある周囲の場合は，それに触発されて学業への意欲が向上していた。スチューデント・アパシー的な無気力へのアプローチとして，本人に働きかけるだ

けでなく，学業意欲を維持しやすいような環境を整えることも有効であると考えられる。それに加えて，大学生が意欲のある状態とない状態をどう捉えるかによって，無気力に対する感情が異なっていた。無気力研究において，大学生の無気力は怠学傾向（齋藤，2005；内田，2009）に繋がる不適切な状態と見なされていた。しかし，大学生の中には，意欲のない状態も普通のこととして捉え，無気力を比較的肯定的に受け入れている者もいた。無気力の多様な側面を理解することが必要であろう。

スチューデント・アパシー的な無気力は，自分の将来に対する意欲の減退も見られることを既述していた。面接調査を行った際も，部活やサークル，アルバイトといった学業以外の場面での意欲の減退が見られており，スチューデント・アパシー的な無気力は学業以外にも意欲が減退することが示唆された。こうしたスチューデント・アパシー的な無気力に付随して生じている意欲の減退は，抑うつ的な無気力と同様に対人関係との関連が見られるのか，検討を行った。その結果，スチューデント・アパシー的な無気力に付随して起こる意欲の減退でも，過去・現在の友人関係，教師との関係が関連することが見出された。対人関係との関連について抑うつ的な無気力と類似した結果が出ることも，抑うつ的な無気力とスチューデント・アパシー的な無気力の混在が起こった一因なのであろう。だが，抑うつ的な無気力とは異なる結果が見られる点もあった。過去の教師に対する不信感は，抑うつ的な無気力の場合，意欲の減退の促進に繋がっていた。一方で，スチューデント・アパシー的な無気力の場合はむしろ意欲の改善と関連していた。類似してはいても，抑うつ的な無気力とスチューデント・アパシー的な無気力はやはり質的に異なるものであり，それぞれに有効な関わり方も違うのであろう。加えて，無気力に対する感情については，対人関係とあまり関連が見られなかった。ここでも，無気力に対して焦りや不安を伴わない一方で，心のゆとりがあるわけでもないことが示されていた。スチューデント・アパシー的な無気力の改善については，他者からの支援よりも，無気力の大学生自身が学業への意義を見出せるような環境の整備が重要であることが推測される。

最後に，コロナ禍において，無気力と対人関係に変容があることが見出された。コロナ禍で他者と交流する機会が減ったことが，無気力の抑制や教師に対する不信感を抑えることに繋がった一方で，過去の友人に対する関係の深めにくさを強めることにも繋がっていた。今後無気力研究を行う際は，コロナ禍による影響に留意する必要があると言える。

本研究では，大学生の無気力の実態を把握し適切な支援策を講じるために，抑うつ的な無気力と過去・現在の対人関係との関連，スチューデント・アパシー的な無気力とそれに対する感情に着目し検討を行ってきた。抑うつ的な無気力には，養育者，友人，教師と多様な対人関係からの支援が有効であることが示された。さらに，大学生本人の属性や他者との関係性によって，支援の有効度合も変わってくることが見出された。加えて，これまで臨床研究での示唆に留まっていた過去の友人との関係も無気力と関連していることが実証された。現在の対人関係から無気力を支援する際には，大学生の過去の友人関係の取り方が支援の求めにくさに繋がっていないか，注目する必要があろう。また，過去・現在の教師との関係

が無気力と関連が見られ，教師は現在の大学生にとって重要な存在になりつつあることが推測された。スチューデント・アパシー的な無気力について，大学生は周囲の環境によって悪い方向にも良い方向にも流されやすいことが推察された。自分がスチューデント・アパシー的な無気力であることに対して，ネガティブな感情を伴わない一方で，心のゆとりもなくしており，大学生は決して無気力を楽観的に捉えているわけではないことが明示された。ただし，大学生の中には無気力の状態を肯定的に受容する者もいた。スチューデント・アパシー的な無気力を全面的に良くない状態として捉えるのではなく，多様な側面を理解し，学業への意欲を維持しやすい環境を整えることが重要であろう。

第 3 節　今後の課題

本研究の課題点として，次の 3 点が挙げられる。1 点目は，調査対象の偏りである。まず第 2 章と第 5 章の研究では，大学 1 校のみの調査で，学生の属性に偏りが見られた。大学ごとのサンプルサイズが小さく，第 2 章では一部の得点が正規分布でないことが示され，第 5 章では条件付き潜在曲線モデルの適合度に影響が見られた。次に第 4 章の研究では，学年に偏りがあり，一部の得点が正規分布でないことが示されていた。さらに第 7 章の研究では，コロナ禍により学生への直接の調査依頼に困難さがあり，第 6 章の面接調査に参加した学生に対して，友人や周囲に調査の参加の呼びかけを依頼せざるを得なかった。結果参加した学生の所属に偏りがあった。より結果を一般化するために，複数の大学で広範囲な調査を進め，学生の属性や学年等の偏りをなくしていかなければならない。学年について，スチューデント･アパシー的な無気力は 2 年生以上で深刻化していくと述べられている（下山, 1995）。入学して間もなく緊張感のある 1 年生や，進路を意識する時期である 4 年生に比べ，2，3 年生は中だるみしやすい時期であると思われる。多母集団同時分析を行い，学年差についても考慮していく必要があろう。また，本研究は一般学生のアパシー化（土川，1985）の指摘に基づき，一般学生を対象に調査を行っていた。今後は臨床群との比較をし，大学生の無気力の特徴を明確化し，さらに今回提示した無気力の学生への支援策について，実際に有効か検討していくべきである。

2 点目は，測定方法に課題点がいくつかあったことである。抑うつ的な無気力の検討について，横断調査に留まっていた。縦断調査や面接調査を行い，時間の経過の中での抑うつ的な無気力と対人関係との関連を綿密に検証し，本研究の整合性を高めていくことが求められる。さらに，対人関係の想定についても課題がある。具体的には，想定した友人関係に「同じ高校の友だち」と記入されていた場合は「同じ高校・クラスメイト」に分類するなど，表現が重なっていた際，先に記入していた関係へと分けていた。例に則ると，同じ高校へ通う知り合い程度の関係と，同じ高校で，普段からよく会話する友人が混在していたことが推測される。今後は，対人関係について関係性をより具体的に指定し，無気力との関連を検討していく。

測定方法はスチューデント・アパシー的な無気力の検討においても課題が見られた。第 5 章の縦断調査では，調査を行った大学が 5 月に学外実習を実施しており，学業以外からのバイアスを避けるために短いスパンで縦断研究を行っていた。その結果，傾きが有意ではない変数がいくつか見られた。狩野・津川（2011）の縦断研究では，持続的な無気力の波を捉えるために，4 週間ごとに調査を行っていた。また，新学期が始まって間もない頃のような，やらなければいけないことが明確な時期に比べ，時間に余裕のある時期はアパシー傾向が高くなる（千島・水野，2015）。それらを踏まえて，調査開始時期を 5 月や 10 月といった新学期が始まったばかりの時期に設定し，学業以外のライフイベントも検討項目に組み込み，3，4 週間の長いスパンで研究を行う。これにより，無気力に対する焦りや不安といった感情が高まることで無気力が深刻化するのか，より明確化することができる。

3 点目に，コロナ前とコロナ禍における調査が混在していたことである。第 7 章第 2 節から，コロナ前とコロナ禍で無気力や対人関係に変容が見られていた。だが，抑うつ的な無気力と対人関係との関連では，第 2 章はコロナ禍に調査を行っていた一方で，第 3，4 章はコロナ前の調査である。これらを同質のものとして比較検討することは難しいであろう。また，第 7 章の調査は，コロナ禍の影響で 2021 年には十分な人数が集まらず，2022 年に再度調査を実施していた。2021 年から 2022 年にかけて，大学では対面での授業が再開し，減少していた他者との交流が既に回復する時期に入っている。それが結果に影響しているであろう。今後は，コロナ禍の影響も踏まえて調査を行い，現在の大学生の無気力の実態をより正確に把握することが求められる。

引用文献

Abramson, L. Y., Seligman, M. E. P., & Teasdale. J. D.（1978）． Learned helplessness in humans: Critique and reformulation. *Journal of Abnormal Psychology*, *87*, 49–74.

Abramson, L. Y., Metalsky, G. I., & Alloy. L. B.（1989）．Hopelessness depression: A theory-based subtype of depression. *Psychological Review*, *96*, 358–372.

Altbach, P. G.（1979）．From revolution to apathy: American student activism in the 1970s. *Higher Education*, *8*, 609–626.

東 美絵（2004）．受験不安と健康について――ソーシャル・サポートとの関連から―― 臨床教育心理学研究（関西学院大学），*30*，39–51.

ベネッセ教育総合研究所（2008）．第 1 回大学生の学習・生活実態調査報告書 ベネッセ総合研究所

ベネッセ教育総合研究所（2016）．第 3 回大学生の学習・生活実態調査報告書 ベネッセ総合研究所

ベネッセ教育総合研究所（2021）．第 4 回大学生の学習・生活実態調査報告書 ベネッセ総合研究所

千島 雄太・水野 雅之（2015）．入学前の大学生活への期待と入学後の現実が大学適応に及ぼす影響――文系学部の新入生を対象として―― 教育心理学研究，*63*，228–241.

Clarke, D. E., Ko, J.Y., Kuhl, E. A., Reekum, R.v., Salvador, R., & Marin, R. S.（2011）．Are the available apathy measures reliable and valid?: A review of the psychometric evidence. *Journal of Psychosomatic Research*, *70*, 73–97.

Dable, R.A., Pawar, B.R., Gade, J.R., Anandan, P.M., Nazirkar, G.S., & Karani, J.T.（2012）．Student apathy for classroom learning and need of repositioning in present andragogy in Indian dental schools. *BMC Medical Education*, *12*, 118. doi: 10.1186/1472–6920–12–118

男女共同参画局（2019）．男女共同参画白書令和元年版 男女共同参画局 Retrieved from https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/r01/zentai/index.html（2022 年 11 月 10 日）

遠藤 隆志・鈴木 瑛貴・窪谷 珠江・馬場 彩果（2022）．コロナ禍が大学生の身体活動ならびに生活習慣に与える影響――2020 年 4 月の緊急事態宣言前後の調査―― 植物学園大学紀要，*14*，37–43.

Fox, J.E.（2004）．Missing the Mark: Nationalist Politics and Student Apathy. *East European Politics and Societies*, *18*, 363–393.

深谷 昌志（1990）．無気力化する子どもたち NHK ブックス

深谷 昌志（1996）．変わりつつある父親像 牧野カツコ・中野由美子・柏木惠子（編著）子どもの発達と父親の役割（pp.14–30） ミネルヴァ書房

福岡 欣治・橋本 宰（1997）．大学生と成人における家族と友人の知覚されたソーシャル・サポートとそのストレス緩和効果 心理学研究，*68*，403–409.

福岡 欣治（2000）．大学生における家族および友人の知覚されたソーシャル・サポートと無気力傾向――達成動機を媒介要因とした検討――　静岡県立大学短期大学部研究紀要 *14*(3)，1–10.

橋本 久美・久村 正也・浜上 尚也・飯村 伸孝（2015）．「なまけ傾向尺度」の妥当性に関する影響――学業面・健康面・認知面における検討――　心身医学　*55*, 1145–1154.

波多野 誼余夫・稲垣 佳世子（1981）．無気力の心理学　中公新書

林田 美咲・黒川 光流・喜田 裕子（2018）．親の愛着および教師・友人関係に対する満足感が学校適応感に及ぼす影響　教育心理学研究　*66*，127–135.

Hiroto, D. S.（1974）．Locus of control and learned helplessness. *Journal of Experimental Psychology*，*102*，187–193.

平石 賢二（2011）．思春期・青年期のこころ――かかわりの中での発達――改訂版　北樹出版

久田 満・千田 茂博・箕口 正博（1989）．学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み（1）日本社会心理学会第 30 回大会論文集，143–144.

Hollingworth, L. S.（1928）．*The psychology of the adolescent*. London: Partridge

本間 里美・松田 英子（2012）．ストレッサーと実行されたソーシャル・サポートが無気力に与える影響――大学生における縦断研究――　ストレス科学研究，*27*，64–70.

飯田 昭人・水野 君平・入江 智也・川崎 直樹・斉藤 美香・西村 貴之（2021）．新型コロナウイルス感染拡大状況における遠隔授業環境や経済的負担感と大学生の精神的健康の関連　心理学研究，*92*，367–373.

伊藤 裕子（1995）．女子青年の職業選択と父母の養育態度――親への評価を媒介として――　青年心理学研究，*7*，15–29.

伊藤 裕子（2001）．青年期女子の性同一性の発達――自尊感情，身体満足度との関連から――　教育心理学研究，*49*，458–467.

入江 智也・丸岡 里香・三上 薫・一條 理絵・安部 久美子・中里 真由美（2015）．大学生における精神的健康の継時的変化――潜在曲線モデルを用いた検討――　北翔大学北方圏学術情報センター年報，*7*，25–33.

鎌原 雅彦（2005）．無気力とは――動機づけの心理学から――　大芦 治・鎌原 雅彦（編著）無気力な青少年の心――無力感の心理――発達臨床心理学的考察（pp.16–29）　北大路書房

狩野 武道・津川 律子（2008）．大学生における無気力の分類の試み――スチューデント・アパシーと抑うつの観点から――　こころの健康，*23*，2–10.

狩野 武道・津川 律子（2011）．大学生における無気力の分類とその特徴――スチューデント・アパシーと抑うつの視点から――　教育心理学研究，*59*，168–178.

笠原 嘉（1977）．青年期――精神病理学から――　中公新書

笠原 嘉（1984）．アパシー・シンドローム――高学歴社会の青年心理――　岩波書店
笠井 孝久・村松 健司・保坂 亨・三浦 香苗（1995）．小学生・中学生の無気力感とその関連要因　教育心理学研究，*43*，424–435.
笠井 孝久（2005）．中学生の無気力　大芦 治・鎌原 雅彦（編著）無気力な青少年の心―無力感の心理―発達臨床心理学的考察（pp.60–70）　北大路書房
柏木 惠子（2003）．家族心理学――社会変動・発達・ジェンダーの視点――　東京大学出版会
川原 正人（2022）．コロナ禍での新しい生活様式におけるポジティブな変化　東京未来大学研究紀要，*16*，135–139.
経済企画庁調査局（1999）．地域経済レポート'99 のポイント――日本列島総不況からの脱却――　経済企画庁調査局 Retrieved from https://www5.cao.go.jp/keizai3/1999/19990713chiikireport.html（2022 年 11 月 10 日）
木下 康仁（1999）．グラウンデッド・セオリー・アプローチ――質的実証研究の再生――弘文堂
木下 康仁（2016）．M-GTA の基本特性と分析方法――質的研究の可能性を確認する――医療看護研究（順天堂大学医療看護学部），*13*，1–11.
国立女性教育会館（2005）．「平成 16 年度・17 年度家庭教育に関する国際比較調査」報告国立女性教育会館 Retrieved from https://www.nwec.jp/about/publish/2006/ndpk5s0000000zft-att/report_page16_1-2.pdf（2016 年 12 月 15 日）
Kos, C., Klaasen, N. G., Marsman, JB. C., Opmeer, E. M., Knegtering, H., Aleman, A., & Tol,MJ.V.（2017）．Neural basis of self-initiative in relation to apathy in a student sample. *Scientific Reports*，*7*，1–10.
厚生労働省（2021）．令和 3 年度雇用機会均等基本調査　厚生労働省 Retrieved from https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/71-r03.html（2022 年 11 月 10 日）
李 相蘭（2000）．青年期無気力傾向に関する比較研究――日・韓の大学生を対象に――東京大学大学院教育学研究科紀要，*40*，139–150.
牧 郁子（2011）．中学生における無気力感の予防・対処要因――時間的・性別要因を入れた検討――　カウンセリング研究，*44*，136–147.
Marin, R. S.（1991）．Apathy: a neuropsychiatric syndrome. *The Journal of Neuropsychiatry and Clinical Neurosciences*，*3*，243–254.
丸井 文男（1967）. 大学生のノイローゼ――意欲減退症候群――　教育と医学, *15*, 476–483.
松原 達哉（1979）．大学生の留年の研究（1）　筑波大学心理学研究，*1*，26–34.
松本 麻友子（2022）．コロナ禍における大学生の学習・生活習慣の変化――第 2 回緊急事態宣言下から 4 回目まん延防止等重点措置前までの縦断調査を通して――　日本教育心理学会第 64 回総会発表論文集，390.
三浦 正江（2006）．中学校におけるストレスチェックリストの活用と効果の検討――不登校

の予防といった視点から――　教育心理学研究，*54*，124–134.
文部科学省（2019）．学校基本調査――令和元年度結果の概要――　文部科学省 Retrieved from https://www.mext.go.jp/content/20191220-mxt_chousa01-000003400_3.pdf（2020 年 10 月 30 日）
文部科学省（2020）．新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況　文部科学省 Retrieved from https://www.mext.go.jp/content/20200717-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf（2022 年 11 月 10 日）
永井 暁行（2016）．大学生の友人関係における援助要請およびソーシャル・サポートと学校適応の関連　教育心理学研究，*64*，199–211.
内閣府（2007）．ユースアドバイザー養成プログラム（改訂版）　内閣府 Retrieved from https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/h19-2/html/ua_mkj.html（2022 年 11 月 10 日）
中井 大介・庄司 一子（2006）．中学生の教師に対する信頼感とその規定要因　教育心理学研究，*54*，453–463.
中井 大介・庄司 一子（2008）．中学生の教師に対する信頼感と学校適応感との関連　発達心理学研究，*19*，57–68.
中井 大介・庄司 一子（2009）．中学生の教師に対する信頼感と過去の教師との関わり経験との関連　教育心理学研究，*57*，49–61.
中本 浩揮・森 司朗・屋良 朝栄（2007）．高校生における教師に対する信頼感と学校適応感の関係　鹿屋体育大学学術研究紀要，*35*，1–13.
難波 久美子（2005）．青年にとって仲間とは何か――対人関係における位置づけと友だち・親友との比較から――　発達心理学研究，*16*，276–285.
NHK 放送文化研究所（2013）．中学生・高校生の生活と意識調査 2012――失われた 20 年が生んだ“幸せ”な十代――　NHK 出版
西平 直喜（編）（1981）．現代青年の意識と行動 1　拒絶と社会参加　大日本図書（現代心理学ブックス）
信田 さよ子（2008）．母が重くてたまらない――墓守娘の嘆き――　春秋社
落合 良行・佐藤 有耕（1996）．親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析　教育心理学研究，*44*，11–22.
落合 良行・佐藤 有耕（1996）．青年期における友達とのつきあい方の発達的変化　教育心理学研究，*44*，55–65.
小川 雅美 （1991）．PBI（Parental Bonding Instrument）日本語版の信頼性，妥当性に関する研究　精神科治療学，*6*，1193–1201.
小川 翔太（2014）．青年期における友人の慰め方が受け手の感情に与える影響――励ましや共感の言葉かけと何もせずそっと離れる行動の比較――　発達心理学研究，*25*，279–290.
小川 時洋・門地 里絵・菊谷 麻美・鈴木 直人（2000）．一般感情尺度の作成　心理学研究，*71*，241–246.

岡田 努（2002）. 現代大学生の「ふれ合い恐怖的心性」と友人関係の関連についての考察　性格心理学研究，*10*，69–84.

大石 千歳（2013）. 教師との関わり経験と教師への信頼感が教職志望動機に及ぼす影響――キャリア教育・教育相談の観点による心理学的研究――　東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要，*48*，17–25.

大久保 智生（2005）. 青年の学校への適応感とその規定要因――青年用適応感尺度の作成と学校別の検討――　教育心理学研究，*53*，307–319.

大西 恭子（2016）. 学業領域固有の知覚された無気力の探索的研究　教育心理学研究，*64*，340–351.

大島 聖美（2013）. 夫婦間の信頼感と両親からの支持的関わりが若者の心理的健康に与える影響の男女差　発達心理学研究，*24*，55–65.

長内 優樹（2009）. 大学生における知覚された無気力の研究――領域固有的無気力が領域全般的無気力に及ぼす影響――　応用社会学研究（東京国際大学大学院社会学研究科），*19*，101–112.

長内 優樹（2010）. 無気力に関する心理学的研究の展望――健常な個人が日常的に知覚する無気力を研究するために――　応用社会学研究（東京国際大学大学院社会学研究科），*20*，83–94.

Parker, G., Tupling, H., & Brown, L. B.（1979）. A Parental Bonding Instrument. *British Journal of Medical Psychology*，*52*，1–10.

齋藤 憲司（2005）. 大学生の無気力　大芦 治・鎌原 雅彦（編著）無気力な青少年の心――無力感の心理――発達臨床心理学的考察（pp.87–98）　北大路書房

桜井茂男（2000）. 無気力の心理学――動機づけの概念を中心にした無気力発生モデルの検討――　丹野 義彦（編）　現代のエスプリ 392　認知行動アプローチ――臨床心理学のニュウーウェーブ――（pp.61–70）　至文堂

Seligman, M. E. P., & Maier, S. F.（1967）. Failure to escape traumatic shock. *Journal of Experimental Psychology*，*74*，1–9.

清水 裕士（2016）. フリーの統計分析ソフト HAD――機能の紹介と統計学習・教育，研究実践における利用方法の提案――　メディア・情報・コミュニケーション研究，*1*，59–73.

下坂 剛（2001）. 青年期の各学校段階における無気力感の検討　教育心理学研究，*49*，305–313.

下斗 米淳（2000）. 友人関係の親密化過程における満足・不満足感及び葛藤の顕在化に関する研究――役割期待と遂行とのズレからの検討――　実験社会心理学研究，*40*，1–15.

下山 晴彦（1995）. 男子大学生の無気力の研究　教育心理学研究，*43*，145–155.

下山 晴彦（1996）. スチューデント・アパシー研究の展望　教育心理学研究，*44*，350–363.

下山 晴彦（2000）．スチューデント・アパシーの 3 次元構造モデル　丹野 義彦（編） 現代のエスプリ 392　認知行動アプローチ――臨床心理学のニュウーウェーブ――（pp.55–60） 至文堂
多田 美香里（1998）. 過去経験の日常的想起における気分の影響　感情心理学研究, *5*, 61–69.
田中 正（2006）．子どもの性差を通してみた親子関係の意識の違い　名古屋文理大学紀要，*6*，99–101.
鉄島 清毅（1993）. 大学生のアパシー傾向に関する研究――関連する諸要因の検討――　教育心理学研究，*41*，200–208.
戸田 須恵子（2006）．母親の養育態度と幼児の自己制御機能及び社会的行動との関係について　北海道教育大学釧路校研究紀要，*38*，59–69.
富田 真弓（2008）．心のゆとり感尺度の作成の試み　九州大学心理学研究，*9*，223–233.
湯 立・外山 美樹（2016）．大学生における専攻している分野への興味の変化様態――大学生用学習分野への興味尺度を作成して――　教育心理学研究，*64*，212–227.
土川 隆史（1981）．スチューデント・アパシー　笠原　嘉・山田和夫（編著）キャンパスの症候群――現代学生の不安と葛藤――（pp.143–166） 弘文堂
土川 隆史（1985）．スチューデント・アパシーと生活リズム　日本文化科学社（編）教育心理 33（9）（pp.771–773） 日本文化科学社
土川 隆史（編）（1990）．スチューデント・アパシー　同朋舎
内田 千代子（2009）．大学生における休・退学，留年学生に関する調査　第 29 報　第 30 回全国メンタルヘルス研究会報告書，70–85.
Walters, P. A. J.（1961）．Student apathy. In G. B. Blaine, Jr. & C. C. McArthur (Eds.), *Emotional problems of the student*(pp.106–120). New York: Appleton-Century-Crofts.
（ウォルターズ，P. A. J.　笠原 嘉・岡本 重慶（訳）（1975）．学生のアパシー　石井 完一郎・笠原 嘉（編）現代のエスプリ 168　スチューデント・アパシー（pp.29–49） 至文堂）
渡部 真（2005）.「大学の学校化」とモラトリアム　渡部 真（編）現代のエスプリ 460　モラトリアム青年肯定論（pp. 130–141） 至文堂
山田 和夫（1992）．ふれ合い恐怖　芸文社
山田 裕子（2011）．大学生の心理的自立の要因ならびに適応との関連　青年心理学研究，*23*，1–18.
山形 伸二・繁桝 算男（2003）．男子大学生のアパシー傾向と Cloninger の気質・性格の 7 次元モデル　パーソナリティ研究，*12*，30–31.
山本 孝則（1994）.「平成不況」の性格とその帰結――「複合論」の検討を通して――　土地制度史学，*36*，19–35.
山内 乾史（2010）．大学・大学院の（いわゆる）「学校化」に関する諸考察――初年次・少人数教育を中心に――　大學教育研究（神戸大学），*19*，29–52.

吉田 辰雄・鈴木 順一（1985）．無気力学生の心理学的研究（1） 東洋大学児童相談研究，*4*，1–18.

吉岡 和子（2001）．友人関係の理想と現実のズレ及び自己受容から捉えた友人関係の満足感 青年心理学研究，*13*，13-30.

謝辞

博士論文を執筆するにあたって，多くの方々のご指導とご協力を賜りました。皆様に心より厚く御礼申し上げます。

指導教授である都筑学先生には，学部 3 年にゼミへ入ってから今まで，長くご指導を頂きました。退官後も貴重なお時間を割いて面倒を見ていただき，感謝してもしきれません。先生の常に温かく，時には容赦ないご指導のおかげで，どうにかここまで論文を書き上げることができました。心より御礼を申し上げます。

新しく指導教授に就かれた髙瀬堅吉先生は，突然に厄介な院生を引き受けることになったにも関わらず，優しく応援していただき，本当にありがとうございます。山科満先生の手厚いサポートも，大変励みになりました。お二人の先生に，心より感謝申し上げます。

また，大学院の先輩方，同期，後輩の皆様からもたくさんのアドバイスを頂きました。とくに，同期の任玉洁さんは，現在中国で教鞭を取る忙しい身にも関わらず，毎回のオンラインでの博論指導に参加してご意見を出していただき，自分も頑張らねばと良い刺激を受けました。この場を借りて，深く感謝を申し上げます。

コロナ禍で大学へ調査に行くことができず研究が停滞し，もはや自分が無気力に陥りかけていたとき，調査参加者の呼びかけにご協力いただいた中央大学ライティング・ラボの関係者の皆様，中央大学文学部西洋史学研究室の多田智明様，他大学の OB，OG の皆様，本当にありがとうございました。皆々様のおかげで，最後まで調査をやり切ることができました。重ねて，御礼申し上げます。

何より，本論文は調査に参加してくださった大学生の皆様なくしては成り立つことがありませんでした。深く感謝すると共に，本研究の結果が少しでも皆様の生活を豊かにすることに繋がれば幸いです。

最後に，長きにわたる院生生活を支えてくれた家族に感謝申し上げます。また，執筆中いつも膝の上に乗って体を温めてくれた愛猫トラ，おかげで腰を痛めました。

付録

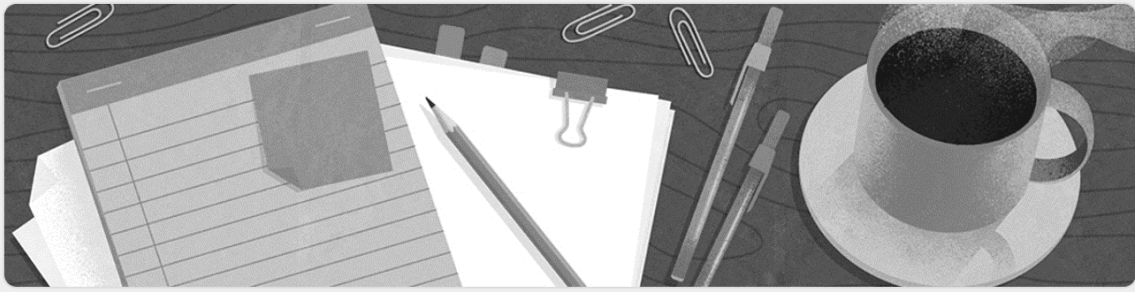
本研究の横断調査及び縦断調査で使用した質問紙と，面接調査の参加者募集用紙，スケジュール確認と同意書を付録として掲載した。付録番号と本論文内で調査結果が使用された箇所を Table 8 に示した。なお，Google フォームを用いた調査の場合，教示文はスクリーンショット画面を記載し，質問項目は Word に直接入力している。

Table 8. 付録番号と本論文の該当箇所

付録	該当箇所	内容	実施
1	2 章	【Google フォーム・横断調査】 養育者と抑うつ的な無気力との関連	2021 年 4 月
2	3 章，7 章第 2 節	【質問紙・横断調査】 友人と抑うつ的な無気力との関連	2016 年 7，8 月
3	4 章，7 章第 2 節	【質問紙・横断調査】 教師と抑うつ的な無気力との関連	2016 年 7，8 月
4	5 章	【質問紙・縦断調査】 スチューデント・アパシー的な無気力とそれに対する感情の時間的変化	2019 年 6 月上旬（T1），6 月下旬～7 月上旬（T2），7 月上旬（T3）
5	6 章	【面接調査】 スチューデント・アパシー的な無気力の形成過程とそれに対する捉え方	2021 年 8，9 月
6	7 章	【Google フォーム・横断調査】 スチューデント・アパシー的な無気力，無気力への感情と対人関係との関連	2021 年 7～9 月， 2022 年 5 月

付録 1

1 ページ目



大学生の養育者との関係と日々の生活意識に関するアンケート調査

（共有なし）

アカウントを切り替える

*必須

このアンケートは，大学生のみなさんの養育者との関係や日々の生活意識についてお聞きするものです（所要時間 約15分）。

お答えいただきましたデータは個人が特定されない形で統計的に処理され，他人にその内容が漏れる事は一切ありません。またここで収集したデータは，研究以外の目的で使用される事はありません。

ただし，回答の途中でどうしても答えたくない，答えるのが難しい項目があった場合，そこで回答を中断していただいて構いません。それによって何らかの不利益が生じることは一切ありません。

ご協力よろしくお願いします。

・質問項目（選択肢）

性別（1．男，2．女，3．その他）

年齢（1．18，2．19，3．20，4．21，5．22，6．23，7．24，8．25～）

学部（調査を行った大学の学部から選択）

学年（1．1 年，2．2 年，3．3 年，4．4 年以上）

2 ページ目

問1．あなたは以下の文章にあるような感じを，普段の生活でどの程度感じますか。最もよくあてはまると思う番号を選択してください（全19項目）

・質問項目

選択肢はすべて「1．全くあてはまらない」～「6．かなりあてはまる」

1. 日ごろ目的のない生活をしていて自分がだらけていると感じる
2. 私の周りの人たちは面白みに欠けると思う
3. 多忙な毎日で疲れて何もしたくなくなる
4. 私は何事にも前向きに取り組む意欲があると思う
5. 私は毎日の生活で疲れを感じている
6. 私は自分らしさを持っていると思う
7. 私の未来には希望が持てないと感じる
8. 日ごろ精神的に疲れたと感じる
9. 周りの人に助けを求めれば応えてくれると思う
10. 自分の将来を真剣に考える気にはならない
11. 日々の生活で体がだるいと感じる
12. 周囲の人たちとの付き合いは退屈だと感じる
13. 自分の将来を考えるとうんざりする
14. 自分がひとりぼっちだという寂しさがある
15. 私は自分から進んで物事を行う熱意がないと感じる
16. 私は将来の目標を持って生きている
17. 私には本当に困ったときに助けてくれる人がいない
18. 私は自分がつまらない人間のように感じる
19. 私を本当に理解してくれる人は少ないと思う

3 ページ目

問2．次の項目はあなたの養育者のさまざまな態度や行動のリストです。あなたが高校生までの，あなたの養育者について，覚えている通りにもっとも適当と思える番号を選択してください（全25項目）

・質問項目

選択肢はすべて「1．まったく違う」～「4．非常にそうだ」

1．暖かく，親しみのある声で話しかけてくれた
2．私が必要とするほどは助けてくれなかった
3．私が好んでしたいと思うことをさせてくれた
4．情緒的には私に冷たいように思えた
5．私の抱えている問題や心配に理解を示してくれた
6．私に優しく，慈愛があった
7．私が自分自身で決定を下すのを好んだ
8．私に成長してほしくなかった
9．私のすることはすべてコントロールしようとした
10．私のプライバシーをおかした
11．私と物事について語り合うのを楽しんだ
12．よく私に微笑みかけた
13．私を子ども扱いしがちだった
14．私が必要としたり，欲していることを理解しているようには思えなかった
15．私自身に決定を下させた
16．私は求められていないと感じさせられた
17．取り乱しているときに気分をほぐしてくれた
18．私とは多くは話さなかった
19．私を養育者に依存させようとしていた
20．養育者がいなければ私は自分のことを処理できないと感じていた
21．私が望むだけの自由を与えてくれた
22．望むだけ外出させてくれた
23．過保護だった
24．私を誉めることはなかった
25．私が好むような服装をさせてくれた

4 ページ目

問3．以下の項目は，あなたが養育者から普段どのような援助をうけているのかをお伺いするものです。項目に示された援助に対する期待感を評定し，あてはまると思う番号を選択してください（全16項目）

・質問項目

選択肢はすべて「1．絶対ちがう」～「4．きっとそうだ」

1．あなたが落ち込んでいると，元気づけてくれる
2．あなたが失恋したと知ったら，心から同情してくれる
3．あなたに何かうれしいことが起きたとき，それを我が事のように喜んでくれる
4．あなたがどうにもならない状況に陥っても，なんとかしてくれる
5．あなたがする話には，いつもたいてい興味をもって耳を傾けてくれる
6．あなたが大切な試験に失敗したと知ったら，一生懸命なぐさめてくれる
7．あなたに元気がないと，すぐ気遣ってくれる
8．あなたが不満をぶちまけたいときは，はけ口になってくれる
9．あなたがミスをしても，そっとカバーしてくれる
10．あなたが何かを成し遂げたとき，心からおめでとうと言ってくれる
11．一人では終わらせられない仕事があった時は，快く手伝ってくれる
12．日頃からあなたの実力を評価し，認めてくれる
13．普段からあなたの気持ちをよく理解してくれる
14．あなたが学校での人間関係で悩んでいると知ったら，いろいろと解決方法をアドバイスしてくれる
15．良いところも悪いところもすべて含めて，あなたの存在を認めてくれる
16．あなたを心から愛している

5 ページ目

問4．次の項目を読んで，現在のあなたが感じている状態に最もよくあてはまると思う番号を選択してください（全24項目）

・質問項目

選択肢はすべて「1．まったく感じていない」～「4．非常に感じている」

1．活気のある
2．楽しい
3．充実した
4．陽気な
5．愉快な
6．元気な
7．快調な
8．やる気に満ちた
9．動揺した
10．びくびくした
11．うろたえた
12．恐ろしい
13．そわそわした
14．緊張した
15．驚いた
16．どきどきした
17．ゆっくりした
18．ゆったりした
19．平穏な
20．のどかな
21．のんきな
22．くつろいだ
23．平静な
24．静かな

6 ページ目

問5．問2，3について，それぞれどのような養育者を想定していましたか。それぞれの問いで想定した養育者との関係について，答えられる範囲で構いませんので回答してください（複数回答可）

・質問項目

選択肢はいずれも母，父，祖母，祖父，きょうだい，親戚（叔父や叔母など），その他（自由回答）

問 2（高校生までの養育者）で想定した人

問 3（現在の養育者）で想定した人

7 ページ目

アンケートは以上になります。最後に，学籍番号を記入してください。ご協力ありがとうございました！

学籍番号 *

回答を入力

※授業等で一斉に回答を送信した場合，回答が重複することがあるため，最後に学籍番号を尋ねていた。

付録 2

大学生の友人関係と日々の生活意識に関するアンケート調査

このアンケートは，修士論文の調査の一環で，大学生のみなさんの過去の友人関係と日々の生活意識についてお聞きするものです。お答えいただきましたデータは個人が特定されない形で統計的に処理され，他人にその内容が漏れる事は一切ありません。またここで収集したデータは，研究以外の目的で使用される事はありません。
アンケートの回答所要時間は約 15 分です。記入漏れの無いようにお願いします。ただし，回答の途中でどうしても答えたくない，答えるのが難しい項目があった場合，そこで回答をやめるか，回答をとばしても構いません。それによって何らかの不利益が生じることは一切ありません。
ご協力よろしくお願いします。

★アンケートに回答していただく前に、下記の項目にお答えください。

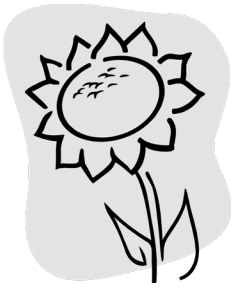
1）ご所属等

性別：（ 男性・女性 ）※どちらかに〇をしてください

年齢：（＿＿＿＿＿＿）歳

大学：（＿＿＿＿＿＿＿＿＿）大学

学年：（＿＿＿＿＿＿）年



★以降のアンケートへの回答の仕方

各質問の指示に従って，あてはまる番号 1 つに○をつけてください。回答例は以下の通りです。

問 1. 次の項目を読んで，最もよくあてはまると思う番号に○をつけてください。

		全くあてはまらない	あてはまらない	あてはまる	よくあてはまる	
1	大学が好きだ	1	2	3	4	回答の良い例
2	よく旅行に行く	1	2	3	4	
3	授業がつまらない	1	2	3	4	回答の悪い例

本調査に関しましてご質問等ございましたら下記までご連絡お願いします
中央大学大学院　文学研究科心理学専攻　修士 2 年　林　雅子
e-mail：a11.6e7f@g.chuo-u.ac.jp

（次のページへ進んでください）

問 1. あなたは以下の文章にあるような感じを，**普段の生活で**どの程度感じますか。**最もよくあてはまると思う番号に**○をつけてください。

		全くあてはまらない	あてはまらない	ややあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる	かなりあてはまる
1	日ごろ目的のない生活をしていて自分がだらけていると感じる	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
2	私の周りの人たちは面白みに欠けると思う	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
3	多忙な毎日で疲れて何もしたくなくなる	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
4	私は何事にも前向きに取り組む意欲があると思う	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
5	私は毎日の生活で疲れを感じている	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
6	私は自分らしさを持っていると思う	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
7	私の未来には希望が持てないと感じる	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
8	日ごろ精神的に疲れたと感じる	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
9	周りの人に助けを求めれば応えてくれると思う	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
10	自分の将来を真剣に考える気にはならない	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
11	日々の生活で体がだるいと感じる	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
12	周囲の人たちとの付き合いは退屈だと感じる	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
13	自分の将来を考えるとうんざりする	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
14	自分がひとりぼっちだという寂しさがある	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
15	私は自分から進んで物事を行う熱意がないと感じる	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
16	私は将来の目標を持って生きている	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
17	私には本当に困ったときに助けてくれる人がいない	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
18	私は自分がつまらない人間のように感じる	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
19	私を本当に理解してくれる人は少ないと思う	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**

問 2. 以下の項目で示される内容は，**中学生のときの**あなたにどの程度あてはまりますか。それぞれの項目について，**あてはまる番号に**○をつけてください。

		全くあてはまらない	あてはまらない	ややあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる	とてもあてはまる
1	友だちと 2 人きりでいる場面は苦手だった	1	2	3	4	5	6
2	できれば給食やお弁当は一人で食べたかった	1	2	3	4	5	6
3	人と雑談するのは苦手だった	1	2	3	4	5	6
4	給食やお弁当は友だちと一緒に食べるのが好きだった	1	2	3	4	5	6
5	友だち数人でいる場面は苦手だった	1	2	3	4	5	6
6	友だちと一緒にいるよりも一人でいる方が気が楽だった	1	2	3	4	5	6
7	人間と関わるよりも物と付き合っている方が楽だった	1	2	3	4	5	6
8	人といる場面で，言葉がなくなってしーんとしてしまわないかと不安になった	1	2	3	4	5	6
9	友だちと一緒に食事をするのは好きでなかった	1	2	3	4	5	6
10	他人の本音で，自分が傷つけられそうな気がした	1	2	3	4	5	6
11	他人とちょうどよい距離をとるのが難しかった	1	2	3	4	5	6
12	人といても話題がなくて困ることが多かった	1	2	3	4	5	6
13	一人で趣味に没頭していたかった	1	2	3	4	5	6
14	大勢の友だちとワイワイ騒ぐのが好きだった	1	2	3	4	5	6
15	他の人は自分を受け入れてくれなかった	1	2	3	4	5	6
16	他人と親しくなるのはうっとうしかった	1	2	3	4	5	6
17	できることなら人とあまり関わりたくなかった	1	2	3	4	5	6

（次のページへ進んでください）

問 3．以下の項目で示される内容は，**高校生のときの**あなたにどの程度あてはまりますか。それぞれの項目について，**あてはまる番号に**○をつけてください。

		全くあてはまらない	あてはまらない	ややあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる	とてもあてはまる
1	友だちと 2 人きりでいる場面は苦手だった	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
2	できれば食事は一人でとりたかった	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
3	人と雑談するのは苦手だった	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
4	昼食は友だちと一緒に食べるのが好きだった	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
5	友だち数人でいる場面は苦手だった	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
6	友だちと一緒にいるよりも一人でいる方が気が楽だった	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
7	人間と関わるよりも物と付き合っている方が楽だった	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
8	人といる場面で，言葉がなくなってしーんとしてしまわないかと不安になった	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
9	友だちと一緒に食事をするのは好きでなかった	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
10	他人の本音で，自分が傷つけられそうな気がした	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
11	他人とちょうどよい距離をとるのが難しかった	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
12	人といても話題がなくて困ることが多かった	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
13	一人で趣味に没頭していたかった	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
14	大勢の友だちとワイワイ騒ぐのが好きだった	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
15	他の人は自分を受け入れてくれなかった	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
16	他人と親しくなるのはうっとうしかった	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
17	できることなら人とあまり関わりたくなかった	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**

問 4．以下の項目は，あなたが**友人から普段どのような援助をうけているのか**をお伺いするものです。項目に示された援助に対する期待感を評定し，**あてはまると思う番号に**○をつけてください。対象と考える友人は誰か特定の人でも結構ですし，何人かの人たちのことでも結構です。

		絶対ちがう	たぶんちがう	たぶんそうだ	きっとそうだ
1	あなたが落ち込んでいると，元気づけてくれる	1	2	3	4
2	あなたが失恋したと知ったら，心から同情してくれる	1	2	3	4
3	あなたに何かうれしいことが起きたとき，それを我が事のように喜んでくれる	1	2	3	4
4	あなたがどうにもならない状況に陥っても，なんとかしてくれる	1	2	3	4
5	あなたがする話には，いつもたいてい興味をもって耳を傾けてくれる	1	2	3	4
6	あなたが大切な試験に失敗したと知ったら，一生懸命なぐさめてくれる	1	2	3	4
7	あなたに元気がないと，すぐ気遣ってくれる	1	2	3	4
8	あなたが不満をぶちまけたいときは，はけ口になってくれる	1	2	3	4
9	あなたがミスをしても，そっとカバーしてくれる	1	2	3	4
10	あなたが何かを成し遂げたとき，心からおめでとうと言ってくれる	1	2	3	4
11	一人では終わらせられない仕事があった時は，快く手伝ってくれる	1	2	3	4
12	日頃からあなたの実力を評価し，認めてくれる	1	2	3	4
13	普段からあなたの気持ちをよく理解してくれる	1	2	3	4
14	あなたが学校での人間関係で悩んでいると知ったら，いろいろと解決方法をアドバイスしてくれる	1	2	3	4
15	良いところも悪いところもすべて含めて，あなたの存在を認めてくれる	1	2	3	4
16	あなたを心から愛している	1	2	3	4

（次のページへ進んでください）

問 5. 次の項目を読んで，**現在の**あなたが感じている状態に**最もよくあてはまると思う番号に**○をつけてください。

		まったく感じていない	感じていない	感じている	非常に感じている
1	活気のある	**1**	**2**	**3**	**4**
2	楽しい	**1**	**2**	**3**	**4**
3	充実した	**1**	**2**	**3**	**4**
4	陽気な	**1**	**2**	**3**	**4**
5	愉快な	**1**	**2**	**3**	**4**
6	元気な	**1**	**2**	**3**	**4**
7	快調な	**1**	**2**	**3**	**4**
8	やる気に満ちた	**1**	**2**	**3**	**4**
9	動揺した	**1**	**2**	**3**	**4**
10	びくびくした	**1**	**2**	**3**	**4**
11	うろたえた	**1**	**2**	**3**	**4**
12	恐ろしい	**1**	**2**	**3**	**4**
13	そわそわした	**1**	**2**	**3**	**4**
14	緊張した	**1**	**2**	**3**	**4**
15	驚いた	**1**	**2**	**3**	**4**
16	どきどきした	**1**	**2**	**3**	**4**
17	ゆっくりした	**1**	**2**	**3**	**4**
18	ゆったりした	**1**	**2**	**3**	**4**
19	平穏な	**1**	**2**	**3**	**4**
20	のどかな	**1**	**2**	**3**	**4**
21	のんきな	**1**	**2**	**3**	**4**
22	くつろいだ	**1**	**2**	**3**	**4**
23	平静な	**1**	**2**	**3**	**4**
24	静かな	**1**	**2**	**3**	**4**

問 6. 問 2～4 について，それぞれ**どのような友人を想定**していましたか。それぞれの問いで想定した友人の性別や人数，関係について，答えられる範囲で構いませんので回答してください。

★回答例

問 2（中学時代の友人）：	同性	・	異性	（ 3 ）人	関係（	クラスメイト ）
問 3（高校時代の友人）：	同性	・	異性	（ 2 ）人	関係（	親友 ）
問 4（現在の友人）：	同性	・	異性	（ 1 ）人	関係（	同じゼミの人 ）

問 2（中学時代の友人）： 同性 ・ 異性 （ ）人 関係（ ）

問 3（高校時代の友人）： 同性 ・ 異性 （ ）人 関係（ ）

問 4（現在の友人）： 同性 ・ 異性 （ ）人 関係（ ）

★その他お気づきの点・感想等がありましたらご自由にお書きください。

以上でアンケートは終了です。
お手数ですが，もう一度回答を見直して，記入漏れが無いか確認をお願いします。
ご協力ありがとうございました。

付録 3

大学生の教師との関係と日々の生活意識に関するアンケート調査

このアンケートは，修士論文の調査の一環で，大学生のみなさんの過去の教師との関係と日々の生活意識についてお聞きするものです。お答えいただきましたデータは個人が特定されない形で統計的に処理され，他人にその内容が漏れる事は一切ありません。またここで収集したデータは，研究以外の目的で使用される事はありません。

アンケートの回答所要時間は約 15 分です。記入漏れの無いようにお願いします。ただし，回答の途中でどうしても答えたくない，答えるのが難しい項目があった場合，そこで回答をやめるか，回答をとばしても構いません。それによって何らかの不利益が生じることは一切ありません。

ご協力よろしくお願いします。

★アンケートに回答していただく前に、下記の項目にお答えください。

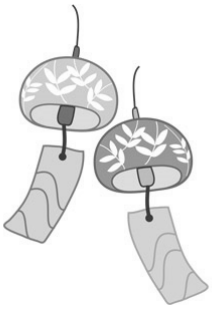
1）ご所属等

性別：（ 男性・女性 ）※どちらかに〇をしてください

年齢：（＿＿＿＿＿＿）歳

大学：（＿＿＿＿＿＿＿＿）大学

学年：（＿＿＿＿＿＿）年



★以降のアンケートへの回答の仕方

各質問の指示に従って，あてはまる番号 1 つに○をつけてください。回答例は以下の通りです。

問 1. 次の項目を読んで，最もよくあてはまると思う番号に○をつけてください。

		全くあてはまらない	あてはまらない	あてはまる	よくあてはまる	
1	大学が好きだ	1	2	3	4	回答の良い例
2	よく旅行に行く	1	2	3	4	
3	授業がつまらない	1	2	3	4	回答の悪い例

本調査に関しましてご質問等ございましたら下記までご連絡お願いします

中央大学大学院　文学研究科心理学専攻　修士 2 年　林　雅子

e-mail：a11.6e7f@g.chuo-u.ac.jp

（次のページへ進んでください）

問 1. あなたは以下の文章にあるような感じを，**普段の生活で**どの程度感じますか。**最もよくあてはまると思う番号に**○をつけてください。

		全くあてはまらない	あてはまらない	ややあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる	かなりあてはまる
1	日ごろ目的のない生活をしていて自分がだらけていると感じる	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
2	私の周りの人たちは面白みに欠けると思う	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
3	多忙な毎日で疲れて何もしたくなくなる	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
4	私は何事にも前向きに取り組む意欲があると思う	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
5	私は毎日の生活で疲れを感じている	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
6	私は自分らしさを持っていると思う	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
7	私の未来には希望が持てないと感じる	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
8	日ごろ精神的に疲れたと感じる	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
9	周りの人に助けを求めれば応えてくれると思う	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
10	自分の将来を真剣に考える気にはならない	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
11	日々の生活で体がだるいと感じる	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
12	周囲の人たちとの付き合いは退屈だと感じる	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
13	自分の将来を考えるとうんざりする	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
14	自分がひとりぼっちだという寂しさがある	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
15	私は自分から進んで物事を行う熱意がないと感じる	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
16	私は将来の目標を持って生きている	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
17	私には本当に困ったときに助けてくれる人がいない	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
18	私は自分がつまらない人間のように感じる	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**
19	私を本当に理解してくれる人は少ないと思う	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**

問 2. 以下に挙げられている先生と生徒の関係を言い表す文を読んで，**中学生の時の**あなたが思っていたことに**最もよくあてはまると思う番号に**○をつけてください。回答の際は，**特定の先生**を思い浮かべて答えてください。

		全くそう思わなかった	あまりそう思わなかった	少しそう思った	非常にそう思った
1	先生は私を大事にしてくれていると感じた	**1**	**2**	**3**	**4**
2	先生なら私との約束や秘密を守ってくれると思った	**1**	**2**	**3**	**4**
3	私が失敗したとき，先生なら私の失敗をかばってくれると思った	**1**	**2**	**3**	**4**
4	先生はいつも私のことを気にかけてくれると思った	**1**	**2**	**3**	**4**
5	先生は私の立場で気持ちを理解してくれていると思った	**1**	**2**	**3**	**4**
6	先生は言っていることと，やっていることに矛盾があると思った	**1**	**2**	**3**	**4**
7	私が不安なとき，先生に話を聞いてもらうと安心した	**1**	**2**	**3**	**4**
8	先生は自分の機嫌で態度が変わると思った	**1**	**2**	**3**	**4**
9	先生は自分の考えを押し付けてくると思った	**1**	**2**	**3**	**4**
10	たとえ間違っているときでも，先生は自分の間違いを認めないと思った	**1**	**2**	**3**	**4**
11	将来のことがわからないときは先生に相談してみようという気になった	**1**	**2**	**3**	**4**
12	先生は一部の人を，ひいきしていると思った	**1**	**2**	**3**	**4**
13	先生の考え方は否定的だと思った	**1**	**2**	**3**	**4**
14	先生と話していると困難なことに立ち向かう勇気がわいた	**1**	**2**	**3**	**4**
15	先生にならいつでも相談ができると感じた	**1**	**2**	**3**	**4**
16	私は先生と話すと気持ちが楽になることがあった	**1**	**2**	**3**	**4**
17	先生は威張っているように感じた	**1**	**2**	**3**	**4**
18	私が悩んでいるとき，先生が私を支えてくれていると感じた	**1**	**2**	**3**	**4**
19	先生は一度言ったことを，ころころ変えると感じた	**1**	**2**	**3**	**4**
20	先生の性格には裏表があるように感じた	**1**	**2**	**3**	**4**
21	先生は他の生徒と私を比べていると感じた	**1**	**2**	**3**	**4**

（次のページへ進んでください）

問 3. 以下に挙げられている先生と生徒の関係を言い表す文を読んで，**高校生の時の**あなたが思っていたことに**最もよくあてはまると思う番号に**○をつけてください。回答の際は，**特定の先生**を思い浮かべて答えてください。

		全くそう思わなかった	あまりそう思わなかった	少しそう思った	非常にそう思った
1	先生は私を大事にしてくれていると感じた	**1**	**2**	**3**	**4**
2	先生なら私との約束や秘密を守ってくれると思った	**1**	**2**	**3**	**4**
3	私が失敗したとき，先生なら私の失敗をかばってくれると思った	**1**	**2**	**3**	**4**
4	先生はいつも私のことを気にかけてくれると思った	**1**	**2**	**3**	**4**
5	先生は私の立場で気持ちを理解してくれていると思った	**1**	**2**	**3**	**4**
6	先生は言っていることと，やっていることに矛盾があると思った	**1**	**2**	**3**	**4**
7	私が不安なとき，先生に話を聞いてもらうと安心した	**1**	**2**	**3**	**4**
8	先生は自分の機嫌で態度が変わると思った	**1**	**2**	**3**	**4**
9	先生は自分の考えを押し付けてくると思った	**1**	**2**	**3**	**4**
10	たとえ間違っているときでも，先生は自分の間違いを認めないと思った	**1**	**2**	**3**	**4**
11	将来のことがわからないときは先生に相談してみようという気になった	**1**	**2**	**3**	**4**
12	先生は一部の人を，ひいきしていると思った	**1**	**2**	**3**	**4**
13	先生の考え方は否定的だと思った	**1**	**2**	**3**	**4**
14	先生と話していると困難なことに立ち向かう勇気がわいた	**1**	**2**	**3**	**4**
15	先生にならいつでも相談ができると感じた	**1**	**2**	**3**	**4**
16	私は先生と話すと気持ちが楽になることがあった	**1**	**2**	**3**	**4**
17	先生は威張っているように感じた	**1**	**2**	**3**	**4**
18	私が悩んでいるとき，先生が私を支えてくれていると感じた	**1**	**2**	**3**	**4**
19	先生は一度言ったことを，ころころ変えると感じた	**1**	**2**	**3**	**4**
20	先生の性格には裏表があるように感じた	**1**	**2**	**3**	**4**
21	先生は他の生徒と私を比べていると感じた	**1**	**2**	**3**	**4**

問 4．以下の項目は，**現在の**あなたが**大学の教師から普段どのような援助をうけているのか**をお伺いするものです。項目に示された援助に対する期待感を評定し，**あてはまると思う番号に**○をつけてください。

		絶対ちがう	たぶんちがう	たぶんそうだ	きっとそうだ
1	あなたが落ち込んでいると，元気づけてくれる	**1**	**2**	**3**	**4**
2	あなたが失恋したと知ったら，心から同情してくれる	**1**	**2**	**3**	**4**
3	あなたに何かうれしいことが起きたとき，それを我が事のように喜んでくれる	**1**	**2**	**3**	**4**
4	あなたがどうにもならない状況に陥っても，なんとかしてくれる	**1**	**2**	**3**	**4**
5	あなたがする話には，いつもたいてい興味をもって耳を傾けてくれる	**1**	**2**	**3**	**4**
6	あなたが大切な試験に失敗したと知ったら，一生懸命なぐさめてくれる	**1**	**2**	**3**	**4**
7	あなたに元気がないと，すぐ気遣ってくれる	**1**	**2**	**3**	**4**
8	あなたが不満をぶちまけたいときは，はけ口になってくれる	**1**	**2**	**3**	**4**
9	あなたがミスをしても，そっとカバーしてくれる	**1**	**2**	**3**	**4**
10	あなたが何かを成し遂げたとき，心からおめでとうと言ってくれる	**1**	**2**	**3**	**4**
11	一人では終わらせられない仕事があった時は，快く手伝ってくれる	**1**	**2**	**3**	**4**
12	日頃からあなたの実力を評価し，認めてくれる	**1**	**2**	**3**	**4**
13	普段からあなたの気持ちをよく理解してくれる	**1**	**2**	**3**	**4**
14	あなたが学校での人間関係で悩んでいると知ったら，いろいろと解決方法をアドバイスしてくれる	**1**	**2**	**3**	**4**
15	良いところも悪いところもすべて含めて，あなたの存在を認めてくれる	**1**	**2**	**3**	**4**
16	あなたを心から愛している	**1**	**2**	**3**	**4**

（次のページへ進んでください）

問 5. 次の項目を読んで，**現在の**あなたが感じている状態に**最もよくあてはまると思う番号に**○をつけてください。

		まったく感じていない	感じていない	感じている	非常に感じている
1	活気のある	**1**	**2**	**3**	**4**
2	楽しい	**1**	**2**	**3**	**4**
3	充実した	**1**	**2**	**3**	**4**
4	陽気な	**1**	**2**	**3**	**4**
5	愉快な	**1**	**2**	**3**	**4**
6	元気な	**1**	**2**	**3**	**4**
7	快調な	**1**	**2**	**3**	**4**
8	やる気に満ちた	**1**	**2**	**3**	**4**
9	動揺した	**1**	**2**	**3**	**4**
10	びくびくした	**1**	**2**	**3**	**4**
11	うろたえた	**1**	**2**	**3**	**4**
12	恐ろしい	**1**	**2**	**3**	**4**
13	そわそわした	**1**	**2**	**3**	**4**
14	緊張した	**1**	**2**	**3**	**4**
15	驚いた	**1**	**2**	**3**	**4**
16	どきどきした	**1**	**2**	**3**	**4**
17	ゆっくりした	**1**	**2**	**3**	**4**
18	ゆったりした	**1**	**2**	**3**	**4**
19	平穏な	**1**	**2**	**3**	**4**
20	のどかな	**1**	**2**	**3**	**4**
21	のんきな	**1**	**2**	**3**	**4**
22	くつろいだ	**1**	**2**	**3**	**4**
23	平静な	**1**	**2**	**3**	**4**
24	静かな	**1**	**2**	**3**	**4**

問 6. 問 2～4 について，それぞれ**どのような教師を想定**していましたか。それぞれの問いで想定した教師の性別や人数，関係について，答えられる範囲で構いませんので回答してください。

★回答例

問 2（中学時代の教師）：	同性	・	異性	（ 1 ）人	関係（	担任の先生 ）
問 3（高校時代の教師）：	同性	・	異性	（ 1 ）人	関係（	部活の先生 ）
問 4（現在の教師）：	同性	・	異性	（ 1 ）人	関係（	ゼミの教授 ）

問 2（中学時代の教師）： 同性 ・ 異性 （ ）人 関係（ ）

問 3（高校時代の教師）： 同性 ・ 異性 （ ）人 関係（ ）

問 4（現在の教師）： 同性 ・ 異性 （ ）人 関係（ ）

★その他お気づきの点・感想等がありましたらご自由にお書きください。

以上でアンケートは終了です。
お手数ですが，もう一度回答を見直して，記入漏れが無いか確認をお願いします。
ご協力ありがとうございました。

付録 4

大学生の生活態度と意識に関するアンケート調査

このアンケートは，博士論文の調査の一環で，大学生のみなさんの日々の生活意識や大学生活の過ごし方についてお聞きするものです。全 3 回にわたって同じ内容の調査を行います。そのため，データの特定のために，ご自身の携帯電話またはスマートフォンの電話番号の下４桁を記入していただくようお願いします。

お答えいただきましたデータは個人が特定されない形で統計的に処理され，他人にその内容が漏れる事は一切ありません。またここで収集したデータは，研究以外の目的で使用される事はありません。

アンケートは全部で 7 ページあり，回答所要時間は約 15 分です。記入漏れの無いようにお願いします。ただし，回答の途中でどうしても答えたくない，答えるのが難しい項目があった場合，そこで回答をやめるか，回答をとばしても構いません。それによって何らかの不利益が生じることは一切ありません。

ご協力よろしくお願いします。

★アンケートに回答していただく前に、下記の項目にお答えください。

1）ご所属等

性別：（＿＿＿＿＿＿）

年齢：（＿＿＿＿＿＿）歳

学部：（＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）※正式名称でお答えください

学年：（＿＿＿＿＿＿）年

携帯・スマートフォンの電話番号の下４桁（＿＿＿＿＿＿＿＿）

★以降のアンケートへの回答の仕方

各質問の指示に従って，あてはまる番号 1 つに〇をつけてください。回答例は以下の通りです。

問 1. 次の項目を読んで，最もよくあてはまると思う番号に〇をつけてください。

		全くあてはまらない	あてはまらない	あてはまる	よくあてはまる	
1	大学が好きだ	1	2	3	4	回答の良い例
2	よく旅行に行く	1	2	3	4	回答の悪い例

本調査に関しましてご質問等ございましたら下記までご連絡お願いします
林　雅子　e-mail：m.hayashi.lecture@gmail.com

問 1（全 19 問）．あなたは以下の文章にあるような感じを，**普段の生活で**どの程度感じますか。**最もよくあてはまると思う番号に○**をつけてください。

		全くあてはまらない	あてはまらない	ややあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる	かなりあてはまる
1	日ごろ目的のない生活をしていて自分がだらけていると感じる	1	2	3	4	5	6
2	私の周りの人たちは面白みに欠けると思う	1	2	3	4	5	6
3	多忙な毎日で疲れて何もしたくなくなる	1	2	3	4	5	6
4	私は何事にも前向きに取り組む意欲があると思う	1	2	3	4	5	6
5	私は毎日の生活で疲れを感じている	1	2	3	4	5	6
6	私は自分らしさを持っていると思う	1	2	3	4	5	6
7	私の未来には希望が持てないと感じる	1	2	3	4	5	6
8	日ごろ精神的に疲れたと感じる	1	2	3	4	5	6
9	周りの人に助けを求めれば応えてくれると思う	1	2	3	4	5	6
10	自分の将来を真剣に考える気にはならない	1	2	3	4	5	6
11	日々の生活で体がだるいと感じている	1	2	3	4	5	6
12	周囲の人たちとの付き合いは退屈だと感じる	1	2	3	4	5	6
13	自分の将来を考えるとうんざりする	1	2	3	4	5	6
14	自分がひとりぼっちだという寂しさがある	1	2	3	4	5	6
15	私は自分から進んで物事を行う熱意がないと感じる	1	2	3	4	5	6
16	私は将来の目標を持って生きている	1	2	3	4	5	6
17	私には本当に困ったときに助けてくれる人がいない	1	2	3	4	5	6
18	私は自分がつまらない人間のように感じる	1	2	3	4	5	6
19	私を本当に理解してくれる人は少ないと思う	1	2	3	4	5	6

問 2（全 15 問）．以下の項目で示される内容は，あなたが**大学生活を送る中で**どの程度あてはまりますか。それぞれの項目について，**あてはまる番号に○**をつけてください。

		全くあてはまらない	どちらかといえばあてはまらない	どちらともいえない	どちらかといえばあてはまる	非常にあてはまる
1	授業に出る気がしない	1	2	3	4	5
2	教師に言われなくても自分から進んで勉強する	1	2	3	4	5
3	朝寝坊などで授業に遅れることが多い	1	2	3	4	5
4	学生生活で打ち込むものがない	1	2	3	4	5
5	何となく授業をさぼることがある	1	2	3	4	5
6	勉強に関する本を読んでいてもすぐに飽きてしまう	1	2	3	4	5
7	大学ではいろいろな人と交流がある	1	2	3	4	5
8	大学からの連絡事項を見落としてしまうことが多い	1	2	3	4	5
9	勉強で疑問に思ったことはすぐ調べる	1	2	3	4	5
10	大学にいるより，自分ひとりでいるほうがいい	1	2	3	4	5
11	必要な単位以外でも，関心のある授業はとるようにしている	1	2	3	4	5
12	授業の課題の提出が遅れたり，出さなかったりすることがある	1	2	3	4	5
13	大学での時間は自分の生活の中で有意義な時間である	1	2	3	4	5
14	大学で勉強することで自分の関心を深めている	1	2	3	4	5
15	大学のなかで自分の居場所がないと感じる	1	2	3	4	5

（次のページへ進んでください）

問 3（全 35 問）．p. 2 の問 1，p. 3 の問 2 のご自身の**回答**をもう一度，簡単に**見返してください**。

問 1, 2 で答えた内容に対して，**どのように感じていますか**。以下の項目について，**あてはまる番号に○**をつけてください。

		全くあてはまらない	あてはまらない	ややあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる	とてもあてはまる
1	他人に寛容になれると感じる	1	2	3	4	5	6
2	周りにあるものを見て楽しめていると感じる	1	2	3	4	5	6
3	不安を感じる	1	2	3	4	5	6
4	焦りを感じる	1	2	3	4	5	6
5	いらいらしていると感じる	1	2	3	4	5	6
6	時間を追われていると感じる	1	2	3	4	5	6
7	自分のことだけでなく人のことも考えられると感じる	1	2	3	4	5	6
8	他人のことも思いやれる余裕があると感じる	1	2	3	4	5	6
9	気持ちの余裕があると感じる	1	2	3	4	5	6
10	心から笑えると感じる	1	2	3	4	5	6
11	前向きにものごとを考えられていると感じる	1	2	3	4	5	6
12	自分の好きなことができていると感じる	1	2	3	4	5	6
13	自分の気持ちを素直に受け入れていると感じる	1	2	3	4	5	6
14	自分のことで精一杯だと感じる	1	2	3	4	5	6
15	人と笑顔で接していると感じる	1	2	3	4	5	6
16	心が落ち着いていると感じる	1	2	3	4	5	6
17	なんだか つらいと感じる	1	2	3	4	5	6
18	自分の生活に満足していると感じる	1	2	3	4	5	6

	問 1，2 に対する意識，続き	全くあてはまらない	あてはまらない	ややあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる	とてもあてはまる
19	充実感を感じる	1	2	3	4	5	6
20	毎日が楽しいと感じる	1	2	3	4	5	6
21	生きがいがあると感じる	1	2	3	4	5	6
22	感謝したくなることがあると感じる	1	2	3	4	5	6
23	柔軟な考えや姿勢を持っていると感じる	1	2	3	4	5	6
24	感情を素直に表現していると感じる	1	2	3	4	5	6
25	自分はのびのびと生きていると感じる	1	2	3	4	5	6
26	こころと身体が一体となって動いていると感じる	1	2	3	4	5	6
27	いろいろなことが気になってしょうがないと感じる	1	2	3	4	5	6
28	息苦しい感じがする	1	2	3	4	5	6
29	きつい，つかれたと感じる	1	2	3	4	5	6
30	心身ともに満たされている感じがする	1	2	3	4	5	6
31	無理していない感じがする	1	2	3	4	5	6
32	ちょっとしたことを不満に感じる	1	2	3	4	5	6
33	何もかもわずらわしいと感じる	1	2	3	4	5	6
34	おしつぶされそうな感じがする	1	2	3	4	5	6
35	安心感があると感じる	1	2	3	4	5	6

（次のページへ進んでください）

問 4（全 24 問）．次の項目を読んで，**現在の**あなたが感じている状態に**最もよくあてはまると思う番号に○**をつけてください。

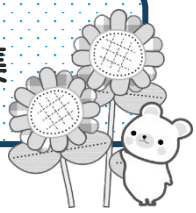
		まったく感じていない	感じていない	感じている	非常に感じている
1	活気のある	1	2	3	4
2	楽しい	1	2	3	4
3	充実した	1	2	3	4
4	陽気な	1	2	3	4
5	愉快な	1	2	3	4
6	元気な	1	2	3	4
7	快調な	1	2	3	4
8	やる気に満ちた	1	2	3	4
9	動揺した	1	2	3	4
10	びくびくした	1	2	3	4
11	うろたえた	1	2	3	4
12	恐ろしい	1	2	3	4
13	そわそわした	1	2	3	4
14	緊張した	1	2	3	4
15	驚いた	1	2	3	4
16	どきどきした	1	2	3	4
17	ゆっくりした	1	2	3	4
18	ゆったりした	1	2	3	4
19	平穏な	1	2	3	4
20	のどかな	1	2	3	4
21	のんきな	1	2	3	4
22	くつろいだ	1	2	3	4
23	平静な	1	2	3	4
24	静かな	1	2	3	4

★その他お気づきの点・感想等がありましたらご自由にお書きください。

以上でアンケートは終了です。
お手数ですが，もう一度回答を見直して，記入漏れが無いか確認をお願いします。
ご協力ありがとうございました。

付録 5

アンケート＆インタビュー調査の参加者募集



皆さま　こんにちは

　私は，中央大学大学院文学研究科心理学専攻に在籍する林雅子と申します。現在博士論文の研究の一環で，アンケート調査とインタビュー調査の募集を行っています。以下に，それぞれの調査の概要を掲載しています。興味のある方は，ぜひご参加ください。

✧アンケート調査

【日程】8 月上旬～中旬

【対象】大学 1 年生～4 年生（できれば 3 年生以上，男性の回答が多いとありがたいです）

【形式】Google フォームにて回答（URL と QR コードはこちら→）

【時間】約 10～15 分程度

【内容】大学生の普段の生活の過ごし方や対人関係について

https://forms.gle/tjNNU7wwm7MyZKSx7

✧インタビュー調査

【日程】8 月 9 日～28 日

【対象】大学 1 年生～4 年生 20～30 名程度（男性 10～15 名，女性 10～15 名）

【形式】Zoom 等オンライン上で行う

【時間】約 20～25 分程度

【内容】大学生の過去・現在の対人関係や勉学に対する姿勢について

【謝礼】QUO カード Pay1500 円相当

※インタビューの際に，IC レコーダーによる録音へのご協力をよろしくお願いします。音声データは公開されず，研究以外の目的で使用されることはありません。また，参加にあたって，特別な知識や能力等は不要です。

※参加希望の方は，Google フォームから参加可能な日時，連絡先などの情報を記入してください（URL と QR コードはこちら→）。回答後 1～2 日以内に，私（a11.6e7f@g.chuo-u.ac.jp）からインタビュー調査の日程や手順に関して折り返しご連絡いたします。

　ご協力よろしくお願いします！

調査に関してご質問等ある方はこちらへ↓
中央大学大学院 文学研究科 心理学専攻　林 雅子
連絡先：a11.6e7f@g.chuo-u.ac.jp

https://forms.gle/DUafHS54Kp8wXjeEA

スケジュール確認 1 ページ目

インタビュー調査のスケジュール確認

（共有なし）

アカウントを切り替える

*必須

このアンケートは，インタビュー調査の日程や形式についてお聞きするものになります。
お答えいただいた内容が第三者に漏れることは一切ありません。また、研究以外の目的で使用されることもありません。ご理解とご協力よろしくお願いします。

1ページ目では，8月23日～9月11日までの都合の良い日程をお聞きします（※日程を延長しました）。他の学生と日程が重なり調整することもあるので，なるべく複数挙げてください。インタビュー調査にかかる時間はおよそ30分前後になります。

問 1．8 月 23～9 月 11 日の間で都合の良い日をすべて選択してください（複数回答可）
8 月 23 日（月），24 日（火），25 日（水），26 日（木），27 日（金），28 日（土），30 日（月），31 日（火），9 月 1 日（水），2 日（木），3 日（金），4 日（土），6 日（月），7 日（火），8 日（水），9 日（木），10 日（金），11 日（土）

問 2．上記の質問で選んだ日付（8 月 23 日～9 月 11 日）の内，希望する時間帯があれば教えてください（複数回答可）
午前（9 時～12 時），午後（13 時～16 時），夜（17 時～20 時）

問 3．時間帯について，細かい指定があったらお答えください（例えば，問 2 で「午前」を選択し，「10 時から希望」など）

2 ページ目

連絡先等の確認

2ページ目では，インタビュー調査で使用するオンラインの形式と，連絡先等あなたの情報についてお聞きします。連絡先は今後，日程の調整やリマインドのメールを送る際に必要なので，打ち間違いの無いようよく確認をお願いします。

インタビュー調査は基本的に Zoom を使用する予定です。しかし，通信環境等の不具合で他のオンライン形式を使用することもあります。以下の選択肢から，使用可能なオンラインの形式をすべて選んでください。

Zoom，Webex，Skype，その他（自由回答）

以下に，あなたに関する事柄をお答えください。インタビュー調査の際に必要な情報であって，第三者に情報が漏れることはありません。よろしくお願いします。

今後日程調整等のやり取りをする際の，メールアドレスをお書きください。打ち間違いが無いか，よく確認してください。

性別（男，女，その他から選択）
年齢（18，19，20，21，22，23，24，25～から選択）
大学名
学部名
学年（1 年，2 年，3 年，4 年以上から選択）
お名前

謝礼（1500 円）は QUO カード Pay でお支払いします。しかし，希望があれば他の支払い方法に変更可能です。変更を希望される方は，以下の選択肢からお選びください。※その他の場合，支払い方法によっては対応が難しいです。ご了承ください。

Amazon ギフト券（E メールタイプ），銀行振込，その他（自由回答）

アンケートは以上になります。回答後，1～2日以内にお答えいただいたメールアドレスに，日程についての連絡をします。ご協力ありがとうございました！

同意書

インタビュー調査の同意依頼

こちらは，インタビュー調査に関する諸注意をまとめたものになります。以下の事項を確認し，同意していただけた場合は最後に日付と名前をご記入ください。よろしくお願いします。

インタビュー調査の概要
この調査は，博士論文作成のための研究の一環で，大学生の過去・現在の対人関係や勉学に対する姿勢について20～30分程度の時間をかけてお聞きするものになります。
調査者の氏名：林雅子
連絡先：a11.6e7f@g.chuo-u.ac.jp

以下の確認事項をお読みください。
◇調査への参加は強制ではありません。インタビュー中でも，回答が難しい，気分が優れないといった場合は，いつでも調査の中止を求めることができます。また，答えにくい質問への回答を拒否することもできます。

◇インタビュー中は，回答内容だけでなく，参加者の様子も記録するため，録画を行います。
ただし，録画が難しい場合はICレコーダーによる録音のみでも構いません。インタビュー開始時に確認するため，自分に合った記録方法を選択してください。なお，インタビュー中でも，録音，録画を停止することができます。

◇調査の記録が博士論文研究以外の目的で使用されることはありません。論文内でも，参加者のプライバシーが侵害されないよう，個人名や所属先は伏せられます。

◇調査の記録は厳重に保管され，調査者以外がその内容を知ることはできません。また，論文使用後は，調査の記録ファイルはすべて調査者が責任を持って破棄・消去します。

調査の結果について，フィードバックを希望しますか。希望された場合，以前回答したメールアドレスに送付されます。

希望しない，希望する

同意書続き

その他，ご意見やご要望がありましたら，以下にご記入ください。

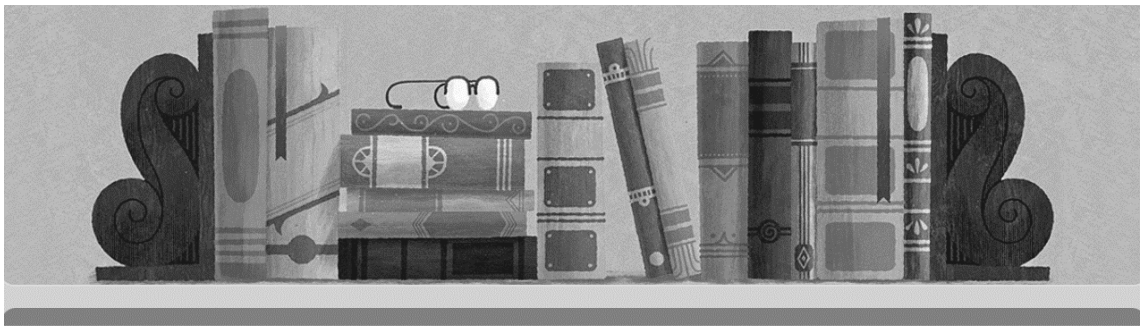
氏名

日付（カレンダーより選択）

調査について同意していただきありがとうございます！　インタビュー調査でお会いできるのを楽しみにしております。

付録 6

1 ページ目



大学生の対人関係と日々の生活意識に関するアンケート調査

（共有なし）

アカウントを切り替える

*必須

このアンケートは，大学生のみなさんの対人関係や日々の生活意識についてお聞きするものです（全7ページ，所要時間 約15分）。

お答えいただきましたデータは個人が特定されない形で統計的に処理され，他人にその内容が漏れる事は一切ありません。またここで収集したデータは，研究以外の目的で使用される事はありません。

ただし，回答の途中でどうしても答えたくない，答えるのが難しい項目があった場合，そこで回答を中断していただいて構いません。それによって何らかの不利益が生じることは一切ありません。

ご協力よろしくお願いします。

・質問項目（選択肢）

性別（男，女，その他から選択）

年齢（18，19，20，21，22，23，24，25～から選択）

大学名

学部名

学年（1 年，2 年，3 年，4 年以上から選択）

留学生ですか（はい，いいえ）

2 ページ目

(2/7) 以下の問1，問2について説明をよく読んで回答してください

問1．あなたは以下の文章にあるような感じを，普段の生活でどの程度感じますか。最もよくあてはまると思う番号を選択してください（全15項目）

・質問項目

選択肢はすべて「1．全くあてはまらない」～「6．かなりあてはまる」

1. 日ごろ目的のない生活をしていて自分がだらけていると感じる
2. 私の周りの人たちは面白みに欠けると思う
3. 私は何事にも前向きに取り組む意欲があると思う
4. 私は自分らしさを持っていると思う
5. 私の未来には希望が持てないと感じる
6. 周りの人に助けを求めれば応えてくれると思う
7. 自分の将来を真剣に考える気にはならない
8. 周囲の人たちとの付き合いは退屈だと感じる
9. 自分の将来を考えるとうんざりする
10. 自分がひとりぼっちだという寂しさがある
11. 私は自分から進んで物事を行う熱意がないと感じる
12. 私は将来の目標を持って生きている
13. 私には本当に困ったときに助けてくれる人がいない
14. 私は自分がつまらない人間のように感じる
15. 私を本当に理解してくれる人は少ないと思う

問2．以下の項目で示される内容は，あなたが大学生活を送る中でどの程度あてはまりますか。最もあてはまると思う番号を選択してください（全5項目）

・質問項目

選択肢はすべて「1．全くあてはまらない」～「6．非常にあてはまる」

1. 教師に言われなくても自分から進んで勉強する
2. 勉強に関する本を読んでいてもすぐに飽きてしまう
3. 勉強で疑問に思ったことはすぐ調べる
4. 必要な単位以外でも，関心のある授業はとるようにしている
5. 大学で勉強することで自分の関心を深めている

3 ページ目

(3/7) 説明をよく読み，回答してください

問3．前ページの問1，問2のご自身の回答を思い返してください（戻るボタンを押して前のページを見返しても構いません）。問1，2で答えたような自分の普段の生活態度や行動に対して，あなたはどのように感じていますか。以下の項目について，最もあてはまると思う番号を選択してください（全17項目）

・質問項目

選択肢はすべて「1．全くあてはまらない」～「6．とてもあてはまる」

1. 他人に寛容になれると感じる
2. 不安を感じる
3. 焦りを感じる
4. 時間を追われていると感じる
5. 自分のことだけでなく人のことも考えられると感じる
6. 他人のことも思いやれる余裕があると感じる
7. 前向きにものごとを考えられていると感じる
8. 自分の好きなことができていると感じる
9. 自分の生活に満足していると感じる
10. 充実感を感じる
11. 毎日が楽しいと感じる
12. 生きがいがあると感じる
13. 自分はのびのびと生きていると感じる
14. 息苦しい感じがする
15. きつい，つかれたと感じる
16. 心身ともに満たされている感じがする
17. おしつぶされそうな感じがする

4 ページ目

(4/7) 高校生のときの自分を思い浮かべて，回答してください

問4-1．以下の項目で示される内容は，高校生のときのあなたにどの程度あてはまりますか。それぞれの項目について，最もあてはまると思う番号を選択してください。回答の際は，特定の友人を思い浮かべてください（全17項目）

・質問項目

選択肢はすべて「1．全くあてはまらない」～「6．とてもあてはまる」

1．友だちと 2 人きりでいる場面は苦手だった
2．できれば食事は一人でとりたかった
3．人と雑談するのは苦手だった
4．昼食は友だちと一緒に食べるのが好きだった
5．友だち数人でいる場面は苦手だった
6．友だちと一緒にいるよりも一人でいる方が気が楽だった
7．人間と関わるよりも物と付き合っている方が楽だった
8．人といる場面で，言葉がなくなってしーんとしてしまわないかと不安になった
9．友だちと一緒に食事をするのは好きでなかった
10．他人の本音で，自分が傷つけられそうな気がした
11．他人とちょうどよい距離をとるのが難しかった
12．人といても話題がなくて困ることが多かった
13．一人で趣味に没頭していたかった
14．大勢の友だちとワイワイ騒ぐのが好きだった
15．他の人は自分を受け入れてくれなかった
16．他人と親しくなるのはうっとうしかった
17．できることなら人とあまり関わりたくなかった

問4-2．上記の質問にあった「友だち」や「他人」について，どのような人を想定していましたか。想定した人との関係について，答えられる範囲で構いませんので回答してください（複数回答可）

想定した人との関係

同じ高校の人やクラスメイト，同じ部活やクラブの人，親友や友人，その他（自由回答）

5 ページ目

(5/7) 高校生のときの自分を思い浮かべて，回答してください

問5-1．以下に挙げられている先生と生徒の関係を言い表す文を読んで，高校生の時のあなたが思っていたことに最もよくあてはまると思う番号を選択してください。回答の際は，特定の先生を思い浮かべて答えてください（全11項目）

・質問項目

選択肢はすべて「1．全くそう思わなかった」～「4．非常にそう思った」

1．私が不安なとき，先生に話を聞いてもらうと安心した
2．先生は自分の機嫌で態度が変わると思った
3．先生は自分の考えを押し付けてくると思った
4．将来のことがわからないときは先生に相談してみようという気になった
5．先生と話していると困難なことに立ち向かう勇気がわいた
6．先生にならいつでも相談ができると感じた
7．私は先生と話すと気持ちが楽になることがあった
8．先生は威張っているように感じた
9．私が悩んでいるとき，先生が私を支えてくれていると感じた
10．先生は一度言ったことを，ころころ変えると感じた
11．先生の性格には裏表があるように感じた

問5-2．上記の質問にあった「先生」について，どのような人を想定していましたか。想定した人との関係について，答えられる範囲で構いませんので回答してください（複数回答可）

想定した人との関係

担任の先生，部活やクラブの顧問の先生，養護教諭，その他（自由回答）

6 ページ目

(6/7) 現在の自分を思い浮かべて，回答してください

問6-1．以下の項目は，あなたが人から普段どのような援助を受けているのかをお伺いするものです。項目に示された援助に対する期待感を評定し，あてはまると思う番号を選択してください。回答の際は，養育者，友人，教師いずれかを思い浮かべて回答してください（全16項目）

・質問項目

選択肢はすべて「1．絶対ちがう」～「4．きっとそうだ」

1．あなたが落ち込んでいると，元気づけてくれる
2．あなたが失恋したと知ったら，心から同情してくれる
3．あなたに何かうれしいことが起きたとき，それを我が事のように喜んでくれる
4．あなたがどうにもならない状況に陥っても，なんとかしてくれる
5．あなたがする話には，いつもたいてい興味をもって耳を傾けてくれる
6．あなたが大切な試験に失敗したと知ったら，一生懸命なぐさめてくれる
7．あなたに元気がないと，すぐ気遣ってくれる
8．あなたが不満をぶちまけたいときは，はけ口になってくれる
9．あなたがミスをしても，そっとカバーしてくれる
10．あなたが何かを成し遂げたとき，心からおめでとうと言ってくれる
11．一人では終わらせられない仕事があった時は，快く手伝ってくれる
12．日頃からあなたの実力を評価し，認めてくれる
13．普段からあなたの気持ちをよく理解してくれる
14．あなたが学校での人間関係で悩んでいると知ったら，いろいろと解決方法をアドバイスしてくれる
15．良いところも悪いところもすべて含めて，あなたの存在を認めてくれる
16．あなたを心から愛している

問5-2．上記の質問について，養育者，友人，教師のどちらを想定していましたか。また，想定した人との関係について，答えられる範囲で構いませんので回答してください

想定していた人（養育者，友人，教師から選択）

6 ページ目続き

「養育者」を想定していた方にお聞きします。想定した養育者との関係をお答えください（複数回答可）

母，父，祖母，祖父，きょうだい，親戚（叔父や叔母など），その他（自由回答）

「友人」を想定していた方にお聞きします。想定した友人との関係をお答えください（複数回答可）

同じ大学や専攻の人，同じ部活やサークルの人，親友や友人，その他（自由回答）

「教師」を想定していた方にお聞きします。想定した教師との関係をお答えください（複数回答可）

履修している授業の先生，部活やサークルの顧問の先生，クラスやゼミの先生，その他（自由回答）

7 ページ目

(7/7) 現在の自分を思い浮かべて，回答してください

問7．次の項目を読んで，現在のあなたが感じている状態に最もよくあてはまると思う番号を選択してください（全8項目）

・質問項目

選択肢はすべて「1．まったく感じていない」～「4．非常に感じている」

1．活気のある
2．楽しい
3．充実した
4．陽気な
5．愉快な
6．元気な
7．快調な
8．やる気に満ちた

アンケートは以上になります。最後に，学籍番号を記入してください。ご協力ありがとうございました！

※授業等で一斉に回答を送信した場合，回答が重複することがあるため，最後に学籍番号を尋ねていた。